

小石川後樂園得仁堂の建設とその後の変遷に関する研究

— 史料および建造物調査による検証 —

奥 村 俊 道

2019年3月





口絵1 得仁堂外観 正側面（南西面）



口絵2 同上内観 正面よりトコを見る





## 論文の要旨

本稿は江戸時代前期に作庭された庭園内に建つ木造建造物に関する考察である。天正 18 年(1590)、徳川家康は江戸に移封されたことを機に、有力な家臣たちを関東周辺に配置、その統治を勢力的に推し進めた。そして、関ヶ原の合戦(1600)以後、関東一円は徳川家による支配が確立し、徳川家の重臣や彼らに忠誠を誓う諸大名は江戸城周辺に屋敷を建設することになる。彼らが江戸の屋敷に造った庭園、いわゆる「大名庭園」は、将軍家や他の大名、家臣たちとの社交の空間、散策などを楽しむ場、さらには武術の訓練として利用された。その多くは平安期から鎌倉期にかけて造られた池庭の趣をもつと共に、各地域の名勝地や和漢の教養をモチーフとして、池の周りに山や石、建物や橋などを配置して回遊しながら鑑賞する「回遊式庭園」として作庭された。こうした庭園は徳川の治世が安定するにつれて、大名達の間で競って作られた。

ここでは大名庭園の一つ、水戸藩が江戸時代前期に作庭を開始して、現在、東京都文京区の特別史跡・特別名勝に指定されている小石川後樂園にある建造物「得仁堂」を取り上げた。得仁堂は、今回の検証によって小石川後樂園の作庭が行われてから間もなく建立され、現在に至るまで改造の履歴が残されていることが判明した。その検証結果から、庭園全体の変遷やその時々々の社会状況を推し量る手掛かりにもなることが明らかとなったので、この建物の考察を軸に論ずることとした。

歴史的建造物の変遷については、史料と建物の調査の両面から考察することで、史実をより正確に評することができると思われる。ここではそうした観点から、得仁堂の建設とその後の変遷を明らかにすることを目的とし、その要因には社会的な変化が関連していることにも言及した。

現代の我々は歴史的建造物の履歴を通じて、各時代の社会を垣間見ることができ、建物の評価を客観的に見出すことも可能だと思われる。その結果、建物における単なる様式の変遷史や技術論に偏った論考だけでなく、その来歴に影響した社会史などが明らかとなって、歴史の中における建物の意義や多様性を再評価することにつながると思われる。

本稿は以下の 8 章で構成している。

第 1 章は、序論として研究の背景や目的、研究方法などを論じた。得仁堂は、平成 24 年 12 月から平成 26 年 3 月にかけて修理工事が行われ、その際、筆者は史料の検証と建物の調査を実施した。さらに、その後の調査で判明した事実も加えて本研究の指針を示した。

第 2 章は、小石川後樂園と得仁堂の概説である。ここでは庭園史・建築史・宗教史の各分野から、得仁堂を多角的に位置づけるとともに、既往研究を検証し、得仁堂のこれまでの評価を総合的に示した。

第 3 章は、歴史資料に関する論述である。得仁堂は、光圀が尊敬する古代中国の賢人、伯夷と叔斉を安置する堂として現在知られているが、今回の検証で「夷斉堂」に安置していた伯夷・叔斉の二像と、「至徳堂」に安置していた泰伯像を合祀するため、「得仁堂」として新たに建設したことが判明した。また、小石川後樂園が描かれた絵図の検討から、その建立時期は 1665 年 7 月～

1668年1月と特定することできた。光圀没後、得仁堂は「孔子堂」、「釈迦堂」と名称を変え、享保3年(1718)以降は「八幡堂」、文政3年(1820)には再び「得仁堂」となった。この時、それまで別の場所に保管していた泰伯像を含む三体の像は焼失したので、伯夷・叔斉の二体の木像だけを新たに制作して安置したことを明らかにした。

第4章から第6章は、建造物調査による検証である。まず、第4章にて建物背面側のトコ廻りに関する検証を行った。創建時の得仁堂のトコは、間口2間幅の規模で、中央東寄りに丸柱一本を建てたものであった。このトコは、西側の幅が広く東側には棚を備えたものであった。光圀死後、「八幡堂」となった際に背面の丸柱一本を撤去し、中央に新たに丸柱二本を建てて間口一間幅とする改造が行われた。その後、「得仁堂」に復興した江戸時代後期、虹梁を上部に移動し、袖壁板を撤去した。これらのトコの改造の過程は、史料による像の変遷と矛盾しないことを明らかにした。

第5章は、屋根廻りの検証で、小屋組・軒廻り・屋根の調査を中心に論述した。得仁堂の屋根は、創建時は植物系葺材と見られるが、江戸時代後期には瓦葺の時代があった。近代以降、明治前半期に大規模な修理が行われてこけら葺となり、その後、鉄板葺、銅板葺など様々な材種で葺き替えられたことなどを明らかにした。

第6章は、造作類や建物に関連する扁額や像などの付属物に関する考察である。得仁堂は明治前半期に大規模な修理がなされるなど後世の取替え材が多いが、創建時の部材も残っていることが判明した。その他、紀州藩第十代藩主徳川治宝が文政3年(1820)に揮毫した扁額、同じく紀州藩で安永8年(1779)に製作された現在の伯夷叔斉像、創建時にまで遡る可能性がある螺鈿の机なども遺存し、その履歴を明らかにした。

第7章は、史料および建造物調査によって判明した得仁堂の変遷を年表としてまとめ、その変遷の原因には、社会的な要因が内在していることを明らかにした。

第8章は、今後の研究課題を示すと共に、建物の単なる様式の変遷史や技術論に偏った論考だけでなく、建築、庭園、政治、思想などとの関連が明らかになることで、歴史的建造物における新たな視点や考え方が生み出される可能性があることを指摘した。

今回の研究成果によって、建築というハードで具体的な現象の中に、他の分野に幅広く展開できる可能性を示すことができると考えている。

## A STUDY ON THE CONSTRUCTION AND SUBSEQUENT HISTORY OF TOKUJIN-DO AT KOISHIKAWA KORAKUEN GARDEN

Analysis through historical material and examination of the building

This paper is a study on the construction and subsequent history of Tokujin-do at Koishikawa Korakuen Garden, a site designated as a Special Historic Site and a Place of Special Scenic Beauty, located in Bunkyo Ward in Tokyo. Results from the examination of Tokujin-do during its preservation and repair works as well as historical documents and drawings of Korakuen which include Tokujin-do have helped to clarify the following points.

Until now, Tokujin-do was thought to have been a worship hall dedicated solely to Boyi and Shuqi, who were two ancient Chinese wise men revered by Tokugawa Mitsukuni (1628-1701), the second feudal lord of Mito Domain. However, historical sources have revealed that it was newly built to enshrine the two images of Boyi and Shuqi which had originally been placed in Isei-do, together with the image of Taibo formally enshrined in Shitoku-do. From studies of drawings of Koishikawa Korakuen Garden, the construction date of Tokujin-do has been specified as sometime between July 1665 and January 1668.

After the death of Mitsukuni, the name of the building was changed firstly to Koshi-do, then to Shaka-do. During the Kyoho era (1716-1736), the name was changed again to Hachiman-do, and later in 1820 (Bunsei 3), the building was restored as Tokujin-do to enshrine solely the images of Boyi and Shuqi. It has become evident that new wooden images of Boyi and Shuqi were created at this point, since the original images of these two wise men together with the image of Taibo, all three of which had until then been stored in a different place, had been lost in a fire.

During and after the late modern period, extensive renovation works took place including changes made to the roof during the first half of the Meiji period. From then on until today, the building has repeatedly undergone partial repairs, such as reroofing using iron sheets or copper sheets. It can be said that social factors are inherent in the fundamental reasoning behind the changes made to Tokujin-do.

The historical facts behind changes made to historical buildings can be more accurately evaluated by a two way process, namely through the analysis of historical material and examination of the building itself. As a result of this process, it is possible to expand the study to include the religious and philosophical backgrounds that may have influenced the construction. Such repeated efforts to examine both historical material and architectural aspects of the building will lead to a more comprehensive study that is not merely inclined towards technical discussions or stylistic changes. Rather, a well balanced analysis will help reveal the entire social history behind the changes, and also help re-evaluate the historical importance and diversity of the building.



# 目次

## 第1章 序論

- 1.1 研究の背景と目的・・・・・・・・・・・・・3
- 1.2 本研究の構成・・・・・・・・・・・・・4
- 1.3 研究の方法・・・・・・・・・・・・・5

## 第2章 小石川後樂園と得仁堂の歴史的概要

- 2.1 はじめに・・・・・・・・・・・・・11
- 2.2 庭園における建造物の役割・・・・・・・・・・・・・11
  - 2.2.1 庭園の歴史的変遷
  - 2.2.2 庭園と建造物の関係
- 2.3 得仁堂の建築的位置づけ・・・・・・・・・・・・・34
  - 2.3.1 建築史における系譜
  - 2.3.2 類例建物の検証
- 2.4 近世日本の儒教・・・・・・・・・・・・・50
  - 2.4.1 近世における儒教の概要
  - 2.4.2 儒教建築の役割
- 2.5 小石川後樂園と得仁堂の沿革・・・・・・・・・・・・・61
  - 2.5.1 小石川後樂園と得仁堂の概要
  - 2.5.2 現在の小石川後樂園と得仁堂
- 2.6 既往研究の検証・・・・・・・・・・・・・66
- 2.7 第2章のまとめ・・・・・・・・・・・・・68

## 第3章 史料調査による検証

- 3.1 はじめに・・・・・・・・・・・・・71
- 3.2 得仁堂が描かれた絵図・・・・・・・・・・・・・72
- 3.3 後樂園絵図(明大本)の信憑性と制作年代・・・・・・・・・・・・・76
- 3.4 得仁堂の建設と三像・・・・・・・・・・・・・82
- 3.5 名称の変更と八幡堂への転換・・・・・・・・・・・・・85
- 3.6 得仁堂の復旧と伯夷・叔斎像・・・・・・・・・・・・・86
- 3.7 江戸末期以降の概略・・・・・・・・・・・・・94
- 3.8 第3章のまとめ・・・・・・・・・・・・・95

## 第4章 トコ廻りを中心とした建造物調査による検証

4.1	はじめに	99
4.2	トコ廻りの検証	99
4.2.1	トコ廻りの痕跡	
4.2.2	史料上の変遷と改造の経過	
4.2.3	創建時の三像	
4.3	第4章のまとめ	108

## 第5章 屋根廻りを中心とした建造物調査による検証

5.1	はじめに	111
5.2	屋根の検証	111
5.2.1	小屋組の痕跡	
5.2.2	絵図および古写真と屋根の痕跡	
5.3	軒廻りの検証	120
5.3.1	裏甲の痕跡	
5.3.2	茅負および木負などの痕跡	
5.3.3	屋根廻りの変遷とその意義	
5.4	第5章のまとめ	127

## 第6章 造作類の建造物調査と付属物の検証

6.1	はじめに	131
6.2	造作類の検証	131
6.2.1	壁板および敷鴨居などの痕跡	
6.2.2	敷瓦の検証	
6.2.4	墓股彫刻の塗装	
6.2.5	建具および金具類の検証	
6.3	付属物の検証	146
6.3.1	扁額の変遷	
6.3.2	伯夷・叔斎像	
6.3.3	螺鈿の机	
6.3.4	史料との検証	
6.4	第6章のまとめ	154

## 第7章 結論

7.1 得仁堂の変遷と社会的要因 . . . . . 157

7.2 まとめ . . . . . 159

## 第8章 展望

8.1 今後の研究課題 . . . . . 163

脚注 . . . . . 165

発表論文 . . . . . 193

謝辞





## 第1章 序論



## 1.1 研究の背景と目的

我が国の歴史的建造物、特に木造建造物に関する調査・研究はこれまでも多々行われてきた。しかし、単に木造建造物といっても、建物が建てられた時代や用途、規模、修理の履歴は様々である。建築の歴史を通観する場合、その基盤となるものは建物個々の調査・研究であり、そうした地道な作業の蓄積によって、対象とする建物の位置づけや建立意義を相対的に評価することが可能となる。

本稿は江戸時代に作庭された庭園内に建つ木造建造物に関する考察である。我が国の庭園は、奈良時代までに百済や新羅、唐から作庭技術を取り入れ、平安時代には寝殿造、中世の禅院・武家住宅や書院造、さらには数寄屋・草庵など建物の有様と共に変化・発展してきた。

江戸時代に入ると、徳川家の重臣や諸大名が、江戸城周辺に建設した屋敷や領国に造った「大名庭園」が、将軍家や他の大名、家臣たちとの社交の空間、散策などを楽しむ場、さらには武術の訓練として利用された。その多くは、平安期から鎌倉期にかけて造られた池庭の趣をもつと共に、和漢の教養を背景として各地域の名勝地を取り入れ、池の周りに山や石、建物や橋などを配置して回遊しながら鑑賞する回遊式の庭園として作庭された。こうした庭園は徳川家の治世が安定するにつれて、大名達の間で競って作られた。

ここでは大名庭園の一つ、水戸藩が江戸時代前期に作庭を開始して、現在、東京都文京区の特別史跡・特別名勝に指定されている小石川後樂園にある建造物「得仁堂」を取り上げた。得仁堂は、今回の検証によって小石川後樂園の作庭が行われてから間もなく建立され、現在に至るまでの改造の履歴が残されていたことが判明した。その検証結果から、庭園全体の変遷やその時々々の社会状況を推し量る手掛かりにもなることが明らかとなったので、この建物の考察を軸に論ずることとした。

得仁堂は、平成24年12月から平成26年3月にかけて屋根葺替と部分修理の工事が行われた。その際、筆者は史料と建物の調査を実施し、その後の検証で判明した事実や考察も加えて本研究の基礎となる材料とした。

これまで、小石川後樂園に関する記述は多くなされているが、それらは庭園史の観点によるものが中心で、得仁堂は庭園内の数ある建物の一つとして扱われているに過ぎない。また、建造物としての得仁堂に関する論考も極めて少なく、それらは史料による裏付けが十分ではなく、建物の痕跡等を詳細に調査した上で、総合的に論じているとは言い難い。

歴史的建造物の変遷については、史料と建物の調査の両面から考察することで、史実をより正確に評することができると思われる。ここではそうした観点から、得仁堂の建設とその後の変遷を明らかにすることを目的とし、その要因には社会的な変化が関連していることにも言及した。

現代の我々は歴史的建造物の履歴を通じて、各時代の社会を垣間見ることができ、建物の評価を客観的に見出すことも可能だと思われる。その結果、建物における単なる様式の変遷史や技術論に偏った論考だけでなく、その来歴に影響した社会史などが明らかとなって、歴史の中における建物の意義や多様性を再評価することにつながると思われる。

今回の研究成果によって、建築というハードで具体的な現象の中に、他の分野に幅広く展開できる可能性を示すことができると考えている。

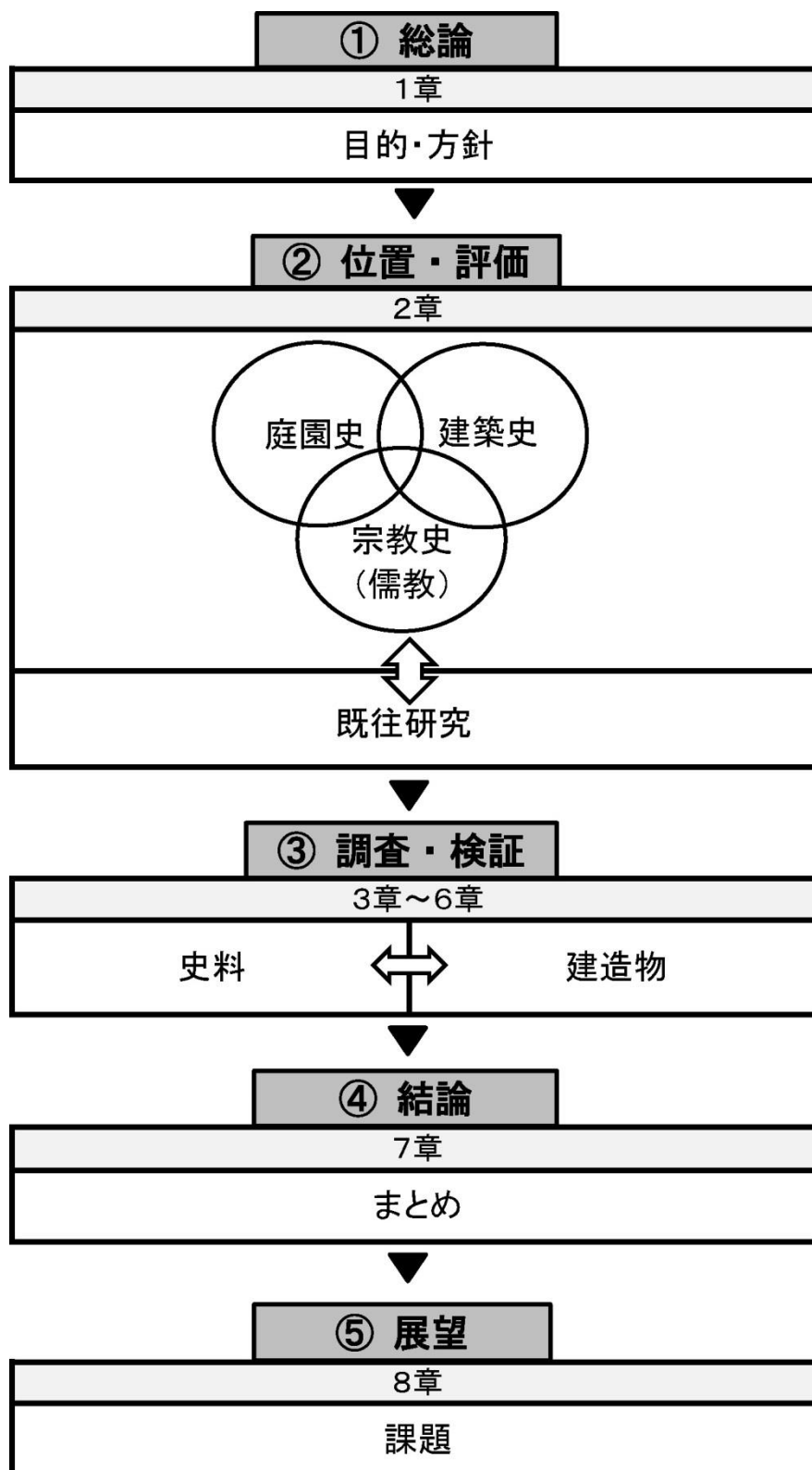
## 1.2 本研究の構成

小石川後樂園得仁堂の建設とその後の変遷に関する本研究は、全8章で構成している。以下はその各構成要素の内容である。

<b>第1章 序論</b> 研究の背景と目的 本研究の構成 研究の方法
<b>第2章 小石川後樂園と得仁堂の歴史的概要</b> 庭園における建造物の役割 得仁堂の建築的位置づけ 近世日本の儒教 小石川後樂園と得仁堂の沿革 既往研究の検証
<b>第3章 史料調査による検証</b> 得仁堂が描かれた絵図 後樂園絵図(明大本)の信憑性と制作年代 得仁堂の建設と三像 名称の変更と八幡堂への転換 得仁堂の復旧と伯夷・叔斎像 江戸末期以降の概要
<b>第4章 トコ廻りを中心とした建造物調査による検証</b> トコ廻りの検証
<b>第5章 屋根廻りを中心とした建造物調査による検証</b> 屋根の検証 軒廻りの検証
<b>第6章 造作類の建造物調査と付属物の検証</b> 造作類の検証 付属物の検証
<b>第7章 結論</b> 得仁堂の変遷と社会的要因 まとめ
<b>第8章 展望</b> 今後の研究課題

### 1.3 研究の方法

本稿の研究方法は以下の図のように、各章ごとに論旨を展開している。



①**総論**（第1章）では、研究の背景や目的、研究方法などを総論として論じ、本研究の構成や方向性など論文全体の骨子を示した。

②**位置・評価**（第2章）は、庭園史・建築史・宗教史の各3分野からの概説で、それぞれ、1. 庭園内の建つ建造物の位置（庭園史からの視点）、2. 建築の様式・形式・種別による分類（建築史からの視点）、3. 儒教に関連する建物の役割（宗教史からの視点）、などの点から得仁堂の位置づけを行い、次節以降の詳細な調査・検証を行う前提として、多角的に解説を行った。その際、小石川後楽園と得仁堂の概説とともに、これまでなされてきた研究や論考の検証も併せて行い、得仁堂のこれまでの評価を総合的に示した。

③**調査・検証**（第3章～第6章）は、本研究の論拠となる核心部分である。ここでは、主として得仁堂に関する史料と建造物調査の両面からアプローチしている。まず文献・絵図・古写真などの歴史資料を検証し、次に建造物の痕跡調査の考察を行って、それらを相互に比較・検討して、得仁堂の創建から現在に至るまでの改造の歴史を明らかにした。その結果、史料にある記述が建物に残された痕跡によって裏付けられた部分と、逆に、建物に残された痕跡の意味を史料によって確認・発見することができた部分があることが明らかとなった。

④**結論**（第7章）は、史料および建造物調査によって判明した得仁堂の変遷のまとめである。ここでは、明らかとなった史実を総括し、得仁堂の建設やその後の改造の根本的な要因となった社会史的な視点からの考察を加えた。

⑤**展望**（第8章）は、本稿で検証した得仁堂に関する今後の研究課題やその意義を論じた。

なお、『国宝・重要文化財建造物目録』（文化庁編，第一法規出版株式会社，2000）および、『国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻）』（文化庁監修，毎日新聞社図書編集部編，毎日新聞社，1998）によれば、建造物の「建立年代区分表」（桃山時代以降）を以下のように区分している。

時代	区分	和暦	西暦
桃山		天正 元 ～ 慶長十四	1573 ～ 1614
江戸	前期	元和 元 ～ 万治 三	1615 ～ 1660
	中期	寛文 元 ～ 寛延 三	1661 ～ 1750
	後期	宝暦 元 ～ 文政十二	1751 ～ 1829
	末期	天保 元 ～ 慶応 三	1830 ～ 1867
近代 現代		明治 元 ～ 四十四	1868 ～ 1991
		大正 元 ～ 十四	1912 ～ 1925
		昭和 元 ～ 六十三	1926 ～ 1988
		平成 元 ～	1989 ～

本稿で時代区分を行う場合、原則として上記の表に従ったが、建物の修理や解体の履歴でその区分が特定できない場合などには、本文中に記載するか脚注にて説明を行って補足した。各年号は、必要に応じて和暦と西暦を併記した。

また、近世の大名領は、その総称として明治以降に「藩」と呼称された。近世には「藩」を公称として用いていないが、現在では一般的に用いられていることから、本稿では当時の大名領を指す場合に、「藩」という語を使用した。

なお、論述の中で、引用した文中の(( ))内の記述は、理解を容易にするための筆者による補筆である。





## 第2章 小石川後樂園と得仁堂の歴史的概要



## 2.1 はじめに

得仁堂は、小石川後樂園内に建つ儒教に関連する建造物である。この章では、庭園史・建築史・宗教史の各三分野からアプローチし、各視点から得仁堂の位置づけを行う。その後、考察の導入部分として小石川後樂園と得仁堂の概説を述べ、既往研究の検証も併せて行い、現在考えられている小石川後樂園および得仁堂のこれまでの評価を総合的に示す。

## 2.2 庭園における建造物の役割

### 2.2.1 庭園の歴史的変遷

#### (1) 庭園概史

ここでまず「庭園」という言葉の意味を確認しておく。例えば、『広辞苑』（第四版）を見ると、「観賞・逍遙などのため、樹木を植え築山・泉池などを設けた庭。特に計画して作った庭。<sup>注1)</sup>」と示され、主に観賞することを目的として庭園が定義されている。一方、庭園の観点からまとめられた『岩波日本庭園辞典』では、「祭祀・儀式・饗宴・逍遙・接遇などの場として、あるいは鑑賞の対象として、一定の空間的・時間的美意識のもとに造形される屋外空間。おもに土・石・植物・水などの自然材料を用いて作られる。建築に付随したり、あるいは建築を包含したりする場合が一般的で、形態からは、人工的・図案的なデザインを持つ幾何学式と、自然景観をモチーフとした風景式とに大別できる。おおむね西洋および中東の庭園が幾何学式であるのに対し、中国・日本など東洋の庭園は風景式であるとされるが、18世紀以降のヨーロッパで人気を博したイギリス風景式庭園や、7～8世紀以降長期にわたって朝鮮半島で築造された方形の池すなわち方池など、そうした認識から外れる例も少なくない。（後略）<sup>注2)</sup>」と、庭園が観賞以外にも祭祀や儀式などの目的もあり、その形態は大きく西洋・中東＝幾何学式、中国・日本＝風景式に分かれるが、例外も多いことが示されている。

また、建築の視点からは、『建築大辞典』（第二版）に、「①個人が自由に楽しめ、利用できる、主として建築に付随した外部空間。一般的には、所有者が個人であるもの、または利用者が不特定多数でないものをいう。本来、庭(にわ)とは場、環境というほどの意味。また、園は籬(かき)で囲った地で果樹蔬菜を作った場所、苑は禽獣を飼うところという意味。庭園という用語は小沢圭次郎『明治庭園記』が初出だといわれている。②建築に付属する人工のオープンスペースで、観賞やレクリエーションなどにつかわれるもの。庭よりは広い概念。<sup>注3)</sup>」と、建築に付随する外部空間であることが強調されている。

このように、庭園や建築の分野などで捉えられている「庭園」の意味は、必ずしも統一されているとは言い難い。後述するが、我が国の庭園の歴史を見ると、単に建築の付随空間で観賞のみを主眼として作られたものばかりではなく、時代によって形式やその目的も様々に変化している。例えば、小石川後樂園のような江戸時代における「大名庭園」は、諸大名の政治・社交目的を兼ねた空間として積極的に利用され、和漢の教養を共通認識として園内を廻る用途を主な目的として作庭されている。したがって、一言で「庭園」といっても時代によって多様な役割があるので、ここではその意味を狭義かつ限定的に考えるのではなく、時代の変化を許容した上でより包括的な概念として幅広く捉えることとする。

我が国の庭園研究は明治時代に始まったと言われている。とくに小沢圭次郎(1842～1932)が明治23年から明治38年にかけて『国華』に掲載した「園苑源流考」と、明治45年にこの概要をまとめた「庭園源流略考」(一卷～八巻)、さらには大正4年に日本園芸研究会が出版した『明治園芸史』の中の「明治庭園記」などが、文献史料に基づく日本の庭園史の先駆的な業績と考えられている。

その後、1920～50年代にかけて重森三玲(1896～1975)等が中心となって、全国の庭園の実測調査や絵画史料の検証が行われ、1960年代以後には、埋蔵文化財発掘調査による成果が庭園史研究に寄与することとなる。

日本の庭園の歴史を紐解く場合、縄文・弥生時代、さらには古墳時代からはじめることも可能である。しかし、これらの時代は文献史料が皆無であること<sup>注4)</sup>や、近年、飛鳥・奈良時代の発掘調査の成果が明らかになっていること、さらに本論は庭園の起源を目的としているのではないことなどを勘案して、本稿では古代を起点に考え、一般的に論じられている各時代の概説を行う。

我が国の庭園は、奈良時代までに百済や新羅、唐から作庭技術を取り入れ、平安時代の寝殿造、中世の禅宗寺院・書院造の庭、茶室の露地など建物の有様と共に変化・発展してきた。江戸時代になると池庭や石組・枯山水・露地の形式など前代の特徴を組み入れ、総合化した「回遊式庭園」が成立する。以下の表は、これまでの庭園研究の成果をもとに、古代から江戸時代に至るまでの庭園の変遷を時代や形式などで概略的にまとめたものである<sup>注5)</sup>。

表 2.2.1 庭園の変遷

時代			形式		特徴	作庭例
①	古代(前期)	飛鳥時代	(儀式・饗宴としての庭園)		百済など朝鮮半島から取り入れられた庭園。方形など幾何学的平面形を持つ池、護岸としての石積、精巧な加工を施された石造物によって構成される。	古宮遺跡、島庄遺跡、飛鳥京跡苑池、石神遺跡など
		奈良時代			唐から取り入れられた庭園を軸に、不正形な平面を持つ池(曲池)、洲浜の護岸、自然石の石組・景石によって構成される。	平城宮東院庭園、平城京左京三条二坊宮跡など
②	古代(後期)	平安時代	寝殿造式庭園		唐を起源とする寝殿造と称される貴族の邸宅に作庭された庭園。寝殿は南に面し、両翼の釣殿は池に臨む。寝殿の南正面に、白砂敷の広庭、その南に池を設け、遣水が池に注ぐ。池中には中島を配して橋を架ける。池の南には築山を置く場合がある。	神泉苑、嵯峨院など
			浄土式庭園		極楽浄土の世界をこの世に再現した庭園で、阿弥陀堂など寺院建築物の前に園池を設ける。	法成寺、平等院、浄瑠璃寺、毛越寺など
③	中世	鎌倉時代 ～ 桃山時代	座親式庭園	枯山水庭園	禅宗寺院や武家住宅などの屋内から対峙して鑑賞する庭園。水を使用することなく、石や砂などにより山水の風景を表現する。山の斜面に作庭された「前期式」と、平庭に作られた「後期式」に分類される。	西芳寺、天龍寺、大徳寺大仙院など
				書院造庭園	室町末期から桃山時代に完成した住宅形式である書院造の庭園。大柄で色鮮やかな庭石が用いられたり、名石や名木を配置するなどの演出がなされる。	醍醐寺三宝院、二条城二之丸など
			露地式庭園		茶室に付随する庭園。露地は茶庭ともいわれ、飛石・延段・蹲踞・石燈籠・塵穴などで構成される。	待庵など
④	近世	江戸時代	回遊式庭園		公家や武家・僧侶などの間で、茶事や宴を催す社交場として、成立した庭園様式。園内は、和漢の教養を背景とした各地域の名勝地を再現し、池を中心に築山・平場などを設え、御殿や茶亭・四阿などの建物を配し、徒歩または船で回遊しながら鑑賞する。	桂離宮、修学院離宮、小石川後楽園、六義園、浜離宮、芝離宮、栗林荘、岡山後楽園、兼六園、水前寺成趣園など

## ①古代（前期）

古代以前の縄文・弥生・古墳時代には、祭祀の場として屋外空間に配石や湧水・流路などを形成した遺構が発掘調査の結果より判明している<sup>注6)</sup>。これらは土木技術を背景とした一定の美意識に基づかれて形成され広い意味で庭園とも考えられるが、前述の通り、ここでは庭園史の範疇に入れていない。ただ、池の水辺に小石を敷き詰めた護岸（州浜）や石組の構成などは、後世の日本の庭園の構成要素を髣髴とさせる手法が見られることは注目される。

4世紀頃、朝鮮半島では高句麗・百済・新羅といった三国による統治が始まり、我が国には特に百済から仏教や建築など、様々な文化・技術が伝えられる。その中で、庭園は7世紀のはじめから670年頃までの間に、宮廷の儀式や饗宴の空間として百済のデザインを取り入れたと考えられている。現在の奈良県明日香村の古宮遺跡や島庄遺跡・飛鳥京跡苑池・石神遺跡などは飛鳥時代に作庭された代表的な庭園で、饗宴や儀式の場として用いられたと見られる。

これらの庭園の特徴は、①方形など幾何学的平面形の池、②護岸としての石積み、③精巧な石造物、などを主たる構成要素としている。百済最後の首都であった韓国の扶余の官北里遺跡には、長方形の池や石積の護岸などが見られ、この時代の我が国の庭園と類似点が多い。飛鳥時代末期になると、百済と高句麗を滅ぼして朝鮮半島を統一した新羅からの影響を受けるようになる。このように飛鳥時代における庭園は、百済や新羅という朝鮮半島で形成された技術やデザインを中心に取り入れたと考えられている。

その後、我が国は百済とともに、唐・新羅の連合軍と白村江の戦い(663)を行い敗戦する。緊迫する東アジアの国際情勢の中で、我が国は急速に中央集権化を進めて国内を整備し、国家の独立を保持することが急務となった。その目標とした国家は、当時の先進国であった中国・唐であった。そして様々な分野を唐から吸収して国家体制を整えはじめる。例えば大宝律令(701)の制定は、当時の日本が積極的に唐から法体系を取り入れた代表的な出来事であり、「日本」という国号が定められたのもこの頃と言われる。710年、平城京に遷都し、唐の都である長安をモデルとした都市が形成される。こうして政治・社会制度が整うと、儀式や饗宴の役割としての庭園が平城宮内やその周辺に作庭される。平城宮東院庭園や平城京左京三条二坊宮跡などはその代表例で、①不整形な平面を持つ池(曲池)、②州浜の護岸、③自然石の石組・景石などが特徴となっている。これらは、当時の唐の庭園である洛陽の上陽宮跡や長安の太液池などに共通要素が見られる。

このように、飛鳥時代と奈良時代では庭園の特徴が異なっており、規範とすべき先進国が百済などの朝鮮半島から唐へと移行した社会風潮の変化が、庭園作りに影響したと考えられる。ただ、奈良時代における唐からの庭園に関する情報は、唐に渡って見聞してきた人々の報告や、絵画などの資料といった間接的なもので、飛鳥時代のように百済から直接、渡来人が庭作りに関わったものとは異なっていたと見られている。

## ②古代（後期）

794年、桓武天皇(在位：781～806)によって平安京に都が遷都される。平安京は、三方を山に囲まれた大小の河川の扇状地で、伏流水が噴出する豊かな水脈などを持つ立地で、そうした環境条件が、庭園作りに反映される。平安時代の庭園の変遷は、一般に前・中・後期の三時代に区分されている。

**寝殿造式庭園** 平安時代前期は、京内やその郊外には大規模な池庭が築造された時期である。桓武天皇専用の庭園であった神泉苑(802 頃完成)や、嵯峨天皇(在位：809～823)の別荘として作庭された嵯峨院(9 世紀初頭完成)などはその代表的な例で、天皇の行幸や儀式・饗宴の場として庭園が利用されることになる。建築史家の太田静六の研究によれば、神泉苑の庭園の池と建物の配置に関し、唐の興慶宮との類似点を指摘している。特に宮殿の正殿の前面に池を配し、コの字型に翼廊を配する建物の配置は寝殿造の原型とも言われ、その起源は唐に由来すると考えられている<sup>注7)</sup>。また、神泉苑の造営後に築造された嵯峨院は、神泉苑を意識していたと言われており、この時期の庭園は唐への志向が強かったと考えられている。



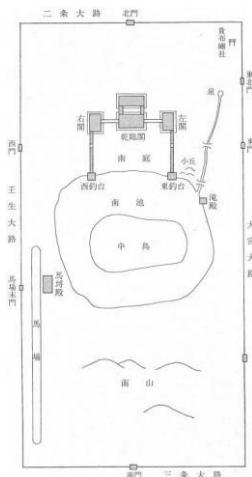
①石神遺跡

小野健吉『日本庭園の歴史と文化』(岩波新書)より転載



②平城宮東院庭園

田中昭三『「日本庭園」の見方』(小学館)より転載



③神泉苑(寝殿造式庭園)

推定復元図：太田清六氏による

小野健吉『日本庭園の歴史と文化』(岩波新書)より転載



④平等院(浄土式庭園)

森種『庭園とその建物』(至文堂)より転載

## 写真 2.2.1 古代の庭園

平安時代中期は、藤原氏による摂関政治の全盛期で、唐の影響が強かった時代から、主として日本の風土や生活に目を向けた国風文化が隆盛してくる。庭園の分野では、貴族の住宅である寝殿造に伴う庭園、いわゆる「寝殿造式庭園」のスタイルが確立される。現在、寝殿造の住宅やその庭園は現存しないが、「作庭記」(11世紀後期)などの文献史料のほか、「年中行事絵巻」(12世紀後期)や「駒競行幸絵巻」(14世紀初期)などの絵画史料によってその構成や意匠を推し量ることが出来る。これらによれば、典型的な寝殿造およびその庭園は、周囲に築地塀を廻らした一町四方の敷地に、南面する寝殿(正殿)を中心に東西に対屋を配し、各対屋から中門廊を南に伸ばして先端に釣殿が設ける。寝殿南面には白砂敷きの広庭を置き、その南に池を設けて北東からの遣水から水を引いて、池には中島を配し橋を架ける。各貴族たちは、こうした構成を基本としつつ、庭園の立地を考慮しながら自然景観を生かし、国内の名所の景観も取り入れるなど個性豊かに作庭していたと考えられている。

**浄土式庭園** 一方、平安時代は思想的には浄土信仰が広がりを見せた。その信仰の中心的役割を担ったのは源信(942～1017)である。彼の著した「往生要集」に示された阿弥陀如来の住む極楽浄土を切望する精神は、文学や美術などに影響を与えるようになり、庭園の分野でも平安時代中期末から後期にかけて、仏寺において自己の極楽往生を祈る空間として、貴族の間で阿弥陀堂と園池とを一体的に構成した「浄土式庭園」が築造されるようになる。

例えば、藤原道長(平安中期～1028)が1020年から1022年にかけて築造した法成寺庭園、その子藤原頼道が1052年に宇治に作庭した平等院のほか、浄瑠璃寺(1150～1205)や奥州藤原氏の拠点であった平泉に所在する毛越寺(1117)などが知られる。これらの庭園には、主として翼廊を伴う阿弥陀堂が建設され、前面に中島のある園池を配し、岸に州浜を用いるなど、寝殿造式の庭園を基盤に作庭された。こうした庭園の構成は、鎌倉時代に至っても永福寺(1194)や称名寺(1323)などに引き継がれていくこととなる。

### ③中世

武家政権が樹立される鎌倉時代に至っても、寝殿造式または浄土式の庭園は郊外の景勝地などに作庭されたが、思想面で禅宗の教えが興隆し、建築や庭園の展開に影響を与えるようになる。特に栄西(1141～1215)が、中国・宋から二度目の帰国を果たし、禅宗の布教を始めて鎌倉・京都に臨済宗の基礎を築いて以来、蘭溪道隆(1213～78)や無学祖元(1226～86)等の中国僧が日本に直接渡来してその教えを広める。彼らは鎌倉において建長寺、円覚寺の開山にそれぞれ寄与していくことになるが、こうした寺院の建設で行った周辺の自然景観を生かして、伽藍を総合的に構成する手法は、宋の禅宗寺院に基づかれ、その中で庭園の作庭手法が確立されてくる。

**座観式庭園：枯山水庭園** 中世になると建築や庭園の分野は、禅宗と密接に結び付いて展開する。そこには作庭指南を得意とする「石立僧」と呼ばれる僧侶の集団の台頭があった。臨済宗の禅僧でありながら作庭も行った夢窓疎石(1275～1351)は、そうした潮流の中で活躍した人物で、彼の関与した西芳寺(1339頃)や天龍寺(1345頃)の庭園は、我が国の作庭手法に大きな影響を及ぼすことになる。西芳寺では、上下二段の庭園に池や建物を配し、上段の指東庵に隣接する洪隠山の斜面を石組で構成した。天龍寺では方丈正面の池(曹源池)に滝(竜門瀑)・現存最古といわれる三連の石橋・その石橋前に石組(池中立石)を据えるなど、寺院の建物や庭園、さらには周辺の環

境を取り込むなど、境内を禅の理想郷としてデザインしている。こうした園池や石組の構成、建物を庭園の景観要素とする手法は、室町幕府3代将軍・足利義満(1358～1408)が造営した北山殿(1397)や、八代将軍・足利義政(1436～1490)の東山殿(1490)にも見られ、夢窓疎石の庭園を基にしていると考えられている。また、東山殿に見られる園池周辺に建物や橋を配して庭園を巡る手法は、江戸時代の回遊式庭園の先駆けとも評されている。

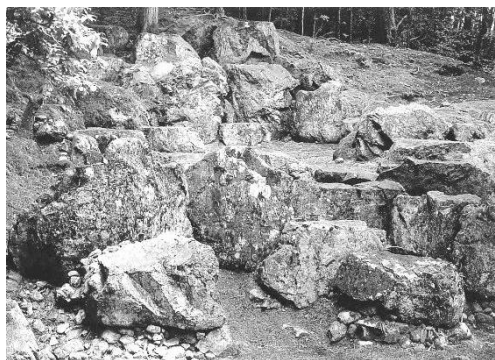
このような庭園手法の内、西芳寺などに見られる自然景観を表現する際に、水を用いないで石組を主体として構成する庭園の形式は「枯山水庭園」と呼ばれ、室町時代中期に主要な様式の一つとして確立されていく。その成立の要因は、①限られた紙面に遠大な景色を納める北宋山水画の影響があったこと、②禅僧の修業の場として水の得にくい寺院が多かったこと、③建物室内の床や棚の美術品の飾り付けが客の社交・接待として重要視され、室内から庭園を觀賞するために作庭されるようになったこと、などが考えられている。こうして中世以降、主として儀式や饗宴を目的として作庭されてきた「寝殿造式庭園」や「浄土式庭園」などの庭園から、建物からの視点を主として構成される「座観式庭園」が興隆し、その中に枯山水が形成されていく。枯山水は一般に、時期と作庭手法の違いから、西芳寺など山の斜面に作庭されるものを「前期式」、平庭に作られるものを「後期式」と呼んでいる。後期式の代表的な例は、大徳寺大仙院(1513)が挙げられ、山・滝・川・海といった自然風景を、白砂や石組・刈込などで構成する。これらは立地条件を問わず管理も容易なこと、観念的な造形を具現化することが可能であることもあって、近世以降も龍安寺(江戸時代前期)など寺院や書院の庭園を中心に築造され、我が国を代表する庭園形式として多用されるようになる。

**座観式庭園：書院造庭園** 応仁の乱(1467～1477)以降の室町時代後期は戦国時代とも呼ばれ、各戦国大名は自らの館に庭園を作庭し、多様な庭園の文化が全国に波及していく。例えば、一乗谷朝倉氏遺跡などは越前的大名であった朝倉氏が文明3年(1471)からおよそ100年に渡って営んだ城下町に造営された遺構で、寺院や武家屋敷など十か所余りの庭園が確認されている。これらの庭園は大ぶりの石や複雑な形状の池、枯山水の形式など様々な庭園手法がなされる。前記したように、武家の居館は社交や接待の場として利用されるようになり、室内には付書院・違棚・押板などの内部空間を設える「書院造」の形式が確立されて、美術品などを飾りつけることが客へのもてなしとしてされた。こうした室内飾りの趣向が建物内から望む庭園にも向けられ、各戦国大名は社交の中で文化力の高さを誇示するべく各地で庭園が作庭されるようになる。

こうした武家住宅は、貴族の住宅である「寝殿造」から変化した住宅様式と考えられ、室町時代前期にはすでに建物としての形式が整っていたと見られる。その内部空間は身分や格式を明確にする舞台装置としても機能し、対面の儀礼は室町時代後期の武家住宅では特に重要視され、庭園は建物内での客の着座する位置からの視点が重んじられるようになる。一般にこの形式の庭園は書院造の建物に対応するという意味で「書院造庭園」と呼ばれている。その大規模な例としては、豊臣秀吉自ら作庭を指揮した醍醐寺三宝院(1598～1626)や、徳川家康が上洛の際の居城として造営された二条城二之丸御殿(1602、1626改造)などが挙げられる。これらの庭園は名石や名木、大柄で色彩豊かな石組などで構成され、全国を制した覇者として豪華さを競う美意識を庭園に反映したものと考えられている。

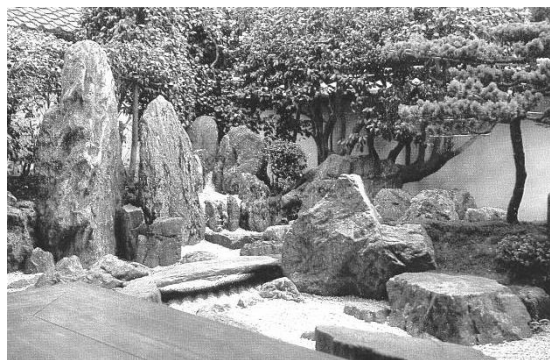


**露地式庭園** 鎌倉時代、禅宗寺院を中心に喫茶の習慣が流行し、武家の間でも広がりを見せる。室町時代後期には將軍家でも茶事が行われるようになるが、その場は主として「書院造」の住宅で行われていた。その後、桃山時代頃から、書院とは別棟に建てた土壁で草葺の民家を規範とした小規模な「草庵」を舞台とする茶事が流行する。この草庵の茶は堺の町衆出身の千利休(1522～91)によって簡素・簡略な精神を重んじる「侘茶」<sup>わびぢや</sup>として大成され、茶室に至る庭園空間として「露地」が形成される。京都の妙喜庵にある待庵(1582)は千利休が関与した建物として知られ、現存する最古の茶室と考えられている。これは茶席二畳、次の間・勝手口を含んだ広さ四畳半の狭小な土壁で覆われた建物で、壁には明障子の開口部を設け、入口は小さな躑口<sup>にじりぐち</sup>、床の間は土壁で塗り込められた洞床<sup>ほらどこ</sup>で構成される。そして、書院から待庵に至るまでの通路が「露地」と考えられる。さらに石敷きの園路である延段<sup>のべだん</sup>や、飛石<sup>とびいし</sup>・蹲踞<sup>つくばい</sup>・石灯籠<sup>いしどうろう</sup>・塵孔<sup>ちりあな</sup>などが配置され、市中にありながら山居の趣を持つことを目指した利休の美意識を反映していると言われている。こうした草庵と露地の構成は、古田織部(1543～1615)の燕庵<sup>えんあん</sup>(1640)や、小堀遠州(1579～1647)の孤蓬庵忘筌<sup>こほうあんぼうせん</sup>(1643)などに受け継がれ、茶の湯の世界は、武家だけではなく各地域の上層町人の間でも盛んとなり、江戸時代を通して庭園や建築などの造営にも影響を与えることになる。



①西芳寺(座観式庭園：枯山水庭園・前期式)

水野克比古『京都禪の庭』(光村推古院)より転載



②大徳寺大仙院(座観式庭園：枯山水庭園・後期式)

森種『庭園とその建物』(至文堂)より転載



③二条城二之丸(座観式庭園：書院造庭園)

水野克比古『京都名庭』(光村推古院)より転載



④待庵(露地式庭園)

日向進『茶室に学ぶ 日本建築の粋』(淡交社)より転載

## 写真 2.2.2 中世の庭園

#### ④近世

江戸時代に入ると浄土式庭園などに見られた池庭を基盤として枯山水、露地などの手法を組込んだ総合的な庭園作りが行われる。これらは京都の公家だけではなく江戸や各領国の屋敷の庭園として広がりを見せ、接待や社交の場として積極的に利用されるようになる。こうした庭園は、和漢の文学や歴史などを題材としたものが多く、その構成は池を中心として築山や四阿<sup>あずまや</sup>などの建物を各所に配置し、園内を徒歩や船などを用いて廻るように計画されたので、「回遊式庭園」と呼ばれている。

一方、江戸時代を通して社会全体が安定してくると、全国各地の寺社や上級武士、経済力を持った商人の屋敷でも庭園が作庭されるようになり、庶民も庭園を楽しむようになってくる。

**回遊式庭園** 本稿のテーマである得仁堂が建つ小石川後樂園は、水戸藩が江戸時代前期に江戸に作庭した大名庭園の一つで、回遊式庭園の代表的な例として挙げられることが多い。ここで「回遊式庭園」という用語を確認しておこう。例えば『岩波日本庭園辞典』によれば、「大規模な池庭を中心に、露地・枯山水の様式を総合した江戸時代の庭園形式。池泉回遊式庭園ともいう。公家・武家・僧侶など、一定の教養や共通認識を持つ集団の社交の場として機能することを目的としたもので、そこには茶の湯を果たす役割が大きかった。広い敷地に大きな池を中心として築山・平場などをしつらえ、御殿や茶室・四阿などの建物を随所に配する構成を持つ。それらの建物を結ぶ園路は、飛石や階段を交えながら池岸や築山をめぐる。その園路に沿って歩を進めるにつれて、ときには園外の景観の見え隠れもあわせながら、庭景が次々と変化するように作庭される。舟による池めぐりに対応した池の水面上から庭景が考慮される場合もある。そうした庭景を真に享受するためには、和漢の教養が共通認識として必要とされる。桂離宮庭園によって確立された様式であり、大名庭園の多くもこの様式に含まれる。(後略)<sup>注8)</sup>」と説明されている。また、『建築大辞典』(第二版)には、「近世に初めて現れた庭園形式の一。池の周りに園路をめぐらし、その園路沿いに日本文学の古典に知られている名所旧跡を再現した景や灯籠、田舎家、仏堂、祠、滝、橋などの要素を配し、継起的体験を通じて庭の景を觀賞する庭園。現存のものとして桂離宮が最も古く、最大であったと思われるものに尾張徳川家の戸山荘、そのほか六義園、後樂園(江戸と岡山)、兼六園、栗林荘などがある。<sup>注9)</sup>」と定義されている。これを見ると、回遊式庭園は、①園内を徒歩や舟で廻り、社交の場として活用された、②和漢の教養が意識されて作庭された、③名所旧跡に由来する景や構造物が配された、などが主要な要素として挙げられ、その形式は京都の桂離宮によって確立され、小石川後樂園を含む大名庭園にも波及したことが示されている。本稿で取り上げている得仁堂は、ここで示されている「仏堂」や「祠」などに相当する庭園内の構成要素の一つと考えられる。

回遊式庭園の最初の例と見られている桂離宮は、元和年間(1615～24)の初頭、後陽成天皇(1571～1617、在位:1586～1611)の弟で豊臣秀吉の養子でもあった八条宮智仁親王<sup>はちじょうのみやとしひと</sup>(1579～1629)が、新たに所領とした桂川西岸の地に別荘の造営を企画したことに由来する。智仁親王は、源氏物語や白楽天の詩文など、和漢の文学の造詣が深く、そうした教養を桂離宮の庭園に反映し、現在も残る古書院や亭<sup>ちん</sup>の築造、古書院の前面の池には天橋立に見立てた岬、築山などを庭園に配備した。その後、嫡子<sup>とじた</sup>の智忠親王(1619～62)の時代には、中書院や新御殿などの御殿や松琴亭<sup>しょうきんてい</sup>・笑意軒<sup>しょういけん</sup>・

賞<sup>しょう</sup>花<sup>か</sup>亭<sup>てい</sup>などの茶亭を築造した。これらの時代を通じて、庭園内には御殿や各茶亭園路を形成する延段や飛石、燈籠や植栽が配置され、京都の公家を中心とした社交の場として、園内を移動するにしたがって景色が展開し、茶亭または池に浮かべた船上から望む園内外の眺望などを楽しむ空間として庭園が活用される。桂離宮は日本庭園におけるこれまでの庭園の要素を統合した「回遊式庭園」という様式を確立した最初期のものと考えられている。この庭園のスタイルは、後水尾上皇(1596～1680)が公家や僧侶などで構成される宮廷サロンの交流の場として作庭した修学院離宮(1653～55)、さらには武家社会においても大名たちが江戸や各領国に築いた「大名庭園」に受け継がれていく。

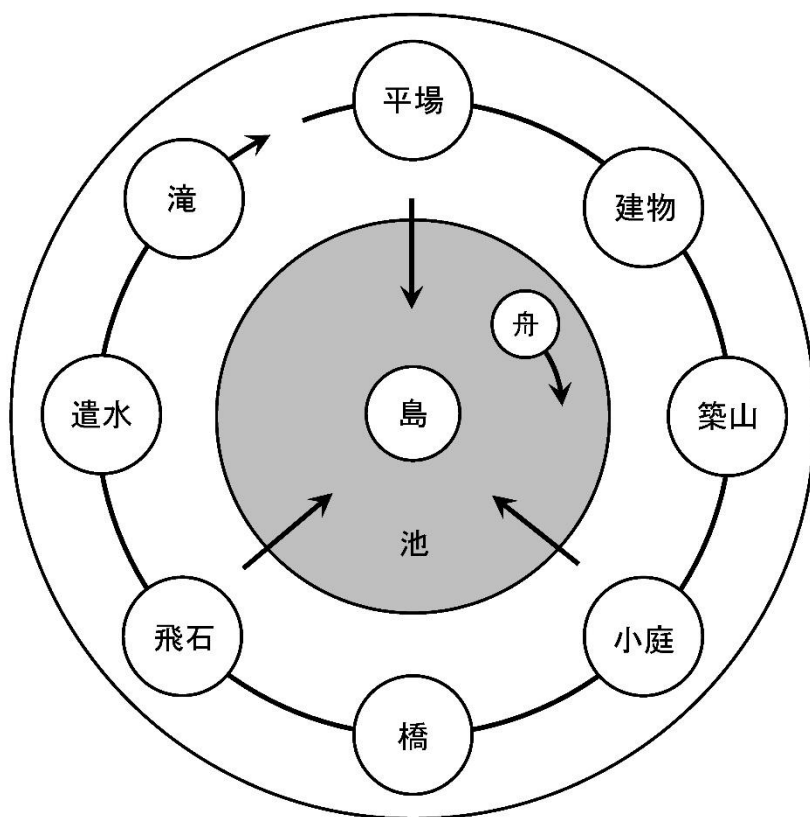


図 2.2.1 回遊式庭園の概念図

「大名庭園」は、徳川幕府が江戸に大名を集中して居住させた寛永年間(1624～44)に始まると言われている。特に江戸では明暦の大火(1657)以後、危険分散のため各大名に複数の邸地が与えられ、広大な敷地を持つ多くの大名の屋敷地で回遊式の庭園が作庭され、同時に各領国の城下町周辺でも築造されることになる。現在も残る江戸の大名庭園としては、小石川後樂園をはじめ、六義園・浜離宮・芝離宮などがあり、地方の領国では栗林荘(香川県)・岡山後樂園(岡山県)・兼六園(石川県)・水前寺成趣園(熊本県)などが代表的なものとして知られる。次にこれらの庭園の内、小石川後樂園を含む江戸に作庭された大名庭園についての概説を行う。



①桂離宮

森種『庭園とその建物』（至文堂）より転載



②栗林荘

湯原公浩編集『大名庭園』（平凡社）より転載



③岡山後楽園

湯原公浩編集『大名庭園』（平凡社）より転載



④兼六園

湯原公浩編集『大名庭園』（平凡社）より転載

### 写真 2.2.3 近世の庭園(回遊式庭園)

## (2) 江戸の大名庭園

天正 18 年(1590)、徳川家康は江戸に移封されたことを期に、有力な家臣たちを関東周辺に配置し、その統治を勢力的に推し進めた。そして、関ヶ原の合戦(1600)以後、関東一円は徳川家による支配が確立し、徳川家の重臣や彼らに忠誠を誓う諸大名は江戸城周辺に次々と屋敷を建設していく。江戸時代初め頃の大名たちは、江戸に一ヶ所屋敷を構えることが多かったが、寛永年間(1624～1643)に入ると複数の屋敷を所有し始める。そして明暦の大火(1657)以後、火災からの危険を分散させるために焼失した本邸以外にも土地を与えられ、寛文年間(1661～73)から元禄年間(1688～1704)にかけて、「上屋敷」、「中屋敷」、「下屋敷」など複数の屋敷地を持つ大名も現れてくる。彼らはこの大火を契機として大規模な平面形式を持つ住宅を建設し、それに伴って様々な庭園を作庭していく<sup>注10)</sup>。

前記した通り、大名たちが江戸の屋敷に造った「大名庭園」では、将軍家や他の大名、家臣たちとの社交の空間、散策などを楽しむ場、さらには武術の訓練として庭園が利用された。その多くは古代から中世にかけて作庭された池庭の趣をもつと共に、和漢の教養を背景とした各地の名

勝地をモチーフとして、池の周りに山や石、建物や橋などを配置して、回遊しながら鑑賞する「回遊式庭園」であった。こうした庭園は徳川家の治世が安定するにつれて、大名達の間で競って造られるようになった。

江戸に数多くの大名庭園が形成された要因は、①政治の中心が京都や大坂から東国の江戸に移動して広大な武蔵野台地と河口付近のデルタ地域が江戸の都市、さらには大名屋敷と庭園を生み出す母胎となり、それらの自然景観を活用して新たな造園を生み出すことが可能であったこと（地理的要因）、②明暦の大火以後、大名が主たる居住地とは別に多くの屋敷地を受領し、大名みずからの娯楽や趣味・休養だけではなく、安定した社会・政治体制のもとで将軍家の「御成」や大名間、武家同士の社交が常態化し、茶事や儀礼・遊興などを行う場の要求が高まったこと（社会的要因）によるものと考えられる。その庭の形式として、池を中心に園路をめぐらし、芝の広がりや築山、建物や工作物などを配置して点景・添景とするような庭園が好まれた。

こうして作庭された江戸の大名庭園の中には、典型的な回遊式庭園に共通する特徴のほかに、①弓場や馬場あるいは鴨場のような武芸と関連する空間が付随するもの、②臨海都市である江戸の立地を活かし、園地に海水を取り入れた「潮入り庭園」として魚釣りなども楽しんだもの、など公家や地方の領国では見られないような独特な機能をもつ要素を庭園内に盛り込んで作庭されたものもあった。

次に、現存する主な江戸の大名庭園とその特徴を示す。

**小石川後樂園** 寛永6年(1629)、水戸藩の初代徳川頼房とくがわよりふさ(在位：1603～61)が三代将軍家光(在位：1623～51)から小石川に屋敷地を与えられたことに始まる。初期の庭園は、変化に富む地形で巨木が生い茂っており、家光の意向も働いたという。二代藩主光圀(在位：1661～90)の時代にさらに庭園が整備される。明の遺臣であった朱舜水しゅしゅんすい(1600～82)が「後樂園」と命名したのもこの時期で、現在の名称の由来となっている。その後も改修が進められるが、四代宗堯むねたか(在位：1718～1730)、六代治保はるもり(在位：1766～1805)の時代には大規模な改修が行われた。庭園は回遊式庭園で、社交の舞台としての役割を持つ大名庭園の先駆けと言われる。庭園中央に大泉水と蓬萊島、大堰川や白糸の滝など日本の名所をモチーフに、西湖堤さいこのつつみや円月橋などの中国趣味のデザインも取入れ、各所に得仁堂などの建築物、築山として小廬山しょうろさん、水田や松原などを配し、多様な景色を起伏のある園路を歩行することで変化を楽しむ構成となっている。

**浜離宮** 浜離宮は、承応3年(1654)に甲府藩主徳川綱重つなしげ(在位：1651～78)が兄の四代将軍家綱(在位：1651～1680)から屋敷地を拝領したことに由来する。庭園は寛文9年(1669)頃に作庭が開始されたと言われている。宝永4年(1707)、中島茶屋の築造など大改修が行われ、綱重の子綱豊つなとよが六代将軍家宣いえのぶ(在位：1709～12)となった際に、将軍家の別邸として「浜御殿」と呼ばれた。明治2年には外国人の接待所として洋館が建設され、皇室の離宮として現在の「浜離宮」と名付けられた。庭園は海に面した埋立地で、池に海水を取入れた「潮入り庭園」として、歴代将軍たちの舟遊びや魚釣り、鷹狩りの遊興のほか、家臣の水練や馬術の鍛錬などにも利用された。また、園内には将軍が船で上陸するお上がりの場、御亭山おちんやま・富士見山などの築山、安永7年(1778)以降に整備された鴨場など、観賞だけが目的ではない点が特徴である。

**六義園** 川越藩主を経て甲府藩主となった柳沢吉保<sup>よしやす</sup>(1658～1714)が元禄8～15年(1695～1702)に作庭した庭園。吉保は五代将軍綱吉(在位：1680～1709)に重用され、庭園は将軍の御成など社交・遊興の場として利用されたという。吉保没後、文化7年(1810)頃に四代藩主吉光<sup>やすみつ</sup>が再整備し、明治維新後には三菱財閥の岩崎家が所有し、現在は東京都の管理となっている。庭園は吉保の文芸趣味を反映した和歌の世界を反映し、「万葉集」や「古今和歌集」などに詠まれた紀州の和歌の浦の風景を「八十八景」として表現した。六義園の名称は「古今和歌集」に書かれている和歌の六種類の様式「六義(六種＝むくさ)」に因む。庭園中心には大泉水を設け中島や岩島を配し、築山の頂上付近は「藤代峠」と命名し富士山や筑波山を望めるように造成し、滝や溪流なども設けて、回遊式庭園として多様な演出を施している。

**芝離宮** 芝離宮は肥前唐津藩で老中の大久保忠朝<sup>ただとも</sup>(1632～1712)が四代将軍家綱から延宝6年(1678)に屋敷地を拝領したことに始まる。文政4年(1821)には堀田家の上屋敷、文政6年(1823)に清水家の下屋敷となり、弘化3年(1846)に紀州徳川家が拝領して「芝御屋敷」となる。明治5年には有栖川宮邸、明治8年には宮内省の所管となり迎賓館として洋館が建設される。その後、大正13年に東京市へ下賜されて現在に至っている。庭園は大久保忠朝の時代に、隣地の取得や埋め立てなどを行い、「楽壽園」と名付け庭園の原形が形成された。忠朝が相模國小田原藩主となった際に、領地から庭師を呼んで産地の「伊豆石」や「根府川石」などを庭園各所に使用し、その他、中国の西湖の堤を模した石造の堤、蓬莱島の石組、州浜・砂浜などを設けた。また、かつては浜離宮と同様に泉水に海水を引込んだ「潮入り庭園」であったと言われている。



①小石川後楽園



②浜離宮



③六義園



④芝離宮

写真 2.2.4 江戸の大名庭園

### (3) 大名庭園としての小石川後樂園の位置

本稿で取り上げている小石川後樂園は、前述のように江戸時代前期に作庭が開始された典型的な回遊式庭園の大名庭園の一つとして位置づけられている。初期の小石川後樂園の姿は、その草創期から元文元年(1736)までを著した鵜飼信興<sup>うかいのぶおき</sup>「後樂園紀事」に記されている。それによるとこの土地は、起伏に富み自然豊かな立地であり、3代将軍家光自ら足を運び庭石や池の造成に指図したという<sup>注1)</sup>。作庭は「徳大寺左兵衛」という人物が関わり、その身分は「高家<sup>こうけ</sup>」として紹介されている。「高家」とは幕府の儀式や典礼をつかさどった家柄を指すことから、小石川後樂園が単なる一大名の造園整備ではないことが窺える。

庭園研究者の重森三玲は、小石川後樂園について「この後樂園が出現して以来、各地の大名庭園が、いずれも復古調の大池泉庭園となったことは、後樂園が手本となったことを考えると、左兵衛の設計施工の指導が大きな意味を持っていると考えてよい。(中略)本園は家光を始め、頼房が心を尽して大体の構想をたて、その好みのあることを徳大寺左兵衛に命じたのであった。(中略)この時代では、江戸が幕府の根拠地となり、天下の政治が京都と二分された関係もあって、東西両都の交通が必然に激化したことによって、各地の名所旧蹟が人々の好みとなり、特に江戸の人々には、古都京都の名勝が何よりも理想の景観となったことによって、特に園中には京都の名勝史蹟を多く布置したのであった。<sup>注1 2)</sup>」と述べている。ここには、初期の小石川後樂園が諸大名の庭園造成の手本となっていたこと、作庭には将軍家光と頼房が深く関わっていたこと、京都の名勝を理想の景観として作庭されたことなどが述べられている。

続く二代藩主光圀の治世である寛文元年(1661)から元禄3年(1690)までの30年間にさらに整備され、現在の小石川後樂園の骨格が出来上がったとされる。彼が水戸藩主になった頃、本園は未完成であったと言われている。光圀は青年期に中国の教えである孔子の「論語」などの儒教を中心に広く学問に励んだ人物で、庭園に儒教思想が付加されることになる。寛文5年(1665)、光圀は明末の儒者朱舜水を招聘し、彼が世を去るまでの18年間師事して、家臣の学問も指導させている。光圀は庭園内に「唐門」、「円月橋」、「西湖堤」、「得仁堂」など中国や儒教に由来する建物を建設するが、これらの設計には朱舜水が深く関わっていたと言われている。当時の光圀が先代頼房の趣旨を活かしながらも中国趣味や儒教の思想を背景として庭園造りに力を入れたことは、小石川後樂園の大きな特徴の一つとなっている。そこには、当時の日本全体が中国に対して強く関心を向けていたという社会風潮に起因していると考えられるが、こうした社会的要因と光圀の思想形成に関しては、後述する第2章4節「近世日本の儒教」にて論ずる。

また、光圀の時代には園内に水田が設けられ、田植や稲刈の行事を催して治下の庶民の労苦を共有することにつとめたと伝えられている。園内には「大日本史」編纂の支局が設けられ、臣下や学者たちを招き、教養を高め、親睦を深める場としても利用された。光圀の時代は、小石川後樂園が大いに活用され、本園の最盛期であったとも評されている。光圀が世を去ったのは、元禄13年(1701)のことである。後述するが、水戸藩邸の庭園はこの頃には既に名園として知られ、二代将軍秀忠(在位：1605～23)の娘で後水尾天皇(在位：1611～29)に入内した東福門院(1607～78)も庭園の絵を觀賞して褒め、自らの庭園作りの参考にしたとされていることから、小石川後樂園が公家の作庭に影響を及ぼしていたと考えられている。

その後、三代藩主綱条<sup>つなえだ</sup>(在位:1690~1718)の時代の元禄15年(1702)に、将軍綱吉の生母である桂昌院光子(当時78歳)を迎える際、歩行安全のために、大石や奇石を用いた石組が取り払われる大改造が行われる。次の四代藩主宗堯<sup>むねたか</sup>(在位:1718~30)は見晴らしをよくするため多くの樹木を伐り払い、大泉水の石組を崩して地割を変更、石積を取り払うなどの大改修がなされた。さらに、六代藩主治保<sup>はるもり</sup>(在位:1766~1805)の時代には、現在の白糸の滝が設けられ、大木や銘木なども復活させるなど再整備が進められた。

このように小石川後楽園は、整備が繰り返されながら、それまでの日本庭園の構成要素を集大成した「回遊式庭園」として、大堰川、白糸の滝などの日本の景観と、西湖堤や円月橋など中国趣味との和漢が共存したデザインを園内各所に取り入れ、公家や武家の庭園作りにも影響を及ぼした江戸時代を代表する大名庭園として位置づけることができる。

## 2.2.2 庭園と建造物の関係

### (1) 庭園における建造物の意味

これまで我が国の庭園史の概要を述べてきたが、各時代に共通する構成要素として、園内に建造物などの施設が築造されることが多い。

庭園内における建造物は、例えば、古代に作庭された浄土式庭園では、平等院や浄瑠璃寺の阿弥陀堂のように池庭を前面に配置する「堂」、寝殿造式庭園では池の前面または左右に寝殿が臨む「殿」、中世では座観式庭園として書院造の建物として建設された金閣・銀閣など、庭園の観賞や生活を楽しむための施設としての「閣」などと呼称されている。また、桃山時代に入ると書院造庭園の中に茶の湯を目的とした「亭<sup>てい</sup>」としての茶室や、その他にも腰掛や、露地の入口としての門なども設けられた。

江戸時代に入ると、桂離宮に代表される公家文化の中に社交場としての回遊式庭園が作庭される。桂離宮の園内には古書院などの御殿のほか、茶事を目的とした松琴亭や卍亭など比較的小規模な建物が配置される。こうした趣向や構成は大名庭園にも組み込まれていく。

庭園の研究者である白幡洋三郎は、大名庭園の成立に関して、桂離宮との関連を次のように述べている。「大名庭園の成立と、その発展、そしてその価値は宮廷の庭園を評価する姿勢からは、まったく顧みられたことがなかった。じっさい大名の庭園は、茶事、宮廷サロン、京都の庭園とは一線を画して語られてきたのである。だが江戸の大名屋敷の庭園と京都の庭園とは別に考えることができない、切り離せないものなのである。しかも大名の庭園は、京都に生まれたサロン文化を上回る規模で、さらに発展させた豊かな社交文化を生んでいる。(中略)できあがった古書院、松琴亭、竹林亭などを含め、桂離宮の庭園全体は「瓜畑茶屋」とか「瓜畑のかろき茶屋」などと呼ばれていた。茶庭という語感にはあまりなじまない、広々とのびやかな桂離宮の庭園ではあるが、回遊する園路の各所には、茶亭や腰掛茶屋がつぎつぎにあらわれる。茶亭における茶事と書院における儀式をつなぐのが園路であり、庭園なのである。すなわち茶事を中心とする貴族の社交舞台としてつくられた庭園が、桂離宮だった。江戸の大名たちの庭園も、とくに初期の頃は、このような気分支配されていただろう。初期の大名屋敷において茶事が庭園造成への原動力の一端となっていたことを指摘しておきたい。<sup>注13)</sup>」ここには、大名庭園の成立は京都のサロンや



庭園、とくに桂離宮と切り離せず、茶事は作庭の核となる要素であったことが紹介されている。

江戸時代の武家社会では、二代将軍秀忠以来、将軍が大名家を訪問する「御成」が頻繁に行われ、そこには茶事が頻繁に行われたという。特に江戸時代初期は、御成を受け入れる大名にとって、屋敷地に茶室・茶庭を設けることが当然となっており、来客をもてなす装置として庭園が活用された。この時期の大名庭園では茶事は欠かせない要素であったので、桂離宮と同様に回遊式庭園の園内にはこうした「茶亭」が各所に配置された。ただ、庭園内で茶事が占める割合は、時代が下ると減少し、社交儀礼や遊興などの場として利用されることが多くなり、多様な目的の受け皿として、その規模や機能も変化・発展していくことになる<sup>注14)</sup>。小石川後楽園の得仁堂も、そうした潮流の中で建設されたと考えられる。

このように大名庭園は、その草創期は茶事を核とした回遊式庭園が作庭され、その後、様々な機能を持つ建物が園内に建てられていく。ここではその建物の名称について考察してみよう。

一般に庭園内の、特に回遊式庭園の園路沿い配置された建物は「あずまや（四阿、東屋）」などと呼ばれることが多い。しかしこの言葉は建物周囲が吹き放しで簡易な建物の印象があり、得仁堂のように規模は小さいが、周囲を壁で覆い、禅宗様の柱や組物・建具類を備え、屋根に宝珠を頂く宝形造とする本格的な建物に対する呼称としては、必ずしも適切であるとは言い難い。例えば、『建築大辞典』の「あずまや」の説明は、「庭園中に設けられる休憩用の屋。草または樹皮葺きの方形の屋根を4本柱で支え、四方を吹放ちとしている。現在は、多角形や円形のものもある。「亭」、「亭」、「四阿」、「園亭」ともいう。<sup>注15)</sup>」と、掲載されていることにも窺える。一方、『岩波日本庭園辞典』には、「四阿に同じだが、庭園建築の四阿がおもに吹き放ちのものをいうのに対し、亭は座敷・付属設備などをともなう住屋形式の小建築物をいうことが多い。<sup>注16)</sup>」と、「四阿」の中でも、吹き放しとなっていない建物は「亭」と呼ばれることが多く、特別に区別されることがあることを説明している。

小石川後楽園の場合、得仁堂はその名が示す通り「堂」と呼称されており、他にも同様に「八卦堂」、「西行堂」、「清水観音堂」などと呼ばれる建物がある。過去にも古代庭園では阿弥陀堂など「堂」という言葉を用いており、崇拜する神仏や個人を祀る建物には、他の建物とはわざわざ区別して建物の性質そのものの意味も含めて名付けられていると考えられる。

このように見てみると、庭園内の構成要素として、園路に配置された各建物の名称は、広い意味で「あずまや（四阿、東屋）」、「亭」、「園亭」などと呼ばれ、その範疇の中にあつて、狭義に「堂」などと呼称されていることがわかる。小石川後楽園では、得仁堂以外にも、丸屋、九八屋などの建物や、円月橋、渡月橋、唐門、西湖堤など建物以外の構成要素も多い。回遊式庭園は、こうした様々な要素を園内に配置することによって成立していたということを名付けられている名称から理解することも出来る。

また、中世に流行した座観式庭園などは、建物から庭を眺めることを主として築造されてきた。しかし、江戸時代に大名たちが好んだ回遊式庭園の場合、園内の建物は「点景」または「添景」として配置されたことに加えて、各建物で景色を眺め、休息し、時には神仏などを礼拝する施設として利用することも目的としている。すなわち江戸時代の大名庭園内の建物は、景色となる場合（景）と、施設を利用する場合（用）の両面として機能していたと考えられる。

庭園研究者の進士五十八はその著、『日本庭園』の中で、「ふつう家をつくって、その家に合わせて庭をつくる。しかし、大名庭園のように広大な造園では逆である。家＝建物は、庭の風景の添景として、その場所に似合いの規模とデザインで配される。庭園内の建物は総称して「園亭」と呼ばれる。(中略) いずれにしても高台や築山の上につくられ、そこから景色を眺めたり、休息したり、食事を摂ったり、待ち合わせたりの実用に供され、他方で、その場所の景観に特別の景趣を添える味わいが期待できる。まさに「用と景」の両方を充たし、眺め、眺められる施設が園亭なのである。<sup>注17)</sup>」と、大名庭園内の施設について解説していることにも窺える。

また、白幡洋三郎は、「それまでの造園、とくに鎌倉・室町時代の、石組に特色をもつ庭園では、一つの造形、意匠が見つめられ、また主な観賞の対象となる。しかし大名庭園の場合、一つ一つの造形物・意匠は、点景、添景というべきものである。それらは皆、一つ一つが強い自己主張をしようとしなない。大名庭園全体にとっての添景であり、回遊の先ざきに現れる点景なのである。「見る」だけでなく「使う」庭として、「使う」機能を、より高めるために個々の造形物は存在している。<sup>注18)</sup>」と、大名庭園内の各施設は、点景または添景として「見る」ための役割と共に、「使う」ことも目的として建てられたことを述べている。

このように、江戸時代の大名庭園は、単に建物から鑑賞するだけではなく、社交・儀礼の場として使用され、園内の建物は点景や添景であると共に、積極的に利用する施設としても築造されたと見られる。得仁堂もそうした側面を併せ持つ建物として建設されたと考えられる。

## (2) 小石川後樂園における得仁堂の位置

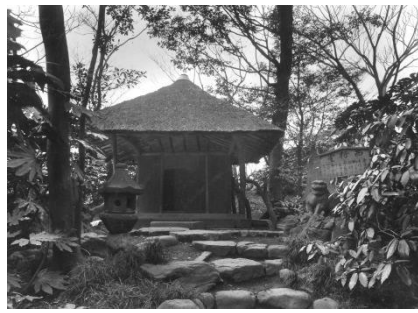
これまで見てきたように、小石川後楽園内には、多様な目的・機能を満たすための装置として、和漢の教養を取り入れつつ数々の施設が建設された。現在、その多くは残っていないが、得仁堂のように江戸時代前期に庭園が作庭されてから間もなく建設された施設も遺存している。

ここで小石川後楽園内における得仁堂の位置を確認するため、園内に建設された主要施設を示す(写真2.2.5、図2.2.2、表2.2.2)<sup>注19)</sup>。本稿で取り上げた施設は、比較的小規模なものは除き、機能やその由来を踏まえて「日本趣味」と「中国趣味」に大別した<sup>注20)</sup>。

現在、小石川後樂園を説明するガイドブックなどには、その構成を4つの景色に見立てている。それらは、中島を中心とする大泉水とその周辺を「海の景」、清水観音堂跡や小廬山、得仁堂周辺を「山の景」、水田や梅林などの「田園の景」、西湖・渡月橋・大堰川一帯を「川の景」などと呼ばれている。

また、小石川後樂園は、近代に入ると水戸家の所有から離れ、明治2年に兵部省の所管となり、その後、造兵司、陸軍省を経て、明治12年に東京砲兵工廠として利用される。その際、かつて小石川後樂園東側に存在した上屋敷は取り壊され、兵器製造所などの建物が建設されることになる。もともと庭園と屋敷地は門と堀で仕切られていたが、屋敷内には別に書院の庭があり、その一部が現在の小石川後楽園内に遺存している。この屋敷の庭部分は「内庭<sup>うちにわ</sup>」と名付けられており、ここではそのエリアも図中に示した。

なお、現況の小石川後樂園は主として北西隅から入場しているが、江戸期はこの東南側の内庭より唐門を通して庭園内に入ったと考えられている。



西行堂

公益財団法人東京都公園協会所蔵写真



清水観音堂

大木秀人『後楽園略記』より転載



渡月橋



通天橋



丸屋



九八屋

日本趣味



得仁堂



円月橋



西湖堤



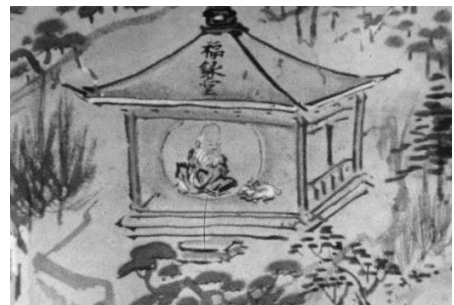
八卦堂

大木秀人『後楽園略記』より転載



唐門

公益財団法人東京都公園協会所蔵写真



福祿堂

「後楽園絵図」(明大本)

中国趣味

写真 2.2.5 小石川後樂園主要施設

表 2.2.2 小石川後樂園主要施設略年表

施設名	年代	江戸			明治	大正	昭和	平成
		17世紀		18世紀	19世紀	20世紀		21世紀
		頼房 治世：1609－61	光圀 治世：1661－90					
日本趣味	西行堂	小石川後樂園の地を賜る（1629）						東京大空襲により焼失（1945）
	清水観音堂							関東大震災により焼失（1923）
	渡月橋							
	通天橋							
	丸屋							
	九八屋							
	得仁堂							
中国趣味	円月橋							
	西湖堤							
	八卦堂							関東大震災により焼失（1923）
	唐門							東京大空襲により焼失（1945）
	福祿堂			元禄地震により崩壊（1703）				

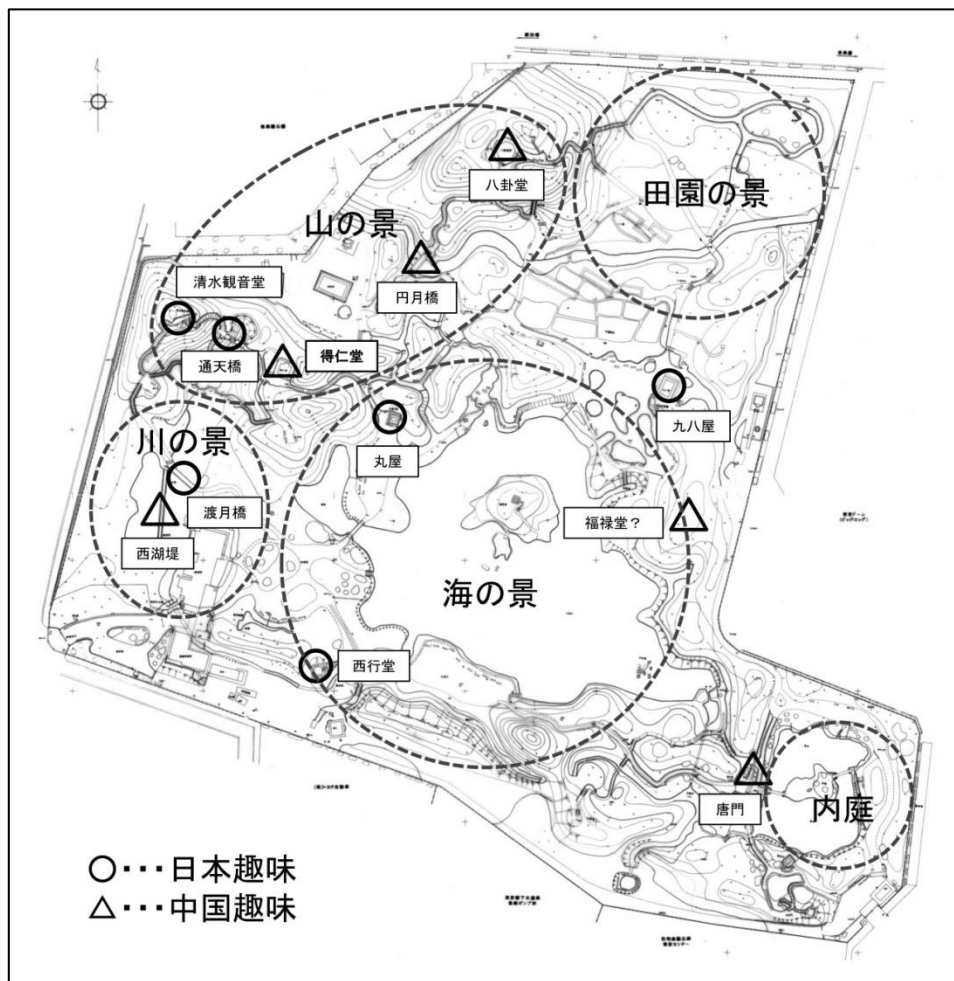


図 2.2.2 小石川後樂園主要施設配置図

東京都建設局東部公園緑地事務所蔵「小石川後樂園現況平面図」（昭和 63 年測量、平成 3 年補正）を加筆

得仁堂を除く各施設の概略は、以下の通りである。

### ＜日本趣味＞

**西行堂** 平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて武士・僧侶・歌人であった西行法師（1118～1190）の像を安置した建物で、背面に壁その他は三方吹き放し、床に敷瓦、屋根は茅葺の宝形造で頂部には陶鉢を載せていたという。創建は初代頼房時代まで遡り、寛永 17 年(1640)の林羅山「小廬山記」<sup>注21)</sup>に「草庵二百年」とあり、これが西行堂を示していると考えられている。関東大震災時に柱が倒れて屋根が落下したが、昭和 2 年に陸軍省によって修復工事がなされた。震災時、像は園内の別の倉庫に保管されていたため焼失し、建物も東京大空襲によって焼失した。

**清水観音堂** 京都の清水寺を模した木造建物で、崖から張り出す懸造形式であった。初代頼房の時代には完成していたとされ、「小廬山記」には「有寺曰清水」とある。堂内には南北朝時代に製作されたと伝えられる如意輪観音像が安置されていた。建物は度々修理が行われたが、関東大震災で焼失した。この時、像は建物の焼失直前に救出され現存している。また、元禄 15 年製作の扁額も遺存している。

**渡月橋** 園内西側に大堰川と名付けられた川に掛けられた橋で、京都嵐山の景観に因んで造られたと言われている。川には大小様々な石組が配され、「將軍腰掛の石」と称される石もある。庭園研究者の吉河功<sup>注22)</sup>によれば、通月橋は初代頼房の頃には石橋として、現在よりも大堰川上流に築造され、その後、西湖堤の北にある現在の橋を改めて渡月橋と命名したとしている。

**通天橋** 京都東福寺の通天橋を模して造られた朱塗の橋で、大堰川の川上に掛けられている。前記した「小廬山記」には、京都東山の音羽山の清水観音堂、音羽滝、通天橋の一带を小廬山と呼称していたので、それに因んでこの辺りを「小廬山」（現在同名の小山と異なる）と呼んでいることが記されている。「廬山」は中国中部の江西省にある景勝地で、当時の日本人の憧れの地であったという。林羅山は、廬山に建つ念仏修行の結社である「蓮社」の寺を清水寺に、「蓮社之橋」を通天橋に見立て「小廬山記」を著したと考えられている。ただ、創建には諸説あり、文献上、「通天橋」の名称の初出は文政 3 年(1830)であって、元禄 16 年(1703)の地震やその後の天災によって、大堰川の川上の滝が枯渇した後、現在の位置に新造した橋が通天橋であるとの指摘もある<sup>注23)</sup>。

**丸屋** 宝形造の茅葺の建物で、現在は休憩所として利用されている。江戸期には田舎道の茶屋を模した施設として利用されていた。第 3 章で詳述する寛文 5 年(1665)から同 8 年(1668)までに描かれたとされる「水戸様小石川御屋敷御庭之図」（明治大学博物館所蔵）<sup>注24)</sup>に「丸屋」と名付けられた建物が現状位置にあることから、創建はこの時代まで遡ることができる。文献上では元禄 15 年(1702)の榎本其角著「後樂園拝見之記」<sup>注25)</sup>に「丸屋」と紹介されたのが初出である。江戸時代の絵図には長方形の建物として描かれているが、明治 39 年の庭園図面<sup>注26)</sup>には正方形で描かれていることから、この頃には現状と同規模の大きさに建て替えられたと見られる。史料から建物は度々修理を受けていることが窺えるが、関東大震災時に屋根が崩落したため、昭和初期に陸軍省により再建された。その後、第二次大戦の東京大空襲により焼失し、昭和 41 年に再建した。これは、昭和 13 年頃に撮影された古写真<sup>注27)</sup>を見ると、焼失前の建物とほとんど変わらないので、忠実に復元したものと見られる。近年では、平成 25 年度に保存修理工事を行い、平成 26 年 3 月に完了した。

**九八屋** 寄棟造、茅葺の建物で、園内の東方に位置し、丸屋と同様に現在は休憩所として利用されている。前出の「後樂園絵図」(明大本)を見ると、現況位置に「新御茶屋」と名が添えられた建物があることから、創建は寛文期まで遡ると見られる。文献上では「後樂園拝見之記」で「黒木の茶屋」とあるのが初出である。その後、「酒茶屋」「酒屋」などと呼ばれていたが、安永4年(1775)頃の名越克敏の「後樂園志」<sup>注28)</sup>に「九八屋」とあり、この頃に現在の呼称になったと見られる。本書には酒を飲むに昼は九分、夜は八分にして万事控えることをよしとする教訓があり、これが建物名の由来とされている。江戸期に描かれた絵図では、九八屋は現在の建物より大きく、間取りも数室から成っていたことが窺えるが、明治元年に倒壊し、同35～36年頃に現状程度の規模に改められ再建したと見られる。その後、第二次大戦の東京大空襲により焼失したため、昭和34年に再建した。これは、同10年の古写真<sup>注29)</sup>には、焼失前とほとんど変わらない姿が写っているため、丸屋と同じく、忠実に復元したものと見られる。近年、木部の虫害や茅葺屋根の劣化が見られたため、平成25年度に保存修理工事を行い、平成26年3月に完了した。

### ＜中国趣味＞

**円月橋** 円月橋は、小石川後楽園内の北方に位置し、清水観音堂・通天橋・得仁堂から八卦堂跡へ至る園路を繋ぐ橋で、「神田上水跡」に架かる石造アーチ橋である。橋の高欄石の彫刻は細やかな造形が施され、園内における景観に配慮した格式の高い石橋として位置付けられる。設計には朱舜水が携わり、石工は駒橋嘉兵衛によると伝えられている。その意匠は、朱舜水の生地である浙江省余姚市の通済橋との類似を指摘する研究もある<sup>注30)</sup>。建設年代は朱舜水が小石川後楽園を訪れた寛文9年(1669)～同13年(1673)頃とされている。絵図や史料には「唐石橋」、「車橋」、「石橋」、「太鼓橋」等とその名称が記述されているが、元文元年(1736)の鶴飼信興「後楽紀事」に初めて「圓月橋」と記されているので、この頃には現在の呼称となったと見られる。名称の由来は橋が水に写る姿が満月のように見えることにあると言われている。また、我が国における江戸時代の石造の橋は、九州地方で多く築造されているが、関東ではその例は少ない。現存する石造アーチ橋で旧規をよく残し、円月橋以前に築造されたものは、沖縄の天女橋(弘治15年<1502>)、長崎の眼鏡橋(寛永11年<1634>)、金沢尾山神社の弓月橋(寛永19年<1642>頃)などが挙げられる。小石川後楽園は現在まで幾多の地震や戦火に遭ったにもかかわらず、円月橋の大規模な破損や修理の文献記録はなく、創建当初の姿を保っていると考えられる。近年では上部造作材を中心に損傷が著しく進行していたため、平成23年度に保存修理工事を実施し、平成25年3月に竣工した。

**西湖堤** 西湖堤は、朱舜水が寛文9年3月19日に後楽園で開かれた花見の宴を詠んだ「遊後樂園賦并序」<sup>注31)</sup>に「容<sub>一</sub>与<sub>二</sub>蘇公之陂<sub>一</sub>。涉<sub>一</sub>平涉<sub>二</sub>聽<sub>一</sub>飛濤<sub>二</sub>。」(「蘇公の堤でゆったりとし、平らな渡しを歩いて水を越え、早く流れる水音を聞く」とあり、この中の「蘇公之陂」(中国浙江省の西湖に蘇軾(蘇東坡)が造った堤)が西湖堤であると見られる。創建年は、朱舜水が水戸家に招かれた寛文5年(1665)～同9年(1669)の間と考えられている。現在の名称は、元禄10年(1697)に安藤定為が記した「常陸帯」<sup>注32)</sup>に「西湖のつゝみ」とあるものが文献上の初出であるが、この堤を描いた絵図「水戸様江戸御屋敷御庭之図」(元禄16年<1703>以前)<sup>注33)</sup>を見ると

その名称が「コケイノツツミ(虎溪の堤)」となっている(図 2.2.3)。「虎溪」とは中国廬山中の名刹東林寺付近の溪谷の名で、一時期、このあたりの景色を「虎溪」になぞらえていた時期があったことを窺わせる。いずれにしる中国の景勝地に憧れその景を縮め築造したと考えられる。また、この絵図には現状の直線とは異なり鍵形に曲がっていることから、後世に改変されたと考えられている。なお、大名庭園の中で、西湖堤(蘇公堤)を作った例は、旧芝離宮(東京都)、縮景園(広島県)、養翠園(和歌山県)、神野園(佐賀県)などがあるが、小石川後樂園はその中でも最も古い例と考えられている。

**八卦堂** 八卦堂は、「八角堂」、「文昌堂」などとも言われ、光圀が幼少の頃に三代将軍家光から拝領した文昌星の銅像を安置した八角形平面の建物であった。文昌星は学問を司る神として知られる。「水戸様小石川御屋敷御庭之図」(明治大学博物館所蔵)には「八角堂」として、屋根は宝珠を頂く瓦葺、外廻りを朱色として描かれている。絵図の制作年から、その建立は寛文5年(1665)～同8年(1668)まで遡ることができる。また、「後楽記事」などによれば、五代将軍綱吉の母、桂昌院が元禄15年(1702)に来園した際に、安全性を確保するため瓦葺はこけら葺、屋根の剣形の飾りは宝珠に取替え、享保年中(1716～36)に再度、瓦葺に復し、文昌星の像を他に移して金毘羅神を安置したとある。その後、屋根の剣形は復旧し、屋根は再びこけら葺となったという<sup>注34)</sup>。内部の詳細は詳らかでないが、格天井には極彩色が施されていたという。吉永義信の「名勝調査報告」によれば、大正10年に修理がなされたが、直後の関東大震災にて焼失し、現在は基礎部分のみ遺存している。震災直前の調査では「八卦堂は亜鉛葺宝形造八角の木造建築物であって建坪九坪四合六勺である。<sup>注35)</sup>」とあり、この時には亜鉛鉄板葺であったことがわかる。

**唐門** 上屋敷から園内に入る正門で、「後楽記事」によれば、「後樂園」の扁額を朱舜水が揮毫、御細工人太田九蔵金具が文字を造ったとある。また、「水戸様小石川御屋敷御庭之図」(明治大学博物館所蔵)には「御唐門」と名称が記載され、図中に「後□□」(虫損のため「後」のみ見える)の額も確認できることから、その建立時期は寛文5年(1665)～同8年(1668)と見られる。また、「後樂園」の名称は宋の范仲淹の作である「岳陽楼記」(1046)の「先天下之憂而憂後天下之樂而樂(天下の憂いに先んじて憂え、天下の楽しみに後れて楽しむ)」という一文をとって、朱舜水が選名したとされる。建物は台輪・拳鼻・棧唐戸などで構成する禅宗様で、彫刻部分は極彩色で彩り、屋根は向唐破風本瓦葺で獅子口を載せ、本柱から内庭側の軒裏は茨垂木、控柱側は格天井であったという。「名勝調査報告」によれば、大正10年に修理がなされたが、直後の関東大震災時に両袖塀を含めて傾斜が見られたため、昭和2年に修理が施されている。その後、東京大空襲によって焼失し、現在は基礎部分のみ遺存している。

**福祿堂** 「後楽記事」によれば、「小堂なり 内は、唐風の造作にて敷きかわらなり 福祿寿の像を安置せり これも大地震に崩れて地中に沈めり その後御造営なし<sup>注36)</sup>」と、この建物が唐風で、福祿寿(七福神の一つで、幸福・俸祿・長寿の三徳をそなえるという)の像を祀っていたが、大地震(元禄16年<1703>)で倒壊したとしている。また、「水戸様小石川御屋敷御庭之図」(明治大学博物館所蔵)には、「福祿堂」と名称が記され、宝形造で朱塗の建物として描かれている。「水戸様江戸御屋敷御庭之図」(元禄16年<1703>以前)には「ホクロク堂」の名が見える。その建設位置は特定できないが、大泉水の東または北側付近に所在していたと考えられる。

これらの施設を創建から現在に至るまでの経過をまとめた表 2.2.2 見ると、小石川後樂園の草創期である頼房の治世には、主として日本国内の景観を中心に庭園を構成していたが、光圀の治世になると朱舜水の思想も加えて、得仁堂や八卦堂、福祿堂などの建造物、さらには円月橋や西湖堤のような橋や工作物など、儒教の教えや中国の景勝地に因んだ施設を新たに造営し、中国趣味が強調されたことが理解できる。ただ、光圀没後、元禄 15 年(1702)に、五代将軍綱吉の生母である桂昌院の訪問時に多くの石組が取り払われ、次の四代藩主宗堯の時代にも多くの樹木の伐採が行われるなどの改造も行われた。

このように小石川後樂園の時代区分は概ね、①草創期、②光圀時代、③光圀没後の三期に分けることが出来るが、ここで取り上げた主要施設に限ってみると、江戸時代に描かれた絵図や、現存している建物および基礎遺構などから、その位置は光圀の時代に築造された場所と概ね変化がなく、現在に至るまで、小石川後樂園の景観要素として修理を繰り返しながらも引き継がれてきたと考えられる。

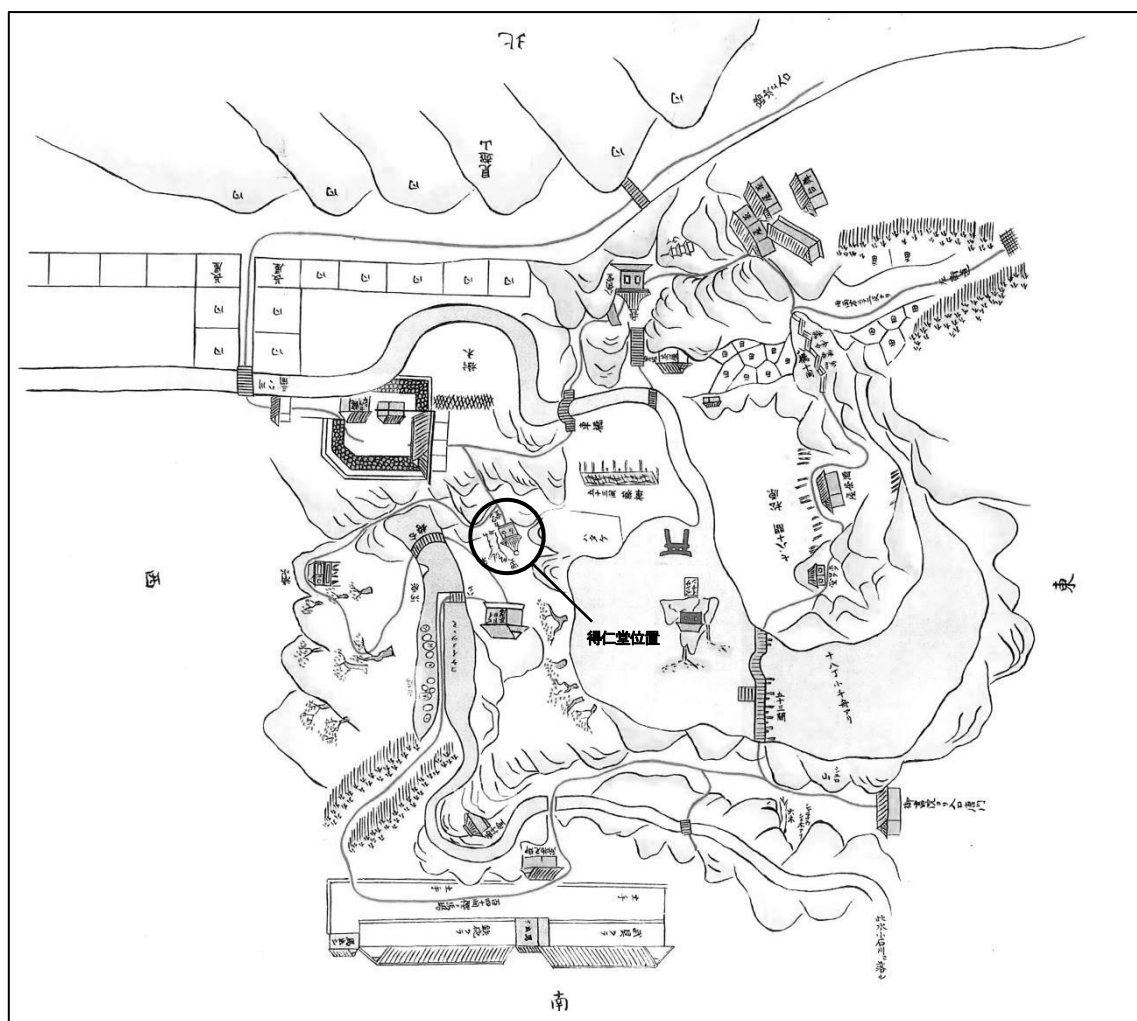


図 2.2.3 「水戸様江戸御屋敷御庭之図」(元禄 16 年<1703>以前)

吉永義信『名勝調査報告 第三輯』より転載(一部加筆)



得仁堂は、小石川後樂園西部の谿谷を思わせる地形の川を遡った先の山頂付近で、現在「山の景」と称される場所に建てられている。山中を模したこの辺りは、庭園全体の中で他の「海の景」、「田園の景」、「川の景」とは異なる特徴を持つ景として、得仁堂創建時から庭園内での役割は概ね変化していないと考えられる。例えば、林羅山の「小廬山記」寛永17年(1640)には、既に頼房の時代からこの付近を中国の景勝地に因んで「小廬山」と呼んでいる。

その後も、羅山の三男である林鷺峰が著した「国史館日録」(寛文2年<1665>～寛文12年<1672>)を見ると、山頂付近で園外の遠望景観を眺め、その景色を楽しんだとの記述も見られることにも表れている<sup>注37)</sup>。同書には光圀が儒学者たちを招いて、饗宴の後に園遊、詩宴の会を催したことも記され、当時の雰囲気を感じることが出来る。さらに、朱舜水が記した「遊後樂園賦并序」(寛文9年<1669>)には、「吾聞山-中<sup>ノ</sup>旧-祠。泰-伯夷齊。<sup>注38)</sup>」と、泰伯・伯夷・叔齊を安置した祠<sup>ほくら</sup>、すなわち得仁堂が山中に佇む様子を伝えている。詳細は後述するが、伯夷・叔齊の兄弟は古代中国・殷代末期の人物で、孔子の「論語」や司馬遷「史記」に登場する中国の賢人として知られ、晩年は首陽山の山中に隠棲して最期を迎えたとされている。安置した像の由縁と、その建物を山中に建てた意図が一致している点は注目に値する。

また、元禄時代頃に描かれたとされる「水戸様江戸御屋敷御庭之図」(元禄16年<1703>以前、図2.2.3)には、園内の回遊路が示されている。この頃は、光圀が作庭した庭園の姿からほとんど変化がないと考えられる。これを見ると、唐門(図中右下)から入場し、「シュロ山」(棕櫚山)を抜け、大泉水の南側に至り西進するルートと、現在では失われているが大泉水の南北の岸に架けられた長橋(図中「五十三間」)を渡って北に進むルートに分岐しているが、いずれも大泉水を中心として庭園内の建物や橋などの施設を経由しながら園内を廻る経路が示されている。この図では、厳密に建物の位置や向きを描いているとは言い難いが、少なくとも得仁堂(図中「カウシ堂」)が、庭園の回遊路沿いにあることは確認できる。

一方、得仁堂には儒教に由来する建物としての側面があるが、光圀は得仁堂で像を毎日拝んだと言われている<sup>注39)</sup>。第6章3節3項で詳述するが、堂内には漆塗螺鈿造りの机が遺存しており、これは中国の明または清で制作されたものとの指摘がある<sup>注40)</sup>。この机に関しては江戸時代後期の記述にも、建物内部で螺鈿の机に香燭を備えていたことが記されている<sup>注41)</sup>。制作時期など詳細は不明であるが、その造作は細かい螺鈿を丹念に象嵌して漆で仕上げている精巧なものであることから、得仁堂創建時から室内の調度品として用いられていた可能性もあり、建築物の機能的側面を推し量ることも可能と思われる。いずれにしろ、得仁堂は単に庭園内の点景や添景として建立されただけではなく、建物内に像を安置して礼拝すると言った「用」としての機能も有していたことは想像に難くない。

このように、小石川後樂園内に建つ得仁堂は、水戸二代藩主であった光圀の時代以降、中国趣味が強調された回遊式庭園の中で、「景」と「用」の性質を併せ持った、儒教思想に由来する建物として、創建当初から山中に建つ建物として計画されたと考えられる。

得仁堂と同じような規模・形式を持ち、江戸時代中期に建設された儒教に関する木造建造物は、江戸の大名庭園には現存していないことから、得仁堂は、江戸時代の庭園作りの一環として建設された貴重な歴史的建造物と考えられる。

## 2.3 得仁堂の建築的位置づけ

### 2.3.1 建築史における系譜

#### (1) 建物の概要と規模

これまで、得仁堂を庭園史または庭園内における建物としての考察を行った。ここではまず、建築的な概要と規模を説明し、その後に建築的な位置づけを行うこととする。

得仁堂は、正背面三間、側面二間の宝形造銅板葺の建物である。建物の背面には像を安置するための「トコ」<sup>注1)</sup>が取り付く。内部は、敷瓦の床に格天井で構成され、構造や細部には主として禅宗様の形式が見られる。後世、屋根の仕様やトコ廻りは改造されているものの、主要軸部は建設当初のまま現在に至っている。得仁堂の建物の概要とその規模を整理すると以下のような（平成26年3月修理工事完了後）。

#### 概要

##### ①全体

正背面三間、側面二間、一重、宝形造、正面軒唐破風付、銅板葺、背面トコ附属

##### ②各部

基 礎：礎石・礎盤、礎石（トコ部分）、地覆石、縁石ともに切石。縁石内軒下叩き。

軸 部：下部粽付円柱、礎石建、地覆・頭貫にて固め、内法長押を内外に廻す。正面に虹梁（下部錫杖彫）を渡し、蓑束立とする。中央間幣軸構え、側面南寄り中敷居と無目鴨居が付く。トコは土台を廻し角柱を建て頭繋ぎで固める。

組 物：出組。

中 備：正面中央間に臺股、その他蓑束。

軒 廻：二軒繁垂木、丸桁、木負、茅負、二重裏甲、軒唐破風、兎の毛通し付。

屋 根：宝形造、銅板葺、屋根頂部露盤宝珠付、軒唐破風箱棟、先端に鬼板銅板包。

床：敷瓦。

壁：豎羽目板、化粧胴縁。

柱間装置：正面幣軸構え双折棧唐戸、両側面突上戸。

造 作：トコ、格天井。

金 具：長押釘隠、垂木・隅木木口金具。

そ の 他：組物木口・蓑束胡粉塗、木鼻渦紋墨塗、臺股（飛龍彫刻）彩色。

#### 規模

##### ①正面柱間（柱真々間距離）

総柱間	3.940m（13 尺）
正面中央間	1.970m（6.5 尺）
正面脇間	0.985m（3.25 尺）
背面中央間	1.696m（5.6 尺）
背面脇間	1.122m（3.7 尺）

##### ②側面柱間（柱真々間距離）

総柱間	3.940m（13 尺）
-----	--------------

各間	1.970m (6.5 尺)
トコ柱間	0.788m (2.6 尺)
③軒の出	
柱真～茅負外下角	1.318m (4.35 尺)
柱真～丸桁真	0.218m (0.72 尺)
丸桁真～木負外下角	0.715m (2.36 尺)
木負外下角～茅負外下角	0.370m (1.27 尺)
④平面積	16.860 m <sup>2</sup>
⑤軒面積	43.244 m <sup>2</sup>
⑥屋根面積	
銅板平葺面積	66.798 m <sup>2</sup>
⑦軒高 礎石上端～茅負外下角	2.620m
⑧総高 礎石上端～宝珠上端	6.150m

後述するが、得仁堂は、トコ廻りや屋根・小屋組を除いた主要軸部は、概ね創建当初の部材と見られ、その基本寸法は、和尺(1 尺≒0.3m)によって計画されている。建物本体部分の平面は、各柱の木鼻間、垂木寸法などにより、13 尺×13 尺の整った数値の矩形である<sup>注2)</sup>。断面も同様に和尺によって計画されたと見られ、高さは北西隅の後世の根継が施されていない当初柱を基準に算出した。組物は出組で各柱上に設けるが、背面中央間は、建物真から東側に 151 mm(5 寸)ずれた位置にある。中備は正面中央間に臺股を置き、両側面・背面および正面虹梁上に蓑束を配置する<sup>注3)</sup>。軒は二軒疎垂木で正面に唐破風を付ける<sup>注4)</sup>。建物の主な部材名称と、計画寸法は、以下の図 2.3.1、図 2.3.2 となる。

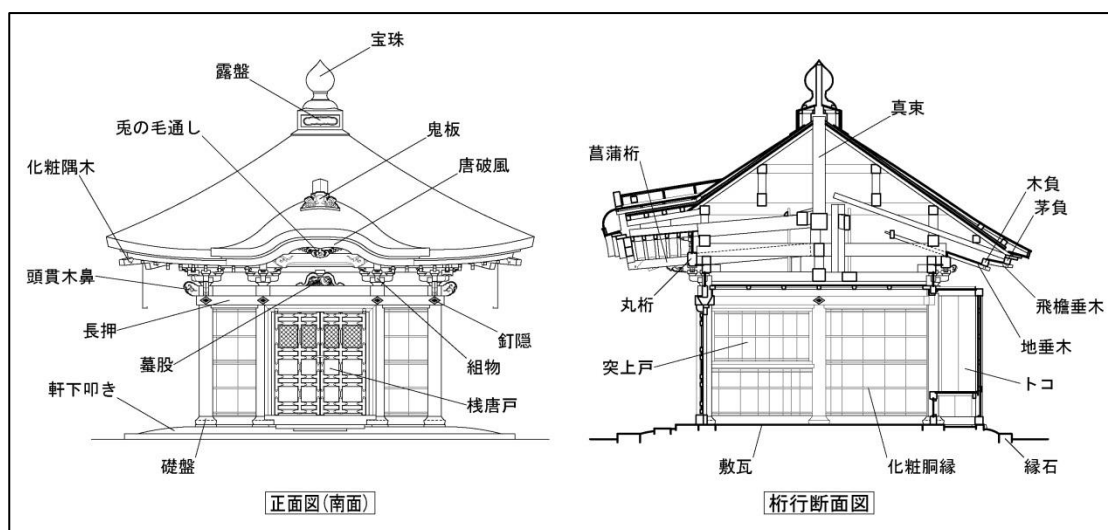


図 2.3.1 主な部材名称

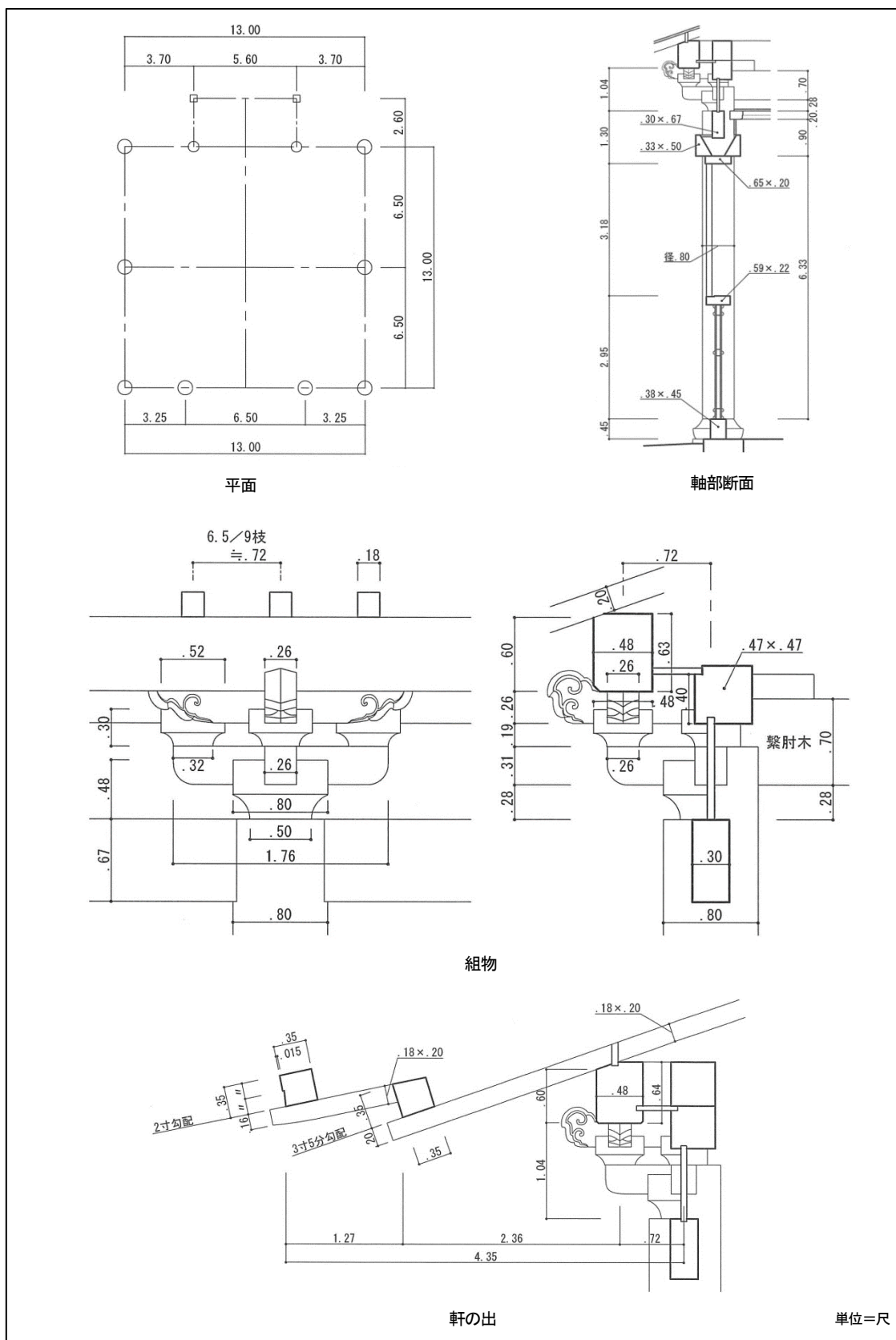


図 2.3.2 各部計画寸法

## (2) 建築史的分類

ここではまず、得仁堂の建築的な位置づけを行う際に必要となる用語を抽出し、その項目に基づいて解説を行うことにする。一般にある建物を建築史の観点から分類する場合、その形状に基づいて「様式」または「形式」という言葉を用いて説明されることが多い。

「様式」という用語は、『建築大辞典』（第二版）によると「一つの作品、または作品群に共通する表現の特徴。作る側の何らかの共通基盤に支えられ、個人様式、民族様式、時代様式等さまざまな種類がある。いったん成立すると模倣、伝承されていく。建築の様式は多くの場合、その表層的特徴の具体的性格から分類された。（後略）<sup>注5)</sup>」と解説されている。また、「様式」とほぼ同じ意味で紹介されている「様」を見ると、「建築や庭園などで特定の哲学、社会習慣、基準、概念などで決められる特定の形式、または表現の形式。和様、唐様、天竺様、折衷様はこの例である。明治以降、「様式」と呼ばれるようになった。<sup>注6)</sup>」とある。これらを見ると、「様式」または「様」は、①建物が成立した社会、すなわち個人や民族、時代などを考慮して名付けられる、②「形式」の意味を含んでいる、③この概念は明治以降に導入された、などの意味があることが理解できる。一般に「様式」という語は、建築だけの概念ではなく美術史でも用いられ、ヨーロッパなどでも地域や歴史と結びついてその形状を指す場合に用いられている<sup>注7)</sup>。ただ、「様」は、建築の部分的な技術手法を指して、その意味を小さく扱うケースがあり、必ずしも「様式」と同等の意味で用いられる場合ばかりではないので、「様式」の中に「様」の意味も含まれているものと考えてよいと思われる。

一方、「形式」に関しては、建築の形の上での特徴を指し、同じ特徴をもった建築をまとめて呼ぶ場合に用いられることが多い。例えば、神社では「神明造」「大社造」「春日造」「流造」など、外見上に現れた特徴を捉えて名付けられている。あくまでも形で説明できるものが「形式」であることから、歴史や地域性などを含めて用いられる「様式」の中に含んでよいと考えられる。

これらの「様式」や「形式」という語は、建築の専門用語として、必ずしも厳密に定義がなされて用いられる場合ばかりではないが、本稿ではこれら2つの言葉を上記のように解釈し、得仁堂の建築的な分類や考察をするための用語として用いることとしよう。

また、得仁堂は、中国の孔子や司馬遷の書物に登場する伯夷・叔斉の像を祀った儒教に関係する建物で、その形状だけで特色を考察することは困難である。歴史的な建物を説明する場合、「寺院」「神社」などといった建物固有の性質による区分は、ごく一般的になされており、こうした「種別」ごとに建築史的な変遷を説明することが多い。したがって、本稿では得仁堂を、①「様式」、②「形式」、③「種別」、という各項目について解説を行い、類例建物も紹介しながら、建築的な位置づけを行うことにする。なお、得仁堂の宗教的な視点や儒教建築の役割の概説については、後述する「近世日本の儒教」にて述べる。

### ①様式

得仁堂は、唐破風、棧唐戸・木鼻・肘木・豎板壁・礎盤・敷瓦・柱粽（下部のみ）、長押・蓑束・臺股などを備えている。建物の柱下と礎石の間に礎盤を置き、柱下部に粽をつけ、肘木先端を丸め、建具には棧唐戸を用いて、内部の床は張らずに敷瓦を敷いている点など、いわゆる「禅宗様」（唐様）<sup>注8)</sup>の特徴を多く有していることがわかる。一般に、禅宗様の代表的な建物として

は、円覚寺舍利殿（室町時代中期）や功山寺仏殿（1320）などが挙げられる。この「禅宗様」は鎌倉時代に禅宗の伝来とともに中国・南宋から伝えられた建築様式と言われ、初めは禅宗の建物に限られていたが、その後、他宗派の建築にも採用されていくことになる。



円覚寺舍利殿

文化庁監修『国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻）』（毎日新聞社）より転載



功山寺仏殿

同左書より転載

### 写真 2.3.1 禅宗様の建物

一方、鎌倉時代には禅宗様よりも少し早く、「大仏様」（天竺様）と呼ばれる様式も寺院には取り入れられていた。これは東大寺の再建に尽くした僧重源<sup>ちゅうげん</sup>と中国・宋の陳和卿<sup>ちんなけい</sup>によって、中国福建省の建築様式と伝統的な和様を基礎に成立したとみられ、挿肘木の使用や木鼻、墓股の繰形などに特色がある。禅宗様や大仏様はともに、奈良時代以来、国内で建てられ続けた「和様」と区別して、建築史上、「宋様式」または「鎌倉新様式」などと総称されている。

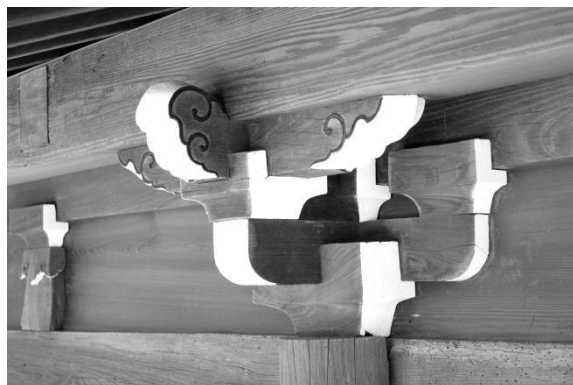
その後の国内の建築的な潮流は、和様を基調としながら禅宗様や大仏様の要素を組み入れた建物が徐々に建てられるようになる。これらは「新和様」や「折衷様」などの用語で呼ばれることが多い。その後、近世までの我が国の建築様式の変遷は、概ね古代以来の「和様」と、鎌倉新様式である「大仏様」「禅宗様」の組み合わせ、またはマイナーチェンジの繰り返しと言われており、得仁堂のようにさらに時代が下った近世の建物を、部分的な形の特徴のみを捉えて、全体の様式として断定することは極めて困難であるともいえる。事実、得仁堂には禅宗様の意匠のほかに、長押や墓股など和様の要素や木鼻の繰形など大仏様と重なる部分もある。

この時代のすべての儒教の建物が必ず禅宗様の要素を取り入れていた、またはある一つの様式に統一して建設されたとは考え難いが、少なくとも得仁堂に関しては、中国の人物である伯夷・叔斎を祀る儒教の教えに関係する建物として建設され、他の様式も部分的には含んでいるとはいえ、全体として禅宗様の意匠を基調にしてまとめられていると見てよいと思われる。

一方、近世に入ると、儒教に対する関心もあって、建物に中国由来の意匠を取り入れる現象が広がりを見せるなど、当時の日本人が中国文化に対する強い傾倒があったことを見逃すことは出来ない。例えば、近世前半に来朝した明僧の隠元<sup>いんげん</sup>（1592～1673）は、黄檗宗をもたらし、その際

に当時の中国式の寺院を導入して万福寺を建立する。その建物は宝珠を棟の中央に載せ、「黄檗天井」と呼ばれる曲がった輪垂木を配するなど、当時としては異国の雰囲気をもっていたと言われている。また、徳川幕府が主導して建設した日光東照宮は、その基調とする様式は禅宗様で、建物の彫刻の主題には儒教や中国に由縁のある人物や動物を取り入れ、全体に色鮮やかで豪華な雰囲気を醸し出している。こうした支配者層の建築文化は、近世を通じて徐々に国内に広がっていく。本稿で取り上げている当時の水戸藩主であった光圀も、明の朱舜水を招聘し、庭園に中国趣味を強調するような作庭を行ったように、庭や建築などといった文化現象には、この時代の我が国が、中国に対して強くかつ深くその意識を向けていた社会潮流が根底にあったことを考慮する必要がある。

近世の人々にとっては、材料や構造学の発展を建築に取り入れるよりも、建築の意匠を借りて自分たちの考えや趣向を表現することを大切にし、その意図を建物に託していたと考えられる。その意匠の目的とするところは、各時代やその建物の建設を主導した人物の社会的立場によって異なっていたと思われる。得仁堂の場合、残念ながらその真意は詳らかとなっていないが、少なくとも儒教の教えと、禅宗様を基調とした意匠を結び付けていることは窺い知ることができる。



組物



敷瓦



柱粽・礎盤



棧唐戸

写真 2.3.2 得仁堂の各部意匠

## ②形式

得仁堂は儒教に関する建築であり、「種別」としては寺院や神社の建物とは一線を画するが、屋根の形状を見る限り「宝形造」の形式であることがわかる。「宝形造」は、『建築大辞典』によると「平面が正方形または八角形の建物のみに見られる屋根形式。四面または八面の屋根面が一つの頂点に集まるもの。社寺建築では心柱が必ずあり、小屋の中へ延び頂点に達するのが特徴。それぞれ四注造り、八注造りと称したこともある。<sup>注9)</sup>」との説明がなされている。得仁堂も背面のトコを除く主要軸部は正方形の四面から構成され、小屋内に心柱（真束）を建て、屋根面を一つの頂点に集めて、頂部に露盤・伏鉢を備えた宝珠を頂いているので、「宝形造」の特徴を有していると見てよい。

「宝形造」は、古くは法隆寺東院夢殿（739、1230 改造）や栄山寺八角堂（757～764）に見ることができる。こうした屋根の形状は、高僧や祖師など個人を祀る供養墓または塔としての性質をあわせ持つ建物に好んで用いられ、その頂部には宝珠を載せることが多い。その点では、中国の賢人を祀る得仁堂と建物の性質は共通している。



①法隆寺東院夢殿

文化庁監修『国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻）』（毎日新聞社）より転載



②栄山寺八角堂

同左書より転載

写真 2.3.3 宝形造の建物



①宝形造



②宝珠（復原）



③昭和 10 年時の宝珠

吉永義信『日本庭園史』（小学館）より転載

写真 2.3.4 得仁堂の屋根



得仁堂の宝珠は、戦前・戦中を通して失われたが、今回の修理に伴う調査によって、真束の頂部は後世に切断されたもので、創建時には上部まで延びて宝珠内部まで至っていたことが明らかとなった。得仁堂が創建されて間もない頃に描かれた「後樂園絵図」（明大本、第3章参照）やその後の江戸時代中に描かれた絵図、さらには明治以降に撮影された古写真などには宝珠のある姿を確認できるので、得仁堂は創建当初から近年に至るまで宝珠を頂く建物であったことが窺える。なお、今回実施した修理工事で、失われた頂部の宝珠は、古写真などをもとに復原整備した。

また、得仁堂の平面形式は、正背面三間・側面二間の正方形で、背面にトコが取り付けられている。全国の国宝・重要文化財に指定されている建物の内、得仁堂のように平面が二間～三間程度の規模で、かつ宝珠を頂く宝形造の建物は、寺院や霊廟・霊屋などの施設に多く見られ、その内部には実在した人物の遺骨や墓石、木造彫刻像、掛軸の画像、位牌などを、トコや仏壇など特別に設けた空間に安置して祀ることが多い<sup>注10)</sup>。

現在、得仁堂は彫刻像を安置する空間として、背面三間のうち中央間を突出させてトコを設えているが、今回の調査によって、創建時には現況のトコ両脇柱はなく、背面を二間として隅柱間全体が後方に突出してトコを形成していたことが判明した（第4章参照）。このように、背面を主要軸部である平面から突出させて像などの安置空間を設ける例は全国でも数が少なく、その限られた例を取り上げてみても、①背面隅柱間全体を突出させ前面を壁面とし、両脇間を安置空間とするもの、②同じく壁面を設えて、その背面三間の両脇間のみ突出させるもの、など概ね二種類に分けることができる。

得仁堂の場合、トコ前面に壁はなく、さらに創建時にはトコ中央の丸柱を建物中心軸から正面向かって右側（東側）に151mm(5寸)寄せて建てるといった特殊な構成としている。こうした設えは伯夷・叔斎の二像と泰伯の一像の計三像を合祀して一つの建物内に安置する必要がある、トコ間口の広い方に伯夷・叔斎像、狭い方に泰伯像を祀るための事情から生じたものと思われる。このような平面形式とトコの構成は、全国でも極めて稀であると考えられる。

なお、得仁堂と同じような規模で、主要軸部から背面が突出してトコを備えている類似の建物の具体例は、次項「類例建物の検証」にてその一部を紹介する。

### ③種別

得仁堂の建物は儒教に関係する建物であるが、建築史の上では明確に「儒教建築」という項目を設けて建築的な変遷を述べている文献はほとんどないと言ってよい。例えば、日本建築史の標準的な概説書として知られる太田博太郎著『日本建築史序説』を見ても、「儒教建築」として項目を設けて日本建築史の系譜の一つとしては解説していない<sup>注11)</sup>。また、近年発行された日本建築史に関する解説書を見ても、社寺を中心とした江戸時代の建物は、全般的な傾向として儒教または中国の影響があることは述べられているが、特別に「儒教建築」として分類し、詳細な説明を行っているとは言い難い<sup>注12)</sup>。

日本建築史の上で、「儒教建築」をその系譜として特別に取り上げていない要因の一つは、江戸時代、儒教は幕府や各藩の支配を行う思想として利用され、一般の武家層の日常的な道德規範として幅広く定着しており、こうした社会風潮を基盤として現れてくる建築現象において、その程度に強弱はあるものの、建物の分類として、わざわざ「儒教建築」と分けて解説を行うことが

困難であるからとも考えられる。

しかし、儒教や儒学といった宗教史の観点からは、直接関連する教育施設として考察がなされる場合がある<sup>注13)</sup>。江戸時代には、各地に孔子の教えを基盤とする教育施設が幕府や各藩によって開設され、講堂・教授所・宿舍、さらには孔子を祀る建物を建設した。こうした建物は、宗教的視点から、建物内で行われる儀式や各施設の成り立ちなどに関連してしばしば紹介されている。

建築史の上では、これらの建物は、「学校建築」または「藩学校」などとして扱われることが多い<sup>注14)</sup>。後世に再建されたものも含め、現在でもその遺構として広く知られているものは、栃木の足利学校や、東京の昌平坂学問所(湯島聖堂)、岡山の閑谷学校、佐賀の多久学校、茨城の弘道館などが挙げられる。

なお、近世における宗教、特に儒教に関する観点からの学校施設の考察は、次節の「近世日本の儒教」にて述べることとする。

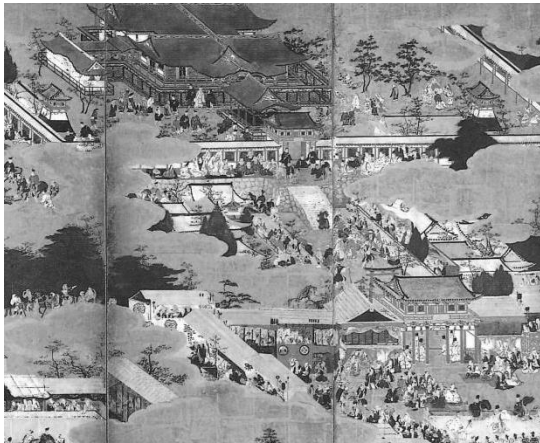
一方、得仁堂のように、個人を祀る性質をあわせ持つ建物は、主として「霊廟」や「霊屋」などの名称を用いて分類される<sup>注15)</sup>。

一般に、「霊廟」という言葉は『広辞苑』(第四版)によると、「①先祖の霊を祀った屋舎。みたまや。霊屋。②卒塔婆(そとば)のこと。<sup>注16)</sup>」との説明があり、「廟」に関しては、「①先祖の霊を祭る所。霊屋。おたまや。やしろ。「聖廟」「宗廟」「孔子廟」②王宮の前段で、政治を行うところ。「廟所」「廟講」<sup>注17)</sup>」などと述べられている。また、建築の分野では『建築大辞典』によれば、「霊廟」の説明として「桃山・江戸時代に亡き武将など偉人や貴人を祀る宗教施設。建築的には仏教建築と神社建築が混在し、主建築には多くは八棟造りが採用され、門、鳥居、水屋などをもち、大規模な場合は神庫、仏塔、仏堂などを持つ。1598年方広寺の鎮守の名目で着工された豊国廟が初例で、現存のものとして日光東照宮、大猷院などがある。「廟」「御霊屋(おたまや)」ともいう。<sup>注18)</sup>」と解説されている。

このように、「霊廟」、「霊屋」、「孔子廟」などは、先祖や過去の賢人など個人を祀るという点ではほぼ同じように扱われている。ただ、「霊廟」という名称は、通常、徳川將軍家の廟に限って用いられたとも言われ<sup>注19)</sup>、さらに「孔子廟」のようにある特定の宗教に由来して建てられた建物を区別して呼んでいる場合もあるので、ここでは寺院や神社以外で、具体的な人物を祀るために意図して建てられた建物を総称して「廟」と呼ぶことにする。

個人の霊を崇めて「廟」を建てる習慣は古くから見られる。例えば、前述した聖徳太子を追慕するために建てられた法隆寺東院夢殿や、藤原武智麻呂を弔う施設である栄山寺八角堂、藤原不比等のための興福寺北円堂(1210)なども「廟」と言うことができる。

近世に入ると、世俗的な権力者の菩提を弔うための「廟」としての建物が、武士層の間で盛んに建てられるようになる。京都の阿弥陀峰に建てられた豊臣秀吉を祀る豊国廟(1599)や高台寺霊屋(1605)などはその先駆けとして知られ、その後、江戸幕府を開いた徳川家は、久能山や日光などに家康を祀る東照宮、家光を弔う輪王寺大猷院霊廟(1653)、増上寺や寛永寺などに建てられた徳川將軍家の霊廟(一部を残して戦災で焼失)、地方の寺院に勧請して建設した金剛峰寺徳川家霊台家康霊屋(1641)および秀忠霊屋(1633)など、全国各地に大小様々な規模の「廟」を建立した。



①豊国廟

画面左上部、豊国祭礼図屏風（狩野内膳筆、右隻：部分、豊国神社所蔵）

「週刊絵で知る日本史 27 豊国祭礼図屏風」（集英社）より転載



②高台寺霊屋

文化庁監修『国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻）』（毎日新聞社）より転載



③輪王寺大猷院霊廟

文化庁監修『国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻）』（毎日新聞社）より転載



④金剛峰寺徳川家霊台秀忠霊屋



⑤圓通院霊屋

文化庁監修『国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻）』（毎日新聞社）より転載



⑥真田信重霊屋

同左書より転載

## 写真 2.3.5 廟の建物

また、徳川家以外の地方の有力な大名達も、各家の祖霊を弔うために塔頭寺院を創建して菩提寺とし、そこに「廟」を建設した。その多くは方一間または方三間の比較的小規模なもので、得仁堂のように宝形造の屋根を特徴としている。こうした建物は戦災などで失われているものも多いが、現存している主な遺構として、弘前藩津軽家の霊屋群や、盛岡藩の南部利康霊屋（1631）、仙台藩二代伊達忠宗<sup>ただむね</sup>の世子光宗<sup>みつむね</sup>を弔う圓通院霊屋（1647）、松代藩の真田信重霊屋（1648）などが挙げられる。

これら近世の武将を弔うための「廟」は、江戸時代初頭に集中して建設された。建物は全体に漆塗・彩色が施され、金具で装飾されるなど華やかな意匠を有するものが多いが、時代を経るごとに簡略化されていく。

一方、江戸時代の教育施設に独立して建てられた「廟」は、「孔子廟」または「聖堂」などと呼ばれ、他の性質の異なる建物と区別して「聖廟」、「文廟」、「大成殿」、「先聖殿」などの名称がつけられる場合が多い。これらの建物では、孔子をはじめその教えに由縁のある賢人の像や画像を掲げて、<sup>しゃくてん</sup>釈奠、<sup>しゃくさい</sup>釈菜という儀式が行われたという<sup>注20)</sup>。例えば、現存例では、岡山藩の旧閑谷学校聖廟大成殿（1684）、佐賀藩の<sup>たいせいでん</sup>多久聖廟（1708）などがその代表的な建物で、これらも「廟」の建物の範疇に含まれると考えられる。



①旧閑谷学校大成殿

文化庁監修『国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻）』（毎日新聞社）より転載



②多久聖廟

同左書より転載

### 写真 2.3.6 孔子廟


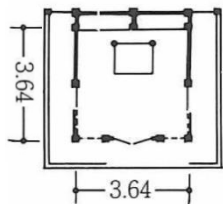

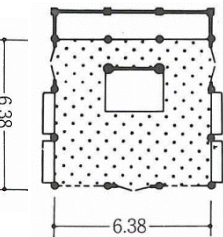

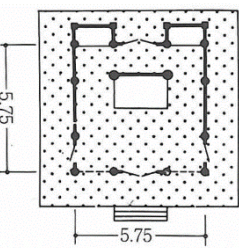

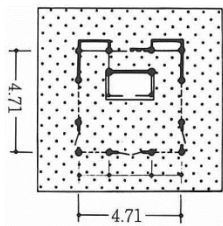
得仁堂の場合、例えば元禄 5 年（1692）4 月に辻言之が小石川後樂園を訪ねた際に記した「東都紀行」に、「三仁を祭れる廟堂有。」とその呼び名を「廟堂」、すなわち「廟」として表現している。前述したように、得仁堂は現在、伯夷・叔斎像のみを安置するようになっているが、トコ廻りは後世の改造を受けており、創建時は泰伯像を別の建物から合祀して三像（三仁）を安置するように設えられていた。この記述には、三像が安置された事実と江戸時代に「廟」として認識されていたことを知ることができる。したがって、得仁堂を建築史上の「種別」として、「廟」のカテゴリーに分類しても差し支えないと思われる。

## 2.3.2 類例建物の検証

### (1) 類似する建物

創建時の得仁堂は、背面を二間として隅柱間全体が後方に突出してトコを形成していた。背面を正方形平面の主要軸部から突出させて空間を設ける建物は全国でも数が少ない。前述したように、それらの例は、①隅柱間全体を突出させるものの前面に壁面を設えるもの（隅柱間突出型）、②同じく壁面を設えて、背面三間のうち両脇間を突出させるもの（両脇間突出型）、など概ね二種類に分けることができる<sup>注21)</sup>。ここでは、得仁堂と同程度の規模の平面形式に注目して、①および②の例を挙げることにする。

表 2.3.1 類似の建物




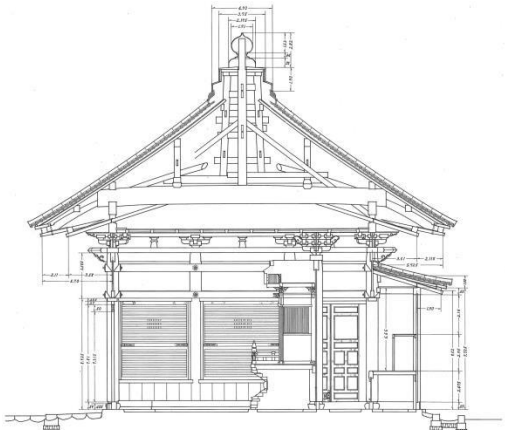
区分	建物	全景	平面 (単位=m)
① 隅柱間突出型	名称：長岳寺旧地藏院本堂 建立年：寛永 18 年（1641） 所在地：奈良県		
	名称：喜多院慈眼堂 建立年：正保 2 年（1645） 所在地：埼玉県		
② 両脇間突出型	名称：普濟寺仏殿 建立年：延文 2 年（1357） 所在地：京都府		
	名称：祥雲寺観音堂 建立年：永享 3 年（1431） 所在地：愛媛県		

写真・図面とも、文化庁監修『国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻）』（毎日新聞社）より転載（一部加工）

ここで取り上げた建物は、得仁堂と同様に主要軸部が二～三間の正方形で、現在、重要文化財に指定されている仏堂である。これらは禅宗様を基調としているなど類似点も多い。ただ、トコ前面に須弥壇を設けている点が、得仁堂と大きく異なっている。そのため、隅柱間突出型であってもトコ中央部分が遮られている。

特に、この隅柱間突出型の例は、得仁堂と建立年代も近く、屋根は宝珠を頂く宝形造とし、トコの背面側の柱は主要軸部に正対して建て、トコ上部を庇としているなど類似点が多い。これらの例と得仁堂の痕跡を比較すると、構造的には創建時の得仁堂の姿に近いと類推することができる。ただ、得仁堂の場合は、背面隅柱の内部側側面にトコ框が取付いた痕跡がないので、トコの床は内部の床とほぼ変わらないレベルにあったと見られる。

表 2.3.2 隅柱間突出型の建物

長岳寺旧地藏院本堂	
背面	断面図
	
喜多院慈眼堂	
背面	断面図
	

写真・図面は、奈良県文化財保存事務所編『重要文化財長岳寺旧地藏院・楼門修理工事報告書』（奈良県教育委員会重要文化財）および、

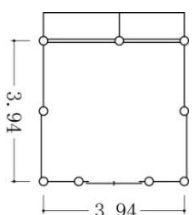
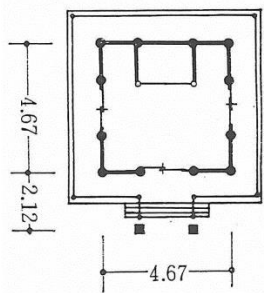
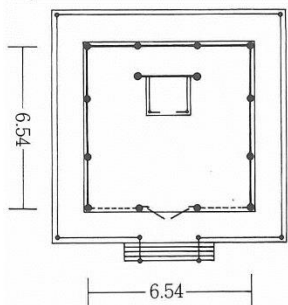
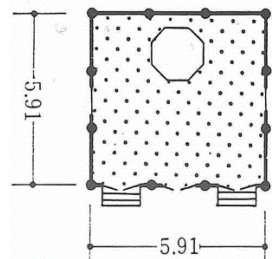
喜多院修理工事委員会編『重要文化財喜多院客殿外5棟修理工事報告書』（喜多院）より転載



以上、トコの構成に焦点を絞って紹介したが、次に得仁堂と比較的建立年代が近く規模も同程度の「廟」の範疇でその類例を取り上げてみる。

下記の表 2.3.3 のように、それらの建物は、得仁堂以外、背面壁の前面に壇を設けて、安置空間を主要軸部内に取り込み、背面は突出させていないことがわかる。ただ、細部意匠としては、得仁堂同様に禅宗様を基調とし、屋根の頂部に宝珠を持つ宝形造の建物もある(写真 2.3.5 参照)。

表 2.3.3 廟の平面形式

<p>得仁堂（創建時推定）</p> <p>寛文 5～8 年（1665－8）</p>	<p>金剛峰寺徳川家霊台秀忠霊屋</p> <p>寛永 10 年(1633)</p>
	
<p>圓通院霊屋</p> <p>正保 4 年（1647）</p>	<p>旧閑谷学校聖廟大成殿</p> <p>貞享元年(1684)</p>
	

得仁堂以外の図面は、文化庁監修『国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻）』（毎日新聞社）より転載（単位＝m）

以上のように、得仁堂は、遺存している同規模の仏堂や廟の建物と共通する点も多いが、必ずしもすべての要素が一致しているわけではない。ただ、こうした相違があっても、この時代までに培われてきた木造建築の技術や意匠の変化・発展の範疇にあって、儒教や庭園に関する建造物という、建物の持つ性質そのものの事情が、建築的な構造や工法の根本的な違いを生んでいるとは考え難い。

これまでの得仁堂に関する論考は、庭園史の観点から論じられることが多いが、上記したような建物と比較すると、建築史の系譜の一つとして、十分に論じることが可能であると思われる。今後、こうした検証の積み重ねによって、この時代の建物の多様性や、歴史の中における得仁堂の存在意義を再評価することにつながると思われる。

## (2) 彫刻細部における東京都内の類例建物




































得仁堂は、棟札などが残っていないので正確な建立年代は不明である。ただ、後述する史料の検証によって、その建立年代は、寛文5年以降、同8年以前であると推定された。その一方で、歴史的建造物の時代判別には、絵様彫刻などの細部意匠から推定されることが多い。これらの彫刻は、復古的に過去のスタイルを真似ることがあるので注意が必要だが、いくつかの例を取り上げることで建立年代判別の一つの目安とすることは可能である。そこで、得仁堂と同じ東京都内で遺存している建物と比較し、史料で示された建設年代と矛盾しないことを検証する。

表 2.3.4 彫刻細部における東京都内の類例建物（17世紀）

時代	名称	虹梁	頭貫木鼻	拳鼻	実肘木	臺股
17世紀	慶長12年 (1607)	—				
	元和7年 (1621)	—				—
	寛永頃 (1624~43)	—	—	—		—
	寛永8年 (1631)	 (元禄7年材)				—
	寛永9年 (1632)	—	—	—		
	寛永16年 (1639)	—	—	—		
	慶安2年 (1649)		—			
	慶安2年 (1649)		—			
	慶安4年 (1651)		—			
	慶安4年 (1651)					—
	寛文5年 (1668) ~ 寛文8年 (1668)					
	延宝9年 (1681)					
	元禄10年 (1697)					
	元禄12年 (1699)			—		



表 2.3.5 彫刻細部における東京都内の類例建物（18・19 世紀）

時代		名称	虹梁	頭貫木鼻	拳鼻	実肘木	墓股
18世紀	宝永3年 (1706)	根津神社幣殿		—			
	宝永3年 (1706)	根津神社唐門	—				—
	宝永3年 (1706)	根津神社西門			—		—
	宝永3年 (1706)	根津神社楼門	—	—			
	宝永6年 (1709)	寛永寺常憲院霊廟 勅使門					
	享保2年 (1717)	増上寺有章院霊廟 二天門					
	寛保3年 (1743)	心章院表門					
	宝暦7年 (1757)	瑞聖寺大雅宝殿		—	—	—	—
19世紀	文政10年頃 (1827)	旧加賀屋敷御守御門			—		—
	江戸末期 (1830~67)	旧因州池田屋敷表門			—		—

これらの建物は、主として重要文化財に指定されている 17～19 世紀に建てられた東京都内に所在する社寺の彫刻細部である。これらを見つめると、全般に各彫刻の渦文や若葉は 17 世紀までは円形に近く彫り込みも浅いが、時代が下るにしたがってその渦文は円が潰れた楕円形となり彫り込みも深くなる傾向にある。

また、墓股彫刻の周囲の枠は、17 世紀までは細く伸びやかであるが、次第に太く重量感のある形状に変化していくことが窺える。

その中で得仁堂は、頭貫木鼻や組物の拳鼻、実肘木などの渦の巻き込みや若葉、墓股彫刻の形状は古風を残し、17 世紀中頃の意匠と見ても差し支えないと考えられる。したがって、得仁堂が寛文 5 年(1665)7 月以降、同 8 年(1668)1 月以前までに建設されたとする史料上の指摘は、建築意匠の潮流からも矛盾していないと言えることができる。こうした彫刻細部に関する検証によって、現在の得仁堂が、光圀の時代に作庭された小石川後樂園時代の建物の一つであるという裏付けにもなると思われる。

## 2.4 近世日本の儒教

### 2.4.1 近世における儒教の概要

#### (1) 近世の儒教

儒教は、孔子を始祖とした思想体系である。孔子は紀元前 551 年の中国の春秋時代、魯国の農村に生まれたと言われている。彼の思想は「仁」（他人に対する親愛の情など）に基づく道德秩序をもって理想社会の実現を目指すもので、孔子の死後、弟子たちによってその言行が「論語」としてまとめられた。この教えは、東アジアで強い影響力を持ち、日本には 513 年に百済より伝わり、学問や教養として受け入れられたと言われている。その後、儒教は仏教の隆盛とともに徐々に衰退していくことになるが、鎌倉時代になると、南宋の朱熹（1130－1200）によって儒教が体系化され、「朱子学」として日本に伝えられて、主に禅宗寺院において広まっていく<sup>注1)</sup>。

江戸時代に入ると、儒教の君主と臣下、親と子の上下関係や秩序を重んじる考え方が、国家を統治するためのイデオロギーとして利用され、幕府や藩の支配者層に積極的に受け入れられることになり、その政策にも影響を与えるようになる。

江戸幕府初期の徳川体制の土台作りに貢献した人物として、林羅山(1583～1657)が挙げられる。彼は徳川家康・秀忠・家光・家綱の将軍四代に仕え、儒教の思想に基づいて様々な制度、儀礼などのルールを定めた。その活躍は、「寛永諸家系図伝」、「本朝通鑑」などの伝記や歴史の編纂、寛永 12 年（1635 年）に武家諸法度を起草し、外交文書の起草、朝鮮通信使の応接など多岐に渡る。そして学問の上では儒学や神道以外の全てを排し、幕府に対しては僧侶の資格で仕えながら仏教批判を行った。こうした儒学の発展と官学化に貢献する一方、彼は紀行文を著す文人としても活動したことで知られている。



写真 2.4.1 湯島聖堂構内の孔子像



図 2.4.1 林羅山像

(林昇氏所蔵)

内山知也、本田哲夫編『湯島聖堂と江戸時代』（斯文会）より転載

寛永7年(1630年)、羅山は將軍・家光から上野の忍岡<sup>しのぶがおか</sup>に土地を与えられ、その地に私塾を開き、「先聖殿」と称する孔子廟を建てた。この私塾は元禄3年(1690)に、五代將軍綱吉が湯島に移して、「大成殿」(湯島聖堂)と改称することになる。次いで、寛政9年(1797)に私塾は幕府直轄の教育施設である「昌平坂學問所」になる。林家は羅山の孫の林鳳岡<sup>ほうこう</sup>の代から大學頭<sup>だいがくのかみ</sup>と称し、以後、代々幕府の教學の責任者としてのその役割を担った。

また、江戸時代前半には「好學大名」と呼ばれる儒教を愛好する大名も多かった。中でも岡山藩の池田光政(1609～82)や会津藩の保科正之(1611～73)、加賀藩の前田綱紀<sup>つなのり</sup>(1643～1742)などは著名な人物で、水戸藩の徳川光圀もその一人に挙げられる。光圀は、「日本書紀」に書かれた歴史を再検証するべく「大日本史」の編纂を始め、そこで形成された學問は「水戸學」と呼ばれるようになる<sup>注2)</sup>。

一方、幕府や諸大名だけではなく、一般の武士や町人たちの間でも独自に儒教の教えを研究する者が出てくる。中江藤樹<sup>なかえとうじゅ</sup>(1608～48)、山鹿素行<sup>やまがそこう</sup>(1622～85)、伊藤仁斎<sup>いとうじんさい</sup>(1627～1705)、荻生徂徠<sup>おぎゅうそらい</sup>(1666～1728)等は、儒教を朱子學や陽明學といった後世の解釈によらずに、論語などの孔子に直接関連する書を研究し、「古學」としての儒教を体系化する。また、石田梅岩<sup>いしだばいがん</sup>(1685～1744)は、儒教を基盤として商業觀・人間觀などの一般道徳を説いて、町人等の支持を集めていくようになる。

こうして、儒教は幕府の御用學問として武家層を中心に定着し、庶民の間でも日本人の倫理規範として共有され、江戸時代を通じて日本国内に幅広く受け入れられるようになる。やがて幕末になると、儒教は天皇を尊び外国を斥けようとする「尊皇攘夷」と結びついて、思想的な原動力の一つとなっていく。

## (2) 光圀と儒教

徳川光圀は寛永5年(1628)、水戸藩初代徳川頼房の三男として生まれる。父である頼房は徳川家康の十一男で、兄には家康の九男・義直(尾張藩・六十二万石)、十男・頼宜(紀州藩・五十六万石)がいる。この三家は後世、いわゆる「徳川御三家」と呼ばれることになるが、水戸藩(二十五万石)は尾張・紀伊両藩に比べ石高も少なく官位も低かった。特に水戸藩は徳川御三家の中でも唯一参勤交代を行わない江戸に定府する藩であり、万が一の変事に備えて將軍の目代の役目を受け持っていた。こうした状況下で、頼房は三代將軍家光と年齢が近いこともあって親しく交流し、家光自身も小石川後樂園の作庭に関わったという。また、光圀の「光」は家光の字をもらったとも言われており、水戸藩と將軍家が親密な関係にあったことが窺える。

光圀の母は谷重則(下野佐野の当主である佐野信吉の家臣)の娘の久子という女性で、正式な側室ではなかった。光圀には同じ母から生まれた兄の頼重がいたが、三男の光圀が水戸藩の家督を相続することになる。光圀にとって兄を差し置いて当主になったことは彼を深く憂慮させたと言われている。二代藩主となった光圀は、寺院改革や蝦夷地の探検などに手腕を発揮していく中で、日本の歴史の集大成となる「大日本史」の編纂を行う。この事業は、既に家督を継ぐ以前から着手しており、当主となってからは「彰考館」を設立してより本格的になる<sup>注3)</sup>。「大日本史」の編纂は、光圀の死後も継続し、最終的に明治に入って完成することになる。



図 2.4.2 徳川光圀像

(部分、狩野常信筆、水戸徳川博物館所蔵)

長山靖夫『天下の副將軍 水戸藩から見た江戸三百年』(新潮社)より転載

この「大日本史」の巻頭に掲げられている一節には光圀が、編纂事業を行う動機が述べられている。「先人十八歳、伯夷伝を読み、蹶然としてその高義に慕ふあり。巻を撫し歎じて曰く、載籍あらずんば、<sup>ぐ</sup>虞夏<sup>か</sup>の文、得て見るべからず。史筆によらずんば、何を以て後の人をして観感する所あらしめんやと。ここにおいてか、慨焉<sup>がいえん</sup>として修史の志を立つ。<sup>注4)</sup>」(ルビは筆者による)

光圀は 18 歳(1645)の頃に司馬遷の「史記」の「伯夷伝」を読んで史書の編纂の志を立てたという。この経緯に関しては諸説あるが<sup>注5)</sup>、少なくとも光圀にとって伯夷と叔斉の生き方は、彼の人生に影響を与えたことは事実であったと思われる。その「伯夷伝」とはどのような内容であろうか。

伯夷と叔斉は、中国の殷<sup>いん</sup>(紀元前 17 世紀～紀元前 11 世紀)代末期の孤竹<sup>こちくこく</sup>国の王の長男(伯夷)と三男(叔斉)であった。父親の死後、弟の叔斉に位を譲ることが父の遺志であったことを伝えられた伯夷は、彼に王位を継がせようとした。しかし、叔斉は兄を差し置いて位に就くことを憂慮し、あくまで兄に位を継がそうとした。そこで伯夷は国を捨てて他国に逃れ、叔斉も位につかずに兄を追って国を出たという物語である。光圀は、長兄の頼重を差し置いて当主を継いだので、自身の人生と重ね合せてこの物語に深く共感したといわれている。

瀬谷義彦は、その著『新装水戸の光圀』の中で、「小石川水戸藩邸の庭であった後樂園に、現存する最も古い建物の得仁堂は、光圀が建てたもので、この中に光圀は伯夷と叔斉の像を安置した。ただ若い時に感化を受けたというだけでなく、藩主となってからも得仁堂に二人を祀るほどの熱心さであった。それは藩主時代だけでなく、引退後隠居所を設けるについては、西山の地名が伯夷と叔斉がこもったという、首陽山の別名西山と同字だったことが、精神的に深いかかわりがあると考えられるから、光圀にとって伯夷叔斉は生涯の師であり、恩人であった。<sup>注6)</sup>」と、得仁堂の建設に伯夷・叔斉の存在が深く関わっていたことを述べている。

ところが、今回の調査で、得仁堂には伯夷・叔斉の像のほか、「泰伯<sup>たいはく</sup>(太伯)」の像もあったことが明らかとなった。残念ながら瀬谷の記述には、得仁堂建設における泰伯の存在までは明記さ

れていないが、光圀は若い頃に伯夷・叔斎と同様に泰伯も理想とする人物として仰いでいたと言われている。

泰伯は「論語」や「史記」にも登場する人物で、紀元前 12 世紀～紀元前 11 世紀頃に中国の古公亶父<sup>ここうたんぽ</sup>の長男として生まれたという。彼には二人の弟がいたが、三男が優秀だったので、父はその子に家督を継がせようとした。父の意を量った泰伯は、弟の虞仲<sup>ぐちゆう</sup>と国を出た。後になって家族の者が二人を迎えに来たが、彼らは自分たちには相応しくないとしてこれを断った。泰伯は後に呉<sup>こ</sup>という国を興した。彼が死んだとき子がいなかったため、弟が跡を継いだという。

光圀は晩年に自らの墓碑である「梅里先生墓」を建立する。この「梅里」は光圀の号の一つで、泰伯が住んでいたと言われている常州(江蘇省<sup>むしやくけん</sup>)無錫県の「梅里」<sup>ばいり</sup>に由来していることから、光圀の泰伯に対する想いの強さを窺い知ることができる。

歴史家の宮田正彦は「孔子は、太((泰))伯の行為は徳の至ったものだ、と称揚している。光圀は、自分が兄を越えて後を継いだことを「大義違い」と考えていたので、この太伯の生き方に深く学ぶところがあったのである。<sup>注7)</sup>」と考察している。さらに、名越時正はその著『新版水戸光圀』の中で、「光圀は伯夷・叔斎に感動したと同じようなことを呉の太伯の讓国にも発見した。おそらく、『史記』の「太伯世家」を読んだためだろう。光圀が伯夷・叔斎と同様に、生涯太伯を尊敬したのはこのためである。その太伯のいた所が常州無錫県梅里といい、世をのがれた荊蛮の風俗にいれずみをして竜子に似せたということから、光圀はのちに梅里と号し字を子龍としたと考えられる。<sup>注8)</sup>」と、伯夷・叔斎と同様に泰伯も尊敬していた光圀の姿を述べている。



写真 2.4.2 梅里先生墓

宮田正彦『水戸光圀の「梅里先生碑」』(水戸史学会)より転載



図 2.4.3 朱舜水像

(部分、立原杏所筆、茨城県立歴史館所蔵)

茨城県立歴史館編『頼重と光圀—高松と水戸を結ぶ兄弟の絆』より転載

こうしてみると伯夷・叔斎と泰伯は、互いに生きた時代こそ異なるものの、兄弟で国を譲り合った人物として「論語」や「史記」の中で高く評価され、光圀は彼らを自身の人生になぞらえて得仁堂の建立を行い、その像を安置したと考えられる。後年、光圀は兄の子供である綱條<sup>つなえだ</sup>に藩主の座を託すことになるが、そこには兄を差し置いて藩主となった彼の深い思慮があったと考えられる。

一方、光圀の思想形成には、この時代の日本人が中国に対して強い関心があったという社会風潮を見逃すことはできない。瀬谷は、当時の日本の状況と光圀について、「日本人の間に広く中国熱が高まったのは江戸時代である。江戸幕府の儒官として権威のあった林家の人々をはじめ、学者の多くが中国崇奉者であった。光圀もその一人である。<sup>注9)</sup>」と記述している。ここで述べられている林家とは、江戸幕府の修史事業に携わった林羅山・林鷲峰<sup>がほう</sup>父子一家のことである<sup>注10)</sup>。この当時、江戸時代前期を代表する知識人や諸大名達は、中国、特に儒教の思想に深く傾倒しており、光圀もこうした潮流の中にあった。

寛文5年(1665)、光圀は明の学者である朱舜水を水戸家に招聘する。朱舜水は江戸駒込に居を構え、「大日本史」の編纂に参加した学者らとも交友し、小石川後樂園の作庭や園内にある「円月橋」の設計にも携わったと伝えられている。光圀と朱舜水に関しては、「光圀が舜水を招いたのは、高まる中国熱の中で、儒教の本国の中国人から、直接に儒学の本領を学びたいという熱情からであり、それには他に負けない立派な人物を迎えたいと考えていたからに違いない。<sup>注11)</sup>」とも評されている。そこには、当時の日本が文化的に進んでいた中国から、その中心的思潮であった儒教を積極的に取り入れようとしていた社会精神が根底にあったと考えられる<sup>注12)</sup>。

光圀の中国への情熱は、小石川後樂園の作庭にも向けられた。それは、「光圀の父頼房が京都風の庭園に自然風の手法を加味して築造したのを、実は光圀が明の遺臣朱舜水の意見を聞いて、中国趣味豊かなものに手直ししたものだった。それは光圀の強い中国への憧れの気持ちを物語っている。<sup>注13)</sup>」と考察されている言葉にもよく表れている。

このように、当時の日本人が中国に傾倒していた風潮の中で、光圀は小石川後樂園を中国趣味、特に儒教の教えを強く意識して作庭することになる。その中で、光圀が「論語」や「史記」に登場し、自らの生い立ちとも重なる伯夷・叔斎、そして泰伯を安置する建物として得仁堂を建設したことも、当時の社会状況を考えれば理解しやすいと思われる。

また後世、水戸藩の六代藩主となった徳川治保(在位:1766~1805)は、光圀に倣って学問奨励に尽力し、立原翠軒<sup>たちばらすいけん</sup>(1744~1823)や藤田幽谷<sup>ふじたゆうこく</sup>(1774~1826)等とともに、停滞していた「大日本史」の編纂を再び軌道に乗せることになる。その潮流は「後期水戸学」と呼ばれ、編纂事業に関わった学者たちは、光圀を讃えるとともに、儒教を基盤とする思想を体系化し、その理論が後の明治維新の思想的原動力となっていく。

光圀の死後、得仁堂は名前を変え、伯夷・叔斎・泰伯像は他の場所に移されて焼失するが、この治保の時代に、伯夷・叔斎の二像を新造して得仁堂を復興していく機運が高まる。こうした動きは、光圀の志を受け継いだ人々の意志に起因し、そこには国内外の社会情勢の変化が人々の思想形成の変化を生み出し、さらに建築現象に影響を与えているという社会的要因に基づく因果関係を見出すことができる。

## 2.4.2 儒教建築の役割

得仁堂のように個人を祀る性質を併せ持つ建物は、「霊廟」、「霊屋」、「孔子廟」などと呼ばれることが多い。本稿では、それらを総称して「廟」の建物として分類し定義した。しかし、これらの建物には儒教と直接関係のない、または関係が希薄なものも含まれている。既に述べた通り、江戸時代の儒教に関連する建物は、建築史の上では「儒教建築」として区分されるよりも、この時代に建設された教育施設を具体的な例として解説を行っていることが多い。

そこで、ここでは江戸時代の儒教建築に関する概説を行う際に、直接、儒教と関係が深く、幕府や各藩が建設した教育施設を中心にその概説を行うことにしよう。これらの諸施設は「官学校」または「藩学校」などと呼ばれ、江戸時代に各地に建設された。

得仁堂は、教育施設とは言い難いが、「儒教」という特定の思想に関連する建物であるという点では同じ範疇にあると考えられる。特に江戸時代は、儒教の教えが武家層を中心に国内で幅広く受容されており、そうした社会的な動向が、建造物という具体的でハードな文化現象を形成する原動力になっていたと考えられるので、「儒教」という思想的側面が建造物の成り立ちに果たした役割の一面を考察することで、相対的に得仁堂の位置づけも明らかにできる部分があると思われる。

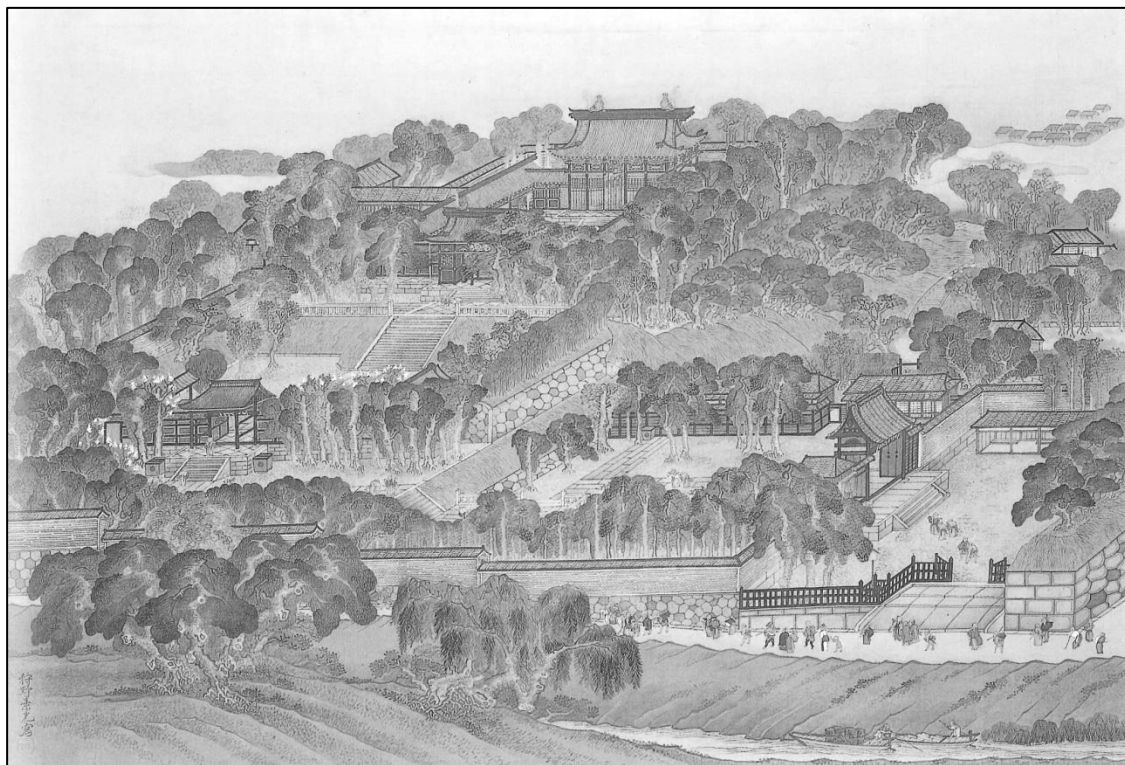


図 2.4.4 昌平坂学問所

「聖堂絵図」、狩野素光筆、寛政 11 年(1799)以後、斯文会所蔵

西山松之助監修、内山知也・本田哲夫編『湯島聖堂と江戸時代』(斯文会)より転載



現在、江戸時代の教育施設は、設立した組織やその目的によって、「官学校」、「藩学校」、「郷学校」、「私学校」に分類されている。このうち「官学校」は、幕府によって幕臣を養成する目的で建設されたものである。また、各藩によって藩士のために創設されたものは「藩学校」、幕府や藩または藩の援助で民間人によって地方の士民や庶民のために設けられたものは「郷学校」、諸学者が個人で設立したものは「私学校」などと呼ばれている<sup>注14)</sup>。これらの学校は、上下関係や秩序を重んじる儒教の教えを根本理念とし、将軍や各藩主との上下関係を維持するとともに、道德規範を広く普及させることを目的として各地に建てられた。

前述の如く、寛永7年(1630年)に林羅山が上野に開いた私塾はその先駆けとして知られる。寛永9年(1632)、尾張藩の徳川義直が資金援助を申し出て、ここに孔子廟(先聖殿)を建て、元禄3年(1690)には五代将軍綱吉が湯島に移し孔子廟を「大成殿」と名付けた。次いで、寛政9年(1797)には幕府直轄の「官学校」として「昌平坂学問所」と呼ばれた。

その他、官学校として創設されたものは、江戸では塙保己一<sup>はなわほきいち</sup>(1746～1821)が寄与した和学講談所(寛政5年<1793>)、奥医師の多紀元孝<sup>たきもとたか</sup>による医学館(明和2年<1765>)などが知られ、地方でも長崎の明倫堂(正保4年<1647>)、甲府の徽典館<sup>きてんかん</sup>(寛政年間<1789～1801>)などが開設された。

一方、各藩が創設した藩学校は、早い例として尾張藩が挙げられ、初代徳川義直が寛永初期に城内二の丸に書斎兼学問所を設けている。義直は儒教の教えを積極的に学んだ人物で、前記のように林羅山のために上野忍岡に聖堂を建てているが、それ以前にも既に自身の城内に孔子を祀る建物を建設していた。尾張藩では義直の死後、学問所は廃絶して長らくその設立を見なかったが、寛延2年(1749)に「明倫堂」を創設することになる。天明3年(1783)には聖堂や学舎を建設して武士や庶民を問わず聴講を許して盛況となった。その他、寛永13年(1636)に創設した盛岡藩の作人館、同18年の岡山藩の花畠教場などが比較的古い創立の藩校として知られている。

こうして設立された藩学校は、時代を下るに従って増加し、江戸時代に設立年代が明らかなもので223校に及んだと言われている。さらに「私学校」や「郷学校」なども含めると、明治初期に至るまで各地に続々と建設された<sup>注15)</sup>。

このような教育施設は、敷地内に様々な用途の建物が建てられたが、それらを分類すると、①学問を教授する施設、②武術を行う施設、③事務館や寄宿寮、食堂などの管理施設、④孔子を祀る施設など概ね四種類に分けることができる。江戸時代前半は、儒教の奨励という主目的があったため、まずは学問を教授するための建物が必要であった。この建物は「講堂」などと呼ばれ、当初は主として藩士の子弟を教育していたが、次第に一般庶民にまで広がってくる。

そこで実施された教育内容は、孔子の教えを基盤とする儒教を中心に行われていたので、孔子を安置する「廟」の建物として、特別に「聖堂」が建設されることもあった。この「聖堂」では、前述の如く、孔子や彼の教えに由縁のある賢人たちの像や画像を掲げて儀式が執り行われ、精神的支柱として大切な施設であった。例えば、幕府が設立した昌平坂学問所が「湯島聖堂」と呼ばれていたことにもそのことがよく表れている。

一方、江戸時代の平穏な時代が続くと、武芸を怠るようになってきたこともあって、江戸時代後期になると、各地で文武両道の教育が行われるようになり、剣術場、槍術場、弓術場など武芸全般に関する施設も併設されるようになる。



こうして建てられた各施設は、大きく二種類の形式によって配置され、①使用目的や利便性に  
 応じて自由に配される場合と、②中心軸を設けて建物を規則的に配置する場合とに分けることが  
 できる。①の代表的な例は、岩出山藩有備館(1692)、尾張藩名古屋明倫堂(1749)、福山藩弘道館  
 (1786)などで、②については、岡山藩学校(1669)、萩藩明倫館(1718)、水戸藩弘道館(1841)など  
 が挙げられる<sup>注16)</sup>。

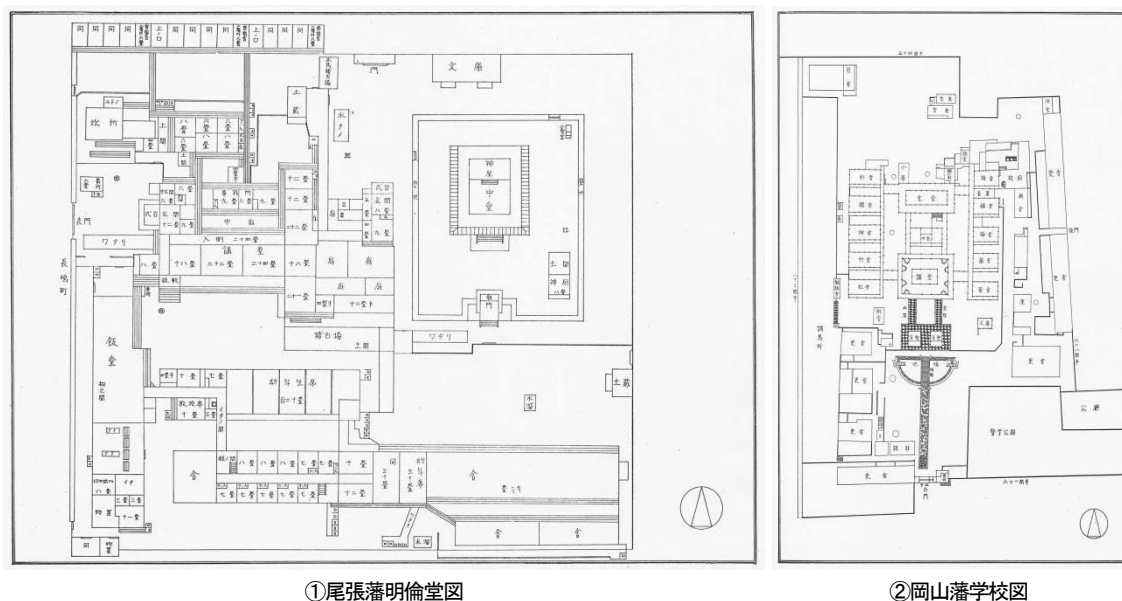


図 2.4.5 学校施設の配置（江戸時代末期頃）

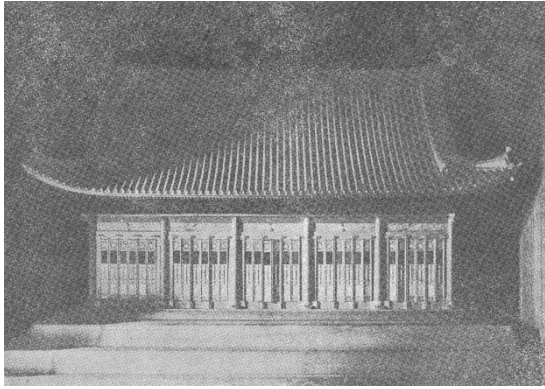
『日本教育史資料集 附録〔1〕』

城戸久、高橋宏之『藩校遺構』（相模書房）より転載

特に②に関しては、講堂または聖堂を軸にして配置されることが多い。学校施設建立の思想的  
 な基盤は儒教であるので、これらの形式は中国のものを踏襲していても不思議ではないが、江戸  
 時代には当時の中国建築の詳細が十分に知られていなかったと見られている。これらの建物やそ  
 の配置は、中国での特色の一つである左右対称形を取り入れているものの、建築細部を含めすべ  
 ての要素を模倣しているとは言い難く、我が国の伝統的な手法を用いていることが多い<sup>注17)</sup>。

それを裏付ける事例として、例えば、徳川光圀が朱舜水を江戸に迎えたのは、儒教の教えを基  
 盤とした学校を創立して彼にその指導教官にすることを目的としていたと言われている<sup>注18)</sup>、  
 その際、光圀は朱舜水に孔子廟の模型を依頼している。その製作には長崎の大工が携わったとさ  
 れ、昌平坂学問所の聖堂（大成殿）はこの模型を参考に建設されたという<sup>注19)</sup>。

光圀が帰化人である朱舜水に模型を制作させたのは、当時の中国建築の詳細が十分に伝わって  
 いなかった事情の裏返しであったと考えられる。すなわち、江戸時代における建築や庭園などの  
 文化的な嗜好は、中国に強く向けられていたものの、その情報は一部の中国の書籍や帰化人によ  
 るごく限られたものであったと見られる。



①朱舜水の孔子廟の模型

飯田須賀斯「江戸時代の孔子廟建築」より転載

福島甲子三編『近世日本の儒学』（岩波書店）所収



②湯島聖堂大成殿

昭和10年(1935)再建



③足利学校大成殿

寛文8年(1668)



④明倫館聖廟

嘉永2年(1848)再建・移築

財団法人文化財建造物保存技術協会編

『史跡旧萩藩校明倫館(南門) 修理工事報告書』より転載

### 写真 2.4.3 聖堂の建物

次に、得仁堂と同様、「廟」建築として位置付けられる「聖堂」に焦点を絞ってみよう。江戸時代を通し、学校施設において独立した「聖堂」が建設されることがあった。その代表として、我が国に遺存する最古の建物と言われる足利学校大成殿(1668)、旧閑谷学校聖廟大成殿(1684)、多久聖廟(1708)、明倫館聖廟(1718、1848 再建・移築)、湯島聖堂大成殿(1799、1935 再建)、弘道館孔子廟(1838、1970 再建)などが挙げられる。

これらの建物を見ると、全体として中国風の要素は細部意匠に抑えられ、火灯窓や木鼻など主たる構成要素は日本国内で培われた建築手法を用いて建設されているものが多い。また、独立した聖堂をもつ学校は全体のわずか二割程度であったと言われている。それは江戸時代を経るにしたがって、徐々に国学や洋学が勃興し、聖堂の意義が薄らぎ、孔子を弔うことが形骸化したことで、聖堂建設の機会は減少していったことに起因していると思われる<sup>注20)</sup>。

さて、次に水戸藩について概説しよう。前記のように、光圀は寛文5年(1665)に朱舜水を招いて聖堂の模型を製作させるなど、儒教を基盤とした大規模な学校創設に意欲的であったが、彼の生存中にそれを実現することはできなかった。水戸藩でそれが具体化したのは、江戸時代末期の天保9年(1838)にまで下らなければならない。

元来、水戸藩は参勤交代の義務がなく藩主が江戸に定住する「定府」と位置づけられ、江戸藩邸には「大日本史」を編纂する「彰考館」もあることから、藩主の主導で学問所を創設するまでには至らなかった。光圀が水戸に隠居した元禄11年(1698)には、彰考館の主体を江戸から水戸に移し、江館(小石川邸内)と水館(水戸城内)に分けられて編纂が進められた。彼の死後、修史事業は衰えたが、六代藩主治保が光圀に倣って学問を奨励すると、再び活況を呈してくる。

徳川斉昭(在位:1829~1860、諡号:烈公)が九代藩主に就任すると、江館を廃止して館員を水戸に移す。そして人事を刷新して藤田東湖(1806~1855)や会沢正志斎(1782~63)らの学者を登用し、海防、民政、教育を重視して積極的に改革を推進した。水戸藩に大規模な教育施設として弘道館が建設されたのは、この改革の一環として行われたものである<sup>注21)</sup>。



写真 2.4.4 弘道館正庁



図 2.4.6 文官装束の烈公

(斉昭 34 歳時、萩谷遷喬筆、個人所蔵)

湯原公浩編『大名庭園』(平凡社)より転載

弘道館は、水戸城三の丸内に天保12年(1841)に仮開館し、安政4年(1857)に本開館に至った。その教育内容は、学問と武道を一体とする「文武不岐」の精神を柱とし、各武芸をはじめ、儒学などの諸学問のほか、天文学・算学・音楽なども行われ、生徒は主として藩主と藩の重臣の子弟であった。弘道館は「後期水戸学」形成の舞台ともなり、「尊皇攘夷」の思想もここから生まれた。

敷地内の各施設は、中央管理棟としての正庁、剣術・槍術・馬術などの武場、諸学問を受講する教授所、孔子を祀る聖堂などが建設され、当時の藩校としては大規模なものであった。また、仮開館してまもなく、天保13年(1842)には水戸城下郊外に「偕楽園」が設けられ、心身療養の場

として弘道館と一体として計画され開園された。

また、斉昭は幼少期から光圀が編纂を始めた「大日本史」に由来する「水戸学」を学び、強い尊王思想を持っていた。彼の急進的な思想は、弘道館設立の原動力となったが、その一方で、幕府から強い反発を受け、晩年には水戸での隠居を命じられた。また、水戸藩士も桜田門外の井伊直弼暗殺や筑波山での挙兵など多くの事件に関わった。その影響もあって、弘道館は明治元年には尊王佐幕両派の争いによって、正庁や正門、聖堂、鐘楼以外は焼失してしまう。その後、更に戦災を受けて、現在、創設期の建物として遺存しているものは、正門と正庁のみである。

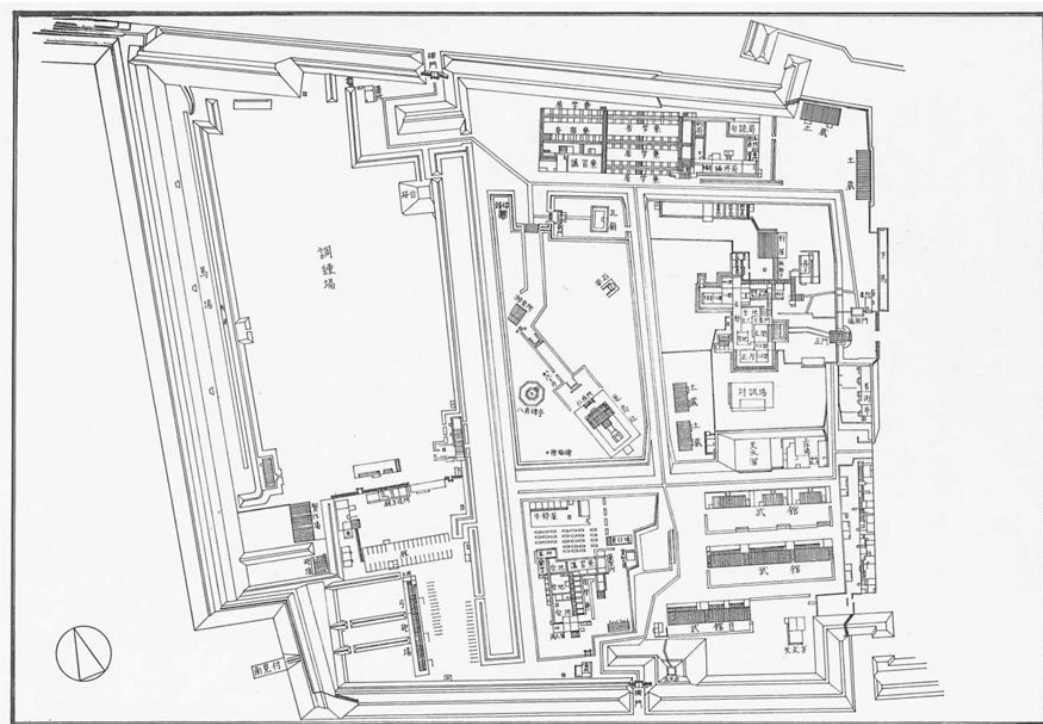


図 2.4.7 水戸藩弘道館図（江戸時代末期頃）

『日本教育史資料集 附録〔1〕』

城戸久、高橋宏之『藩校遺構』（相模書房）より転載

以上、江戸時代の教育施設を通して儒教に関連する建物を概観した。江戸時代前期には、幕府や各藩が儒教思想の普及を積極的に推し進め、その思想的原動力の建築的な受皿として、各地に教育施設が造られた。水戸藩では江戸時代末期になって大規模な施設を建設した。これらの教育施設には、独立した聖堂を併設したものも見られたが、その形式は必ずしも中国の完全な模倣ではなく、自国で培われて構造や意匠が多く取り入れられた。そこには中国建築の情報が限られていたという事情もあった。このように、江戸時代に儒教と関連が深い建物の具体例は、当時の教育施設に見ることができるが、同じく儒教に由来する得仁堂が、主として我が国の伝統的意匠で構成されていることも、こうした事例から理解できると思われる。

## 2.5 小石川後樂園と得仁堂の沿革

### 2.5.1 小石川後樂園と得仁堂の概要

#### (1) 小石川後樂園略史

ここでは、既に述べた内容も含めて、小石川後樂園と得仁堂に関する通説をまとめ、次章以下の導入部分としよう。小石川後樂園は、寛永6年(1629)尾張・紀伊と並んで御三家の一つであった水戸藩の初代頼房(家康の十一男)が二代将軍秀忠から小石川に屋敷地約76,700坪を下賜されたことに始まる。この頃、御三家の上屋敷は江戸城本丸近くに位置していたが、明暦大火(1657)を機に城外に移され、水戸藩は小石川に11,700余坪を添地されて上屋敷とした。元禄13年(1700)には綱吉から9,700余坪を賜り、享保2年(1717)にも1,600坪近くが加わって、約10万坪の広大な面積を占めることになった<sup>注1)</sup>。ちなみに現在の小石川後樂園は約2万坪である。

前記のように、初期の小石川後樂園は、起伏に富み自然豊かな立地で、その作庭には京都作庭の流れを汲む「徳大寺左兵衛」なる人物が携わり、頼房と三代将軍家光と親しい間柄であったこともあって、将軍自ら足を運び、庭石や池の築造に関わったとされている

当時の水戸藩邸を描いた絵画として、「江戸図屏風」(国立歴史民俗博物館所蔵)(図2.5.1)が知られている。この屏風は家光の事績顕彰を目的として描かれたもので、景観年代は明暦3年(1657)の大火以前とされている<sup>注2)</sup>。



図2.5.1 「江戸図屏風」(水戸藩下屋敷庭園部)

国立歴史民俗博物館所蔵

「水戸中納言下屋舗」と貼紙された藩邸は小石川の地が上屋敷となる以前の様子が描かれてい  
ると見られ、庭園部分には、池を中心に島や砂州、滝、反橋、石組、望楼を有する建物があり、  
家光がこの庭園築造に深く関わったために描き込まれたものと考えられている。邸地を得てから  
間もない段階ではあるが、既に評判の高い庭であったことがこの屏風絵から窺える。

二代藩主光圀（頼房の三男）が治めた寛文元年(1661)から元禄 3 年(1690)までの期間に現在  
の姿の基盤となる景観が造られる。得仁堂が建立されたのもこの時期である。光圀は青年期に中  
国の教えである儒教を中心に広く学問に励んでおり、庭園にも儒教思想が付け加えられた。寛文  
5 年(1665)、光圀は明末の儒者朱舜水を水戸藩に招聘し、彼が世を去るまでの 18 年間師事するこ  
とになる。舜水は庭園内の「円月橋」の設計と築造の指導を行い、「西湖堤」の築造にも関わって  
いたといわれる<sup>注3)</sup>。「後樂園」の呼称は、光圀の招きに応じて江戸へ来た朱舜水が名付けたもの  
で、かつて唐門に掲げられていた扁額の文字「後樂園」は舜水の揮毫であったことは既に述べた  
通りである。朱舜水は寛文 9 年(1669)に初めて小石川の庭園に招かれたと言われるが、それ以前  
の庭園は、単に「園」と呼ばれ、特別な名称が付けられていなかったと見られる<sup>注4)</sup>。また、光圀  
は園内に田植えや稲刈りを実践するための水田を作り、農民に年貢の義務を自ら示したといわれ  
る。さらに、「大日本史」編纂の支局も設け、園内で親睦を深めるなど、この時期の後樂園は、社  
交の場として大いに活用されたという。光圀は元禄 13 年(1701)にこの世を去った。

三代藩主綱条<sup>つなえだ</sup>の時代になると、元禄 15 年(1702)の 5 代将軍綱吉の生母桂昌院光子の訪問時に  
安全面が考慮されて大きく改造されことになる。また、翌年の江戸一帯を襲った元禄大地震(1703)  
では石の転倒や建物の損壊などの被害があり、そのわずか数日後には水戸家を火元とする大火が  
起きたという。「後樂園紀事」には、この頃の後樂園の様子を「園中の景一変し侍りぬ」<sup>注5)</sup>と記  
述されている。さらに四代藩主宗堯<sup>むねたか</sup>の時代になると、見晴らしをよくするため樹木七百余本を伐  
り払い、大泉水の石組を崩して地割を変更、石積を取り払うなどの大改修が行われたという<sup>注6)</sup>。こ  
うして頼房・光圀の造営からおよそ百年で後樂園の景観は大きく変化したと見られる。

その後、六代藩主治保<sup>はるもり</sup>の時代には、現在の白糸の滝が設けられるなど再整備が進められた。こ  
の頃、園内には大木や銘木なども復活して、庭の拝観が頻繁に行われるようになる。その様子は  
大田南畝の「みつがひとつ」(天明 4 年<1784>)や、大田錦城の「遊後樂園記并序」(寛政 6 年<1794>)  
など、後樂園の記事が頻出することにも表れている。文化・文政期になると、一時荒廃していた  
水田を再開し、名称が八幡堂となっていた得仁堂の建物に再び伯夷・叔斎像を安置した。ところが、  
幕末期には、安政 2 年(1855)の大地震、翌年秋の暴風雨の被害を受けたこともあって、後  
樂園は急速に荒廃したという。

近代に入ると、明治 2 年に後樂園を含む水戸邸は水戸徳川家の手を離れて兵部省の所管となり、  
その後、造兵司、陸軍省を経て、同 12 年に東京砲兵工廠として利用されることになる。この時、  
敷地の北部と東部の屋敷部分には煉瓦造の兵器製造所が建設されるが、庭園部分は天皇の工廠行  
幸の休息地、更には公的な迎賓施設として整備し利用された。そして大正 12 年 3 月には、「史蹟  
名勝天然記念物保存法」による「史蹟及び名勝」の指定を受けて保護が図られた<sup>注7)</sup>。ところが、  
指定直後の 11 月に起きた関東大震災によって東京工廠は施設の大半を焼失し、園内の建物も多  
くが損壊した。昭和 2 年には、「後樂園内工作物補修計画」として庭園部分の建物や園路・護岸

などが修理された。この時、兵器製造工場は小倉に移転され、同 11 年には庭園の所有が東京市へ移ることになり、広く一般に公開されることになった。なお、翌年 5 月には「史蹟名勝天然記念物保存法」に基づく追加指定および一部指定解除がなされた。

その後、太平洋戦争によって園内の建物はほとんどが焼失し、光圀の時代から残る建造物は得仁堂と円月橋を残すのみとなった。水戸家上屋敷部分一帯は、機関砲隊・通信隊などの軍の施設もあったことから同 20 年の東京大空襲の際には、米軍の攻撃目標となったと言われている。戦後、「文化財保護法」により昭和 27 年 3 月 29 日に「特別史跡及び特別名勝」に指定され、今日にいたるまで維持管理・整備が行われている<sup>注8)</sup>。

なお、特別史跡と特別名勝の重複指定を受けているのは、東京都立の庭園では旧浜離宮庭園と小石川後樂園の二箇所だけで、全国でも京都の鹿苑寺（金閣寺）庭園、慈照寺（銀閣寺）庭園、醍醐寺三寶院庭園、奈良県の平城京左京三条二坊宮跡庭園、広島県の厳島、岩手県の毛越寺庭園、福井県の一乗谷朝倉氏庭園を合わせ九箇所だけとなっている。

これまで述べた通り、小石川後樂園は、「回遊式庭園」という特徴を持った江戸大名庭園の最初期のものであり、各大名の作庭に対しても大きな影響力を与え、様々な天災や社会的要因によって修理を繰り返し、今日の景観が造りだされた。

## (2) 得仁堂略史

得仁堂は水戸藩の二代藩主徳川光圀(1628～1701、在位：1661～90)が自らの生き方の手本とした中国の賢人伯夷<sup>はくい</sup>・叔斉<sup>しゅくせい</sup>像を安置するために建立したと言われている。棟札ほかの造営を示す記述が残されていないので、正確な建立年代は詳らかになっていないが、一般には寛文年間(1661～73)頃と推定されている。

「得仁堂」という名称は、孔子が「論語」（紀元前 200 年頃成立）の中で伯夷・叔斉に因んで述べた「求仁得仁」の句によるものとされる。青年期の光圀は、孔子や司馬遷の書物を熱心に読み、儒学を中心として広く学問に励んだと伝えられる。

これまでなされてきた解釈では、光圀が 18 歳の頃、司馬遷の「史記」（紀元前 91 年頃成立）を読んだ際、兄弟の伯夷・叔斉が、お互いに王位を譲り合った物語に感銘し、のちに初代頼房の三男である自分が兄達を差し置いて世継ぎとなったことを憂慮して、伯夷と叔斉の像を安置するために得仁堂を建てたと言われている。

史料の中には、得仁堂には伯夷・叔斉のほか、孔子に「至徳」と呼ばれた泰伯の像の計三体を堂内に安置していたと記す史料が僅かではあるが存在しており、創建年代についても様々に示されている。そのことに関しては、第 3 章で詳しく述べることにする。

光圀没後、得仁堂は三代藩主綱条<sup>つなえだ</sup>の治世の元禄 13～15(1701～1703)に「孔子堂」・「釈迦堂」と名称が変化する。高松藩から徳川宗堯<sup>むねたか</sup>(在位：1718～30)を四代藩主として迎えると、得仁堂に八幡神が安置され、建物の名前を「八幡堂」と変更し、伯夷・叔斉像は別所へ移された。

文政 3 年(1827)、八代藩主斉脩<sup>なりのお</sup>(在位：1816～29)の治世に伯夷・叔斉像は元に戻されて、建物の名も再び「得仁堂」となる。同年、紀州藩の十代藩主徳川治宝<sup>はるとみ</sup>(在位：1789～1842)が揮毫した「得仁堂」の扁額が掛けられた。



また、現在、得仁堂の屋根は銅板葺だが、創建時は茅葺であったとの言い伝えがある。ただ、江戸時代中に後世描かれた絵図や文献には瓦葺の得仁堂を伝えている。

近代以降の得仁堂の修理記録はほとんど残されていないが、古写真や昭和 57 年の修理時の記録などを見ると、屋根はこけら葺から鉄板葺、銅板葺に改められ、頂部の宝珠が失われた時期があったことが窺える。前述のように得仁堂は、関東大震災や太平洋戦争を経ているが建物の被災は免れた。太平洋戦争時には、小石川後樂園は火災に見舞われたが、その際、堂内の伯夷・叔斉像は運び出されたと言われている。

近年、得仁堂は平成 24 年 12 月から平成 26 年 3 月にかけて、宝珠の復原を含む屋根葺替および部分修理が行われて、現在に至っている。



写真 2.5.1 叔斎像(左)と伯夷像(右)

安見隆雄『水戸光圀と京都』(錦正社) 口絵より転載



写真 2.5.2 現在の西山荘

茨城県常陸太田市

## 2.5.2 現在の小石川後樂園と得仁堂

現在の小石川後樂園は、中央南東寄りに中島のある大きな池が配され、周囲は回遊路となっている。園内にはウメ、サクラ、ツツジ、ハナシロユズなどの植物が植えられ、四季を通じて情緒豊かな景色が広がり多くの来園者を楽しませている。

小石川後樂園の西部部は山と谿谷を思わせる地形で瀧と川があり、川下には中国の西湖を模した池と堤が設けられている。その川を遡って斜面を登り朱塗の通天橋を渡った先に、今回対象としている得仁堂が木々に囲まれて建っている。

これまで見てきたように、得仁堂は正背面三間、側面二間、出組、二軒繁垂木、正面に唐破風が付いた宝形造銅板葺の建物である。背面には像を安置するための「トコ」が取り付け、内部は、床を白色の敷瓦とし、周囲に板壁を配して天井を格天井とする一室空間で構成され、建物全体は、禅宗様を基調としてまとめている。

小石川後樂園は光圀の時代によってその原型が形づくられ、園内には数棟の木造建物が建設されていたが、その多くは失われている。得仁堂は小石川後樂園の作庭間もない頃からの姿を残す唯一の木造建築物であり、貴重な存在となっている。





①正面(南面)



②背側面(北西面)

写真 2.5.3 現在の得仁堂

平成 26 年工事竣工時

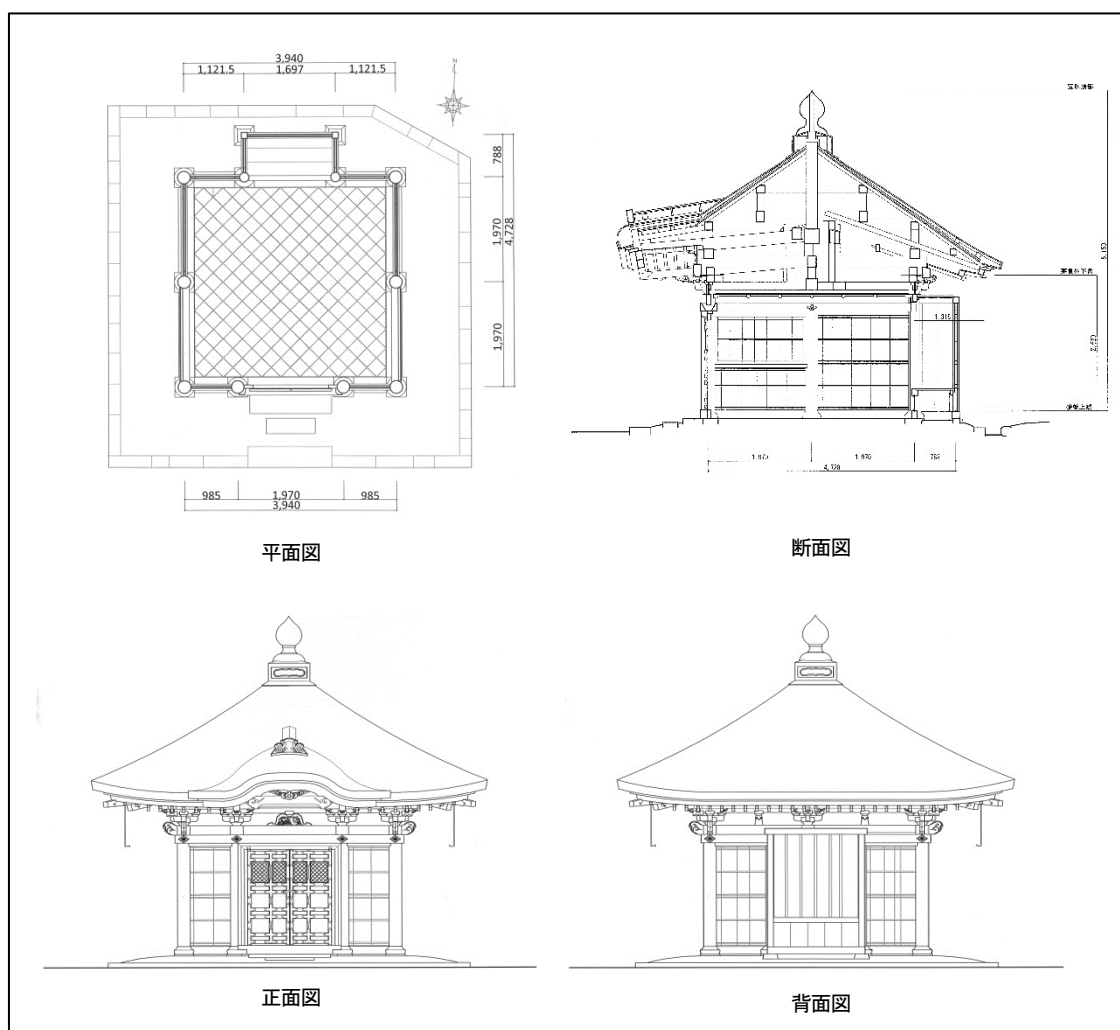


図 2.5.2 得仁堂図

平成 26 年工事竣工時

## 2.6 既往研究の検証

近代以降の小石川後樂園および得仁堂に関する主な研究成果としては、①小石川後樂園に関する通史、②庭園を中心とした論文、③得仁堂に関する考察、④伯夷・叔斉像に関する論述の4つに大別される<sup>注1)</sup>。

①は主に庭園を専門としている著者らによるもので、江戸時代の史料および絵図の紹介や庭園全般の概説を中心とした内容となっており、小石川後樂園の歴史を知る上での標準的な解説書である。得仁堂に関する記述は一部見られるものの、建物の詳細な調査に基づく検証まではなされていない<sup>注2)</sup>。

②は庭園に関する論述で、庭園史としての小石川後樂園が考察されている。得仁堂は部分的に紹介されているに過ぎないが、李偉が著した「初期小石川後樂園における眺望行為に関する研究」には、「夷斉堂と至徳堂は後世の得仁堂と考えてよい<sup>注3)</sup>」と、得仁堂の創建に関する重要な指摘がなされている。しかし、その根拠を示す史料の詳細な分析にまでは手が届いていない。

③は建築史家からの観点で得仁堂に焦点を当てたものである。しかし、建物から得られる情報が中心で、史料による裏付けが不十分である。例えば、白井裕泰は「小石川後樂園得仁堂について」の中で、創建時の復原考察を行い、建物背面のトコは左右の幅が異なっていたとし、左の幅の広い方に座像の伯夷像、右には立像の叔斉像の二像が祀られたと述べている<sup>注4)</sup>。しかし、今回の史料調査によって、得仁堂の創建時は泰伯像を加えた三像が祀られていたことが判明し、その事実が見逃されている。

また、白井は「国史館日録」の寛文8年4月8日に記された「頂有堂」の部分を山の頂に得仁堂があるとしているが、この「堂」は清水観音堂の可能性も考えられ、得仁堂と限定することはできない。そして結論として、「現在の得仁堂は少なくとも寛文8年(1668)には建築されたといっても大過ないであろう。<sup>注5)</sup>」と史料の詳細な検証がなされないまま漠然と創建年代を推定しているに過ぎない。

④は水野敬三郎・瀬山里志の「小石川後樂園 伯夷叔斉像等調査報告」で、伯夷・叔斉像の技法や制作年等を考察した調査報告である。この報告の中で、「得仁堂および伯夷・叔斉像の造立時期を推測するならば、((光圀が))讓国の決意を公にした寛文元年(1661)以降、朱舜水『遊後樂園賦并序』の同九年(1669)、或いは『与陳遵之書』の寛文六年(1666)以前に絞られよう。さらにその契機を推測するなら、松千代((兄頼重の長男))が世子に立ち、元服する同三年・四年(1664・1665)頃が考えられようか。<sup>注6)</sup>」と、一応、史料を取り上げて論じている。ここで述べられている寛文9年(1669)に書かれた朱舜水「遊後樂園賦并序」については、「得仁堂について言及があるので、この時までには造営されていたことは確かである。ここでは泰伯・伯夷・叔斉の三体を祀ってあるように記している。」と記述されている。この「泰伯・伯夷・叔斉の三体を祀ってあるように記している。」の部分は全くの間違いとはいえないが、詳細に解釈していないので、三体の安置を断定できていない。

また、寛文6年(1666)については、同年の朱舜水「与陳遵之書」で「上公、国を譲る一事、之れを為すも泯然として迹無し。真大の手段なり。旧より泰伯・夷斉を称して至徳と為す。然れども之れを為して其の迹有り。」(石原道弘著『朱舜水』＜参考文献 36＞からの引用)と書かれた中

の「其の迹有り」部分が「得仁堂の造営を示す可能性がある」と指摘している。しかし、この部分は「泰伯・伯夷・叔斉の迹(おこない・いさお)は今に残る」と言う意味で、得仁堂の建物のことを記したものではない可能性が高い。こうした考察を全面的に否定する訳ではないが、史料の検証が十分になされているとは言い難い。特に伯夷・叔斉像の制作年を「新像造立の記事がない以上、一応、当初像とすべきであろう。注7)」と結論付けている。本稿では、泰伯・伯夷・叔斉の三体が焼失し、新しい像が造立された史料を示して、創建時には3像であったことを根拠としているが、著者は史料の発見には至らず断定できていない。

このように、得仁堂に関する既往の研究は、各専門分野から断片的に取り上げられているにすぎないことが理解できる。歴史的建造物を考察する場合、史料と建物から得られる情報は両輪とも言えるが、どちらかに偏った視点からでは見過ごされてしまう事実も多いと思われる。

得仁堂の創建年とその時に安置された像に関する既存の論文や文献等に記述されている内容をまとめると以下の通りとなる。

表 2.6.1 得仁堂の創建と像に関する既往研究の記述

著者	書籍・論文名	出版年	創建年	創建時の像	備考
計見東山	後楽園	1907	三代藩主綱條時代 (元禄3年<1690>～享保3年<1718>)	伯夷・叔斉	
田村剛	後楽園史	1929	二代藩主光圀時代 (寛文元年<1661>～元禄3年<1690>)	伯夷・叔斉	
重森三玲	日本庭園史図鑑	1936	「光圀卿時代に出来たもの」	「太伯、伯夷、叔斉の像を置き」	史料翻刻を掲載 創建年と像は史料翻刻に基づく
藤島亥治郎	後楽園の建築	1938	寛文年間 (1661-1673)	—	創建年の根拠は「細部手法より」
重森三玲 重森完途	日本庭園史大系	1974	「光圀時代の作」	「伯夷叔斉の像を安置した」	『日本庭園史図鑑』の改訂版 史料翻刻部分は改訂前と同じ
吉川需 高橋康夫	小石川後楽園	1981	(上限は示さず) 下限：寛文9年(1669)3月	「太伯伯夷叔斉の像」	創建年は朱舜水「遊後楽園賦并序」、像は鶴岡信興「後楽園紀事」の翻刻に基づく
白井裕泰	小石川後楽園得仁堂について	1995	寛文8年(1668)頃	伯夷・叔斉	
水野敬三郎 瀬山里志	小石川後楽園 伯夷叔斉像等調査報告	2000	上限：寛文元年(1661) 下限：寛文6年(1666)または 寛文9年(1669)3月	「泰伯・伯夷・叔斉の三体を記 つてあるように記している。」	朱舜水「遊後楽園賦并序」などの 史料に基づく

本稿では、後述する第3章3節で行った考察で、得仁堂の創建年代は、寛文5年(1665)7月以降、寛文8年(1668)1月以前と絞り込むことができた。続く第4章では、創建時の像は泰伯・伯夷・叔斉の三体を安置したことを裏付ける痕跡が建物に残されていることを明らかにした。

また、創建後の得仁堂は、名称を変えて、三体の像は別の場所に移されるが、そこで焼失してしまったので、紀州藩で伯夷・叔斉の二像だけが制作され、この二体が得仁堂に再び安置されたことなどの経過も本稿で解明することが出来た。こうした詳細な論述は、後述の第3章以降で述べることとする。

なお、安永8年に新たに制作されたと見られる伯夷・叔斉の二像は遺存しており、現在、東京都建設局東部公園緑地事務所に保管されている。

## 2.7 第2章のまとめ

この章では、小石川後楽園内における得仁堂を、主として庭園史・建築史・宗教史の各3分野からアプローチし、次節以降の詳細な考察を行う導入部分として、多角的に概観した。その際、既往研究の検証も併せて行い、現在考えられている小石川後楽園と得仁堂の位置付けや評価を総合的に示した。それらをまとめると以下の通りとなる。

- ①得仁堂が建つ小石川後楽園は、日本趣味と中国趣味とが共存した江戸時代を代表する大名庭園で、園内の建物は、庭園の景と用としての機能を有し、得仁堂はその両方の性質を併せ持つ建物として建立された。
- ②得仁堂は、禅宗様を基調とした宝珠を頂く宝形造の建物で、建築史上、「廟」の建築として分類され、トコ廻りは全国でも稀な構成となっている。
- ③江戸時代初期、幕府や水戸藩をはじめとする各藩は儒教思想の普及を推し進め、その一環として各地に教育施設を建設した。そこには独立した「廟」も併設されたが、その建物は得仁堂と同様、主として自国で培われてきた構造や意匠によって構成された。
- ④得仁堂に関する既往の研究は、各専門分野から断片的に取り上げられているにすぎず、史料の検証や建物の調査が十分に行われてきたとは言い難い。そこで本稿は、史料の詳細な検証と、建物の調査の両面から考察した。

### 第3章 史料調査による検証



### 3.1 はじめに

第2章 2.6「既往研究の検証」で述べたように、小石川後樂園について書かれた出版物は種々あるが、大部分は庭園史の観点から書かれたものである。その中で得仁堂は庭園内の数ある建物の一つとして扱われているに過ぎず、その変遷を詳しく検討したものは見られない。本章では、主として江戸時代における史料を整理・検討し、通説の検証を行って不明な点を明らかにするとともに、その創建から現在に至るまでの変遷について叙述することを目的とする。

得仁堂についてこれまで通説となっている主たる事柄の概略を整理すると次のようになる。

○得仁堂は光圀が尊敬する古代中国の賢人、伯夷と叔斉を祀った堂であり、寛文年間(1661～1673)頃に建てられた。

○後に孔子堂、釈迦堂と名前が変わり、享保年間(1716～36)には八幡堂となった。

○その後、再び得仁堂となり、八幡堂は別の建物が建てられ文政9年(1826)に遷座された。

これらを踏まえた上で、この章では以下の考察を行う。

- ① 林羅山の子、鷲峰が後樂園を訪れた寛文5年(1665)の日記には得仁堂の名が見えず、「夷斉堂」と称される伯夷・叔斉を祀った堂と、同じく賢人の泰伯を祀った「至徳堂」があった。一方、元禄16年(1703)年以前の後樂園を描いたとされる最古の絵図(明治大学博物館所蔵)には「得仁堂」と記された建物が見られる。これは絵図上で「得仁堂」の名称の初出である。この絵図には寛文9年(1669)には存在していた「西湖堤」が見られない。先の日記と絵図の内容から、得仁堂の建設時期は、寛文5年(1665)から同9年(1669)の可能性が高いと考えられた。この絵図の由来は不明とされていたが、安藤定為<sup>さだため</sup>の旅日記「常陸帯」<sup>ひたちのおび</sup>の中に記された絵図、すなわちかつて徳川家から後水尾天皇<sup>ごみずのお</sup>に嫁いた東福門院<sup>とうふくもんいん</sup>が光圀に依頼して制作・献上され、後水尾院も感心して褒めたという絵図がこれではないかとした。(3.2節)
- ② 絵図の由来と制作年代を更に確かなものとするために、「常陸帯」の著者安藤定為およびその家族の履歴、絵図の制作を依頼した当時の御所の状況、後水尾院と光圀の関係をさぐった。その結果、絵図の由来は確かであって、東福門院御所に出入りする安藤亀子から夫の定為に伝えられた可能性が極めて高く、制作時期の下限は亀子が没した寛文8年(1668)に修正された。当時の両院御所は、万治4(1661)年の大火から復興したばかりの時期であって、一応は完成していた庭園の整備や改造、或いは後の参考とするため、後樂園絵図の制作を依頼したものと推定した。また、絵図を東福門院から見せられた後水尾院は光圀と親しい関係にあったことが明らかとなった。(3.3節)
- ③ 通説では、得仁堂には建立当初から伯夷と叔斉の二体の像が祀られていたと考えられていた。他に、泰伯を含めた三体が祀られていたとの説もあったが、史料的裏付けが不十分であった。今回関連する史料から、得仁堂には建立当初は、泰伯・伯夷・叔斉の三体が祀られていたことが立証された。得仁堂の建立以前に存在していた伯夷・叔斉を祀る「夷斉堂」に「至徳堂」の泰伯を合祀するため、夷斉堂を改めて新たに造られた建物が得仁堂である、と結論づけることが出来た。(3.4節)

- ④ 光圀の死去を境として、得仁堂は孔子堂に、ついで釈迦堂に変えられ、さらに四代藩主の出身地讃岐から八幡神が勧請されて八幡堂となるが、三代將軍家光から光圀に送られた文昌星像を安置していた八角堂も、同じころ讃岐の金比羅神を安置した。これらには、生前の光圀が行った社寺改革、特に八幡改めとの関係が深いことを指摘した。(3.5 節)
- ⑤ 八幡堂の園内新築移転と得仁堂の復旧に関する新たな史料により、文政元年(1818)年に八幡神が他所へ遷宮され、同3年に得仁堂が復旧されたことが判明した。以前の得仁堂に安置されていた三体の像は、保管先で焼失しており、新たに作り直された伯夷・叔斉像だけがこのとき納められた。時を同じくして、光圀の隠居所であった水戸の西山荘が復元されており、これらは藩内における後期水戸学の興隆によるものと考えられた。(3.6 節)
- ⑥ その後、江戸末から近代を経て、現在に至るまでの変遷の概略を記した。(3.7 節)

これまで、小石川後樂園内に建つ得仁堂を説明する場合、必ずと言っても良いほど引用されるのは、次の史料 1「後樂園紀事」である。得仁堂の歴史を検討し直す出発点となるので、まずここに示しておきたい。<sup>注1)</sup>

#### 【史料 1】

「後樂園紀事」<sup>うかいのぶおき</sup> 鵜飼信興 元文元年(1736)

得仁堂 是ハ義公御本意をあらハし給ふ堂なるヘシ、茅葺也、堂のうち敷瓦なり、<sup>(平出)</sup>公上曾て<sup>(ママ)</sup>大伯伯夷叔斉の像を安置セさせ給ふ、像ハ前田助十郎か作也、今ハ其像ミエス此事禁忌なれハもらしはへるなり、額ハ御右筆武田常斎か筆也、元禄中堂の潤色も改まり、釈迦堂となれり、その時に堂の経営昔にことなり、今井元昌額を書あらたむ、其後享保中、讃州<sup>(ママ)</sup> 岩 清尾の八幡となる、八幡堂と称す、額ハ止らる

宮崎成身：視聽草 所収 国立公文書館内閣文庫所蔵

### 3.2 得仁堂が描かれた絵図

得仁堂が建設された頃の様子を伝える史料は、僅かしか残されていない。朱舜水が光圀に招かれて江戸に来る前月の寛文5年(1665)6月、林羅山の子鷺峰が後樂園を訪れた。その時の日記には次の史料2「国史館日録」に記されているが、この時はまだ「得仁堂」の名称は見られない。

#### 【史料 2】

「国史館日録」林鷺峰 寛文5年(1665)6月17日条

周回寛広、有池有林、池上架長橋、橋下有舟、喬木茂草千万章、挙細径上山、山有二堂、其一号夷斉堂在半腹、其一在絶頂号至徳堂、或名達徳 祭泰伯云云、君超兄為嫡、常有遜讓之心、官命不許、故養兄子為嗣、使其子為兄之子、互相易以遂素志、故祭泰伯・夷斉也、

林鷺峰：史料纂集 110 国史館日録 第1, 続群書類従完成会, 1997



つまり、山に二つの堂があり、中腹の「夷斉堂」には伯夷・叔斉を祀り、頂上の「至徳堂」別名「達徳堂」には泰伯を祀っていたという<sup>注1)</sup>。この「山」は、初代藩主頼房からの依頼により寛永17年(1640)に林羅山が名づけた「小廬山」である。ここで言う小廬山は、現在同じ名前と呼ばれる小山とは異なり、園内西側の山勝ちの一带を指していたと考えられている<sup>注2)</sup>。

得仁堂の名称およびその姿が描かれた初出は、年末詳だが最古の後樂園絵図面とされる明治大学博物館が所蔵する「水戸様小石川御屋敷御庭之図」(ここでは「後樂園絵図」(明大本)と呼ぶ)と考えられており、中央左寄りに「得仁堂」と記された建物が見える。(図3.2.1、図3.2.2)

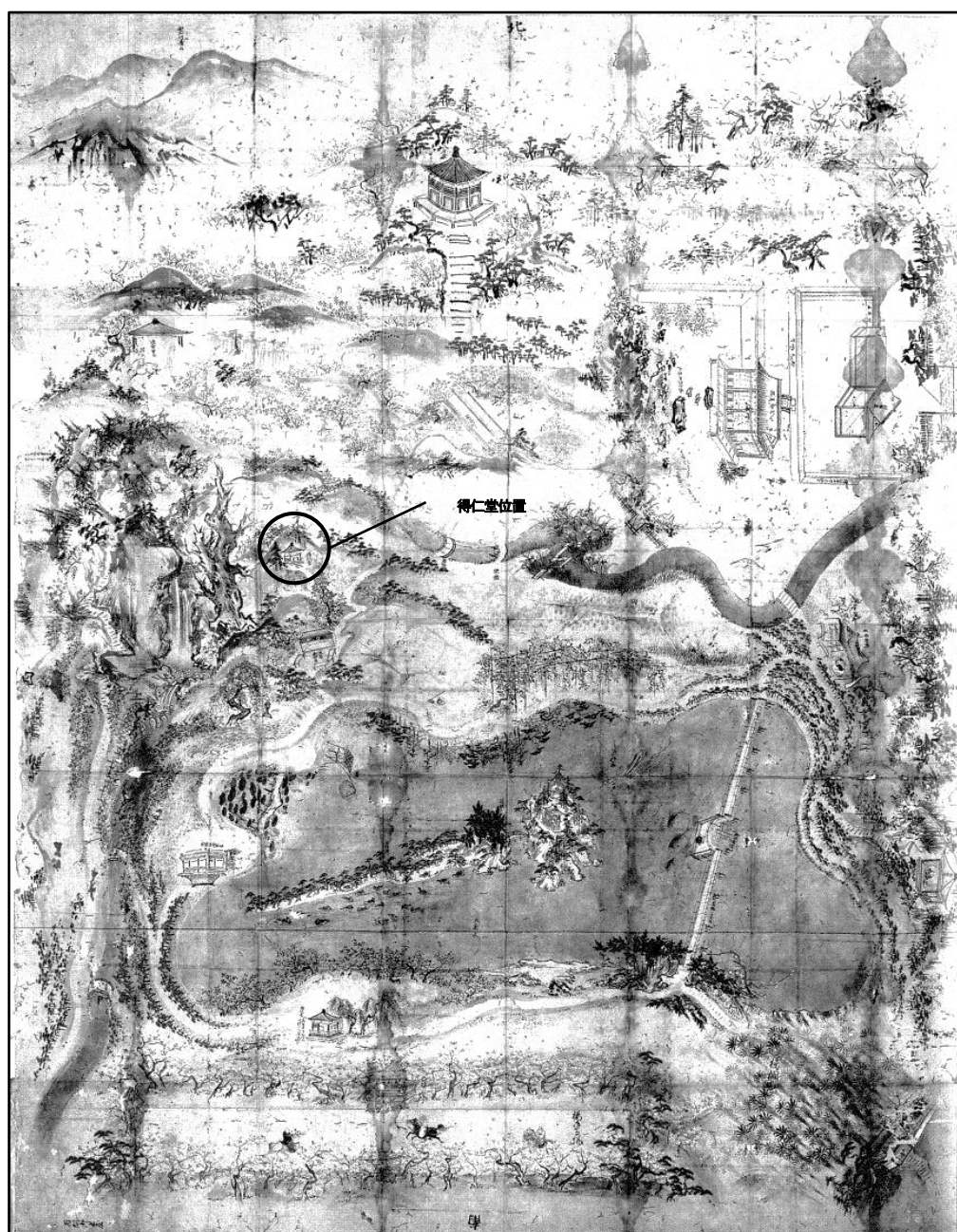


図3.2.1 「後樂園絵図」(明大本) 全図、一部加筆



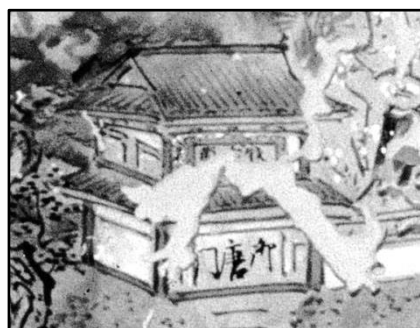
①左下部拡大（得仁堂・清水観音堂から大堰川まで）



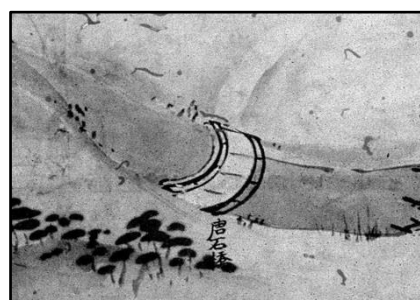
②得仁堂



③清水観音堂



④御唐門



⑤唐石橋

図 3.2.2 「後楽園絵図」（明大本）部分図 1

この絵図には、華やかな庭園の様子が詳細に描かれている。現在、明治大学博物館の所蔵であるが、その来歴は詳らかではなく、絵図中には誤記もあることから、写本あるいは控の可能性も考えられる<sup>注3)</sup>。内容・制作年代について詳しく検討された服部勉の論文<sup>注4)</sup>によれば、元禄16年(1703)11月23日の地震で地中に沈んだ福祿堂が描かれていること、同地震で水の枯れた音羽の滝に勢いのよい水流がみられることから、描かれた景観の時期は「元禄16年以前の可能性が高い」としている。また、制作時期は、この絵図が日向国延岡藩主内藤家文書に含まれ、元禄13年(1700)9月、五代将軍綱吉の水戸藩小石川邸御成の際に藩主内藤義孝が御供を命ぜられたことから、この折に拝見した後楽園の様子を描かせたことが考えられるとし、一方で西湖堤が図中に入らないことから、制作は堤の建造以前に遡る可能性もあるとしている。

しかし、この時の将軍綱吉御成は、後楽園での接待は行われておらず<sup>注5)</sup>、絵図の制作根拠とはならない。年代判定に別の根拠となる西湖堤は、朱舜水が寛文9年(1669)3月19日に後楽園で開かれた花見の宴を詠んだ「遊後楽園賦并序」に記される、「容<sub>二</sub>一与<sup>そこう</sup>蘇公之陂<sub>一</sub>。涉<sub>二</sub>平涉<sup>つづみ</sup>一ヲ聽二飛瀑<sub>一</sub>。」(「蘇公の堤でゆったりとし、平らな渡しを歩いて水を越え、早く流れる水音を聞く」とあらわされた「蘇公之陂」(中国の西湖に蘇東坡が造った堤)と見られる。絵図にはこの西湖堤が「大井川」(大堰川)の下流に描かれておらず、園の南端に至るまで川が続くので、絵図制作は寛文9年3月中旬以前と考えられる。また、舜水筆「後楽園」の扁額が掲げられた唐門も描かれており(虫損のため「後」のみ確認出来る)、朱舜水の設計・指導になる現在の円月橋と思われる「唐石橋」もみられる<sup>注6)</sup>。舜水が江戸に来たのは、先の「至徳堂」「夷斉堂」が確認された1カ月後の寛文5年(1665)7月11日であったから、絵図制作もそれ以降であろう。

そこで、この絵図の来歴として注目されるのが、次の史料3にある安藤定為(朴翁)<sup>ぼくおう</sup>の紀行文「常陸帯」<sup>注7)</sup>に書かれた後楽園図の記事である。定為は、水戸藩三代藩主綱條に招待されて元禄10年4月1日に後楽園を訪れた。その部分に次の文章が記されている。

### 【史料3】

「常陸帯」安藤定為 元禄10年(1697)

この御壺<sup>(庭)</sup>ハ、京江戸にもまた類ひなき聞へありて、故東福門院御在世の時、図にうつして御覧せられし、折ふし仙洞御水尾院にもうちうち覧ましして、御感賞おはしましけるとそ

ひたち帯一元禄常陸紀行一、筑波書林、1994

この文章は、鵜飼信興「後楽園紀事」では内容が本文中で紹介されたうえ、巻末にも上記原文の写が添付されていた。すなわち、二代将軍秀忠娘の東福門院(慶長12年～延宝6年<1607～1678>)の依頼により制作されて御覧になり、後水尾院(慶長元年～延宝8年<1596～1680>)も御覧になって感心され褒められたという図が、この「後楽園絵図」(明大本)ではないかと推測できる。

この絵図をさらに子細に見ると、徳川家光と光圀の縁で建てられた八角堂、銀閣寺庭園の写と能舞台を備えた立派な書院(「瓦御書院」)が大きくしっかりといるのに対し、得仁堂は控えめで小さい。園内には様々な動物が飼われていたと云われるとおり<sup>注8)</sup>、書院の横にはつがいの丹頂鶴

が飛び、その先の葭原には三羽の子鶴がいて一羽は口を開けて迎えている。池の中島から伸びた洲「三保崎」には水中を含めて五匹の亀、池の長橋中程には真鯉の群れが見え(図 3. 2. 3)、また酒の幟をあげた「新御茶屋」には布袋の姿が、「福録堂」には福祿寿が描かれる。実際の情景を描いたものではあろうが、東福門院に献上し、後水尾院との幸福と長寿を祝うのであれば、それに相応しい内容であろう。寛文 5 年(1665)7 月中旬以降、寛文 9 年(1669)3 月中旬以前の作であれば、東福門院・後水尾上皇の在世期間とも矛盾しない。

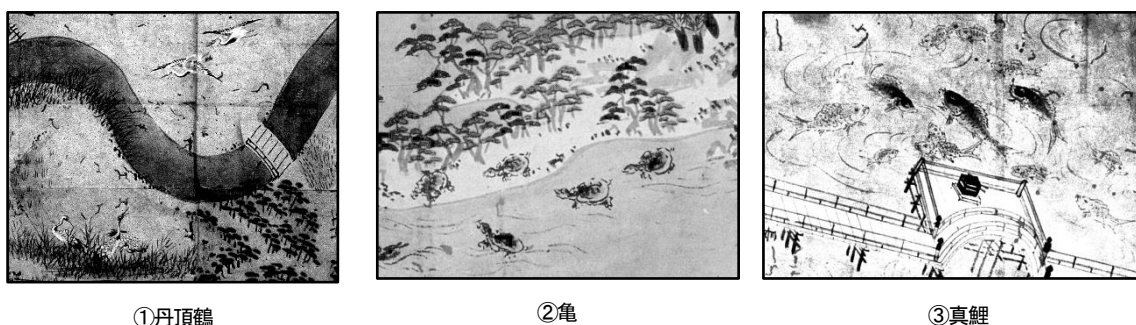


図 3. 2. 3 「後樂園絵図」(明大本) 部分図 2

### 3. 3 後樂園絵図(明大本)の信憑性と制作年代

ここで、安藤定為「常陸帯」に書かれた後樂園絵図制作・献上の真偽と時期等について、人間関係をもとに検討しておこう。

安藤定為は国学者<sup>りようおう</sup>了翁を父として寛永 4(1627)年に生れた。曾祖父は伏見宮邦輔親王<sup>ふしみのみやくにすけしんのう</sup>の庶子であつたと伝えられる。若くから儒学のほか和歌を学び、伏見宮貞清親王に仕え、琴・琵琶も得意としていた。明暦 3 年(1657)、親王の三女が四代将軍徳川家綱との婚姻のため江戸へ入った際には、付添って将軍に拝謁し、以後毎年頭には将軍・御台所(正室)に拝謁するようになる。延宝 6 年(1678)52 才で伏見宮への仕官をやめ、2 年後には剃髪して自ら朴翁居士<sup>ぼくおう こじ</sup>と名乗った。

妻の亀子は、定為より 3 つ年下であつた。連歌を特に得意としていた父親の山田道夢にならい、和歌・連歌を詠むことを覚えた。記憶力に優れ、古歌 3000 首を暗記していたという。後水尾上皇の仙洞御所、東福門院の女院御所に出入りして、歌の上手なことから「今式部」と呼ばれ、その歌集は中院通茂<sup>なかのいんみちしげ</sup><sup>注1)</sup>によって「今式部集」と題された。定為との間に生まれた男子は 2 名、為実<sup>ためざね</sup>(素軒<sup>そけん</sup> 1654~1717)・為章<sup>ためあきら</sup>(年山<sup>ねんざん</sup> 1659~1716)であつた。

息子の為実・為章はともに父親と同じ伏見宮に仕え、和歌は中院通茂に教わっていた。国学に優れた評判により、光圀から呼ばれて貞享 3 年(1686)水戸に下り、「礼儀類典」(515 巻)や「积万葉集」(52 巻)編纂の中心となって活躍した<sup>注2)</sup>。

先の「常陸帯」は元禄 10 年(1697)、71 歳の定為が二人の息子に誘われ、水戸・江戸を訪ねた紀行文である。4 月 1 日には当時の藩主綱條の招待を受けて小石川後樂園を訪れており、その 2 ヶ月後の 6 月 12 日から 13 日にかけては、水戸城北方の西山(現常陸太田市)に隠居していた光圀を親子揃って訪ね、両日とも夜半まで歓待を受けた。これは光圀が 6 月 10 日に 70 歳の誕生日を

祝っての訪問であり、藩主綱條への挨拶とあわせ、この旅行の一番の目的であったのだろう。

以上のことから、東福門院が後樂園を図に写して御覧になり、後水尾院も内々御覧になって感賞されたと書かれた「常陸帯」の記事は、確かな事実であろう。定為はこのことを、両御所に親しく出入りしていた妻の亀子から聞いた可能性が極めて高い。そうすると、亀子の死去が寛文8年(1668)正月11日であることから、「後樂園図」が描かれたのはそれ以前となり、先の推定年代下限内に収まっている。従って、先の「後樂園絵図」(明大本)は、「常陸帯」にある絵図と同じものと考えても矛盾しない<sup>注3)</sup>。

東福門院献上の絵図については、庭園史研究者の先駆けとして知られる小沢圭次郎(1842～1932)が、自身の編集になる『園林叢書』の末尾にまとめとして執筆した「後樂園断案」中に、「後来(この後)其画卷ノ所在ヲ 詳<sup>つまびらか</sup>ニスルコト能<sup>あた</sup>ハサルハ 寔<sup>まこと</sup>ニ惋惜<sup>わんせき</sup>(嘆き悲しみ)ニ禁<sup>た</sup>ヘサルナリ。」<sup>注4)</sup>と記して、その発見を宿願としていた。

では、東福門院が後樂園の絵図を所望した理由は何だったのであろうか。東福門院はもと徳川和子、二代將軍秀忠の五女である。三代將軍家光の同母妹で、光圀の従姉妹にあたる。幕府による朝廷統制の一環として若くして後水尾天皇の許へ嫁いだことはよく知られている<sup>注5)</sup>。

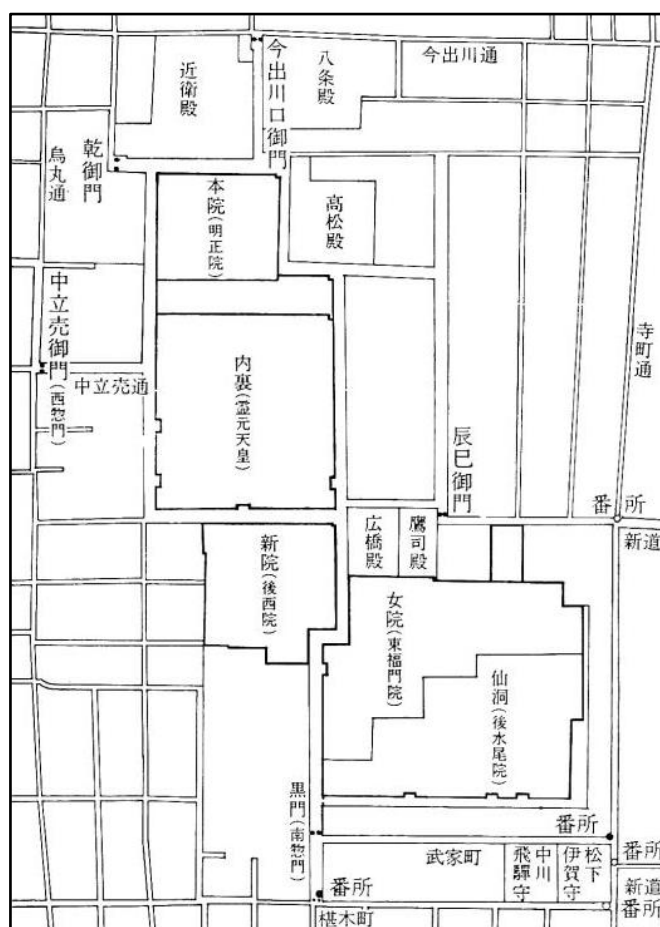


図 3.3.1 内裏・諸院御所等配置図(寛文3年-13年頃)

平井聖『中井家文書の研究 第2巻』(中央公論美術出版)本文挿図8より転載

江戸幕府が開かれて以来、朝廷・公家には大小様々な規制がなされたが、徳川和子の入内によって莫大な資金が入るようになり、戦国時代に衰微した朝廷・公家の復興・整備も積極的に行われた。禁裏・御所や離宮の造営もその一環である。後水尾院は修学院離宮を造るにあたって、場所の選定から作庭の細部に到るまで、自ら指示したと伝えられ、それに従った東福門院も庭に対する関心が高かったとされている。

ここで当時の後水尾院御所と東福門院御所を見てみよう。後水尾院御所と東福門院御所は、天皇の住まいである内裏近くの東南に位置し、東西約 163 間・南北 142 間のほぼ矩形の土地を南東と北西に二分割したものであった(図 3.3.1)。

万治 4 年(1661)1 月 15 日、二条殿から出た火災は燃え広がり、寛永 7(1630)年に造営された後水尾院御所・東福門院御所も焼失した。

再建にあたっては、御所と明正院御所<sup>めいしょういん</sup>が優先され、後水尾院御所・東福門院御所の造営と移徙は次のように進められた<sup>注6)</sup>。

寛文 2 年 12 月 2 日(後水尾院)・3 日(東福門院)	鉦始
3 年 7 月 26 日(後水尾院)・27 日(東福門院)	上棟
3 年 8 月 21 日(後水尾院・東福門院)	移徙

庭園部分の築造に関する詳細は不明であるが、下記の見学記事が認められる。

寛文 3 年 12 月 27 日(後水尾院)	御茶屋普請中 *1
4 年 2 月 15 日(後水尾院)	庭園造成見世物 *2
(東福門院)	庭園見物 *3
4 年 6 月 22 日(後水尾院)	庭園完成の披露目 *4
6 年 4 月 9 日(東福門院)	庭園見物 *5
6 年 7 月 19 日(東福門院)	庭園見物 *6

\*1～4 鳳林承章：隔蓐記(万治 4 年正月～寛文 4 年 12 月，赤松俊英校註，鹿苑寺，第 5 巻，1958)

\*5 兼晴公記(宮内庁書陵部所蔵)

\*6 鳳林承章：隔蓐記(寛文 5 年正月～寛文 8 年 6 月，赤松俊英校註，鹿苑寺，第 6 巻，1958)、豊長卿日記(内閣文庫所蔵)

後水尾院の庭園完成は寛文 4 年 6 月であるが、両院の建設はほぼ同じ日程で進められていたことから推測すると、東福門院の庭園完成はその前後であろう。したがって、両院が後楽園絵図を目にしたと考えられる寛文 5 年 7 月から 8 年初頭は、両御所が万治 4 年の火災から復興し、庭園も一応完成して形が整ってきた時期にあたる。

この頃行われた東福門院の庭園見物のうち、寛文 6 年 7 月 19 日については、鹿苑寺(金閣寺)住職鳳林承章の日記である史料 4「<sup>かくめいき</sup>隔蓐記」に次のように記されている。



【史料4】

「隔莫記」 寛文6年(1666)年7月19日条

(東福門院)  
女院御所之御庭各見物可仕之旨、被 召連、院参之衆老若不残、被 召連也。尤今日之御客、新院・照門・某・烏丸・平山致伺公也。御庭之様絶言語事、難盡筆頭也。法皇還御、各御供仕也 (中略) 女院御所御庭御池被挑燈掛在、是又各見物之事、自女院、亦被 仰、又於 女院、而法皇被為成、各御供、致伺公、御池中・御茶屋辺・塔婆・山上之挑燈不夜城也。挑燈不知幾百数也。被乗御舟、各乗御舟、池中数廻也。

第6巻, 赤松俊秀校註編, 鹿苑寺, 1958

この会は後水尾院も加わって特に盛大に開かれており、鳳林を含めて5名の客が招かれたほか、「院参之衆老若不残」も召されて参加した。このとき鳳林は「御庭之様絶言語事、難盡筆頭也」と絶賛している。丁度五山送り火の2日後にあたっており、夜には幾百もの提灯を庭園中至るところに吊るし、舟遊びが行われた。

後水尾天皇の譲位に伴って造営され、寛永7年(1630)に移徙された後水尾院・東福門院の両御所には、寛永11年(1634)から同13年にかけて小堀遠州を奉行として庭園(図3.3.2)が築造され、そこには「独創的で斬新な造形が施され<sup>注7)</sup>」たといわれている。

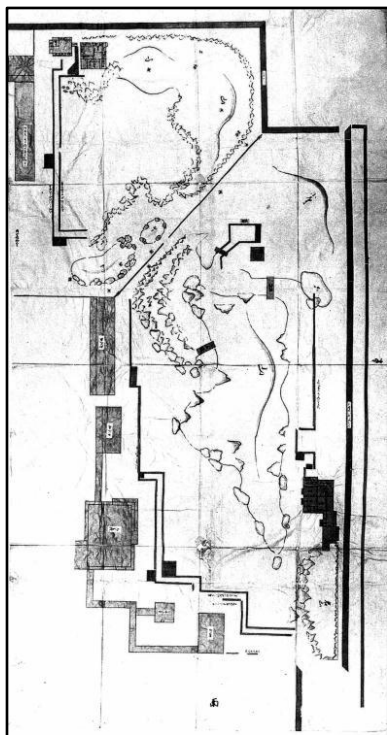


図3.3.2 東福門院・後水尾院両御庭園図(寛永12年)

上方左(北西部分)が東福門院御所庭園

平井聖『中井家文書の研究 第1巻』図8より転載

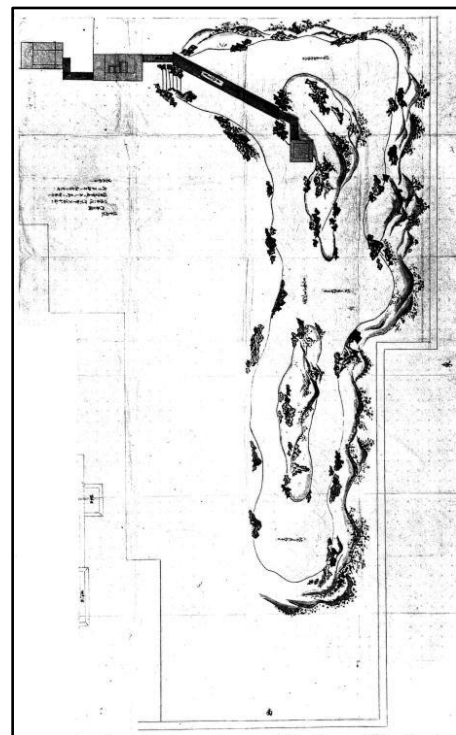


図3.3.3 後水尾院御所庭園図(寛文2年)

左記と同研究。第2巻, 図91より転載

図3.3.2および図3.3.3とも原図は宮内庁書陵部所蔵

次いで寛文期の築庭は、東福門院庭園の敷地が後水尾院庭園北部を取り込んで広がり、後水尾院の庭も同院敷地の南端まで大きく広げられ、全く違うかたちで作り直されたと考えられている。完成図は残されておらず、寛文2年(1662)の後水尾院の庭園絵図(図3.3.3)が存在するが、この図の通りには造られなかったという書付けがなされている。

寛文3年に造営された御所は同13年(1673)に再度焼失する。この後の造営になる延宝3年(1675)の図には東福門院御所の庭園(図3.3.3)が書かれている。さらに下って両院没後、貞享4年(1687)の図(図3.3.4)も庭園の変遷を知るために参考となる<sup>注8)</sup>

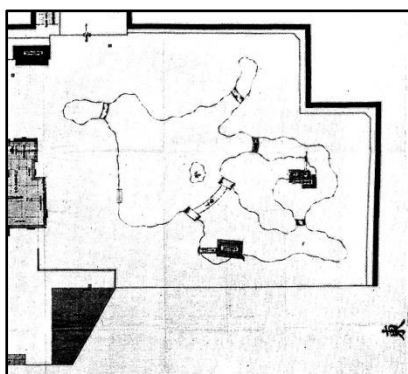


図 3.3.4 東福門院御所庭園図(延宝3年3月)

平井聖『中井家文書の研究 第4巻』図342より転載

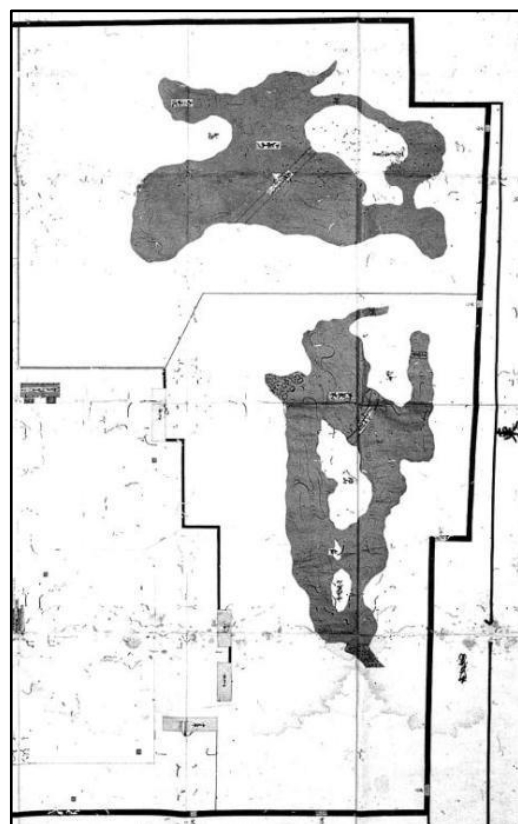


図 3.3.5 霊元院・新上西門院両御所庭園図(貞享4年)

上記と同研究 第4巻 図387より転載

図3.3.4および図3.3.5とも原図は宮内庁書陵部所蔵

以上から、一応完成した庭園の整備や改造、あるいは後の作庭の参考とするために、後樂園の絵図制作を光圀に依頼したものではないかと推測される。確かなことは不明だが、庭園平面の変化からみて、江戸の小石川後樂園が両院の庭に何らかの影響を与えたことは十分に考えられる。

では、東福門院から「後樂園絵図」を見せられた後水尾院と徳川光圀の関係はどのようなものであったか。寛永19年(1643)に藩主頼房の養母(父家康の側室)英勝院が亡くなったとき、その一周忌に合わせて鎌倉の英勝寺に建てられた山門の扁額は、将軍家光の取り計らいによって頼房の元へ届けられた後水尾院宸筆の勅額であった<sup>注9)</sup>。また、光圀と承応3年(1654)に17才で結婚し、4年後の万治元年に亡くなった夫人の尋子(泰姫)は、後水尾院の弟近衛信尋<sup>のぶひろ</sup>の娘である。したがって、水戸徳川家ならびに光圀と後水尾院は、もともと近い間柄ではあった。



以下に示すように、「後樂園絵図」(明大本)が制作された頃の日記には、より深まった両者の関係が記されている。史料5「无上法院殿御日記」によると、近衛基熙<sup>もとひろ</sup>夫人である後水尾院の娘(第十六皇女)常子<sup>つねこ</sup>内親王(品宮<sup>しなのみや</sup>、无上法印<sup>むじょう</sup>)に毎年の暮れ、父から「水戸の鯉」「水戸の鯉の煮こごり」<sup>注10)</sup>が渡された。光圀から後水尾院へ、水戸名産の鯉が毎年贈られていたと考えられる。私的で些細な事柄ではあるが、それだけに光圀と後水尾院の親しい間柄がうかがわれる。

#### 【史料5】

「无上法院殿御日記」 寛文7年(1667)12月19日条

十九日 己丑  
はるゝ、夕かた雪ふる、夜ニ入やむ  
きん中より暮の御しうき、はいりやうす  
ほうわうより水戸のこい、はいりやうす

寛文9年12月2日条

二日 辛卯  
雨ふり、夜ニ入あられもましりふる  
法わうより、いつものことく水戸のこいのこゝり、はいりやうす

東京大学史料編纂所蔵謄写本

原本は公益財団法人陽明文庫所蔵

次の史料6「基熙公記」には、近衛家屋敷の修理について光圀から資金として小判二千両、資材として大きな木材二千挺(二千本か)の援助がなされことに対し、近衛基熙が「満足之旨」を返事させたと記されている<sup>注11)</sup>。

#### 【史料6】

「基熙公記」 寛文5年(1665)9月16日条

従水戸宰相使給、去年予屋敷修理事云来、雖然  
人多京都へ上せ候事はゝかり候間、為料小<sup>(ママ)</sup>番二  
千両、大はた二千挺給之、満足之旨令返事了

東京大学史料編纂所蔵謄写本

原本は公益財団法人陽明文庫所蔵

「はた」は大きな材木(森田武編：邦訳日葡辞書、岩波書店、1989)

基熙は幼少期に後水尾院の世話で近衛尚嗣の養子となり、その後も同院の庇護養育を受けて育った<sup>注12)</sup>。後水尾院は娘を嫁がせたこともあり、特に基熙を寵愛していた。しばらく後のことになるが、延宝2年(1674)、光圀は後水尾院の第六皇子で天皇を退いていた後西上皇<sup>ごさい</sup>から勅題「雪

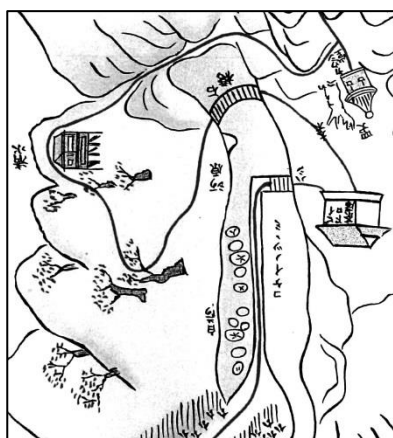
朝遠望」に応じて漢詩を作るよう命じられ、翌年正月に律詩三首を奉った。間に立ったのは同じく後水尾院の第十三皇子である聖護院門主道寛法親王である<sup>注13)</sup>。

これらに加え、両者の信条には共通する二つの点が知られており、それが親しい関係のもとになっていたと考えられる。その第一は、兄を差し置いて父の跡を継いだことである。光圀の随筆には、「後水尾」という諡号<sup>しごう</sup>を自らつけた理由は、二人の兄を押しやって皇位継承したことにあった、と記されている。「水尾天皇」とは京都愛宕山ふもとの水尾村<sup>みずお</sup>に御陵のある清和天皇(在位：858-876)のことで、本意ではないのに兄を退けて皇位についた天皇であった<sup>注14)</sup>。光圀もまた兄を差し置いて水戸藩主となり、その心のわだかまりがあったために、伯夷・叔斉を祀る得仁堂を設け、生涯その気持は変わることがなかったといわれている。第二としては、廃れつつあった朝廷古来の行事・儀礼・慣習の復興に大きな価値を置いていたこと、そのためには古書籍・古文書類が大事であるとしたことである。後水尾院は当時の朝廷における行事を「当時年中行事」としてまとめたが、光圀は院が没した後の天和2年(1682)、これを承け、先に述べたとおり安藤為実・為章らを率いて「礼儀類典」の編集を行ったのであった。

以上から総合的に判断すると、「後楽園絵図」(明大本)は、常陸帯に書かれた絵図と考えられ、制作時期の下限は当初に推定した寛文9年(1669)3月中旬より若干遡った寛文8年(1668)1月上旬と考えられる。この絵図は写本あるいは控えの可能性も残されているが、これまで考察したように描かれている内容は、この時期の姿を描いていると考えても矛盾しないので、この期間に得仁堂が建立されたと見てよいと思われる<sup>注15)</sup>。

### 3.4 得仁堂の建設と三像

ここでもう一度、「後楽園絵図」(明大本)に戻ってみよう。「得仁堂」は、清水観音堂(図3.2.2)から少し右下方向へ下がったところにある高さ四丈の大木の右脇に描かれている。後の元禄16年以前とされる絵図「水戸様江戸御屋敷御庭之図」(全図：図2.2.3)では、先の絵図と同じく大木の脇に当時の名称「カウシ堂(孔子堂)」として得仁堂の建物が描かれている。



①孔子堂・観音堂から大堰川まで



②孔子堂

図3.4.1 「水戸様江戸御屋敷御庭之図」(元禄16年<1703>以前)部分拡大図

「後樂園絵図」(明大本)に描かれた得仁堂は、「国史館日録」寛文5年6月の項に記された至徳堂と夷斉堂のうち、山の「半腹」(中腹)にあった夷斉堂の後身として新築されたものであろう。時代はだいぶ下るが、寛政6年(1794)5月、太田錦城は「自是之西、阪道紆折、達于山腹平坦之处、得仁堂在焉、堂前可坐数十人<sup>注1)</sup>」と記していて、立地の表現も類似する。

では、泰伯を祀った「至徳堂」(別名「達徳堂」)は寛文5年の段階でどこにあって、その後どこへ行ったのか。建てられていた場所は山頂であり、地形及び夷斉堂との距離からみて、清水観音堂の位置付近と思われる。得仁堂と同じく観音堂の絵図上の初出は「後樂園絵図」(明大本)で、この辺りに至徳堂があった可能性がある。

先述のごとく、寛永17年(1640)に林羅山は世に小廬山と呼ばれていたとする京都清水寺周辺の写しとして、園内西部のこの場所を「小廬山」と命名し、「有寺曰清水」と記している。しかし、そこには観音堂に祀られた如意輪観音とともに、儒教にとって最高の聖人であった泰伯像も近在して祀られていたのではないか。二つの堂の額はともに右筆武田常斎<sup>注2)</sup>の筆で、後世その額を新しくした時も今井元昌<sup>注3)</sup>による同一の筆であったと伝えられる(「後樂園紀事」)ことから、両堂には深い関係があったことは窺える。

4年後の寛文9年3月に朱舜水が詠んだ史料7「遊後樂園賦并序」では、泰伯・夷斉の古びれた祠を訪(「聞<sup>たず</sup>」)ねて「召伯之堂」に休んだ、と記されている。

#### 【史料7】

「遊後樂園賦并序」朱舜水 寛文9年(1669)

吾聞山中ノ旧祠。泰・伯夷・斉。龍・門以冠<sup>ス</sup>世・家列伝ニ。元・侯之志也。吾未<sup>レ</sup>得<sup>テ</sup>過<sup>テ</sup>而礼スルヲ焉。於<sup>レ</sup>心ニ不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>無<sup>ニ</sup>歎・歎ニ矣。于<sup>テ</sup>是ニ暫休ニ召・伯之・堂ニ。容ニ与<sup>ス</sup>蘇・公之・陂ニ。涉ニ平渉ヲ聽ニ飛・漚ヲ。

「舜水先生文集」徳川光圀輯、徳川綱條校、正徳5年版

早稲田大学所蔵、安積澹泊旧蔵本

光圀に関わる中国の賢人で「召伯」という人物はみられない。また、泰伯と伯夷はともに「伯」の字を含むが、紛らわしいためか、伯夷・叔斉は「夷斉」と呼ばれることが多い。したがってこれは、「伯」すなわち泰伯を招(「召<sup>まね</sup>」)いて合祀した堂と解釈される<sup>注4)</sup>。全体を現代語訳すると次のようになる。

私は山中の古びれたほこらを訪ねた。泰伯と伯夷叔斉は声望が高く、それぞれ((司馬遷『史記』の))「世家」「列伝」の第一に記されている。((この三名は))元侯((諸侯の王。藩主光圀を指すか))の志である。私はまだその前を通って拝することが出来ずにいた。心に遺憾の気持が強く残る。ここで、暫く「召伯之堂」((泰伯を招いた堂))にて休憩をとった。

従来の書籍や報告等を並べて見ると、得仁堂に建立当初から泰伯・伯夷・叔斉の木像三体が安置されてきたと書かれたものが三点ある（表 2.5.1）。そのうち近年書かれた二点で根拠のひとつとされたのが上記の史料 7 であった。しかし、不十分な解釈がなされたため、この史料は三体安置の確かな根拠となっておらず、建立年代の下限を決定していない。

もう一つの根拠とされたのが、史料 1 の元文元年(1736)の鶴飼信興「後樂園紀事」である。この史料を根拠として、安置された像を三体とした文献は二点、伯夷・叔斉の二体としたものが三点であった(第 3 章 3.1 注 1)。したがって、この史料だけでは三体と断定することは出来ない。実際、この史料を唯一の根拠とした著作『日本庭園史図鑑』は、改訂版の際には三体説をやめて、伯夷・叔斉の二体と記していた（表 2.6.1）。

なお、得仁堂に泰伯（太伯）と伯夷・叔斉を合せて三体の像が祀られていたと記した史料は他に二点存在する。

一つは、「続水戸紀年」に収められた蘆沢元斎著「侍間小録」（文政 12 年<1829>）の一文で、「園中ノ八幡堂ハ 義公ノ時呉ノ太伯夷斉ヲ祀リ玉フモノナリ<sup>注5)</sup>」とされている。これは、鶴飼信興「後樂園記事」と同様、後世の者によって記されたものである。

もう一つは、「三仁を祭れる廟堂有」と明記された次の史料 8 「東都紀行」である。これは、辻言之自身が後樂園を訪ねた記録であり、史料 7 「遊後樂園賦并序」と同様、疑いようのない内容である。

#### 【史料 8】

「東都紀行」辻言之(雪洞) 元禄 5 年(1692)4 月

廿余年の昔迄ハ。たれたれも此御庭ミル事なれハ。我も元禄五年の卯月上弦此御庭見たりし。辰の上刻より未の下刻迄足をも休めず。うちめぐりたる。猶見のこす方も有し。(中略) 得仁堂へ行道。谿谷に石を以組アゲ揚たる。<sup>セキランキヤウ</sup>石欄橋をかまえらる。凡十数間。是をわたり棚橋をつたひ。三仁を祭れる廟堂有。△是なん得仁堂なり△(中略) 御庭も。今ハミル事を禁ぜらるゝのミか。両度まで炎上せしかバ。何事もふるき世のミとはよく書たる事よ

(奥書)

「東都紀行下終

己亥季六月下浣記之

雪洞行年六十六歳」

辻言之の自筆本、成立は享保 4 年(1719)6 月

公益財団法人前田育徳会尊経閣文庫所蔵

以上のことから、得仁堂は、三体を安置した堂であった可能性が高い。すなわち、寛文 5 年から 8 年の間に、伯夷・叔斉を祀っていた夷斉堂に泰伯を迎え入れて合祀するため、「夷斉堂」を建て替えて「得仁堂」と名前を変更したものと考えられる<sup>注6)</sup>。

### 3.5 名称の変更と八幡堂への転換

元禄3年(1690)、光圀は幕府に願い出て隠居し、実の兄である高松藩主松平頼重の子、綱條を三代藩主として迎え、水戸城の北方に自らの住居(西山荘)を構えた。隠居の理由は自身の病氣とされているが、元禄7年には將軍綱吉の招きで江戸へ出て城中で儒学の講義をし、翌年まで江戸に滞在、元禄10年には潮来へ、ついで翌11年には下野那須まで出かけるなど、元気であった。ところが、元禄12年の暮頃から老衰の兆候が現れ、翌13年の頃からつかえ痞(胸に起こるさしこみの発作)を患い、12月6日に西山荘で没した<sup>注1)</sup>。前記したように、この間の元禄5年には、まだ得仁堂には泰伯・伯夷・叔斉の三体が祀られていて、後樂園そのものにも大きな変化は見られなかったようである。

しかし光圀の没後、元禄15年9月の五代將軍綱吉生母(桂昌院)来園に先だって、歩行の安全確保のため「大石・奇石」が大概取り払われるなど、園中の景色が一変したとされる(「後樂園紀事」)。その二カ月後の11月27日、芭蕉門下の俳人榎本其角が後樂園を訪れた際の史料9に示す「後樂園拝見之記」には、以前の得仁堂が「孔子堂」と記されている<sup>注2)</sup>。これは光圀三回忌の命日直前のことであった。

#### 【史料9】

「後樂園拝見之記」榎本其角 元禄15年(1702)11月27日

元禄十五壬午歳霜月廿七日候<sub>ニ</sub>于黄門光圀公<sub>〇</sub>徳川。之御茶亭<sub>ニ</sub>、題二周山之佳景<sub>一</sub>。

(中略)

二、清水寺音羽

散かう精舎梢や冬の雪さかり

<sup>(ママ)</sup>  
六角堂、孔子堂、小町か石塔なんとあり。むなしく行過ぬ。

東京市役所編：東京市史稿 遊園篇1, 1929

先の元禄16年以前の絵図(図3.1.9)でも建物に「カウシ堂」(孔子堂)と記入されている。孔子堂への名称変更は、おそらく光圀が死去した元禄13年以降のことであろう。

また、得仁堂の建物は「元禄の末、堂の潤色もあらたまり、釈迦堂となれり、その時に堂の経営むかしにことなり、今井元昌額を書あらたむ」(「後樂園紀事」とされる。今井元昌がこれと同時に書いたと考えられる清水観音堂の額が残されていて、裏に元禄15年12月の銘がある<sup>注3)</sup>ことから、「((光圀の))三回忌を期して孔子堂から釈迦堂への改変があったかも知れない<sup>注4)</sup>」との指摘がなされている。得仁堂に祀られていた三体の像は、「孔子堂」となった時点、あるいはその後「釈迦堂」(仏堂)となる以前に外へ運び出されたものであろう。

翌、元禄16年11月23日には関東を大地震が襲い、園中の大池にある中島の石組が崩壊し、福祿堂は地中に没し、6日後の29日には水戸藩邸を火元とする大火が起きた。ただし釈迦堂(旧得仁堂)の被害は確認されていない。

下って享保4年(1719)頃には、園の見学が禁じられていた(「東都紀行」)。同じ享保年間(1716

～36)<sup>注5)</sup>には、園内の見晴しが悪いとの理由で、光圀が一本も伐るなど伝えていた古木・大木七百余本が切り倒され、石組みを崩して珍しい石も取り払われた。そのため、古くからの景観は以前の改造にも増して姿を変え、残ったのは小廬山の辺りばかりであったという。〔後樂園紀事〕この改造は、享保3年に十四才の若さで四代藩主となった宗堯<sup>むねたか</sup>が、父である高松藩主の指示を受けて行ったとされる。得仁堂が讃岐の石清尾八幡を勧請して「八幡堂」に変えられたのもこの頃であり、また八角堂も同じ讃岐の「金比羅堂」にしたと伝えられている(〔後樂園紀事〕)。八角堂は別名「文昌堂」で、後には「八卦堂」とも呼ばれ、光圀の幼少時に三代将軍家光から頂戴した文昌星(北斗七星の北極星を除く六星。文学の神)の像を祀った堂であった。光圀に関わる二つの堂がともに祭祀の対象を変えられたことになる。

先の元禄年間末と享保年間の二度にわたる庭園の大改造には、伝えられている理由のほか、度々生じた災害からの復旧、庭園の役割の変化や警備上の問題なども関係していたかも知れない。しかし、光圀の没後に生じた得仁堂、八角堂の変容を合わせてみると、光圀色を消そうとする意図が働いていたと考えられるのではなかろうか。なかでも「得仁堂」は一度に「八幡堂」とするのではなく、間に「孔子堂」、「釈迦堂」を挟んで目立たぬように変えられている。その変化の要因としては、光圀が在世中に行った宗教政策があげられるだろう。少々長くなるが、光圀の社寺改革について記された『水戸市史』から関連部分を要約する。

光圀は、青年時代に排仏思潮が強い儒学界の影響を受けて仏教批判の思想を持つようになり、藩主に就くと寺院の整理、神社制度の改正を行って、迷信の排斥と葬祭風習の改革を推進した。中年以降は宗教観が穏健となって、仏教に親しみ、寺院の保護・建立に尽くしたが、神社制度の改正については光圀の引退後まで行なわれた。

水戸藩の神社整理は、元禄9年8月から全領にわたって厳しく実施された。目的は、村の鎮守社から仏教的な要素を追放して神社を純化すること、つまり神仏習合の粛清であって、具体的に最も重視したのが八幡社の整理・処分であった。処分の理由は、八幡社崇敬の思想が神仏習合の根柢である本地垂迹説を肯定しているためとされた。これに先立つ元禄7年には城下の八幡宮(現在の水戸八幡宮)を北西に13kmの那珂西村に移して、その土地の八幡社と合祀した(中巻 第1、第6章 第2節)。

以上の八幡改めは、光圀が没する直前も苛烈を極めた。「水戸紀年」元禄13年の項には、「三月十三日邦内ノ八幡祠皆破却ノ命アリ」と記されている。

このように、光圀にとっての聖堂ともいえる得仁堂が、最もきらった八幡神に取って代わられたのであった。なお、八角堂の後身である金比羅も神仏習合の堂社であった。

### 3.6 得仁堂の復旧と伯夷・叔斎像

ここでは、八幡堂が得仁堂となった時期について述べることにしよう。これまでの通説では、次の史料10「御園の記」より、まず得仁堂の復旧が復旧し、文政9年(1826)10月29日に八幡神が台地に新築された建物へ遷座されたと見られていた<sup>注1)</sup>。

## 【史料10】

「御園の記」坂 昌成 文政9年(1826)10月29日

やゝ木深き処にいらかふけるハ得仁堂なり、三方唐戸にして色々の花鳥を彫付らる、さぬき瓦を甃にしかれて伯夷叔齊の木像を安置せらる、伯ハ坐像叔ハ立像、前田助十郎作也といへり 前に螺鈿の机に香燭を備へあり、額は紀伊の殿大納言治宝卿の御筆なり (中略)

此岡の上森ふかき陰に、八幡の宮みおはします、享保の比かとよ、讃岐の国 岩 清尾といへる処の宮をうつされて、あなたなる得仁堂に只かりそめのまつり置かせ給ひしより年へたるを、こたひ爰に宮作有て、祭りいとなませ給ふにより、けふハ吉日也とて、舞樂を奉らせ給ふにてそ有ける

後樂園訪問は前日の28日

「(甃)」部分は宮内庁書陵部本「後樂園記」によった

早稲田大学図書館所蔵

しかし、下記の史料11「御園の記」によれば、6年前には既に得仁堂が元に戻されたことが記されており、そのあいだ八幡神はどこかに仮遷座していたとせざるを得なくなる。

## 【史料11】

「御園の記」志賀理斎 文政3年(1820)3月6日

此道すからに、得仁堂とて、伯夷叔齊の像を安置させ給ふ有、内は讃岐瓦を以て甃とす、像は前田助十郎といえるか、造りしとかや、此堂のことハ、もとより義公の御本意を示されたる者なるへしといえり、

国立国会図書館所蔵

今回新たに見出された史料によって、文政9年の八幡宮祭礼は、遷座の8年後に行われた別の祭礼の記事であったことが判明した。

小宮山楓軒<sup>注2)</sup>「楓軒年録」(第14冊)中の「朶依陵八幡宮御鎮座記」には、八幡の遷宮について詳細に記されている。この史料によれば、もとの八幡堂は「得仁堂を仮殿に定め給ひ、暫く此に安置し給ふ」とし、あくまでも仮に設けた堂であったとされている。

文化13年(1816)閏8月に第七代藩主治紀が没し、長男の斉脩が跡を継いだ翌14年の9月28日、これまでの八幡堂の北方にある台地、「台廼丘」<sup>注3)</sup>に新たな敷地を定めて地鎮祭を行い、冬(10~12月)には八幡宮の上棟式が催された。建築が完成し正遷宮の式が執り行われたのは、その翌年の文政元(1818)年9月13日で、先代藩主三回忌追善供養に時期を合わせて計画されたものであった。遷宮は、付け人を従えて参拝する正装姿の藩主斉脩のほか、御庭奉行をはじめとして多

数が参加し、太平楽が奏でられるなか、盛大に行われた。その時の様子は「千木・勝男木は朝日に輝き、八流の御旗は秋風に<sup>ハタ</sup>翻<sup>ヒルガヘ</sup>る」と表現され、鳥居も飾られていた。

そのほかこの史料には、上棟式の棟札銘文、当代藩主斉脩が書いた鈴と神鏡の銘文、「地鎮祭祝詞」、斉脩作の「御告祝詞」、「遷宮祝詞」、建物内外のしつらい、「祭主 蘆沢総兵衛大江元昇」以下の関係者一覧が添付されていて、総計 10 丁半(21 頁)にもわたっている。

一方、旧八幡堂が得仁堂に戻されたことについては、しばらく後の部分の 1 丁(二頁)には、次の史料 1 2 にみるように、祭文が何の解説もなしに記されるのみであった。

## 【史料 1 2】

〔得仁堂復旧祭文〕 文政 3 年(1820)2 月 9 日

維

日本文政三年歳次庚辰二月丁亥朔越九日乙未春分之節参議従三位兼行左近衛権中将源朝臣「御名」謹潔牲醴粢盛致祭于殷处士 伯叔二先生曰嗚呼 先生当殷室之乱隱首陽之山其志捨濁世而不捨道飢汚禄而不飢義求仁<sup>(得)</sup> 得 仁之誉遠及於秋津励頑起懦之誠久存于赤県真廉真忠実為臣民之鑑克恭克讓兼備兄弟之則我先祖義公 伯病 仲夭 叔継国政自類孤竹之古事嘗感於 先生之高義養 兄之子以讓封国於是乎宮祠于後樂園中春秋設其祭而星霜相遷時勢頗異有故而廢其祭「御名」不堪感旧懷古欲起廢繼絶謹修祠宇再設祭奠雖扶桑与殷邦異其地成徳統承同是千古一王之国此米粟之潔兮猶首陽之蕨矣神若有知来綏来臻尚饗

「御名」部分には藩主徳川斉脩の名前が入る

小宮山楓軒：楓軒年録 第 15 冊

国立国会図書館デジタルコレクション

これらから判明する要点を書きあげると、以下のとおりである。

- ①得仁堂が元通りに戻されたのは、文政 3 年 2 月 9 日の春分であった<sup>注4)</sup>。これは八幡移転の 1 年半後のことである。
- ②伯夷・叔斉の二体を祀った。ただし、ここでは「伯叔」と称されている<sup>注5)</sup>。泰伯像については記されていない。
- ③光圀が兄の子に藩主を譲ってから、祠(得仁堂)で春と秋に祭祀を行っていた。後に八幡神に取って代わられたことについては、時が過ぎて情勢が全く変わったために祀りが途絶えたとし、はっきりとした理由は記していない。
- ④今回は謹んで祠を修理し、再び設けてまつ。これは得仁堂が「釈迦堂」になってから、およそ 120 年ぶりのことであった。

また、先の文政 3 年、史料 1 1 が得仁堂復旧直後の様子を記していたことも明らかとなった<sup>注6)</sup>。



一方、光圀が隠居後を過した西山荘でも同様のことが起きていた。光圀の死後は西山荘への出入りが禁じられ、庭園の山を崩して池を埋め、樹を伐って薪とするなどされていた。建物は文化14年野火によって焼失したが、文政2年、古図に基づいた復元再建の工が起こされて、得仁堂復旧と同じ文化3年の5月12日に竣工し、翌4年秋には庭が造られたのであった<sup>注7)</sup>

一方、得仁堂に当初から安置されていた泰伯・夷斉の三体の像については、史料13「続水戸紀年」に以下のように記されている。

### 【史料13】

「続水戸紀年」 文政12年(1829)

園中ノ八幡堂ハ 義公ノ時吳ノ太伯夷斉ヲ祀リ玉フモノナリ其後讃岐石清尾ノ八幡ヲ祀ラセ三主ハ矢倉ノ庫中ニアリテ焼ウセヌ 文公復古ノ御志ニテ紀伊彫工小笠原一斎ノ像ヲ造ラセ玉ヒ御果サスシテ逝玉フ 公((水戸八代当主斉脩))其遺志ヲ継玉ヒ台ノ地ヲ扱テ八幡宮ヲ建テコレヲ移シ旧堂ヘハ夷斉ヲ祀リ玉ヘリ 同上((侍間小録))

(( )) 内加筆

「侍間小録」(文政12年序)は、蘆沢元斎(一閑)著

茨城県史編さん近世史第1部会編：茨城県史料 近世政治編Ⅰ，1970所収

内容は以下の通りである。

八幡神が祀られた時、泰伯・夷斉の像三体は矢倉の庫中に移されて焼失した。六代藩主<sup>はろもり</sup>治保(在位:1766～1805)は復古を志して紀伊の彫工小笠原一斎に造らせたが、得仁堂の復古は果たせないまま亡くなり、八代藩主<sup>たりのぶ</sup>斉脩(哀公、在位:1816～1829)がその遺志を継いで八幡宮を台ノ地に新たに築いて移し、旧堂へは夷斉像を戻して祀った。

これに従えば、現存する夷斉像は、水戸藩の細工人前田助十郎が制作した当初像ではないことになり、以前の夷斉像がそのまま戻されたとする他の諸史料と合わない。現存の夷斉像について平成7年に行われた調査では、当初のものと断定するには疑わしい要素が多く認められたものである。極めて巧みな彫<sup>たりのぶ</sup>技ではあるが、一般の仏像と比べて構造的にも作風にも極めて異例な点が多く、「本像の作者は江戸時代の一般的な仏師とは異なる系譜に属するものと考えられる」とし、史料13が示されたにもかかわらず、(夷斉像を戻す時に)「当初像を戻したかどうかやや問題はあ<sup>はろもり</sup>るが、新像造立の記事がない以上、一応本像を当初像とすべきであろう。」と結論づけられた<sup>注8)</sup>。

これに対して下記の史料14、15から、現在の夷斉像は焼失後、新たに作られたものであり、先の史料13の「侍間小録」の内容は正しいことが裏付けられた。

紀伊の彫工「小笠原一斎」は『南紀徳川史』<sup>注9)</sup>に一項目として立てられており、そこには、

夷斉の像二体を制作した記事が史料14「麟徳記」(紀州九代藩主徳川<sup>はるさだ</sup>治貞の事績記録)にあること、史料15「装剣奇賞」(稲葉新右衛門 天明元年)には、紀州の根付師として小笠原一斎が掲載されていることが記されている。

#### 【史料14】

「麟徳記」 安永8年(1779)

##### 〔上巻〕

- 一 水戸様御庭内伯夷叔斉の廟ハ、<sup>(平出)</sup>義公様の御造被遊たる像を御安置被遊候所、前年回禄に及び候故、安永八亥年 <sup>(平出)</sup>文公様その祀の廢セしを以て、思召にて夷斉廟御再造被遊候ニ付、二賢の像を作る者御国にハ無之候や、紀州の小笠原一斎へ被仰付二賢の像出来申候、一斎ハ彫琢精工のよし世にも聞へし故にや、<sup>(台頭)</sup>香嚴院様御自ら記文を撰せられ、和歌山より被進候 文ハ下ノ冊に載たり

##### 〔下巻〕

##### 一 夷斉廟堂記

伯夷叔斉仁不念旧惡。義不食周粟。其高風清節。千載之下。聞者莫不興起。豈非亘世之大賢乎。水戸黄門義公尊仁義之道。欽夷斉之徳。嘗木造其像。而廟祀之。蓋 義公之好徳也。後罹煨燼。祀事中輟。今 宰相君恫其礼之廢。乃属余使敝邑工人。再造其像。将以昭 先公之懿徳也。孔子曰夫孝者善繼人之志。善述人之事者也。今也其繼述之誠。孝思之篤。亦又使人起敬欣慕焉。工人造成。因記其概略。以寓贊嘆之意。附而贈之云。

寔録

国立国会図書館所蔵

要約すると、次のようになる。

伯夷・叔斉の廟には光圀公が造った像が安置されていたところ、先の年に「回禄」(火事)にあった。そこで安永8年、水戸藩主治保が「夷斉廟」を再び造立するにつき、「二賢(夷斉)の像」を造る者は紀州に居ないかと問われた結果、小笠原一斎へ仰せつけられて像が出来上がった。紀州藩主<sup>はるさだ</sup>治貞<sup>注10)</sup>が自ら次のような記録文を書いてその像に添え、和歌山から進呈した。夷斉の木像を廟に祀っていたところ煨燼(灰燼。燃え尽き)にかかって祀り事は中断したが、私の国の細工人にその像を再び造らせ、出来上がったのでこれを贈る。

紀州藩主治貞には、堂に夷斉の二体だけが祀られていて、その堂ごと焼失したと伝えられたようである。そして安永8年(1779)に、新しい像が造られて水戸藩六代藩主治保へ贈られた<sup>注11)</sup>。三体の像が別の建物で焼失したことは江戸では極秘事項とされていた。このことを「侍間小録」(史料13)に書いた「蘆沢元斎(一閑)」は、文政元年9月13日に八幡宮遷宮の祭主を勤めた「蘆沢総

兵衛大江元昇」その人であり<sup>注1 2)</sup>、得仁堂の歴史について確かなことを知っていたのであった。

鵜飼信興が「今ハ其像<sup>(見)</sup>ミ<sup>(ず)</sup>へず、此事禁忌なれハ<sup>(ば)</sup>もらしはへるなり」(「後樂園紀事」)と述べたのも、三体の像が見えないこととその理由(焼失)は、禁忌すなわちタブーであるから、見えないことだけを敢えてここにそと書いておく、という意味であった。現存する夷斎像に作者の銘が無いのもそのためかもしれない。

細工人の小笠原一斎は、根付師として名前が知られていた。以下は、彼の腕の確かさを裏付ける史料15「装剣奇賞」の記述と作品の図である。

### 【史料15】

「装剣奇賞」稲葉新右衛門 天明元年(1781)

ヲ<sup>ガサ</sup>ハ<sup>ハラ</sup>一<sup>いつ</sup>斎<sup>さい</sup> 紀州人

近<sup>エ</sup>来<sup>ヤス</sup>無<sup>ソウ</sup>双<sup>ゲ</sup>の名<sup>クジラ</sup>人<sup>バ</sup>にして。現<sup>ツ</sup>在<sup>ウツ</sup>の人なれども得<sup>ツ</sup>易<sup>ウツ</sup>からず。すべて象<sup>ゾウ</sup>牙<sup>ゲ</sup> 鯨<sup>クジラ</sup>牙<sup>バ</sup>等を用て雕刻する事。至て細<sup>サイ</sup>密<sup>ミツ</sup>にして人<sup>サイ</sup>工<sup>ミツ</sup>の及びがたき手<sup>テ</sup>際<sup>ギハ</sup>なり。下に六<sup>ツ</sup>図<sup>ウツ</sup>を写す。  
象<sup>ゾウ</sup>牙<sup>ゲ</sup>の色を付ざる素<sup>ズ</sup>刻<sup>ボリ</sup>なり

国立国会図書館デジタルコレクション

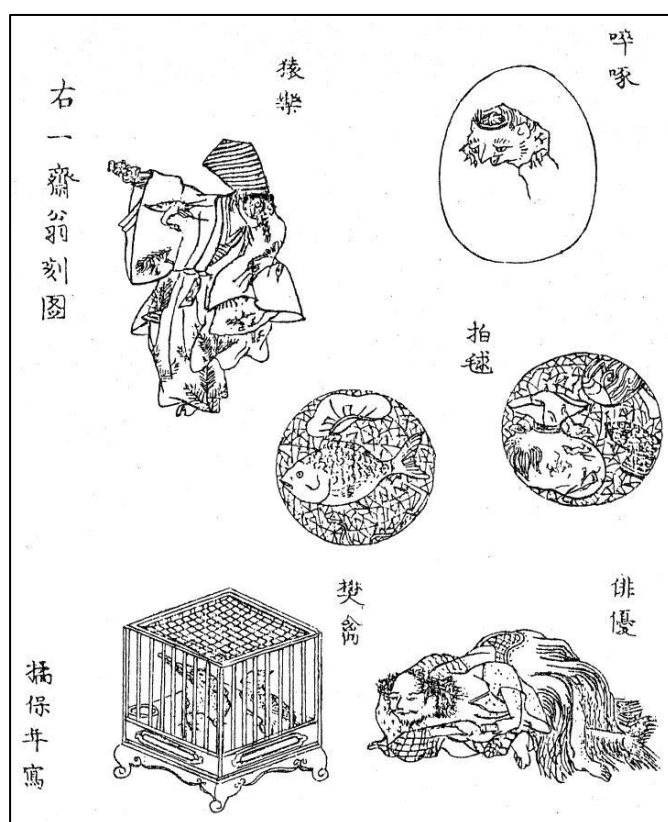


図3.6.1 小笠原一斎の作品の図

荒川浩和『郷コレクション 根付』(日本象牙彫刻会)より転載

以上の事実が明らかになったことにより、得仁堂が園内の別の場所に描かれていてその理由がわからない二枚の絵図(写し)を解釈することが出来るようになった。

一枚は、大木秀人『後樂園略記』に載せられた「沿革図第二」(図 3.6.2, 図 3.6.3)で、「享保年間改変以後ノ状況ヲ写シタルモノナラン」<sup>注13)</sup>と註記され、八卦堂(八角堂)の右傍に「得仁堂」が描かれているものである。八幡堂は見え、八角堂はまだ金比羅になっていない。簡略な図ではあるが、旧来の場所を追い出された三体の木像を納める新たな得仁堂が、一時期、八角堂の近くに設けられたことを示していると考えられる。



図 3.6.2 「沿革図第二」(写、年不詳)

大木秀人『後樂園略記』より転載



図 3.6.3 同上 部分拡大

もう一枚は、計見東山の『後樂園』(育英舎, 1907)に載せられた図(図3.6.4, 図3.6.5)<sup>注14)</sup>で、「文化四年調製ノ地図ニ依ル」と別記されている。ここでは八幡堂から距離を隔て、円月橋の下を流れる川を遡った柵門の外、園の端に「得仁堂」が位置している。得仁堂が元の位置に復旧されたのが文政3年であることを考慮すれば、復旧に備えて、小笠原一斎作の夷斉像を祀る仮の得仁堂を、これも光圈と縁の深い円月橋近くの目立たぬ場所に設けていたものと推測される。

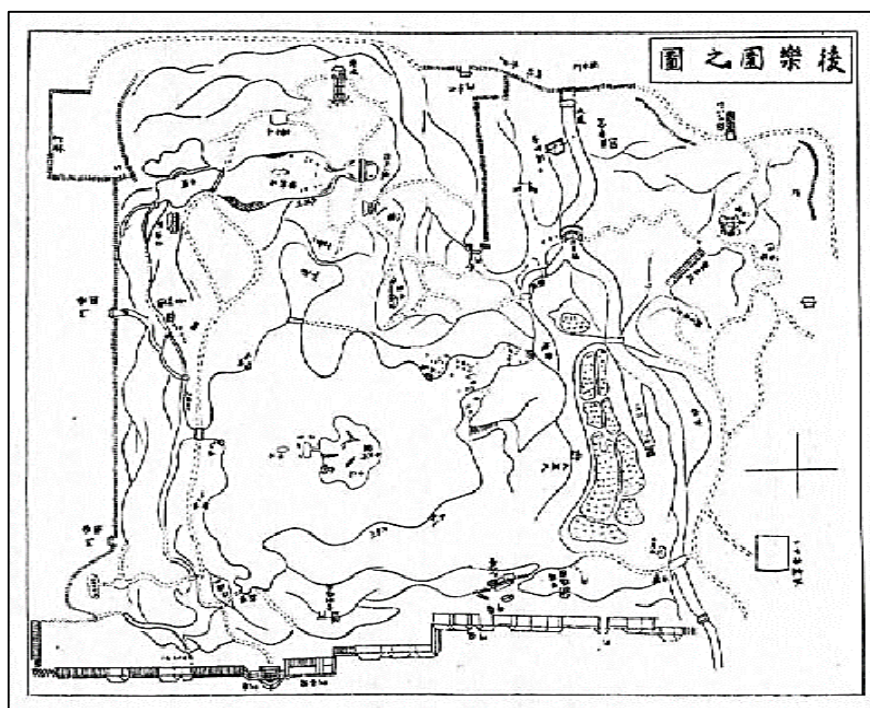


図3.6.4 「後樂園之図」(写、年不詳)

計見東山『後樂園』(育英舎)より転載

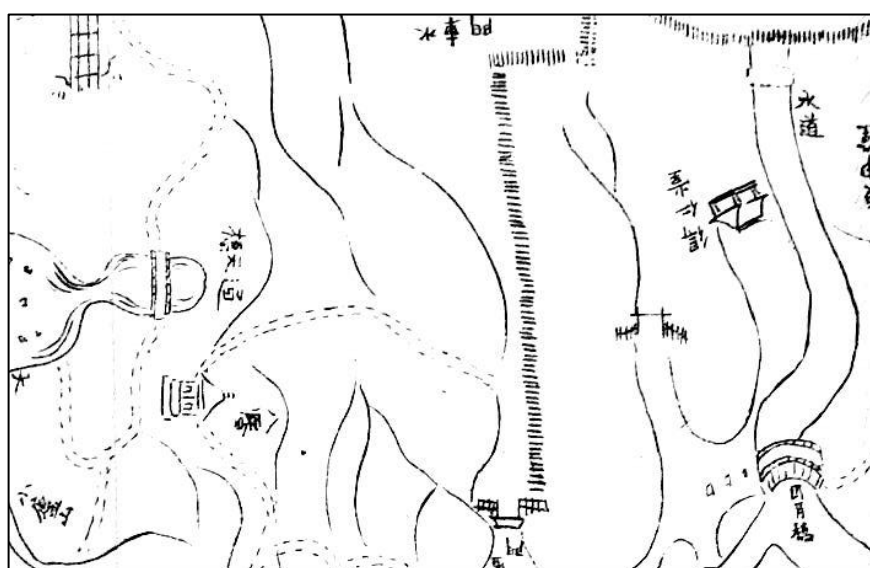


図3.6.5 同上 部分拡大

伯夷・叔齊像の造り直しに際して、再び「夷齊」を冠して呼ばれた堂であったが、現実には「得仁堂」として復旧された。おそらく長く親しまれた名前だったからであろう。この復旧の基には、国内外の社会情勢の変化によって生じた、藩内における「後期水戸学」<sup>注1 5)</sup>の興隆と、それに伴う光圀に対する評価の高まりがあったのであろう。なお、文昌星像をかつて祀っていた八角堂は、文政9年に至っても金比羅のままであったが、天保9年(1838)5月26日には文昌星像が戻されて、金比羅権現が合祀された<sup>注1 6)</sup>。

### 3.7 江戸末期以降の概略

安政2年(1855)に江戸を大地震が襲った。田村剛の『後樂園史』には、その時の得仁堂の被害状況とその後の修理について次のように記されている。

「安政二年十月二日江戸の大地震に、阿波の鳴門が壊れ園内建設物に被害があった。得仁堂の柱が礎石から飛び出して曲つたといふ程であるから、その程度も想像せられる。而してその柱は同六年に修理せられた。(中略) 安政二年十月二日の大地震で得仁堂は大破損をしたので、六年四月修復に着手し、一時中止となり、十月二十一日再度取掛つて、二十五日に落成した。修復の箇所は貫鼻胡粉付、扉組子なほし、角鉄物取付、建羽目板新足、御長押銅物糊さび落し、扉白鉄物等新規取替、紐縁喰付直し、と見えてゐる。<sup>注1)</sup>」とある。江戸時代末期の得仁堂に関する文献上の記録は、残念ながらこれ以外に発見されていない。

明治維新を迎えると、水戸邸の敷地は明治政府の所管となる。明治7年、天皇の行幸に合わせて園内の建物の修復がなされた。その頃の状況を田村剛は、「斯くして園内の堂宇を修繕し、庭園を手入れして大いに面目を改めた後、明治七年明治天皇の臨幸皇后行啓を仰いだ。<sup>注2)</sup>」と述べている。具体的に修理された建物の名前は不明であるが、この頃、得仁堂は修理がなされた可能性が高い。特に屋根はこけら葺に変えられたと見られ、その痕跡は現在でも遺存しており、この時期に撮影された写真によってもこけら葺の姿が確認できる<sup>注3)</sup>。ただ、明治40年に出版された計見東山『後樂園』に掲載されている写真<sup>注4)</sup>では鉄板葺となっているので、こけら葺の時代は、少なくとも明治前半期から中頃までであったと思われる。

大正12年(1923)3月に「史蹟名勝天然記念物保存法」による「史蹟及び名勝」の指定を受けて小石川後樂園の保護が図られた。指定に先立って、大正10年に得仁堂の修理がなされ、翌11年には、指定に向けた調査・実測・写真撮影等が行われる。その成果は昭和12年(1937)に調査報告書『名勝調査報告』として公刊され、それによれば、「大正十年二月に錦春門が書院庭園の東南隅に東門として移築された。その他清水観音堂・唐門・得仁堂・八卦堂等が修繕されてゐる。<sup>注5)</sup>」と記されているが、具体的な修理内容は記されずに、「得仁堂は亜鉛葺寶形造の木造平家で建坪五坪八合四勺である。<sup>注6)</sup>」と書かれているのみである。なお、直後の関東大震災(大正12年)によって、園内の八卦堂・清水観音堂等が火災で焼失したことも報告されている。

昭和2年、震災後の復旧政策として「後樂園内工作物補修計画」と題し、園内の建物の補修が行われた。この時の得仁堂に関する修理の記録は見られないが、2年後に出版された田村剛『後樂園史』を見ると、「又得仁堂の屋根は銅葺きで天井と床とは近頃とりかへられ、正面は唐戸左右は挿入窓となつてゐるがこれは改まったものとは思われぬ。<sup>注7)</sup>」と記されている。

大正期に出版されたと見られる大木秀人『後樂園略記』に掲載されている写真<sup>注8)</sup>では、先の明治40年の計見東山『後樂園』内の写真と同じ鉄板葺で、昭和4年に出版された『後樂園史』に「銅葺き」とあるので、この昭和2年の「後樂園内工作物補修計画」の際に、鉄板葺から銅板葺に葺替えられた可能性が高い。そのことは、昭和10年に撮影された写真<sup>注9)</sup>に、唐破風部分の納まりが以前の鉄板葺と異なっている様子から窺える。

また、昭和13年の藤島亥治郎「後樂園の建築」によると、得仁堂の様子は次のようであった。「床は四半敷唐草文入の黄灰色の塼で敷き詰めてあるが、格天井と共に近年旧制通りに取り換へられたものである。(中略) 現在銅板葺であるから殊更に重苦しい。(中略) 室内祀壇前に横長の甲板と細い四脚とを具へ、特徴ある刳形に細かく唐草文を螺鈿した机があり、様式技法上明清の製作であろう。品雅に富んだ優作である。上には香燭を備えた事が旧記にある。<sup>注10)</sup>」ここには銅板葺の屋根、天井や床の取り替えが書かれている。なお、螺鈿の机に関しては、現在のところ明や清の製作であるかは明らかとなっていない。

その後、太平洋戦争によって小石川後樂園内の建物は殆どが焼失するが、得仁堂は難を逃れた。この時、庭園の火災の際には職員が得仁堂に飛び込みんで伯夷・叔斉像を運び出したと伝えられている<sup>注11)</sup>。戦中・戦後を通じて得仁堂の修理の記録は残されていないが、古写真や昭和57年の1月から3月にかけて行われた修理の設計図書を見ると、この修理までに再び鉄板葺に改められ、宝珠が失われていることがわかる。<sup>注12)</sup>

なお、江戸末期以降の史料および古写真の詳細な検証は、第5章にて建造物の調査結果と併せて詳述する。

### 3.8 第3章のまとめ

得仁堂の変遷について本章で明らかとなった点をまとめると、以下の通りとなる。

- ①得仁堂の建立時期は、「後樂園絵図」(明大本)より寛文5年(1665)7月以降、同8年(1668)1月以前の可能性が高く、「得仁堂」の名称の初出もこの絵図による。
- ②得仁堂は、伯夷・叔斉の像二体を祀る「夷斉堂」と、「至徳堂」に祀られていた泰伯像を合祀するために新築された。
- ③得仁堂は元禄13年(1701)から元禄15年(1703)頃までに「孔子堂」、「釈迦堂」となり、享保3年(1718)以降「八幡堂」となった。三像は別の場所に移され、その後焼失した。
- ④安永8年(1779)に紀州藩主の世話によって作り直された伯夷・叔斉の二体が水戸藩に贈られ、文政元年(1818)に八幡神を遷座し、文政3年(1820)に得仁堂に新造の伯夷・叔斉像を再び安置した。
- ⑤近代以降、屋根をこけら葺、鉄板葺、銅板葺に葺き替えるなど部分修理がくり返された。





## 第4章 トコ廻りを中心とした建造物調査による検証



## 4.1 はじめに

これまで見てきたように、得仁堂は、「夷齊堂」に祀られていた伯夷・叔斉の二像と、「至徳堂」に安置されていた泰伯像を合祀するために、寛文5年(1665)7月～寛文8年(1668)1月までの期間に「得仁堂」として建設された可能性が高いことが史料によって明らかとなった。光圀没後、得仁堂は「孔子堂」、「釈迦堂」と名称を変え、享保3年(1718)以降、水戸四代藩主宗堯<sup>むねたか</sup>の出身地である讃岐から八幡神が勧請されて「八幡堂」となり、文政3年(1820)には再び伯夷・叔斉の二像が祀られて「得仁堂」として名称が変更された。この時、それまで別の場所に保管されていた三体の像が焼失したので、伯夷・叔斉の二体の木像だけが新造され、安置されたことが判明した。

史料上における得仁堂の変遷は第3章にて論じたが、こうした記録が建物の修理や改造の履歴に反映されていることは十分考えられる。そこで、本章ではまず、トコ廻りを中心に得仁堂の変遷を明らかにする。像とそれを安置したトコとの関係は不可分であり、建物を通じて史料を裏付けることができると思われる。その結果、得仁堂の建設やその後の変遷の原因となった社会史的観点からの解明にも資することがあると考えている。なお、本章から第6章までに述べる建造物の考察は、平成24年12月から平成26年3月にかけて行われた屋根葺替および部分修理の調査結果に基づいている。

## 4.2 トコ廻りの検証

### 4.2.1 トコ廻りの痕跡

今回の工事は屋根葺替および部分修理で、解体範囲は屋根(銅板葺・野地板・野垂木・裏甲等)、壁板、トコ廻り、建具、軒下叩き、敷瓦の一部である。そのため、調査範囲は限られていたが、得仁堂建設の目的やその経緯を知る上で鍵となる背面のトコは腐朽が甚だしかったため、すべて解体することとなり、その結果、この部分に関しては詳細な調査を行うことができた。

得仁堂は創建当初から現在に至るまで何度か名称を変更していることが、史料によって判明している。こうした変化はトコに安置する像の移り変わりとは無関係とは考え難く、そのため像の大きさや数などに合わせて、トコの規模や納まりが改造されてきたことは容易に想像できる。



①修理前 (北東より)



②壁板解体後 (同左)

写真 4.2.1 トコ廻り

現在、得仁堂の背面中央部分には、建物の南北中心軸から東(正面から見て右)に 151 mm (5 寸) 寄った位置に拳鼻付平三斗の組物がある。肘木は小屋組の部材が延びたもので構造上一体となっている<sup>注1)</sup>。また、組物下部に柱は現存しないものの、その位置の頭貫には、輪薙ぎ込みが施され、他の丸柱と同径の柱の圧痕と柱真を示す墨線があった(写真 4.2.3 ③)。柱・頭貫・組物はすべて檜材で、改造された痕跡が見られなかったことから、創建時はこの位置に丸柱が建てられていたと見られる。この輪薙ぎ込みの寸法は現存する両側面の中央丸柱に位置する頭貫の輪薙ぎ込みと幅・厚み共に同寸である。



写真 4.2.2 トコの痕跡(北面)

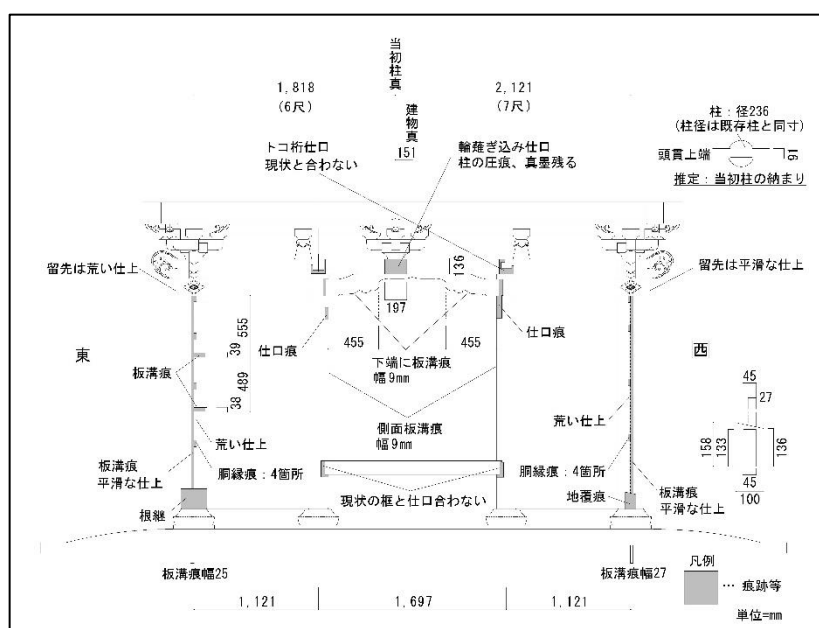
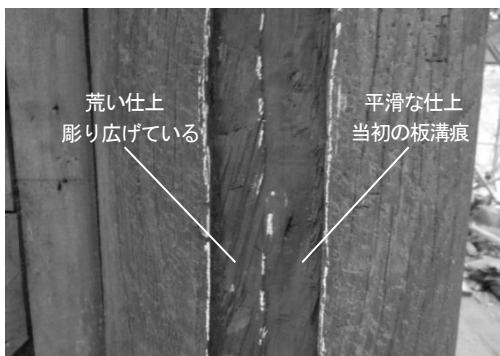
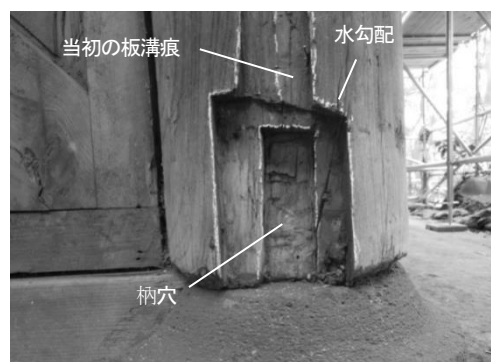


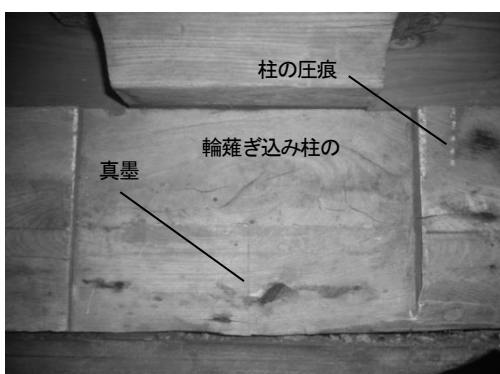
図 4.2.1 トコの痕跡図(北面)



①北西隅柱背面に残る板溝の痕跡



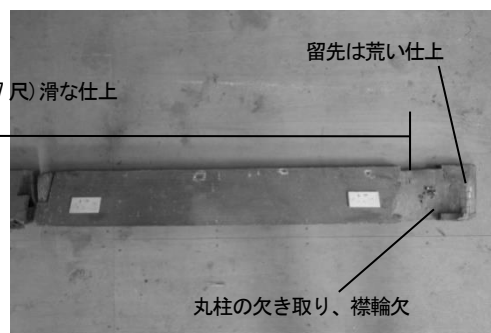
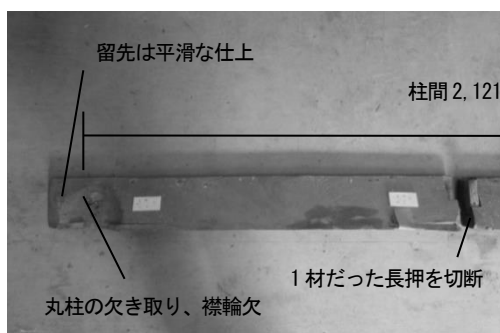
②同左、地覆の痕跡



③頭貫に残る当初柱の痕跡



④北東隅柱に残る棚板の痕跡(西より)



⑤北面外部の長押裏側に残る痕跡



⑥北面外部長押の木目の一致



⑦トコ基礎部分

写真 4. 2. 3 各部材の痕跡

また、現在のトコ正面両柱の礎石や礎盤は、他の丸柱のものよりも小さく、トコの改造時に現在の柱に合わせて、新たに据えられたものと考えられる。トコ正面の地覆石の表面は、木部が載る部分を粗面仕上げとするなど、他の地覆石とは明らかに仕様が異なっていた。なお、当初の基礎部分の石材の抜取痕などは確認されなかった。その他、トコの東西および背面の地覆石は本体部分の石材と比較して姑息な仕上げで、角柱の礎石も他の丸柱の礎石よりも明らかに新しいことから、現在のトコ廻りの基礎部分はいずれも後補材と見られる。(写真 4.2.3 ⑦)

従って、創建当初、建物背面側には建物の中心軸より東に 151 mm の位置に、現存する丸柱(径 236 mm)と同寸の柱が一本建っていたと想定される(写真 4.2.2、図 4.2.1)。

また、北面隅柱二本の背面には、縦に埋木が施されていた。今回の修理で埋木を解体したところ、柱には壁板と胴縁が納まっていた痕跡を発見した。胴縁は成 61mm×幅 24~27 mm 程度で各柱に 3 箇所差込んでいたと見られる。両隅柱に彫られている溝の外側の側面は平滑で創建当初の施工と思われるが、内側は荒くノミで彫り広げているので、当初の壁板は現状の縦溝幅よりも薄く、25~27 mm 程度の厚さで、胴縁外側から打付けていたと思われる。また、得仁堂の中で唯一、柱の全長が遺存している北西隅柱背面の足元には水勾配の付けられた地覆の仕口痕も残されていた(写真 4.2.3 ①・②)。

なお、北東隅柱の中段の高さには二箇所、幅 40 mm 程度の水平の溝が、内側に彫られている。仕口は丁寧で当初からのものと見られ、棚板が 2 段納まっていたと推定される(写真 4.2.3 ④)。ただ、この棚の役割を明らかにすることはできなかった。

また、北面外部の長押は現在、トコを挟んで東西二か所に設置されている。今回、この二材を補修のために解体して突き合わせたところ、木目が合い、元々一材であったものを切断して再利用していることが判明した。この二材の裏面の柱に接触する部分は、襟輪欠きの仕口としているが、横に並べてこの仕口真の間隔を計ると 2,121 mm(7 尺)となり、創建当初の北面西側の柱間と整合する。さらに、北東隅の留めの仕口は荒く削られていることから、北面外部の長押は、創建当初は元々一材で背面に設置され、後世、トコを改造する際に切断して、東西に分けて設置したと考えられる<sup>注2)</sup>。その際、北東隅は留めの仕口を新たに施して、余長分は破棄されたと見られる(写真 4.2.3 ⑤・⑥)。

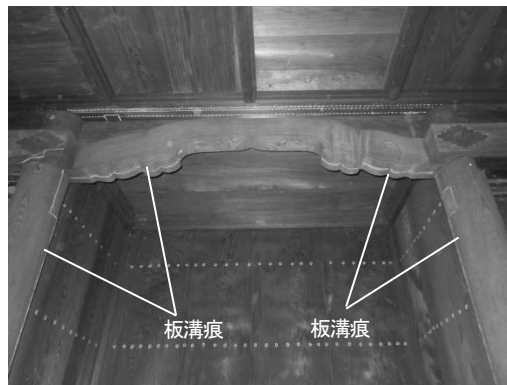
以上のように、創建時のトコは、間口 2 間幅の規模で、中央東寄りに丸柱 1 本を建てていたと推察できる<sup>注3)</sup>。特に西側が広く、東側に棚を設置していたことは注目される。

その後、トコが現状の間口 1 間分の規模に改造された時期を知る史料は残されていない。しかし、①創建当初、②現在の規模となった時代、③部分的な改造がなされた時代、とトコは少なくとも 2 回の改造が施されたと見られる。

現在、トコの正面は、丸柱を 2 本建て上部に虹梁、下部にトコ框を渡して壇を造っている(口絵 2)。丸柱二本の内側側面には幅 9 mm の一本の板溝の痕跡があり、東側(西側は後世削られている)の虹梁直下にはやや幅の広い羽目板溝の痕跡がある。また、虹梁下端にも両丸柱の側面から水平距離で各 455mm、幅 9 mm 程度の板溝の痕跡が残る(写真 4.2.4)。現在、トコ框上端に板溝の痕跡は見られないが、トコ框の両端部は丸柱と仕口が合わないことなどから、現況のトコ框は丸柱の設置後に取替えられた部材と考えられる。



①トコ丸柱(西側)



②トコ中央間



③トコ丸柱(東側)

写真 4.2.4 トコの丸柱・虹梁に残る痕跡

また、虹梁下部の丸柱内側には長方形の埋木がなされていた。今回、これらの埋木を取り外したところ、東西両丸柱共にそれぞれ柄穴が確認された。穴の寸法は東側で成 71 mm×幅 27 mm、西側は成 76 mm×幅 31 mmでほぼ同形である。そのレベルは虹梁下端から柄穴下部まで東側が 206 mm、西側は 203 mmとほぼ同高である。また、東側の柄穴から「東ノ方」と墨書きされた柄の一部が発見された。この柄は現在の虹梁と同種の樺材で木目も近似していた。(写真 4.2.5)

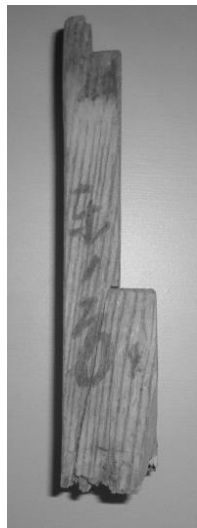


写真 4.2.5 柄に書かれていた墨書

これらを総合して考えると、創建時のトコが最初に改造を受けた時、虹梁は現状よりも下部に設置され、虹梁直上にはやや厚みのある羽目板<sup>注4)</sup>、虹梁下の両脇には袖壁板があったと推察される。現在の虹梁や天井板は和釘のみで止められており、これらの改造は江戸時代になされたものと考えられる<sup>注5)</sup>。つまり、創建後、まずトコの間口を一間幅として改造し、その後、虹梁を上げて袖壁板を撤去するなど、江戸時代中に少なくとも二回の改造を行ったと見られる。

このようなトコの改造が行われた理由は、安置する像の変遷と深い関係があることは想像に難くない。創建時の得仁堂は伯夷・叔斎・泰伯の三像を拝する建物として建てられ、西側の幅の広い方に兄弟の伯夷・叔斎像、東側の狭い方に泰伯像が安置されたと推定される。享保3年(1718)以降になると八幡神像を祀るために、元々あった伯夷・叔斎・泰伯像を別の場所に移動して、現在の平面形式に改造した。その後、文政3年(1820)に再び伯夷・叔斎二像を安置することになり、像の大きさとの関係から虹梁を上部に上げ、左右の袖壁板を外したと考えられるのである。

それを一部裏付ける史料として、かつて堂内に像が安置されていた頃の写真<sup>註6)</sup>が大正期に出版されたと見られる『後樂園略記』に掲載されている(写真4.2.6)。この時は既に虹梁が上部に移動した後である。これを見ると、高さ・幅共にトコの空間いっぱいに像が置かれていたことを伺い知ることができる。すなわち、叔斎像は立像で高さがあるため虹梁を上部にあげ、二像の幅を確保するために左右の袖壁板を外す必要があったと考えられるのである。

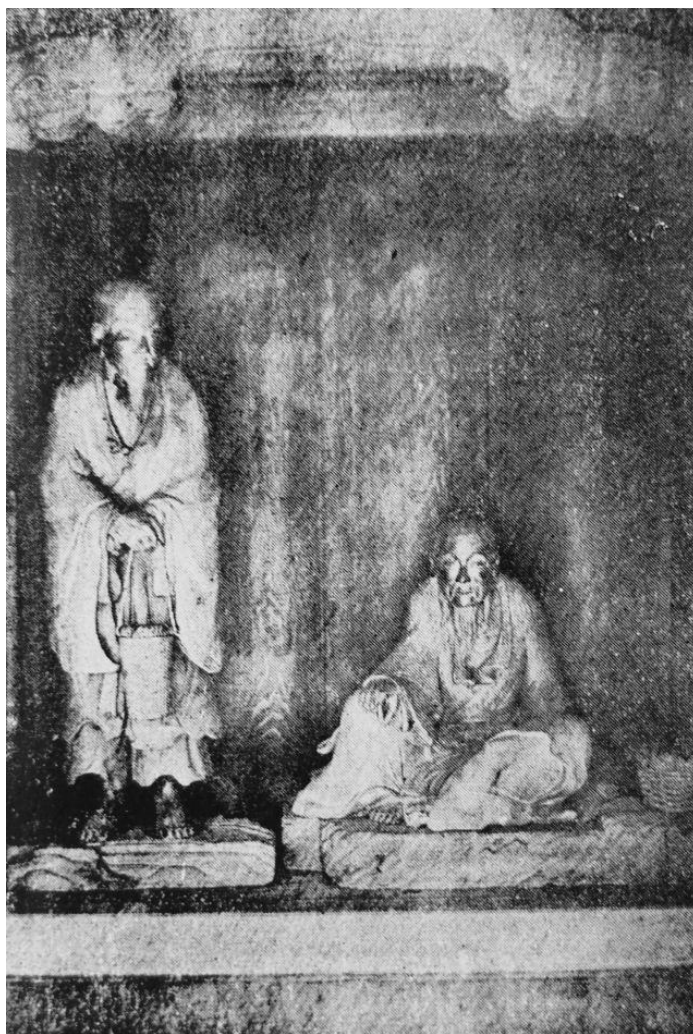


写真 4.2.6 得仁堂安置の伯夷・叔斎像

大木秀人『後樂園略記』(出版社不明)より転載



以上、得仁堂の創建時から現在に至るまでのトコ廻りの変遷を略平面で記すと下記ようになる。

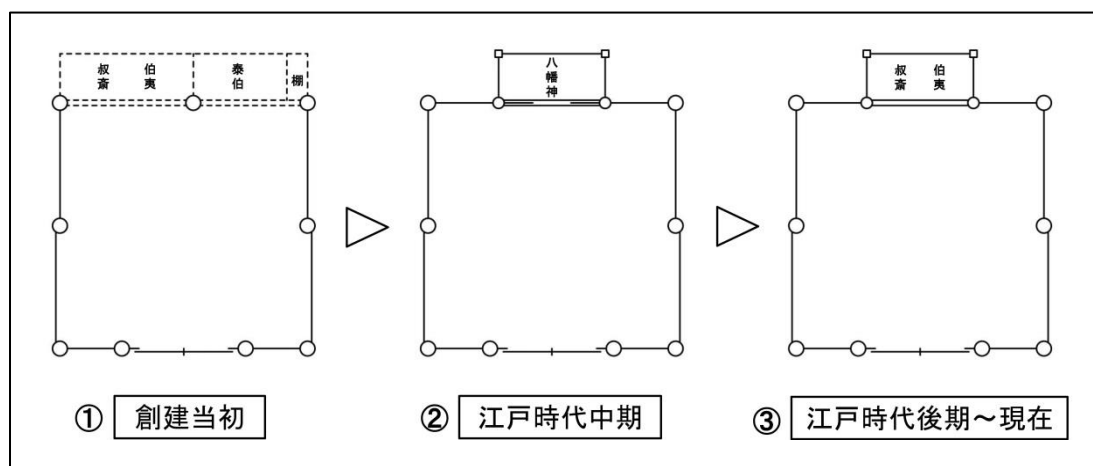


図 4.2.2 トコの変遷

#### 4.2.2 史料上の変遷と改造の経過

得仁堂における史料上の検証は、既に第3章にて論じているが、その概説とトコ廻りの改造の履歴との関連をまとめると以下の通りとなる。

寛文5年(1665)6月、林羅山の子<sup>らざん</sup>鷺峰<sup>がほう</sup>が後樂園を訪れた際の日記をまとめた「国史館実録」がある。ここには得仁堂の名はまだ見えないが、山に二つの堂があり、中腹の「夷斉堂」には伯夷・叔斉、頂上の「至徳堂」別名「達徳堂」には泰伯を祀っていたとある。このことから、この時点では別々の建物として祀られていたと見られる。

一方、小石川後樂園の最古の絵図面とされる「後樂園絵図」(明大本)には、「得仁堂」と記された堂が描かれている。この絵図は、寛文8年(1668)1月までには制作され、少なくともこの時期までに、得仁堂は建設されていたと見られる。

創建当時の得仁堂に伯夷・叔斎・泰伯の三体が安置されていたことは、寛文9年(1669)3月に朱舜水が詠んだ「遊後樂園賦并序」に、泰伯・夷斉の古びれた祠を訪<sup>たず</sup>(「聞」)ねて「召伯之堂」に休んだ、と記されており、「伯」(泰伯)を「召」(招)いて合祀した堂、すなわち得仁堂が建立されていたと解釈できる。また、辻言之がその著「東都紀行」の中で、元禄5年(1692)4月に後樂園を訪ねた際に「三仁を祭れる廟堂、是なん得仁堂なり」と記していることにも窺える。

光圀が没した元禄13年(1700)後の変遷は、俳人の榎本其角が後樂園を訪れた際に記録した「後樂園拝見之記」(元禄15年、1702)や、前記した鵜飼信興の「後樂園紀事」(元文元年、1736)に詳しい。これによると、得仁堂は「孔子堂」・「釈迦堂」などと名称が変わったという。そして、享保3年(1718)に水戸四代藩主となった宗堯が、讃岐の石清尾八幡を勧請して「得仁堂」を「八幡堂」に変える。この時にトコ廻りが現在の規模に改造され、三体の像は外に運び出されたと見られる。

その後、徳川治宝(治世：1766～1805)が六代藩主になると、再び「得仁堂」として復旧する機

運が高まる。ところが、得仁堂の建物に八幡神が祀られている時、別の倉の中に移されていた伯夷・叔斎・泰伯の三体の像は焼失してしまっていた。そこで、安永8年(1779)に紀州九代藩主徳川治貞が、紀州の細工人である小笠原一斎に命じて伯夷・叔斎の二像を造らせ、水戸六代藩主治保に贈った。その遺志を継いだ水戸八代藩主斉脩の時代に、新たに造られた伯夷・叔斎像を得仁堂に安置することになった。小宮山楓軒の「楓軒年録」(第14冊)の「朶依陵八幡宮御鎮座記」によれば、得仁堂に像が戻されたのは文政3年(1820)で、それに併せて修理がなされたという。この時にトコ廻りでは虹梁を上部に上げ、袖壁板を撤去した可能性が高い。

これらによれば、得仁堂に安置されていた像は、①寛文5年(1665)～同8年(1668)の創建時：伯夷・叔斎・泰伯、②享保3年(1718)以降：八幡神、③文政3年(1820)～現在：伯夷・叔斎、の三つの時期に区分され、建物に残された痕跡と史料の記録は矛盾していないことがわかる。

### 4.2.3 創建時の三像

ここで、創建期の三像が建築空間としてトコにどのように安置されていたか、痕跡などを参照に検証してみよう。下記の図は創建当初の像の安置を再現したものである。

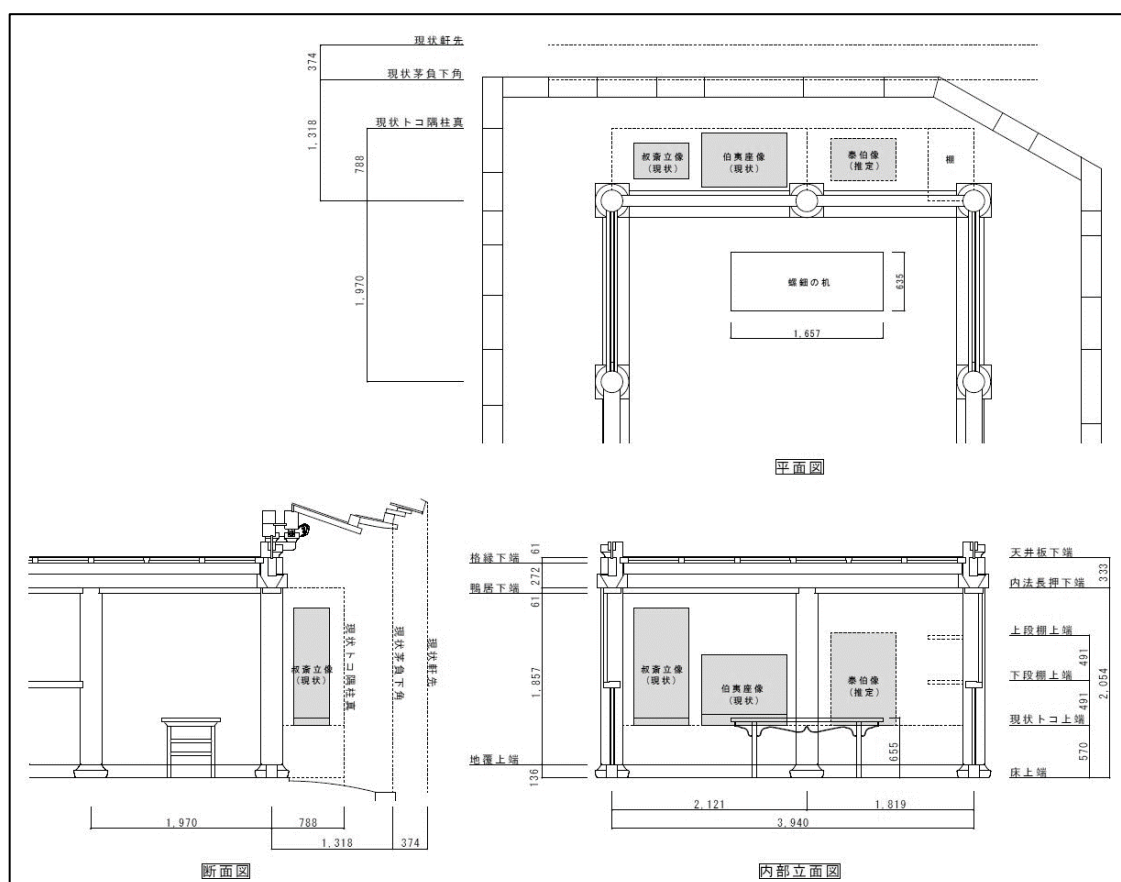


図 4.2.3 創建時のトコと三像

前述の如く、創建当時の三像の詳細は明らかとなっていない。ここでは、その目安として遺存している伯夷・叔斎像（伯夷像 像：高さ 649 mm、台座：高さ 119 mm・幅 930 mm・奥行 597 mm、叔斎像 像：高さ 1191 mm、台座：高さ 85 mm・幅 590 mm・奥行 383 mm<sup>註7)</sup>）を用いた。伯夷・叔斎二像の左右の配置は、大正 8 年頃の古写真(写真 4.2.6)に従って、伯夷像を右、叔斎像を左に配置している。泰伯像はまったく手掛かりがないので大きさは推定とした。

建物は、痕跡に倣って建物中央から東に 151 mm の位置に丸柱を建て、東側のトコには棚を配置した。棚の見付幅は推定である。また、北面両隅柱の礎石には、内側向かい合わせに地覆を入れる欠き込みがあるので、トコ正面に地覆を配した。現在のトコ柱以外の礎石は丸柱と寸法も合い、風喰も進んでいることから当初のものと判断した。

トコの床は北面隅柱に框の仕口痕がないので、当初のトコ床は、室内の床と同高か、地覆上端高であったと推定される(地覆成 136 mm)。トコ間口上部は、内法長押が渡され、開放であることから無目の鴨居が両脇間に取り付いていたと考えられる。

トコの奥行きは不明であるが、軒の出などから現況のトコと同寸とした。また、建物周りの雨落葛石は建物の礎石と比較して部材が新しく創建時の材とは言い難い。特に北東隅が斜めになっており、これは後世、建物東側の乱積の石垣に沿って配置した可能性がある。得仁堂は、元禄地震(1703)や安政の大地震(1855)、関東大震災(1923)、さらには戦災などを経て現在に至っており、その時々で建物の被害も記録されている。東側の石垣は、その際に土手が崩れて積み直したもの、または新たに積んだものとも考えられる。また、建物外周の三和土は、昭和 57 年の修理時でも改修されており、地盤面から手掛かりとなる痕跡は発見されなかった。このように創建時の建物周囲は現況と異なっていた可能性もあるが、目安として現状のまま配置した。

トコの天井は、遺存している外部の長押や組物、化粧垂木などから推定した。前述したように、現在の背面外部の長押は、創建時のものを切断して両脇間に配置したと見られるが、風喰がかなり進行している。また、背面中央の組物も同じように風喰しており、長い期間外部に晒されていたと見られる。一方、トコ奥の柱は、化粧垂木に痕跡がないことから、軒裏まで伸びていなかったと考えられる。したがって、トコの天井は、外部の長押下端と同高程度の位置に板を張っていた形式であったと見られる。

また、堂内には創建時まで遡ると見られる螺鈿の机が遺存していた(第 6 章 6.3.3 参照)。この机は、日常的な礼拝や儀式などに使用したと考えられ、トコ中央の丸柱の前面に配した。

以上から考察すると、まず螺鈿の机の高さが 655 mm であるので、三像は台座のようなものの上に安置したと考えられる。台座の高さは不明だが、仮に現在のトコ高とすると、像下端は螺鈿の机と同高程度となり、像全体もトコ内に納められる。螺鈿の机は、椅子に座って使用したと見られ、その時、三像は視覚上、やや見上げた無理のない高さとなる。また、東側二箇所の棚は、その機能は不明だが、各上端は仮定した台座高さから等間隔になることは注目される。

したがって、創建時の三像の安置は、遺存している像、建物の痕跡、螺鈿の机などから考えても無理なくトコに納めることがわかる。創建時の三像は明らかとなっていないが、建築空間から想定すると、伯夷・叔斎像の二像は、安永 8 年(1779)に当初の像と同程度の大きさで造られたが、泰伯像は、すでに改造されたトコには納められなかったので造られなかったとも考えられる。

### 4.3 第4章のまとめ

得仁堂の歴史的変遷に関し、トコ廻りを中心とした建造物調査による考察を行った。本章で明らかとなった点は以下の通りである。

- ①創建時のトコは、間口二間幅の規模で、中央東寄りに丸柱一本を建て、西側は広く東側には棚を備えたものであった。
- ②江戸時代中期、丸柱を撤去し、新たに丸柱二本を建て、規模を間口一間幅とする改造が行われた。
- ③江戸時代後期、虹梁を上部に上げ、袖壁板を撤去した。
- ④トコの改造の過程は、史料による像の変遷と矛盾しない。

## 第5章 屋根廻りを中心とした建造物調査による検証



## 5.1 はじめに

得仁堂の変遷に関して、第3章では史料における考察、第4章ではトコ廻りを中心とした建造物調査について論じてきた。これらの中で得仁堂は、伯夷・叔斉の二像と泰伯像を合祀するため、寛文5年(1665)7月～寛文8年(1668)1月までに建設され、トコは建物背面いっぱいの規模で、中央東寄りに丸柱一本を建て、西側は広く東側には棚を備えたものであったことを指摘した。また、享保3年(1718)以後、八幡神が勧請されて「八幡堂」となるが、同時にトコ中央の丸柱を撤去して、新たに丸柱二本を建て、規模を間口1間幅に縮める改造が行われた。さらに文政3年(1820)に新造の伯夷・叔斉の二像が祀られて再び「得仁堂」として名称が変更されると、虹梁を上部に上げ、袖壁板を撤去した。ここまでの考察では、史料上の記述とトコ廻りの痕跡が矛盾しないことが明らかとなった。

これまでは、主として近世を中心に述べてきたが、近代に入ると小石川後樂園は、水戸家の所有から離れ、明治2年に兵部省の所管となり、その後、造兵司、陸軍省を経て、明治12年には東京砲兵工廠の所有として利用される。この時、庭園部分は明治天皇の行幸の際の休息地や迎賓施設として整備され、工廠付属の園池となる。

こうした社会変化は、園内の建物の変遷と密接に関連していたと考えられる。歴史的建造物の考察を行う場合、創建から現在に至るまでの過程を通観することによって、建築史上の位置づけや建物の再評価の一助とすることが可能となると思われる。今回行った建物の調査では、屋根や造作などは、主として近代以降に改造されたことが判明した。

そこで、この章ではまず、屋根廻りを中心に述べ、次の第6章にて造作類さらに伯夷・叔斉像や扁額などの建物に関連する付属物に関して論じることとする。

## 5.2 屋根の検証

### 5.2.1 小屋組の痕跡

今回実施した修理工事の中で、屋根の銅板葺とその下部の野地板・野垂木を解体したところ、こけら葺が発見された(写真5.2.2 ①)。これは得仁堂の歴史を物語る貴重な資料になると考え、解体を行わずに存置したので、今回の調査は可能な範囲で行った<sup>注1)</sup>。

得仁堂の小屋組の架構は四段で構成されている。一段目の各部材は、丸桁のみ杉、その他は柱や組物と同様の檜材で共に木目のつんだ良質な部材であった。特に繫肘木は建物外部まで一材で伸び、手先部分を肘木とするなど組物と構造上一体となっている。それ以外の他の部材も継木や取替えられた痕跡などは確認できなかった。

第4章で考察したように、一段目の部材の内、背面側の繫肘木は建物の南北中心軸から東に151mm(5寸)寄った位置に取付いている。この組物直下に柱は現存しないが、その位置の頭貫には、輪薙ぎ込みが施され、他の丸柱と同径柱の圧痕と柱真を示す墨線があつて、柱・頭貫・組物は檜材で、改造の痕跡がないことから、創建時はこの位置に丸柱が建てられていたと見られる。その他の遺存する柱・組物・頭貫は創建時のものであることは既に述べた通りである。したがって、組物と一体の繫肘木に改造の痕跡が見られないことから、一段目の部材は創建時の部材が遺存していると考えられる。

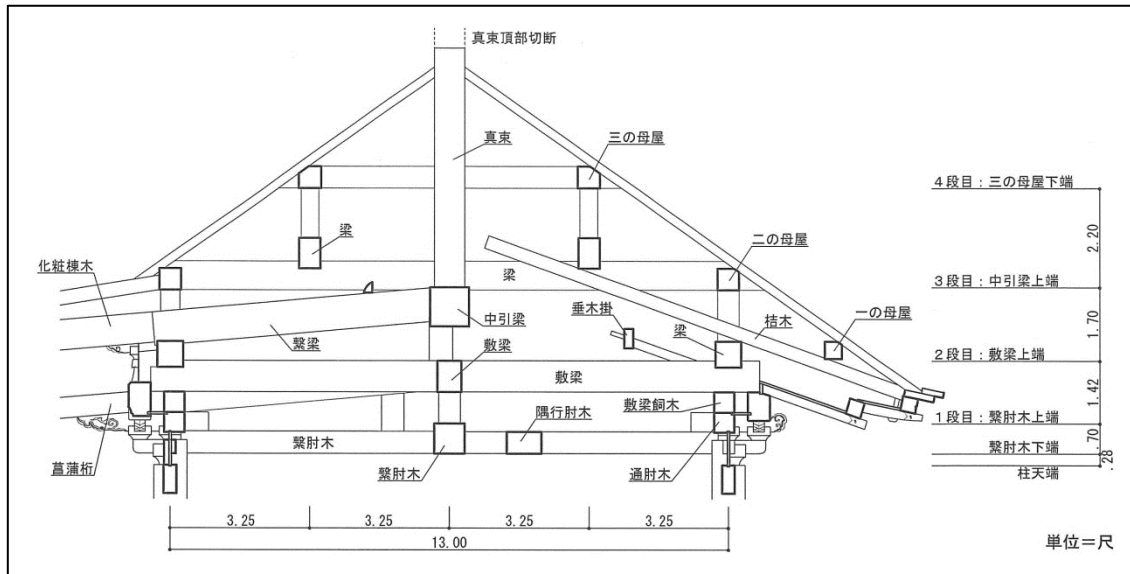


図 5.2.1 小屋組断面図

一方、二段目から上部の小屋組の部材は、継木が施されているものや貫穴・木舞穴のある転用材などが使用され、他の材も一段目と比較して総じて部材が新しく、洋釘止も確認できたので、後世に修理がなされていることが認められた。各部材を子細にみると、草蒲桁は杉、その他の梁は松材で、中央の南北および東西に延びる二本の繋梁は、寄蟻穴・貫穴・木舞穴・板決・渡顎仕口などの痕跡がある転用材を用いており、その交差部の束は洋釘打で固定されていたことから、明治期以降に手を加えられていると考えられる。また、二本の草蒲桁の内、西側は建物外部まで一材で部材も古く当初材と見られるが、東側は丸桁上端付近で金輪継とする二丁継である。部材外寄りの先端は創建時と考えられるものの、継木材は後世の修理によって継がれたと考えられる。

三段目より上は、梁が松、他は杉材で、母屋や束は一段目と比較して明らかに部材が新しい。ただ、化粧隅木は、北側二本はともに一材で部材も古く、南側二本は尻端部が後世の修理によって継木されていたが、それ以外は創建当初まで遡る可能性が高い。材種は後世の修理材とも杉で、建物外部は飛檐・地隅木を一木で造り出し、部材を丸桁に落とし込んで、小屋内部の通肘木上に置いた飼木を枕にして据付けている。隅木尻は、北側二本を隅行肘木上に建てた束に杓差込栓打ちとし、南側二本は三段目の中引梁または繋梁に載せ掛け真束に突きつける簡易な納まりとしていた。通肘木上の飼木は丸桁側面に短柄差されていたが、南西隅のみ欠失して杓穴の痕跡のみ残っていた。北側隅木を受ける二箇所束は、共に 158 mm 角程度の部材で、未使用の貫穴と両側面を欠込んだ痕跡があったが、その来歴は明らかにできなかった。化粧棟木は、端部に唐破風板を掛け、側通り真の位置で小屋内部の繋梁と継ぐ。建物外部は木目のつんだ良質材で当初材と見られたが、小屋内の継木材の繋梁は貫穴痕があり、隅には面取が施され、表面に鉋掛けをしていることから、柱の転用材と見られる。また、桝木は十五本中、元口径 130 mm 程度の松丸太を十四本、120 mm 角の角材一本を入れていたが、長さも不揃いで部材も新しく、遡っても明治前半期頃と推定された。



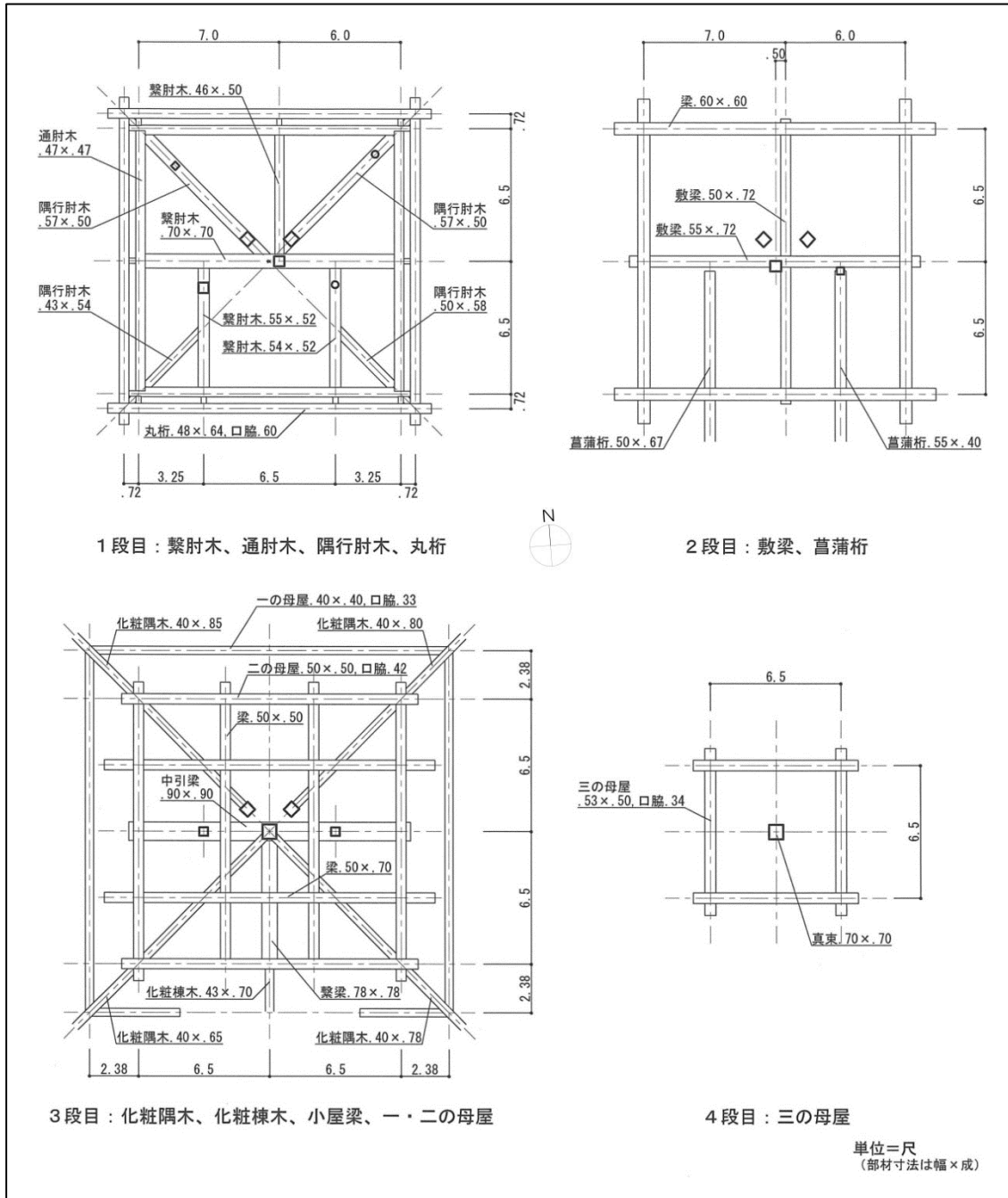


図 5.2.2 小屋組伏図

また、次項で述べるが、遺存していたこけら葺は、古写真や表面に残る痕跡などによって、明治前半期の施工と考えられ、その下地である野地板と野垂木とともに洋釘止であることが判明した。今回、一部腐朽していたこれらの部材を解体したところ、下部に他の釘痕が見られなかったことから、こけら葺と野地板・野垂木は同時期に施工したものと考えられ、上記で述べた小屋内の部材の痕跡などを考え合わせると、明治前半期には小屋組を含めた大規模な屋根の修理があったと考えられる。

## 5.2.2 絵図および古写真と屋根の痕跡

ここでは文献史料や絵図・古写真と建物調査の両面から屋根の変遷を考察する。

### (1) 創建当初：植物系葺材か

創建時の得仁堂の屋根を知る史料は少ない。寛文5年(1665)～寛文8年(1668)までに制作されたと見られる「後樂園絵図」(明大本)(図5.2.3 ①)を見ると、創建時はこけら葺または檜皮葺などの植物系の屋根で描かれていると見られる<sup>注2)</sup>。また、現況のような唐破風はなく、屋根頂部には宝珠が描かれている。



①「後樂園絵図」(明大本)  
寛文5年(1665)～寛文8年(1668)



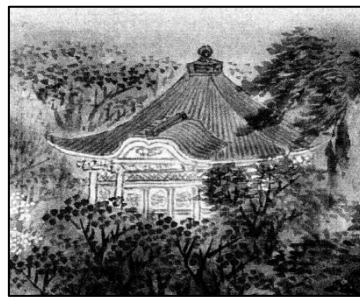
②「水戸様御屋敷御庭之図」  
元禄16年(1703)以前



③「後樂園図」  
寛政9年(1797)



④「小石川後樂園図」  
天保2年(1831)以降



⑤「後樂園之図」  
安政2年(1855)～慶応4年(1868)

図5.2.3 得仁堂を描いた絵図(部分)

前述した通り、二本の菖蒲桁の内、西側は当初材、東側は丸桁から外は創建時と考えられ、化粧棟木も当初材と見られる。後述するが、現在の唐破風板は、拝み中央で部材を継ぎ、西側は上部の裏甲と共に風喰が進行し、材料も木目がつんだ良質材であることから当初材と見られるので、唐破風は創建時から設えられていたと考えられる。

また、同じ絵図の中で、「御唐門」も唐破風が描かれていない(図3.3.3)。唐門は、光圀時代に建てられたもので、戦災で失われている前は、唐破風のある建物であった(写真2.2.5)。したがって、この絵図の建物の形状は、模式的に描かれていると考えられる。しかし、屋根の葺材に

関しては、しっかりと描き分けがなされているので、創建時の得仁堂の屋根は、こけら葺または檜皮葺などの植物系の屋根であった可能性が高い。

## (2) 江戸時代中期～江戸時代末期：瓦葺

ここでは、創建以後から、江戸時代末期までの得仁堂の屋根を見てみよう。「水戸様御屋敷御庭之図」(参考文献 20) 所収、元禄 16 年<1703>以前、図 5.2.3 ②) は、やや描画の精度は低いが屋根面に瓦葺と考えられる縦線が描かれている。この図も建物正面に唐破風はないが、頂部には宝珠を確認することができる。

また、谷文晁によって描かれた「後楽園図」(寛政 9 年<1797>、同図、③)<sup>注3)</sup>、天保 2 年(1831)以降に描かれたとされる「小石川後楽園図」(公益財団法人 徳川ミュージアム所蔵、同図 ④)、さらには、水戸藩の絵師であった山内勝春が幕末に安政 2 年(1855)の大地震以前の後楽園を復原的に描いた「後楽園之図」(同館所蔵、同図 ⑤)の三点を見ると、はっきりと瓦葺で唐破風と宝珠が描かれている。これらの絵図を見ると、それ以前に描かれた②も瓦葺屋根を想定して描いていると見てよいと思われる。

また、坂昌成が著した「御園の記」(文政 9 年<1826>)には、「いらか((葺))ふけるハ得仁堂なり<sup>注4)</sup>」と、「いらか」すなわち瓦葺を示唆する言葉が見える。これらのことから、得仁堂は創建以降、屋根は瓦葺の時期があったことが窺え、江戸時代末期まで続いたと見られる。<sup>注5)</sup>

## (3) 明治前半期：こけら葺、露盤 i

明治前半期に撮影された古写真(参考文献 73) 所収、写真 5.2.1 ①) には、得仁堂はこけら葺の姿で写る。今回の調査で遺存していたこけら葺は、その表面に風喰痕があることから、屋根葺材の下地として施工されたものではないことや、こけら葺下の野地板や野垂木は洋釘止であることなどが判明した(写真 5.2.2 ①～③)。したがって、建物に残る痕跡から明治前半期にはこけら葺に変更されたと見てよいと思われる。さらに古写真を子細に見ると、露盤の形状は上下に鉢巻状の段を付けたもので、現況のように格狭間がなく形状が違っており、唐破風上の鬼板も異なっていることがわかる(写真 5.2.2 ⑤・⑥)。

ところで、水戸藩邸は近代に入ると水戸家の手を離れて明治 2 年に兵部省の所有(明治 5 年に陸軍省)となり、明治 8 年以降、陸軍省下の「砲兵第一方面内砲兵本廠」が庭園の管理を行う。その後、明治 12 年には「東京砲兵工廠」と改称される。

そうした中、明治 3 年から東側の屋敷部分は兵器工廠が建設され、庭園部分は明治天皇の工廠行幸の休息地、更には公的な迎賓施設として残され整備される。吉川需・高橋康夫著の『小石川後楽園』によれば、「工廠はその所管地の一部としての園の整備にも意を用い、堂宇の修復、樹木の手入れ等を行って、明治六年、天皇の工廠行幸の折ここに休息たまわり(後略)<sup>注6)</sup>」と述べられている。ここには具体的にどの建物の修繕がなされたかは記されていないが、軍の管理下で国費により園内の建物の修理を行ったことは想像に難くない。特に幕末期の小石川後楽園は長らく放置されて、かなり荒廃していたと伝えられており、得仁堂も他の建物と同様に改修が行われたことは十分に考えられる。したがって、発見されたこけら葺は古写真に写るものと同一で、明治

前半期に葺かれたものと見てよいと思われる。

一方、前述の如く、この時に屋根は小屋組を含む大規模な修理がなされ、同時に瓦葺からこけら葺へ変更されたと見られるが、その変更理由は明らかとなっていない。これ以前の修理で記録に残るものは、安政2年(1855)の大地震後の安政6年(1859)である(第6章2節1項参照)。上記の絵図⑥は、大地震の年から江戸時代終わりまでに、安政地震以前の姿を復元的に描かれたもので、その屋根は瓦葺となっている。この絵図の信憑性は薄いと見られるが、地震直前までの屋根を瓦葺として描いていることは参考になる。

小石川後樂園は明治に入ると軍の管理下に入り、得仁堂は早くても明治6年(1873)時の行幸の直前に修理がなされたとすると、直近の修理から14年を経ていることになる。その間、得仁堂のメンテナンスは疎かになっていったと考えられるので、天皇の行幸を機に修理を行ったと考えられる。その際、こけら葺とした具体的な理由は明らかとはなっていないが、得仁堂が園路のすぐ傍に建っていることから、屋根の軽量化を図りつつ、幾度となく災害で瓦が落下していたことを憂慮し、安全性を確保するためであったとも考えられる。

#### (4) 明治後半期：鉄板葺 a、露盤 i

明治後半期の得仁堂は、明治40年頃の古写真(参考文献72所収、写真5.2.1 ②)に金属板の一文字葺の屋根として写る。古写真からは銅板葺または鉄板葺の可能性が考えられるが、後の大正8年頃に撮影された古写真(参考文献19)所収、写真5.2.1 ③)には、同じ屋根面が写り、かつ、後述する『名勝調査報告』には、大正12年時(関東大震災前)の屋根が「亜鉛葺」であったという記述が見られることから、明治40年頃までにこけら葺を残して鉄板を葺き、その後、明治終わりまで鉄板葺であったと推察される。このこけら葺から鉄板葺への変更理由は定かではないが、園内の建物の内、明治初期に琴画亭、明治13年に涵徳亭<sup>かんとくてい</sup>が焼失しており、火災からの延焼を防ぐ目的があったとも考えられる。

また、露盤の形状は、明治前半期のものと同じである。したがって、屋根葺材は変更されたが、露盤・宝珠はそのまま使用したものと見られる。また、遺存していたこけら葺表面には、鉄製の吊子(写真5.2.2 ④)が残っていた。これは鉄板葺に用いたものであるが、昭和中期にも鉄板葺を更新しておりこの時のものと思われる。

#### (5) 大正期：鉄板葺 a、露盤 ii

大正12年の関東大震災前に調査された『名勝調査報告』に、「得仁堂は亜鉛葺寶形造の木造平屋で建坪八合四勺である。<sup>注7)</sup>」と、記載されていることから、明治後半期と同じ鉄板葺であったと考えられる。しかし、明治40年頃と大正期に撮影されたと見られる古写真(写真5.2.1 ③)を比較すると露盤に鉢巻状の段がなく、低い露盤に替わっている。

上記の『名勝調査報告』には「大正十年二月に(中略)清水観音堂・唐門・得仁堂・八卦堂等が修繕されてゐる。<sup>注8)</sup>」とあるので、この時に露盤を取替えた可能性がある。

なお、大正12年3月7日に、それまで一般に呼ばれていた「後樂園」から「小石川後樂園」として名称を定め、「史蹟名勝天然記念物保存法」により「史蹟及び名勝」の指定を受けた。

#### (6)昭和前期：銅板葺 a、露盤 iii

昭和 10 年の古写真（参考文献 26）所収、写真 5.2.1 ④）をよく見ると、写真 5.2.1 ②および③の二点の古写真に見られる鉄板葺の屋根と唐破風部分や隅棟部分の納まりが異なっているほか、露盤が現況と同じ格狭間のあるものとなっている。昭和 4 年に出版された田村剛の『後樂園史』には、「得仁堂の屋根は銅葺きで（後略）<sup>注9)</sup>」とあり、さらに昭和 13 年に藤島亥治郎が著した「後樂園の建築」にも「現在、銅板葺で（後略）<sup>注10)</sup>」と述べられていることから、昭和前期には銅板葺に変更されていたと考えられる。昭和 2 年に、関東大震災（大正 12 年 9 月 1 日）の復興事業として園内の建物が補修されているので<sup>注11)</sup>、この時に屋根を鉄板葺から銅板葺へ改め、露盤や宝珠も新造したと見られる<sup>注12)</sup>。この銅板葺へ変更された理由も明らかではないが、「史蹟及び名勝」の指定を受けたことで、震災後の修理を機に、鉄板葺よりも高価で耐久性があり、かつ歴史的木造建造物の格付けとして銅板葺が選択されたとも考えられる。

なお、昭和 11 年 12 月 22 日、東京砲兵工廠が小倉へ移転されるのに伴い、小石川後樂園は、文部省（現文部科学省）に移管され東京市（昭和 18 年以降：東京都）が管理することになった。

#### (7)昭和中期：鉄板葺 b、露盤 iii

この頃の得仁堂の修理に関する史料は少ない。ただ、第二次世界大戦の空襲により園内のほとんどの建物が焼失しており、得仁堂も何らかの被害を受けたと思われる。

今回の工事で露盤を解体したが、その内部からは全体が焼け焦げている六本の古い部材が発見された（写真 5.2.2 ⑧）。これは現況の露盤の中棧や杵框などの組子として使用されていたと考えられ、各部材は現況の露盤側板の仕口と長さ寸法が一致した。昭和 10 年の古写真を見ると、露盤自体の形状は現在と変化していないので、昭和前半期から現在まで同じ露盤の木製下地の側板が使用されていると見られる。昭和 10 年と昭和 49 年頃の古写真（参考文献 18 所収、写真 5.2.1 ⑤）を比較すると、棟は宝珠が失われて露盤のみになっていることがわかる。したがって、組子が焼け焦げていた原因は、空襲によって宝珠が被災したからだと推察できる。

また、唐破風の箱棟は天板上に樋棟がなく、鬼板は形状が異なり、鬼台は低くなっている。昭和 49 年頃の古写真に写る一文字葺の屋根は、昭和 57 年修理時の設計図書に既存の屋根が鉄板葺であったことが記載されており<sup>注13)</sup>、このことから昭和 10 年から昭和 49 年までの間に鉄板葺に葺き替える修理が行われたが、被災した宝珠は復原されず、露盤のみで棟を納めたと見られる。この修理は、小石川後樂園が昭和 27 年 3 月 29 日に文化財保護法により「特別史跡及び特別名勝」の指定を受けたのを機に行われたとも考えられるが、修理記録は明らかになっていない。

#### (8)昭和 57 年：銅板葺 b、露盤 iii

昭和 57 年 1 月から 3 月にかけて屋根葺替部分修理が実施された（参考文献 74 所収、写真 5.2.1、⑥、昭和 57 年修理完了直後の写真）。これは今回の修理前に行われた直近の工事である。この時の修理では、鉄板葺を解体した際にこけら葺が遺存していたため、その上に母屋を並べ垂木を配り、野地板を張って銅板葺として勾配の緩い屋根としている<sup>注14)</sup>。

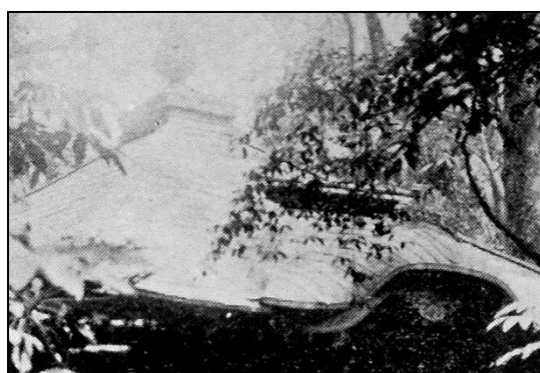
前述の如く、現在の露盤は、昭和 10 年時と細部形状が同じである。昭和 57 年時に側板を補修

し、側板中央と隅木を新規に設置して露盤の屋根を造ったと見られる(写真 5.2.2 ⑦)<sup>注15)</sup>。また、真束はこの時すでに頂部が失われ樹脂で補修を施しているが、以前は宝珠内部まで延ばされていたと考えられる。真束は212mm角で、明治前半期のこけら葺施工時のものと推定される<sup>注16)</sup>。

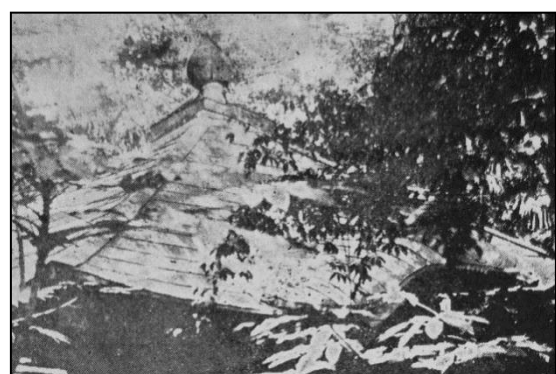
また、今回の調査で、この時の修理で唐破風上の箱棟は部分補修に留め、古材を再利用していたことが明らかとなったので、昭和中期の箱棟を踏襲したと考えられる。なお、鬼板はこの時の修理で新規に製作されている(写真 5.2.2 ⑤)。



①明治前半期：こけら葺、露盤 i



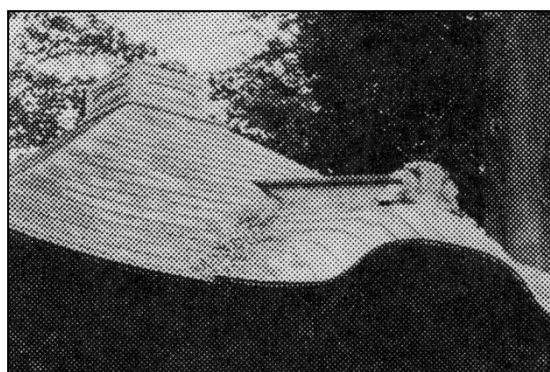
②明治後半期(明治40年頃)：鉄板葺 a、露盤 i



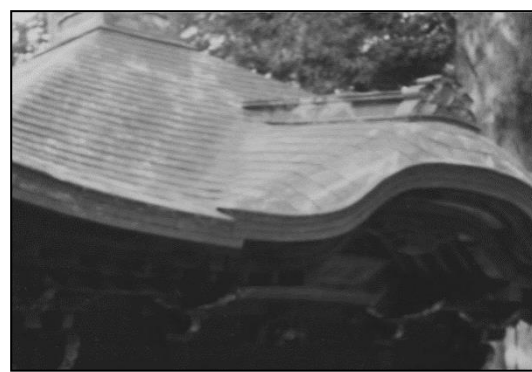
③大正期(大正10年以降)：鉄板葺 a、露盤 ii



④昭和前期(昭和10年)：銅板葺 a、露盤 iii



⑤昭和中期(昭和49年頃)：鉄板葺 b、露盤 iii



⑥昭和後期(昭和57年)：銅板葺 b、露盤 iii

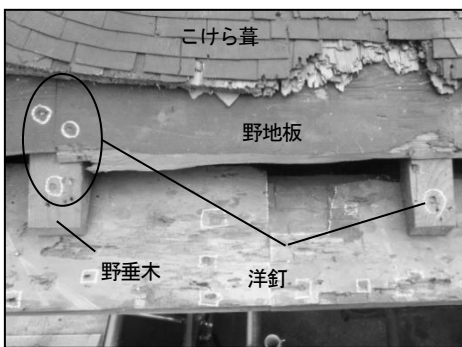
写真 5.2.1 古写真(屋根部分拡大)



①遺存こけら葺



②こけら板の風喰



③軒先詳細



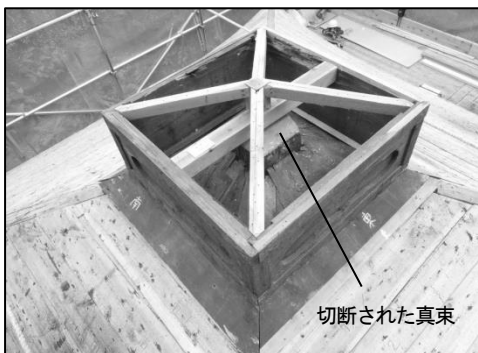
④鉄製吊子



⑤鬼板



⑥露盤



⑦昭和 57 年時の露盤補修（屋根下地等）



⑧露盤内に保管されていた昭和前期の部材

## 写真 5.2.2 現況屋根の調査



## 5.3 軒廻りの検証

### 5.3.1 裏甲の痕跡

現在の得仁堂の軒先は二重に裏甲を廻している(図 5.2.4)。この内、上部の裏甲(二重裏甲)はすべて杉材の洋釘止で、木口に雇い柄または短柄を造り出し接合していた。また、部材上端の軒先付近には、洋釘が間隔 30~45 mm 程度、折り曲げ長さ 15 mm 程度で残っていた。こけら葺は軒先が切除されていたため、厚さ 15 mm 程度の積板と、軒先の屋弛みを考慮して屋根面の軒先の納まりを確認してみたところ、こけら葺を想定して納めることが可能であった(写真 5.2.4)。これらのことから、この二重裏甲はこけら葺と同時期の施工である可能性が高いと考えられる。

なお、二重裏甲の内、唐破風の両端二箇所は背面に赤色塗装が施されており転用材の使用が確認された。この二材は共に幅が 130 mm 程度で木目の様子や風喰の進行が類似していた。その二材の内の西側は隣接する部材を欠込んで納めていることから、少なくとも他の二重裏甲の設置以後であることは明らかなので、明治前半期以降に軒廻りの修理が行われたことを物語っている。そのことは、例えば、北面中央部分と唐破風の東・西端には、昭和 57 年時に樹脂補修を施していることにも窺える(写真 5.2.3)。

また、下部の裏甲は和釘止されている部材が見られた。この内、北面中央部と東隅、東面および西面の各南隅二箇所、さらに唐破風上部の西側はいずれも木目が詰んだ良質材で、打替えられた痕跡がないので、この五箇所は当初材と考えられる。また、他の箇所にも和釘止の部材があり、東面と北面の各一箇所、唐破風の拌み部分から東側二材の計二箇所で見られた。この内、東面と北面の部材は風喰が進行し、未使用の蟻仕口や不明の彫込みも見られたことから転用材と考えられる。北東隅の留部分の鋸が一度打ち替えられた痕跡が確認されたので、修理が行われた裏付けとなる。また、唐破風上部の拌み部分から東側の二材は、互いに雇柄としていたが木目が粗く当初材とは言い難い。ただ、これら四箇所の部材は和釘止されていることから、江戸時代後期から末期までの修理材と推定される<sup>注1)</sup>。なお、洋釘止の部材の内、西面南側の部材上端から「明治□」(□部分は不明)と記された墨書が発見された。裏甲の上端にはこけら葺の野垂木尻を洋釘止していることから、明治前半期のこけら葺と同時期に一段目の裏甲の修理も行ったと見られる。以上により、現況の裏甲は最低二回の修理が行われていると考えられる。

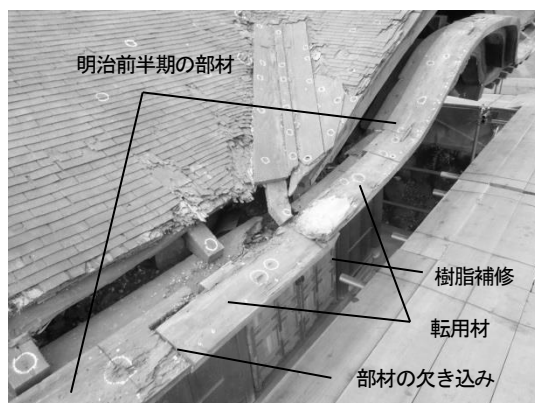


写真 5.3.1 二重裏甲（唐破風西側）



写真 5.3.2 こけら葺軒先想定



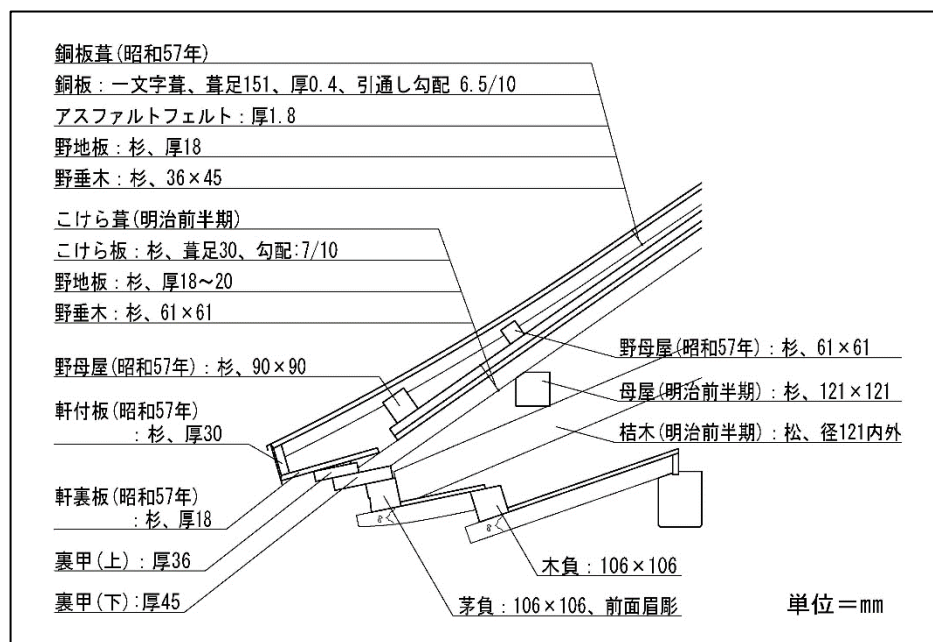


図 5. 3. 1 現状軒先詳細図

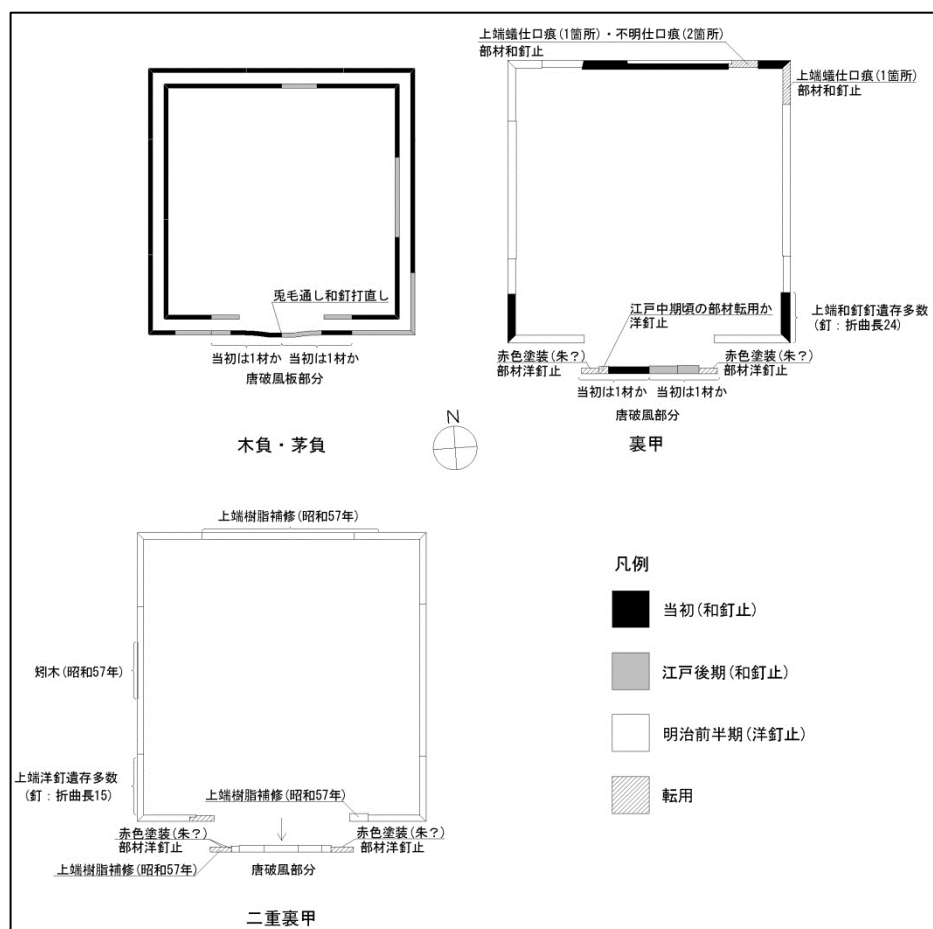


図 5. 3. 2 軒廻り材時代判別図

### 5.3.2 茅負および木負などの痕跡

今回の修理では木負・茅負（唐破風含む）の解体は行っていない。ただ、風喰が比較的進行し、和釘止で木目が詰まった良質な部材は、創建時まで遡ることが出来ると判断し、それ以外の和釘止の部材で、木目が粗いものは江戸時代中期以降と区分した。

木負は正面唐破風の両脇二箇所と東面中央、南面中央の計4箇所の部材が他の部材と比較して木目が粗く、明らかに部材が新しい。その他の部材は木目が詰まっている良質材であることから、創建時まで遡る部材の可能性はある。材種はすべて杉で、幅・成ともに106mm程度である。東・北面は後世の修理部材を含めて三本継となっているが、西面は良質の部材で二本継としていることから、東・北面の木負も施工当初は二本継であったと考えられる。南面の唐破風両脇の木負はそれぞれ二本継であったが、当初は一材で菖蒲桁に取付いていたと思われる。また、各面ともに下駄欠き部分に矧木されている箇所が見られるが、後世に取替えられた部材をさらに修理を施しているため、少なくとも木負は三回の修理歴があることがわかる。

茅負は東面北側一箇所、南面東側一箇所・西側二箇所に後補材が確認され、部材は木目が粗く他と比較して明らかに新しい。それ以外の西・南面は木目が詰まった良質材であることから、当初材の可能性が高い。材種はすべて杉で成・幅共に106mm、眉は中央位置に深さ5mmで設ける。西・北面の茅負が三本継としていることから、東面も当初は三本継であったと考えられる。南面は唐破風板と下端を揃えて継ぐ。

唐破風板は南面中央に位置し、両脇は下部を菖蒲桁、頂部は背面を化粧棟木で支える。拌み部分より東西で二分して材を継いでいるが、西側の部材は東側と比較すると目の詰んだ良質材であり、当初材と考えられる。東側の後補材と見られる破風板は兎の毛通しを和釘で打ち直した痕跡が見られたことから、江戸時代中には取替えられたものと見られる。材種は共に杉で菖蒲桁の位置で成148mm、幅127mm、表面に鎬付の眉を造り出している。なお、破風板は拌みより西側が菖蒲桁外より飛檐垂木一本目、東側は菖蒲桁中央で継いでいる。ただ東側は飛檐垂木三本目まで当初の部材と同じ良質な材料が遺存していることから、破風板は当初、拌み部分から菖蒲桁外の飛檐垂木三本目まで一材であったと考えられる。また、飛檐垂木二本目と三本目の中央付近では、成を欠き込んで段差を設け、茅負と成・幅を合わせ、眉も茅負の形状に加工するなど、唐破風板の端部は茅負のように造り出して東西の茅負と継いでいる。

化粧棟木は、端部に破風板を掛け、側面に茨垂木を差し込み、唐破風を受ける。部材は側通り真の位置で小屋内の繫梁と継がれているが、創建時の部材と見られる。菖蒲桁は、建物正面に東西二本が配置され、端部に破風板を掛け、側面に茨垂木を差し込み、唐破風を受ける。西側は小屋内部から建物外側まで一材となっており、創建時の部材と見られるが、東側は丸桁上端付近で金輪継にて二丁継され、小屋内の継木材は西側に比べて比較的新しく、時期は不明だが後世の修理で継がれたと考えられる。東西ともに一段目の繫肘木上に束を立て菖蒲桁を載せかけているが、部材尻は敷梁には接続していなかった。

以上のように、茅負や木負、唐破風板などは創建時ならびに江戸時代後期頃までの部材が多く遺存していると推測される。なお、地垂木・飛檐垂木は、すべて杉材で配付垂木や垂木掛なども創建時まで遡る可能性も考えられたが、未解体のため十分な根拠を得ることができなかった。

### 5.3.3 屋根廻りの変遷とその意義

これまで得仁堂の屋根廻りの変遷を述べてきたが、その葺材は、①植物系屋根（創建時）、②瓦葺（創建～江戸時代末）、③こけら葺（明治前半期）、④鉄板葺（明治後半期および昭和中期）、⑤銅板葺（昭和前期、昭和57年、平成24年）と、少なくとも五種類で葺かれてきた。

その中でも特に江戸時代は概ね瓦葺であり、その期間は光圀が没した元禄13年（1701）頃から、早くて明治天皇の行幸が行われた明治6年（1873）までおよそ170年間であった。得仁堂は寛文5年（1665）から寛文8年（1668）までに建立されたと考えられるので、創建から現在まで350年ほど経過している。その前半期はほぼ瓦葺の期間ということになる。その後、屋根はこけら葺や鉄板葺、銅板葺など比較的短いサイクルで変化している。

現在、軒先の裏甲は二段となっており、上部の裏甲はすべて洋釘止で後世の部材である。今回の調査では、屋根廻りの部材をすべて解体した訳ではないので、下部の当初材の裏甲上端の先端を確認できなかったが、瓦葺の場合、上部の裏甲は瓦座であったと考えられる。

ここで、得仁堂を瓦葺の姿として想定してみると図5.3.3のようになる。屋根は唐門の古写真（写真2.2.5）を参考にして本瓦葺、唐破風上の鬼は獅子口とした。宝珠の形状は現況（今回の工事で昭和10年の古写真を参考に復原したもの）に倣い、露盤の格狭間は昭和以降に設けられたので除いている。

これを見ると、建物全体は屋根のボリュームが増して重厚な印象となり、軒先は唐破風の影響が総反りのように見える。それに対し、得仁堂と同じような規模で「廟」の建物である金剛峰寺徳川家霊台秀忠霊屋（1633）（写真2.3.5）は、屋根頂部が高く、「銅瓦葺」でもあることから、比較的軽快な印象を受ける。さらに同じく写真2.3.5で挙げた輪王寺大猷院霊廟（1653）も銅瓦葺であるように、徳川将軍家に関連する廟や一連の東照宮の建物などは銅瓦葺として表面に黒漆を施すことが多い。これは徳川家の権威を示すために、技巧を凝らした高価な材料が用いられたからだと考えられる<sup>注2)</sup>。

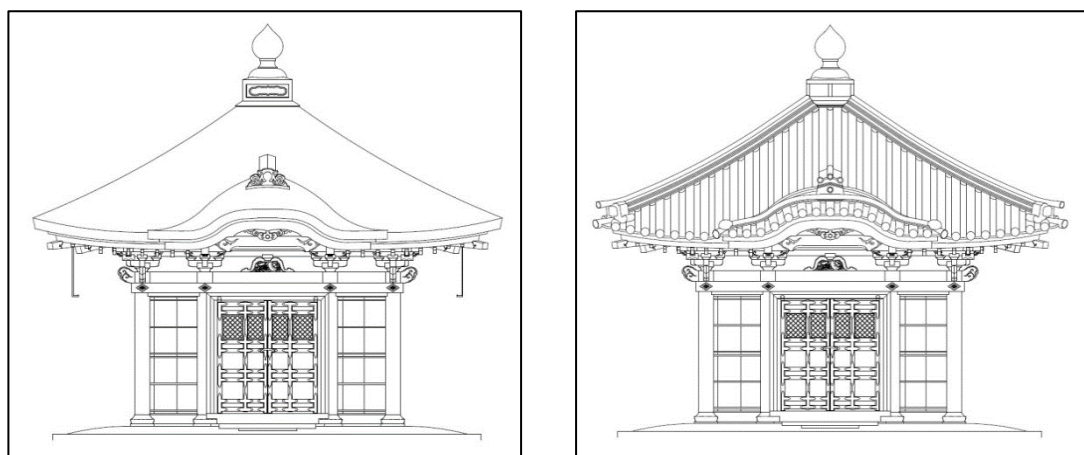


図 5.3.3 現状銅板葺と想定瓦葺正面図

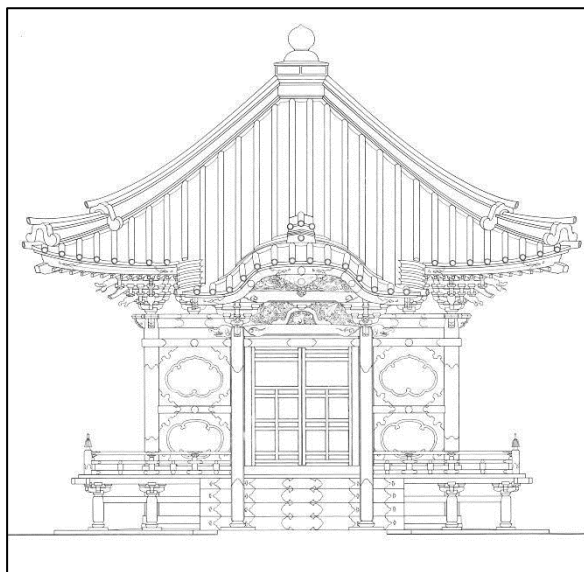


図 5.3.4 金剛峰寺徳川家霊台秀忠霊屋正面図

財団法人高野山文化財保存会編『重要文化財金剛峰寺徳川家霊台家康霊屋秀忠霊屋修理工事報告書』より転載

小石川後樂園は同じ徳川家の血縁を持つ水戸藩が作庭している。限られた人々が観賞する庭園内にひっそりと建つ得仁堂と、徳川将軍家が直接関与してその威信を示すべく建立した建物を必ずしも同じ土俵で論じることができない。しかし、得仁堂の小屋組は明治前半期に大規模な修理が行われ、多くの部材は取り替えられてしまっているのが、金剛峰寺徳川家霊台秀忠霊屋のように、屋根頂部は現在よりも高かった可能性は否定できない。

また、銅瓦葺に関しては残念ながら建物にその痕跡は発見されなかった。ただ、絵図上で植物系葺材から瓦葺に変化した期間、小石川後樂園では、①元禄 15 年（1702）に将軍綱吉の生母である桂昌院光子が来園した際に庭園の改造がなされた、②翌年の大地震によって園内の大石や福祿堂などの建物が倒壊した、などの二つの大きな出来事があった。

このうち、前者①は第 2 章 2 節 2 項で見た通り、同じく園内の建物である八卦堂が、安全性の観点から瓦葺をこけら葺として屋根の剣形の飾りを宝珠に取替えたとの記録があり、むしろこの時点では得仁堂の屋根は植物系のままであったと考えられる。

しかし、後者②は、1. この大地震を機に今後発生する火災による建物への延焼を憂慮して屋根を瓦葺とした、または、2. 地震後の園内の修理に伴って「得仁堂」の名称を「カウシ堂」とし、屋根を瓦葺にして建物の印象を一新する必要があった、と考えられる。こうした変化は、既に光圀がこの世を去っているために、彼の意図した庭園や建物の趣向に囚われずに改変することが出来たという事情も作用していたと思われる。

いずれにしても、得仁堂の屋根を植物系葺材から瓦葺にした詳細な理由や、その瓦葺の具体的な仕様は明らかとはなっていないが、瓦葺の姿で描かれている数点の絵図があることや、坂昌成の記述の「いらか」という言葉から、江戸時代には瓦葺の時期があり、その仕様は少なくとも銅瓦葺ではなかったと考えてもよいと思われる。

その後、近代に入ると、小石川後樂園はその所有者が水戸徳川から軍部へと変わり、昭和11年には文部省（現文部科学省、管理は東京都）に移管される（表5.3.1）。その中で得仁堂の屋根は戦災を除き、およそ30年ごとに屋根が葺き替えられ、材料も変化する。その要因は所有者の変化や社会的要因が大きかったと思われる。以下にその変遷を考察してみよう。

小石川後樂園が明治2年に軍の管理になると、昭和6年の天皇の行幸に際して園内建物の修理が行われるが、早くてもこの時期に得仁堂の屋根は瓦葺から「こけら葺」に変化する。その理由は、前述した五代将軍綱吉の母の桂昌院のために八卦堂が瓦葺をこけら葺とした経緯と同様に、天皇を迎えるに際して安全性を確保するためであったとも考えられる。

その後、明治後半期になると火災に対する延焼防止のためか一時期「鉄板葺」に変化する。この時期の鉄板は、『名勝調査報告』に「亜鉛葺」と紹介されているように、薄鉄板に亜鉛メッキした「亜鉛鉄板（トタン）」と考えられる。しかし、この当時は、錆びやすく耐久性が非常に悪かったと言われている<sup>注3)</sup>。我が国では、明治38年に官営八幡製鉄所で初めて亜鉛鉄板が国産化されているので、得仁堂の屋根もこの時以降に鉄板葺となった可能性がある。

大正12年3月、「史蹟及び名勝」の指定を受け、同年9月に関東大震災が発生する。その後、昭和2年頃に修理がなされ、「銅板葺」が選択された。その意図は、小石川後樂園が国の指定を受け、震災後の修理を機により高価で耐久性がある銅板葺が望まれたからだと推察できる。関東大震災では、小石川後樂園の管理を担っていた東京砲兵工廠の施設の大半が破壊された。小石川後樂園の修理が涵徳亭を除き概ね完了した昭和2年、陸軍省は砲兵工廠を小倉へ移転することを決定する。小倉の砲兵工廠は昭和8年に開設し、小石川後樂園は昭和11年に文部省に所管が移るが、震災後まもなくして文部省への移管は決定していたと言われている。

その後、太平洋戦争が始まると東京大空襲によって得仁堂は宝珠を失ったと見られる。戦後の昭和27年、小石川後樂園は改めて「特別史蹟及び特別名勝」の指定を受ける。その前後に得仁堂は修理がなされたと見られ、屋根は「鉄板葺」となる。これは物資が乏しい中、短期間に仕上げられたものと考えられ、修理記録も残されていない。得仁堂の屋根が再び「銅板葺」となるのは、昭和57年になってからである。

このように近代以降、前半は小石川後樂園の保存には陸軍省が貢献し、後半は文部省に変わることになる。その間、得仁堂の屋根葺材は様々に変化する。その大きな理由は、①安全性の確保または応急処置（こけら葺・鉄板葺）、②価値を重視（銅板葺）の二点に絞ることが出来る。こうした変化は、その時々、社会的な要求によるものが大きかったと考えられる。

①に関しては、建物の価値を見据えて選択したと言うよりもむしろ、歩行者や災害に対する安全または早期の復旧という視点からなされたものである。他方、②は、庭園内の建物として得仁堂にその真価を求めたものである。具体的には、大正12年に小石川後樂園が「史蹟及び名勝」の指定になった時期と、戦後に「特別史蹟及び特別名勝」となった時期で、共通して「銅板葺」が選択されている。

こうして考えると、近代以降、建物本体の価値を高めようとした上記②のうち、宝形造の象徴である宝珠が存在し、かつ銅板葺であった昭和前期が得仁堂の建造物としての盛期として位置づけられる、と現在の我々は評価することが出来ると思われる（写真5.2.1の④）。

一方、創建時の植物系葺材、または瓦葺の八幡堂の時代に価値を求めることも可能である。ただ、建物の痕跡などの確証は得られていない。建物の価値基準は視点によって異なり、建設当初の意図に重点を置く場合は創建時、存在期間の長さという点からは八幡堂時代となるであろう。今後、得仁堂を評価する場合、社会的観点なども含めた更なる検証も必要になると思われる。

表 5.3.1 所有者と屋根の変遷

時代	時期	所有者	屋根	主な出来事
江戸	創建：1665～1668 光圀 (治世：1661～1690) 生没年 (1628～1701)	水戸徳川	植物系葺材	元禄16年 元禄大地震  安政2年 安政大地震
	元禄16年 (1704)			
	安政2年 (1855)			
明治	明治2年 (1869)	兵部省	瓦葺	明治6年 明治天皇行幸    明治38年 垂鉛鉄板の国産化開始
	明治4年 (1871)	造兵司		
	明治5年 (1872)	陸軍省		
	明治6年 (1873)			
	明治8年 (1875)	砲兵第一方面内砲兵本廠	こけら葺	
	明治12年 (1879)	東京砲兵工廠		
	明治38年 (1905)			
大正	大正10年 (1921)	東京砲兵工廠	鉄板葺	大正12年 3月7日 「史蹟及び名勝」指定 9月1日 関東大震災
	大正12年 (1923)			
昭和～平成	昭和2年 (1927)	東京砲兵工廠	銅板葺	昭和2年 小石川後楽園復興事業
	昭和11年 (1936)			
	昭和20年 (1945)	文部省（現 文部科学省） 管理：東京市（都）	鉄板葺 (2回目)	昭和20年 太平洋戦争終結  昭和27年 「特別史跡及び特別名勝」指定
	昭和27年		銅板葺	
	昭和57年 (1982)		銅板葺 (2回目)	
	平成26年～ (2014)		銅板葺 (2回目)	

### 5.3 第5章のまとめ

本章では、得仁堂の屋根廻りを中心とした考察を行った。本章で明らかとなった点は、以下の通りである。

- ①創建時、屋根は植物系葺材の可能性はある。
- ②江戸時代中期から末期まで、瓦葺の時期があった。
- ③明治前半期、小屋組の解体を伴う大規模な修理。屋根をこけら葺とした（明治6年直前か）。
- ④明治後半期、こけら葺を残して鉄板葺とした（明治38年以降か）。
- ⑤大正期、露盤取替などの修理（大正10年か）。
- ⑥昭和前期、銅板葺に葺替（昭和2年か）、その後、空襲によって宝珠焼失。
- ⑦昭和中期、鉄板葺に葺替。（昭和27年前後か）
- ⑧昭和57年、銅板葺に葺替などの修理。
- ⑨軒廻りは当初材が遺存し、創建から少なくとも二回の修理がなされている。
- ⑩建物の前半期は瓦葺で、現在までその期間が最も長い。
- ⑪近代以降は、安全性や価値を重視するなどの要求によって屋根葺材の変更があったが、昭和前半期が建物としての盛期と評価できる。





## 第6章 造作類の建造物調査と付属物の検証



## 6.1 はじめに

これまで、得仁堂の建造物調査による考察として、第4章でトコ廻り、第5章では屋根廻りを中心に論じてきた。ここでは、建物の造作類や伯夷・叔斎の像、扁額など建物に関連する付属物を論じ、得仁堂の創建から現在に至るまでの過程を様々な要素から検証する。

## 6.2 造作類の検証

### 6.2.1 壁板および敷鴨居などの痕跡

#### (1) 壁板

得仁堂の建物本体の側廻りの壁板は内・外部両面からそれぞれ板を打付ける「太鼓張り」の形式であった。今回の工事では、外壁板はすべて解体し、内壁板は傷みが甚だしかった東面北側、北面東側、西面北側の3箇所のみ解体した。その際、各柱には壁板を納める板溝以外に横胴縁の仕口の痕跡は見られなかったので、当初は柱際に縦胴縁を立て、そこに横胴縁を取付けて壁板を太鼓張りしたものと推定される。現況の太鼓張り内部は胴縁と筋違の下地材が配されていた。ただ、南面のみ形式が異なり、厚30mm程度の板の横張りであった。

また、東西面南側腰下部分2箇所の胴縁は洋釘止のみで、昭和57年の修理工事の設計図書にも修理の記載がないことから大正から昭和中期までに取付けられたと考えられる。この腰下以外の部材は洋釘と和釘を併用して打付けられており、釘の打替えなどの形跡が見られないことから、和洋の釘は同時期に施工されたと見られる。これは和釘から洋釘への移行期に、その両方が混在していた明治前半期の施工と考えられ、特に和釘は筋違の交差部分や柱際を中心に用いていることから、使用箇所を考慮して使い分けをしたことが窺える(写真6.2.1)<sup>注1)</sup>。

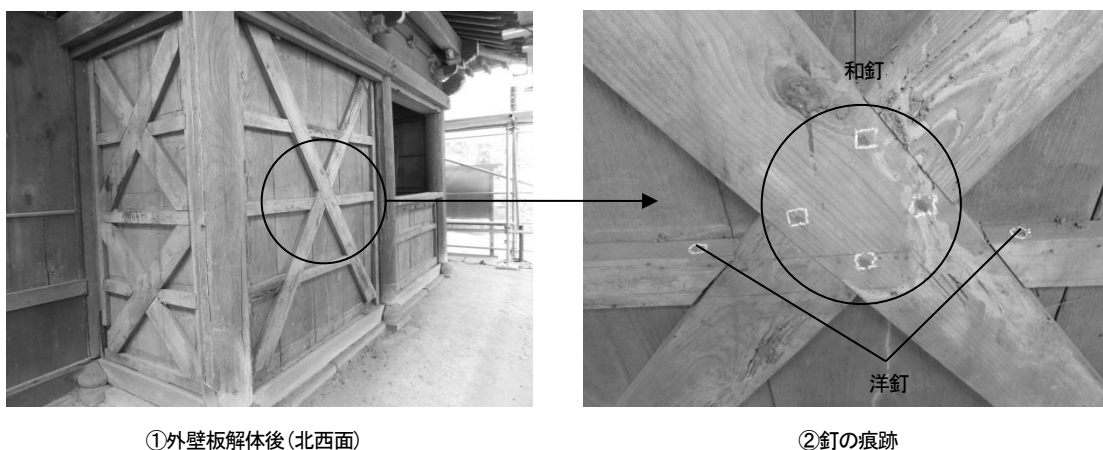


写真 6.2.1 壁下地材

一方、今回解体した壁板の裏面の加工は、主として帯鋸で仕上げられ、筋違と接触する箇所のみ厚さ調整のために鉋で研られていた。明治前半期に撮影された古写真<sup>注2)</sup>を見ると、正面西側の壁板は現況と木目が同じことから同一部材であることがわかり、さらに柱の足元は根継が施さ

れていることが確認できる(写真 6.2.2)。得仁堂は、南西隅柱以外の柱は根継が施されているが、その足元は壁内の見え隠れ部分で鉄製アングルを用いて地覆と固定されていた。このアングルは江戸時代のものとは考え難く、かつ施工順序として少なくとも胴縁を入れる前に施工しなければならないことから、壁下地や壁板と同時期に施工されたものと見られる。

柱の根継に関しては、田村剛の『後樂園史』に「安政二年十月二日の大地震に、阿波の鳴門が壊れ園内建物に被害があった。得仁堂の柱が礎石からとび出して曲つたといふ程であるから、その程度も想像せられる。而してその柱は同六年に修理せられた。<sup>注3)</sup>」と、安政6年に柱の根継がなされた可能性が考えられ、明治前半期に撮影された古写真と施工時期に矛盾はない。

以上により、壁下地材も含めた建物周囲の壁面は、屋根や小屋組と共に、明治前半期に解体を伴う修理が行われたと考えられる<sup>注4)</sup>。

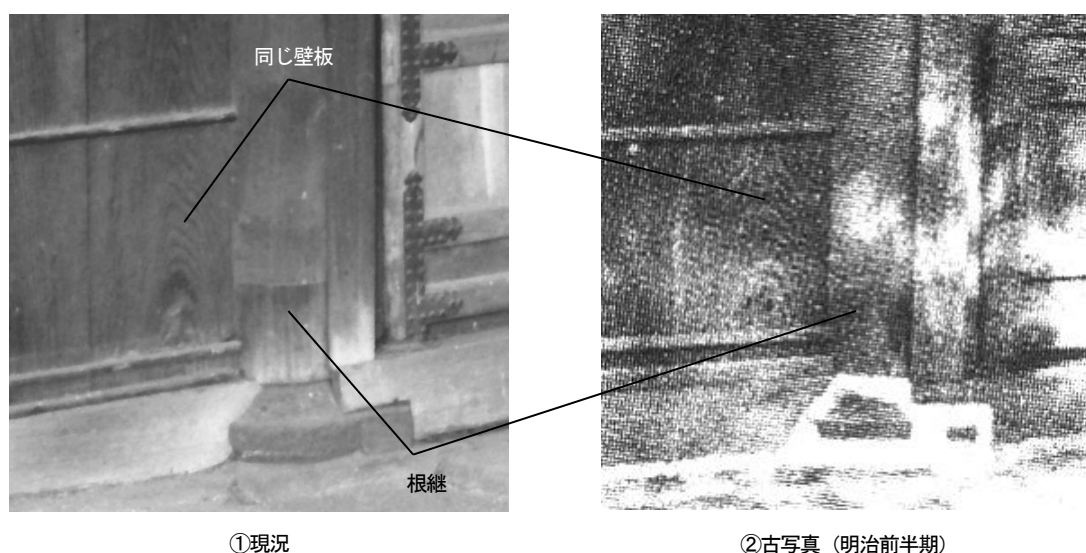


写真 6.2.2 古写真との比較

## (2) 中敷居・鴨居

東西両側面の南側は突上戸で、下部は中敷居、上部は無目の鴨居が納まる。中敷居は東西面共に1箇所ずつ端部を継ぐ。継木部分以外は良質な樺材で、柱側面にも改変の痕跡が見られないので、当初材と考えてもよいと思われる。鴨居は中敷居同様に木目が詰んだ良質材で、両端部を柱に柄差して納めており、当初材と見られる。鴨居の外下角には吊金具を打ち込み、突上戸を吊る。吊金具は現状ではすべて昭和57年のものとなっている。東西両面の突上戸の形式は、中敷居・鴨居が当初材と考えられることから、創建時から変化していないと見られる。

**(3) 付鴨居** 突上戸部分以外の鴨居は、壁板の施工後に取付ける「付鴨居」の形式である。柱には柄穴を造らず、すべて側面から釘止であった。部材は当初・江戸後期以降・明治前半期・昭和57年の概ね四世代が遺存し、転用材も確認された。材種は杉だが転用材は樺であった。

当初の付鴨居は木目が詰んだ良質な杉材で、一部和釘止が確認できたが、後世に洋釘止で固定されていた。また、江戸時代中期以降と考えられる部材は南面内部の両脇間の部材等で、当初ほど良質材ではないが、見え隠れ部分を鉾削りとして、和釘にて固定されていたことから、江戸時代後期以降の部材と見られる。

北面東側外部の付鴨居は樺で、側面に鴨居の当り痕と釘彫が見られたことから、長押の一部を転用したと推察される。部材の西側端に1箇所、和釘止されていたので、少なくとも江戸時代後期までに施工されたと見られる。この材は、内・外部いずれかの北面長押の一部の可能性もある。

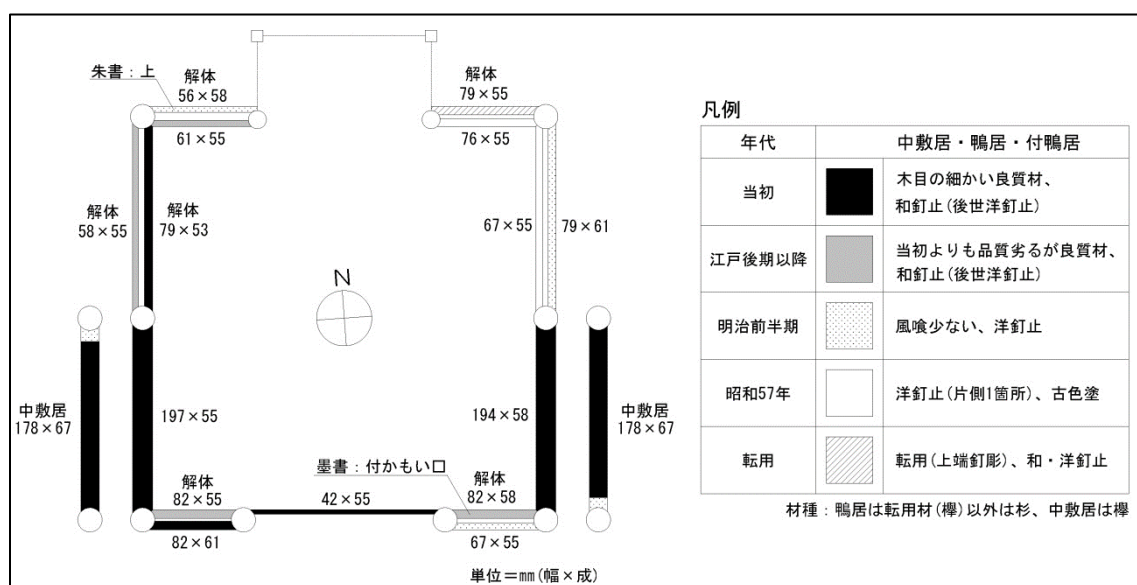


図 6.2.1 敷居・中敷居・付鴨居の仕様と時代判別図

**(4) 地覆・蹴放** 地覆は樺材で礎盤の欠込みに落とし込み、鉄製アングルで柱と固定されていたが、柱と比較し風喰も少なく比較的新しかった。正面の棧唐戸下の蹴放は、礎石上部から落とし込む形式を、近年、正面から払い込む納め方に改められ樹脂で補修されていた。この材は風喰状況から他の地覆と同時代と見られる。よって、足元廻りの地覆や蹴放は、アングルや壁下地材と同様に明治前半期の材と考えられる。なお、東面北側の地覆は後世、さらに補修が施されていた。

**(5) 長押** 今回の工事では北面外部以外の長押の解体は行っていない。目視では得仁堂に遺存している長押は柱と同様に当初の部材と見られた。ただ、前記の通り、北面外部トコ両脇の長押は元々1材であったものをトコの改造により切断して両脇間に分けて付け直している。また、各長押の上端には長押蓋が付けられていたが、数枚を残して欠失していた。頭貫側面と長押上端にはそれぞれ和釘痕が確認されたので、当初は各長押に長押蓋が付けられていたと見られる。

**(6) 格天井** 建物内部は格天井で構成される。今回、解体は行っていないが、格縁、天井板、吊木、吊木受ともに洋釘止であったので、明治前半期またはそれ以降の施工と見られる。

## 6.2.2 敷瓦の検証

得仁堂内部の床には「敷瓦」が敷き詰められている。これは白い釉薬が施された陶製で、「本業<sup>ほんぎょう</sup>敷瓦」と呼ばれている<sup>注5)</sup>。この表面には文様（印花文）が施されているが、その装飾や敷瓦の厚みなどから、江戸時代末期から明治初期にかけて、現在の愛知県瀬戸市を中心に製造されていたということが判明した<sup>注6)</sup>。現在、愛知県瀬戸市やその近郊の博物館には、得仁堂と同じ文様の敷瓦や、制作時に使用する木型が保存されている。また、名古屋市に所在する瑞巖寺僧堂（明治元年<1868>）は同じ印花文の敷瓦が敷かれており、数種の釉薬による色彩豊かな敷瓦を用いて内部空間を演出している（写真 6.2.3）。



①得仁堂の敷瓦



②様々な釉薬の敷瓦

INAX ライブミュージアム所蔵



③瑞泉寺僧堂（明治元年<1868>）内部



④同左 敷瓦詳細



⑤得仁堂と同じ文様の木型

瀬戸蔵ミュージアム所蔵

写真 6.2.3 得仁堂の敷瓦と類例

江戸時代末期から大正時代までの本業敷瓦の表面の装飾の方法を時代順に分類すると以下の通りとなる<sup>注7)</sup>。

- ①印花文(江戸時代末～明治 15 年頃)
- ②手描き文様(明治 15 年頃～明治 20 年頃)
- ③銅板転写・石版転写文様(明治 20 年頃～大正初期)
- ④半乾式(大正年間)

現況の得仁堂の敷瓦は、上記①に該当すると考えられる。前記のように、明治前半期に屋根や壁などは大規模な修理がなされたと考えられるが、敷瓦の制作年から考えて、床面もこの時に現在の敷瓦を新たに施工したと見られる<sup>注8)</sup>。

また、今回の調査では、修理のために解体した敷瓦の下部から、緑釉の敷瓦片(長辺 2 cm 程度)が発見された(図 6.2.1 ①)。文様までは確認できなかったが、この敷瓦片の釉薬を蛍光 X 線分析によって、使用されている顔料の元素を回析すると、ケイ素・カルシウム・アルミニウム・銅などを含むことがわかり、瀬戸市内で近世に製作された釉薬の成分と近似していることが判明した<sup>注9)</sup>(図 6.2.1 ②・③)。この緑釉の敷瓦は、現状の敷瓦が明治初期に製作されたものであるならば、少なくとも江戸時代末期以前に敷設されていたものとなる<sup>注10)</sup>。



①発見された敷瓦片

蛍光X線分析による元素の定性	
++++非常に多い	—
+++多い	Si
++中位	Ca Al
+少ない	Cu
(+)非常に少ない	Ba Zr Sr Rb Zn Fe Mu Ti K Cl P Mg Na

②発見された敷瓦片の顔料分析

釉の種類	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TiO <sub>2</sub>	CaO	MgO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	MnO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	CuO	合計
緑 釉	55.42	14.16	1.10	0.29	15.57	1.84	0.98	3.47	0.23	0.90	2.86	96.82

(単位: wt. %)

分析: (財)東海技術センター

③近世釉薬の分析表(瀬戸市、勇右衛門窯)

瀬戸史編集委員会編『瀬戸市史 陶磁史 篇五』より一部転載

図 6.2.2 発見された敷瓦片と顔料分析



建物に釉薬付の敷瓦が使用された歴史は古い。例えば光圀の叔父である尾張初代藩主、徳川義直(1601～1650)の霊廟・源敬公廟(承応元年<1652>、定光寺・瀬戸市)は、明から帰化した陳元賛<sup>ちんげんざん</sup>の設計によるもので、施釉された敷瓦を用いている現存最古の建物と言われている。源敬公廟の築地塀(承応元年<1652>)には緑色の釉薬が施された陶器が使用されており、緑釉のものは江戸時代初期にはすでに生産され、建物に使用されていたことがわかる(写真6.2.4)。

徳川義直は光圀の叔父であり、光圀が若い頃に義直から積極的に儒教の教えを学んでいた。同じく儒教の教えを背景として建てられた得仁堂にも、源敬公廟と同様に施釉された敷瓦が創建当初から敷き詰められていたことは十分に考えられる。



①霊廟内部



②築地塀

写真提供：瀬戸蔵ミュージアム



③同左 緑釉敷瓦詳細

阿木香, 日野永一, 新見隆, 山本正之『日本タイル博物誌』(INAX)より転載

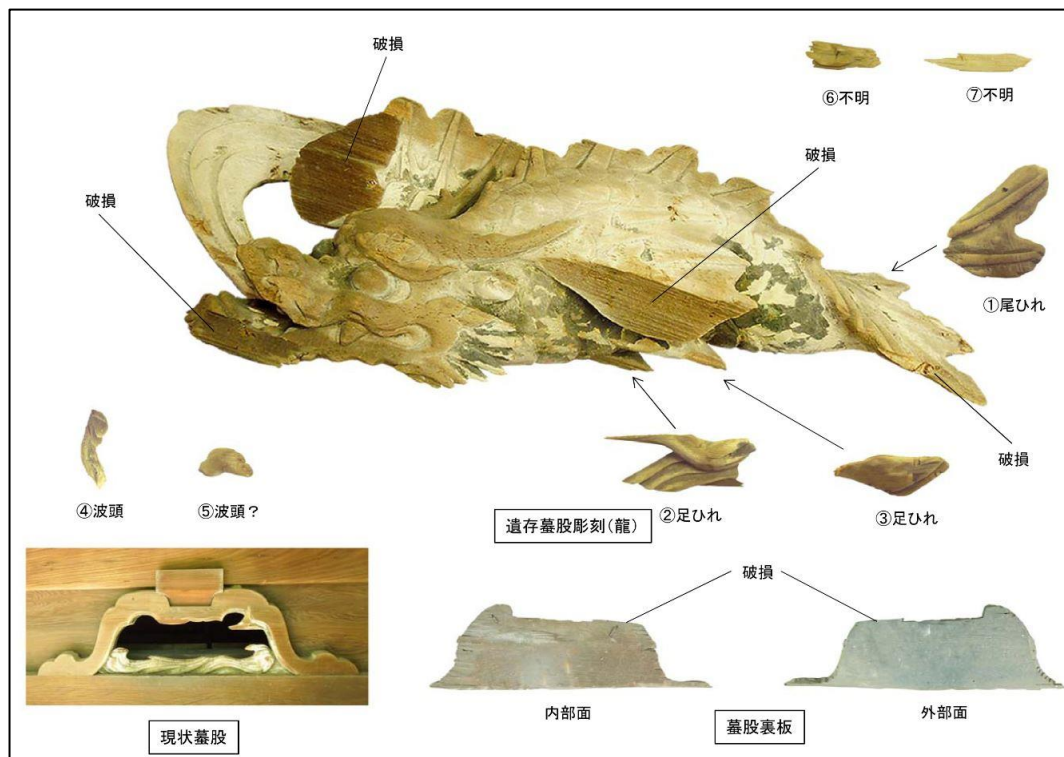
写真6.2.4 源敬公廟(承応元年<1652>)



### 6.2.3 墓股彫刻の塗装

得仁堂の正面には、龍の彫刻が施された墓股がある<sup>注1 1)</sup>。得仁堂になぜ龍の彫刻が施されているのか、その理由は詳らかとなっていない。ただ、光圀は、父から贈られた馬に「飛龍<sup>ひりゅう</sup>」と名付け、さらに龍の屏風を飾っていたと伝えられる。彼自身、字<sup>あざな</sup>を「子龍」としていることから、龍を好んでいたことは窺える。

また、龍の彫刻は、昭和10年に撮影された古写真<sup>注1 2)</sup> (写真6.2.5 ②)、および彫刻部の破損・欠失している箇所から、翼があったことがわかる。例えば、近在で建設年代に近い浅草神社幣殿(慶安2年<1649>、東京都)にも翼をもつ龍の彫刻がある。翼をもつ龍は、強いものがさらに強さを増すという意味で「龍に翼を得たる如し」という言葉があるように、得仁堂の建設に際し、光圀は自身の生き方に対する強い決意を建物に込めたとも想像できる。



①墓股破状況（修理前）



②古写真（昭和10年撮影、墓股部分拡大）



③浅草神社幣殿(慶安2年<1649>)

写真6.2.5 得仁堂の墓股と類例

今回、修理前に得仁堂の塗装・彩色が確認できた箇所は、組物の木口、頭貫木鼻木口、拳鼻木口、蓑束線形下部、渦紋、墓股、内部化粧胴縁である。組物などの木口に関しては、昭和 57 年の修理時に下地処理を含めて新たに塗装を施し直したため、当初の塗装はほとんど残されていない。しかし、墓股彫刻部分は、前回の修理時も彩色の復原は行っていないので、創建当初の顔料が残されている可能性があった。そこで、塗装歴の確認と色彩復原の調査を兼ねて、墓股部分を中心に「X線回析」と「蛍光X線分析」の2種類の顔料分析を行った。(写真 6.2.6、表 6.2.1) その際、木部に直接塗られている下地部分の当初顔料を採取するように心掛けた<sup>注13)</sup>。

一般に木部に彩色を施す場合、顔料の発色を良くするために白土や胡粉などの白色塗料を下地として塗ることが多い。しかし、墓股部分の分析結果を見ると、龍彫刻の胴体側面や墓股の枳側面・覆輪からはCu(銅)を主成分とした元素が検出された(試料No.1・5・7・8・10・13・15・18)。この銅の成分は龍本体の当初の上部彩色とも考えられたが、それ以外の墓股枳の内側や覆輪でも検出された。特に墓股枳の内側には目視でも銅を主成分とする緑青の顔料を確認することができ、採取が困難な程しっかりと接着していた。そこで、緑青を含む堅牢でしっかりとした彩色の下塗り技法の中に「鍍泥下地」があることに注目した。

鍍泥下地は緑青(白緑)・真鍍粉等を主材料として、膠などで練って木部に塗布して使用する。これは近世の神社や仏閣などの木地面の彩色の下塗り技法として用いられた技法である。真鍍粉はCu(銅)とZn(亜鉛)の合金で一般に銅7亜鉛3程度の比率である。分析を行った試料のうち、No.1・5・7・8・10・13・15の分析結果を見るといずれもZn(亜鉛)が含まれており、鍍泥下地の可能性を裏付ける結果となった<sup>注14)</sup>。したがって、分析結果や顔料の状態を考え合わせた結果、墓股彫刻には鍍泥下地が施されていたと考えられる。

その他、龍彫刻の底面や口、墓股枳の覆輪(試料No.2・3・4・6・9)にはPb(鉛)およびHg(水銀)が検出されていることから、上塗りとして水銀を主成分とする朱、下地として鉛丹が使用されていたと見られ、龍の底面(No.6)にはAu(金)が検出されていることから、部分的に金箔を施していたと考えられる。波部分はX線解析ではCaSO<sub>4</sub>・2H<sub>2</sub>O(石膏)が認められるが、CaCO<sub>3</sub>(炭酸カルシウム・漆喰)の変質である可能性があるため、胡粉をベースに彩色が施されていると考えられるが、特に有効な岩絵の具の顔料は検出されなかった。したがって、波部分の上塗り分析では検出されにくい本藍などの染料系の絵具を使用したと推察される<sup>注15)</sup>。

さて、鍍泥下地は、江戸期の彩色技法を伝える『丹青指南』に詳しく紹介されている。この書は幕末の狩野派に学んだ著者、市川守静がまとめた彩色の技術書で、大正15年に東京美術学校の校友会誌に付録として掲載されたものである。ここには、この当時彩色された杉戸絵などの木部の胡粉下地の多くが、部分的に剥落していることを憂慮し、伝統的な技法を習得するべく書を著した経緯も述べられており、彩色において下地塗装がいかに大切かを窺い知ることができる。『丹青指南』の「鍍泥下地」に関する記述は以下の通りである。

「一、鍍泥 比鍍泥と称する下塗り資料は、荘厳なる建物の天井、又は神社仏閣等に於ける天井、および壁画木地面の下地として、最も濃厚に塗るものなり、然して神社仏閣等に施す鍍泥の如きは漆塗の下地なれば、大抵は、漆工の受持にて塗るなり、然して此に画きたる、絵の余地の如きは、大かた金地にして、金箔を漆にて置たるものなり、故に是等は、漆工の手にて施した

るも若し高貴の宮殿、天井の下地に塗るべき鍮泥の如きは、技術者直ちに製して、用ゐたるものとす、然して其絵の余地は、大かた白地にして胡粉の塗限なり、故に是等の場所に於ては、悉皆技術者の手にて、完成するものなれば鍮泥の製法をしめすべし比鍮泥を製ずるには、其鍮粉と、煉緑青とを当分し、之を濃厚に煮沸溶融したる、膠液又は煮沸溶融したる、鹿角菜にて泥々に煉りたる粥状の塗料とす、然して此原料は、何れも酸化性の配合物なるが故に、塗たる資料は、年月を経るにしたがひ、其木地面より透滲して、堅牢に錆着くものなり、然して此鍮泥の下地ある装飾画にして、関東筋に、現存したる箇所は、東京の芝増上寺に於ける徳川氏の霊廟、又静岡県久能山東照宮および栃木県日光の東照宮是なり。(此鍮泥も塗りて乾きたるときに礬水を布きて後に画くべし。) 注16)」。ここには鍮泥下地は木部にしっかりと固着して離れなくなるというその真価を示す記述がなされ、今回の調査でも墓股枠内側の顔料の堅牢さを裏付けていると言えよう。

また、鍮泥下地は江戸期の画壇である狩野派独特の技法であることが知られている注17)。そこには当時の水戸徳川家との関係も窺われる。光圀治世時、紀伊徳川家御用絵師であった狩野興以の2男の狩野興也(生年不明～1673)という絵師が仕えていたことが判明している注18)。この人物の詳細は明らかになっていない部分が多いが、今回の分析結果から、得仁堂の彩色に狩野派の絵師が関わっていることを窺わせる結果となった。

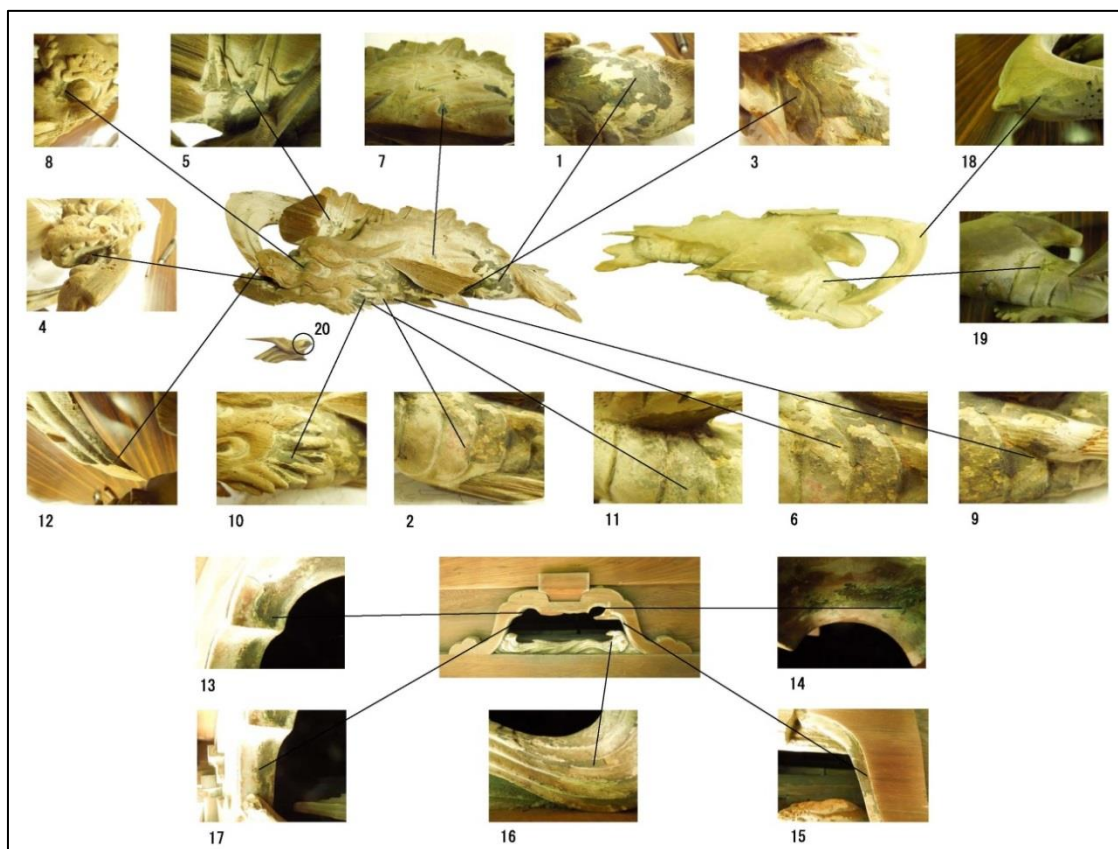


写真 6.2.6 墓股顔料採取箇所

表 6. 2. 1 墓股顔料分析表①

【相対強度】++++:非常に強い, +++:強い, ++:中位, +:弱い, (+:非常に弱い									
試料 No.	区 分	採取位置	調査内容		材料分析調査報告				
			目視観察等	分析目的	色・形状等	X線回折による形態分析	蛍光X線分析による元素の定性	考察	推定材料
1	墓股 龍	龍尾ひれ 側面	緑色と表面に黒色あり。黒色 は後世の彩色と見られる。(共 通) 現在遺存している彩色 は、鉛泥下地+胡粉+彩色 (当初)に胡粉+彩色(後補) を塗装しているようである。	緑青が使われている か確認したい。 合わせて鉛泥下地 が使われていた痕 跡を確認したい。	黒色 (裏・緑青)	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++++ Cu <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> (OH) <sub>2</sub> (Brochantite) ++ Au(Gold) + SiO <sub>2</sub> (α-Quartz) (+)	++++ +++ Cu, Ca, S ++ + As (+) Sr, Pb, Au, Zn, Fe, Mn Cr, K, Cl, P, Si, Al, Na	X線回折では銅の腐食生成物が 検出され、蛍光X線分析では亜鉛が 検出された。銅と亜鉛の共存を示唆 しており鉛泥下地の可能性がある。 腐食性生成物は顔料の緑青が腐食 した可能性もある。また、金の成分も 見られる。	鉛泥下地 + 胡粉 緑青 金箔
2	墓股 龍	龍胸ひれ 付近下端	当初は金箔地に朱調に見え る。その上に黄土地に朱調に 見える。	金箔、朱、黄土が使 われているか確認し たい。	赤色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++++ PbSO <sub>4</sub> (Anglesite) +++ HgS(Cinnabar) ++ Cu <sub>2</sub> (SO <sub>4</sub> )(OH) <sub>2</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Posnjakite) (+)	++++ +++ Ca, S ++ + Hg (+) As, Fe, Cr, K, P, Al, Mg Na	X線回折で硫酸鉛鉱と水銀朱が 検出されており、赤色の下塗りには鉛 丹を使い、上塗りに水銀朱を使用し たか、金や黄土は今回の試料では検 出されなかった。	胡粉 上塗りは朱 朱下は鉛丹
3	墓股 龍	龍脇腹	緑青+朱(表面黒色)に見える	緑青、朱が使われて いたか確認したい。	黒色 赤色 濃緑色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++++ PbSO <sub>4</sub> (Anglesite) ++ HgS(Cinnabar) ++	++++ +++ Pb, Ca ++ + Hg, Si (+) Sr, As, Zn, Fe, Cr, Ti K, Cl, P, Al, Mg, Na	蛍光X線分析では鉛・水銀が検出 されており、赤色の下塗りに鉛丹 を使い、上塗りに水銀朱を使用した のでは、銅の検出は少ない為、緑青 の可能性は低い。	胡粉 上塗りは朱 朱下は鉛丹
4	墓股 龍	龍口	胡粉+朱(表面黒色)に見える	朱が使われているか 確認したい。	赤色	HgS(Cinnabar) +++++ CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++	++++ +++ Ca, S ++ + Hg, Fe, Na (+) Cr, K, P, Al, Mg	X線回折で水銀朱が検出された。 蛍光X線では鉛が検出されたこと から赤色の下塗りに鉛丹を使い、上 塗りに水銀朱を使用したか。	胡粉 上塗りは朱 朱下は鉛丹
5	墓股 龍	龍(奥) 側面	胡粉+緑青(表面黒色)に見える	緑青が使われている か確認したい。 合わせて鉛泥下地 が使われていた痕 跡を確認したい。	濃緑色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++++ Cu <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> (OH) <sub>2</sub> (Brochantite) +++ SiO <sub>2</sub> (α-Quartz) ++	++++ +++ Cu ++ Ca, S + As, Si (+) Zn, Fe, Ti, K, P, Al	X線回折では銅の腐食生成物が 検出され、蛍光X線分析では亜鉛が 検出された。銅と亜鉛の共存を示唆 しており鉛泥下地の可能性がある。 腐食性生成物は顔料の緑青が腐食 した可能性もある。	鉛泥下地 + 胡粉 緑青
6	墓股 龍	龍下端	黄土+朱(表面黒色)に見える	朱と黄土が使われて いるか確認したい。	黒色 赤色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++++ HgS(Cinnabar) +++	++++ +++ Pb, Ca ++ + Hg, S (+) Au, Fe, K, Cl, P, Si, Al Mg	X線回折で水銀朱が検出された。 蛍光X線では鉛が検出されたこと から赤色の下塗りに鉛丹を使い、上 塗りに水銀朱を使用したのでは。 金も微量ではあるが検出された。	胡粉 上塗りは朱 朱下は鉛丹 金箔
7	墓股 龍	龍側面	緑青(表面黒色)に見える。	緑青が使われている か確認したい。 合わせて鉛泥下地 が使われていた痕 跡を確認したい。	淡緑色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++++ Cu <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> (OH) <sub>2</sub> (Brochantite) +++	++++ +++ Cu ++ Ca, S (+) As, Zn, Fe, K, Al	X線回折では銅の腐食生成物が 検出され、蛍光X線分析では亜鉛が 検出された。銅と亜鉛の共存を示唆 しており鉛泥下地の可能性がある。 腐食性生成物は顔料の緑青が腐食 した可能性もある。	鉛泥下地 + 胡粉 緑青
8	墓股 龍	龍目	緑青に一部朱と黒色が見える	緑青、朱、黒が使 われていたか確認し たい。	赤色 緑色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++++ PbSO <sub>4</sub> (Anglesite) +++++ Cu <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> (OH) <sub>2</sub> (Brochantite) +	++++ +++ Pb +++ ++ Cu + Ca, Cl, S (+) Zn, Fe, Ti, Al	X線回折では銅の腐食生成物が 検出され、蛍光X線分析では亜鉛が 検出された。銅と亜鉛の共存を示唆 しており鉛泥下地の可能性がある。 腐食性生成物は顔料の緑青が腐食 した可能性もある。硫酸鉛鉱は検出 されたが、水銀が検出されていない 為、朱以外の赤色上塗りの可能性あ り。	鉛泥下地 + 胡粉 弁柄 墨
9	墓股 龍	龍胸ひれ際	黄土+朱(表面黒色)に見える。	朱が使われているか 確認したい。	赤色 黒色	PbSO <sub>4</sub> (Anglesite) +++++ CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++	++++ +++ Pb +++ ++ Ca, S + Hg, Cl (+) Sr, Zn, Ti, K, P, Al, Na	蛍光X線分析では鉛・水銀が検出 されており、赤色の下塗りに鉛丹 を使い、上塗りに水銀朱を使用した のでは。銅の検出は少ない為、緑青 の可能性は低い。黄土の成分は検出 されなかった。	胡粉 上塗りは朱 朱下は鉛丹
10	墓股 龍	龍ひげ	緑青(表面黒色)に見える。	緑青が使われている か確認したい。 合わせて鉛泥下地 が使われていた痕 跡を確認したい。	黒色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++++ Au(Gold) +++ Cu <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> (OH) <sub>2</sub> (Brochantite) +	++++ +++ Ca ++ S + Cu, Si (+) As, Au, Zn, Fe, Mn, Ti K, Cl, P, Al, Na	X線回折では銅の腐食生成物が 検出され、蛍光X線分析では亜鉛が 検出された。銅と亜鉛の共存を示唆 しており鉛泥下地の可能性がある。 腐食性生成物は顔料の緑青が腐食 した可能性もある。金も微量ではある が検出された。	鉛泥下地 + 胡粉 緑青 金箔
11	墓股 龍	龍ひげ 下端	朱(表面黒色)に見える。	朱が使われているか 確認したい。	赤色 黒色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++++ SiO <sub>2</sub> (α-Quartz) ++	++++ +++ Ca, S ++ + Zn, Fe (+) Ti, K, Pb, P, Al	X線回折では呈色顔料となるものは 検出されなかった。蛍光X線分析では 赤色顔料として使われるのは鉄の み。	不明
12	墓股 龍	波	胡粉(表面黒色)に見える。	目視で白色が使 われているのを確認 できるが、青色が使 われた痕跡があるか 確認したい。	白色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++++ SiO <sub>2</sub> (α-Quartz) +	++++ +++ Ca +++ S, Na + Si (+) Zn, Fe, Ti, K, P, Al	X線回折で石膏が検出されている ことから胡粉が使われた可能性は高 い。青色となる成分は検出されなかつ たが、青色は劣化が激しく検出されな いことも多い。	胡粉
13	墓股 持	墓股内側 (左)上部	緑青(表面黒色)に見える。	緑青が使われている か確認したい。 合わせて鉛泥下地 が使われていた痕 跡を確認したい。	淡緑色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) +++++ Cu <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> (OH) <sub>2</sub> (Brochantite) ++ SiO <sub>2</sub> (α-Quartz) (+)	++++ +++ Cu, Ca, S +++ + Pb, As, Zn, Fe, Mn, Ti (+) K, Cl, P, Si, Al, Mg, Na	X線回折では銅の腐食生成物が 検出され、蛍光X線分析では亜鉛が 検出された。銅と亜鉛の共存を示唆 しており鉛泥下地の可能性がある。 腐食性生成物は顔料の緑青が腐食 した可能性もある。	鉛泥下地 + 胡粉 緑青
14	墓股 持	墓股内側 (右)上部	緑青(表面黒色)に見える。	—	—	— 13と同じ為、分析なし	— 13と同じ為、分析なし	— 13と同じ為、分析なし	鉛泥下地 + 胡粉 緑青



表 6.2.2 墓股顔料分析表②

試料 No.	区 分	採取位置	調査内容		材料分析調査報告				推定材料
			目視観察等	分析目的	色・形状等	X線回折による形態分析	蛍光X線分析による元素の定性	考察	
15	墓股 枠	墓股(右) 匠輪	胡粉(表面黒色)に見える。	墓股内側とは仕様が異なっているように見える。白色に見えるが他に検出されるか確認したい。	黒色 濃緑色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) ++++ PbSO <sub>4</sub> (Anglesite) ++++ PbO(Litharge) ++++ Cu <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> (OH) <sub>6</sub> (Brochantite) ++ HgS(Cinnabar) ++	++++ Pb Cu, Ca, S Hg (+) Zn, Fe, Mn, Ti, K, Cl P, Si, Al, Mg, Na	X線回折では銅の腐食生成物が検出され、蛍光X線分析では亜鉛が検出された。銅と亜鉛の共存を示唆しており、腐食生成物は顔料の緑青が腐食した可能性もある。蛍光X線分析では鉛・水銀が検出されており、上塗りには鉛丹を使い、上塗りに水銀朱を使用したか。	漆泥下地 + 胡粉 上塗りには朱 朱下は鉛丹
16	墓股 枠	墓股波	胡粉(表面黒色)に見える。	目視で白色が使われているのを確認できるが、青色が使われた痕跡があるか確認したい。	白色 緑青	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) ++++ SiO <sub>2</sub> (α-Quartz) ++	++++ Ca, S Si ++ Fe, Al (+) Sr, Pb, Zn, Mn, Ti, K, Cl P, Mg, Na	X線回折で石膏が検出されていることから胡粉が使われた可能性は高い。青色となる成分は検出されなかったが、青色は劣化が激しく検出されないことも多い。	胡粉
17	墓股 枠	墓股内側 (左)下部	緑青(表面黒色)に見える。	—	—	— 13と同じ為、分析なし	— 13と同じ為、分析なし	— 13と同じ為、分析なし	漆泥下地 + 胡粉 緑青
18	墓股 龍	波裏	緑青若しくは群青に見える。	使われた顔料が緑青か群青か確認したい。	白色 緑色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) ++++ Cu <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> (OH) <sub>6</sub> (Brochantite) ++++ SiO <sub>2</sub> (α-Quartz) +++	++++ ++ ++ Cu, Ca, S + Fe, Si, Al, Na (+) K, P, Mg	X線回折では銅の腐食生成物が検出された。緑青の可能性もあるが、群青にも近い分子構成をしているのでどちらかは分析では不明。	不明
19	墓股 龍	口裏	金箔に見える。	金箔が使われているか確認したい。	白色 (裏・緑青)	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) ++++ SiO <sub>2</sub> (α-Quartz) ++ Au(Gold) (+)	++++ +++ ++ Ca, S + (+) Pb, Au, Fe, Ti, K, Cl, P Si, Al, Mg	金がわずかに検出された。	金箔
20	墓股 龍	右足 (断片)	金箔に見える。	金箔が使われているか確認したい。	白色 黒色 赤色	CaSO <sub>4</sub> ・2H <sub>2</sub> O(Gypsum) ++++ PbSO <sub>4</sub> (Anglesite) ++++	++++ +++ ++ Pb, Ca + S + Si (+) Au, Zn, Fe, Ti, K, Cl, P, Al, Mg	X線回折で硫酸鉛鉱が検出された。赤色・箔下の可能性あり。蛍光X線分析で金も検出された。	金箔



写真 6.2.7 顔料分析結果に基づく墓股彩色復原

## 6.2.5 建具および金具類の検証

### (1) 建具

#### ① 棧唐戸

得仁堂の正面中央間は幣軸を廻し、棧唐戸を建て込んでいる。棧唐戸は外開きの両折で、縦框と横棧の間に錦板を嵌め込むが、上方部分は菱格子を入れる。材種はすべて杉である。現在の棧唐戸は、部材の風喰などから創建当初のものとは言い難いが、田村剛の『後樂園史』には、安政6年(1859)の修理内容として、「修復の個所は貫鼻胡粉付、扉組子なおほし(中略)扉録物等新規取替<sup>注19)</sup>」とあることから、安政6年(1859)には棧唐戸の組子や金具等の修理を行ったことが窺える。この記述が現在の棧唐戸であるかは不明だが、近年のものではないことは明らかなので、江戸時代末期の安政6年までには現在の棧唐戸は取付けられていた可能性が高い。なお、菱格子や八双金具は昭和57年の修理に新調されている。

## ②突上戸

東西側面の南側は突上戸を吊り込んでいる。四周には框を廻し錦板を嵌め込み、内外に化粧胴縁を打つ。上框の両端に蝶番を打ち、鴨居から吊る。突上戸の材種は杉だが、西面の上框のみ檜で、上端に2箇所柄穴のある転用材であった。

東面は羽目板の仕上げを内外とも浮造りとし、板傍を樋部倉矧とするが、1枚は焼板が使用されていた。上下框は昭和57年に取替えられていた。西面は上框と羽目板は転用材と考えられ、特に羽目板の板傍は突付で、内部側表面には幅90mm程度の胴縁の当り痕と洋釘痕があったが、以前の用途を明らかに出来なかった。突上戸は東西面とも総じて部材全体の風喰は少なく、明治前半期頃のものと思われるが、上記のように建具形式は創建当初から変化していないと見られる。天保2年(1831)以降に描かれたとされる「小石川後楽園図」(図5.2.3④)にも突上戸が描かれており、少なくとも江戸時代末期にも現況同様に突上戸であったことはわかる。なお、施錠は敷居上端の壺金具に環金具を通し、建具内側に打付けられた壺金具に掛ける簡易なものであった。

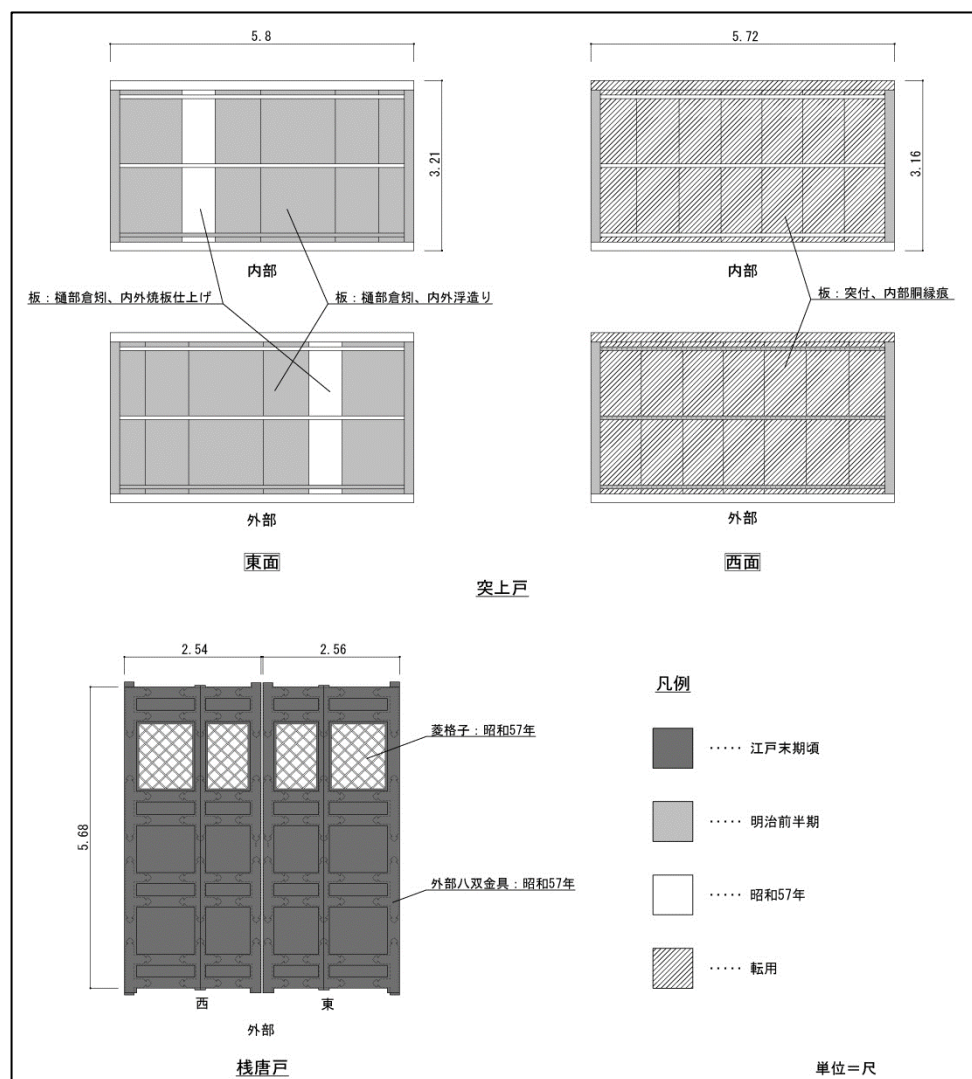
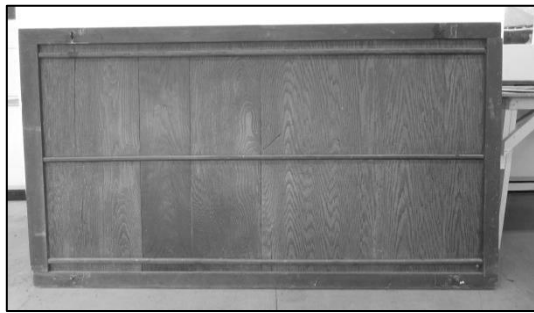
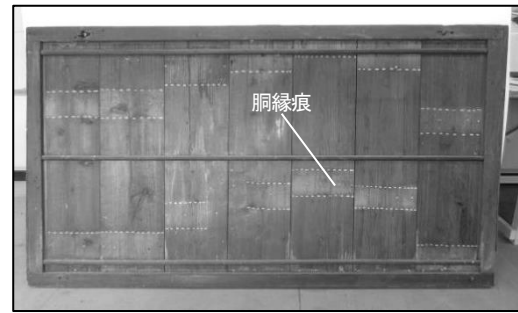


図 6.2.3 建具時代判別図



①東面



②西面

写真 6.2.8 突上戸（内部側）

## (2) 金具

得仁堂に使用されている金具は、垂木や隅木の鼻隠し、長押の釘隠が銅製であったが、それ以外の軒廻りや建具廻りのものはすべて鉄製であった。主として江戸時代末期から昭和 57 年までに製作されたものと見られる。

### ① 棧唐戸

出入口の地覆や塀軸、棧唐戸には鉄製の金具が取り付けられている。地覆や幣軸の藁座金具、棧唐戸の八双金具と戸締り金具はいずれも昭和 57 年の修理時に製作され、漆焼付塗装が施されたことが、議事録および図面などから判明し、遺存する金具に倣って製作されたものと見られる。また、史料からは前述した田村剛の『後樂園記』に、「扉録物等新規取替」とあり、「録＝なまがね（生鉄）」すなわち鉄製の金具を取替えたと解釈できる。したがって、安政 6 年(1859)時には、現状と同様に鉄製で同じ形状であった可能性がある。

藁座金具は地覆と塀軸にそれぞれ鉋釘止めし、棧唐戸の軸には軸摺金具を付け、藁座金具に建て込む。昭和 57 年時の設計図書を見ると、下部の藁座金具には鉄製の軸受が入れられていたことがわかるが、欠失していたために開閉に支障がある状態であった。戸締りは、棧唐戸の内部側に落とし金具が取り付けられている。金具は落猿形式で東西の戸にそれぞれ付けられ、取手部分は亀の形状に造られている。しかし、蹴放上部には落とし金具の受座がなく、痕跡も確認されなかった。また、東側の金具は固定されていて使用できない状態になっていた。棧唐戸には落とし金具用の鍵穴はないため、他から移動または転用された可能性もある。中央外部側にある戸締りの掛金は、鋳鉋とも欠失した状態であったが、室内の床上に落ちていたものを発見した。この掛金は、八双金具と同様に昭和 57 年の修理で取り替えられたものであるが、それ以前の戸締りの形式については不明である。現状の戸締りは、受金具を取り付け南京錠にて施錠していた。

### ② 突上戸

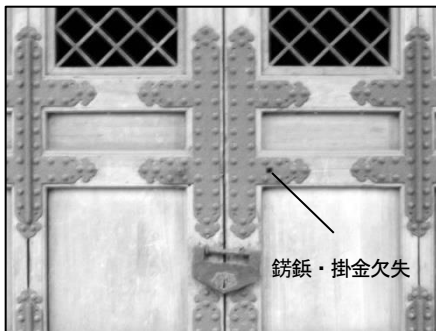
突上戸の金具は、上部を蝶番 2 点で支え、外側に突き上げ、引掛金具に掛ける形式である。蝶番と引掛金具は鉄製で、昭和 57 年に新規製作されたものである。以前の仕様は不明であるが、中敷居から棒で受ける形式であった可能性もある。施錠は敷居上端に壺金具を打って環金具を通し、建具内側に打付けた壺金具に掛ける形式である。突上戸側面の柱面 4 箇所には、成 15 mm×幅 9 mm、深さ 15 mm の穴があったが、戸締りに関係する金具の痕跡かどうか詳細は不明であった。



① 棧唐戸：藁座金具（幣軸）



② 棧唐戸：藁座金具（地覆）



③ 棧唐戸：八双金具、南京錠（外側）



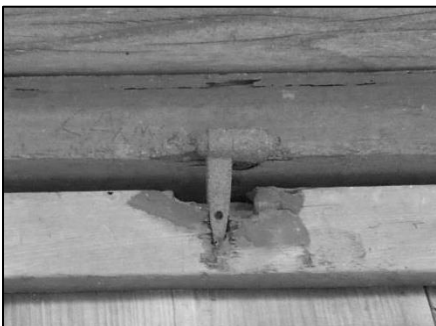
④ 棧唐戸：落とし金具（内側）



⑤ 棧唐戸：発見された掛金



⑥ 突上戸：戸締金具



⑦ 突上戸：蝶番



⑧ 突上戸：引掛金具

## 写真 6.2.9 建具金具



### ③長押

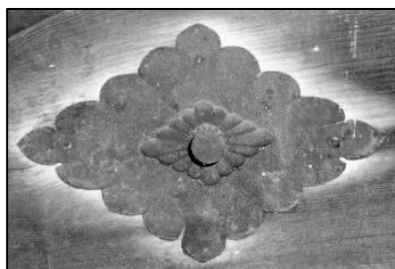
長押には内・外部とも柱位置に釘隠金具が取り付けられていた。計 18 箇所の内、内部の全てと外部 5 箇所は昭和 57 年の修理時に製作されたものであった。それ以外のものは、田村剛著『後樂園史』に、「御長押銅物糊さび落し<sup>注20)</sup>」と、長押銅物（＝釘隠金具）がこの時に修理がされたと見られ、史料上、少なくとも安政 6 年まで遡ることが出来る。釘隠は、台座・菊座（大）・菊座（小）・樽の口で構成され、台座の上下左右の端部 4 箇所を銅釘止する。台座と菊座は厚 0. 6 mm 程で花卉部分を凸型に加工していた。

### ④軒廻り

軒廻りの金具は、1. 飛檐・地垂木・隅木などの木口金具と、2. 軒下の吊金具に大別される。

垂木の木口金具は両側面・底面・正面に唐草文様が陰刻され、特に正面は 4 枚の花弁がある唐花が施されている。部材は銅製の丸頭釘にて垂木に固定する。銅板の厚みは 1mm 程度で、概ね側面と底面および正面の 4 面を別々の銅板としているが、両側面と底面を一体化し、正面のみ別の銅板で構成されているものもある。この仕様の違いは施工された時期によるものとも考えられるが、未解体のため詳細は不明である。ただ、昭和 57 年の修理時には 11 箇所が新補されたことが、当時の設計図書にある。また、隅木木口の銅板は両側面と底面を一体化し、表面には文様を施さない。これら木口金具は比較的簡易なもので当初のものとは考え難いが、遺存する釘隠金具と仕様や風蝕差などが類似していることから、江戸時代末期の安政 6 年頃に製作されたと見られる。

吊金具は、軒下の隅木や垂木下端の桔木止用のほか、軒先部分に L 形金具が遺存していた。いずれも鉄製で垂木の木口金具と同様に、江戸時代末期の安政 6 年まで遡ることができると考えられる。L 形金具は、行事の際に建物周囲を幕で囲うための吊金具と考えられるが、昭和 57 年の修理時には「幕吊金具」と称し、総計 19 箇所内、8 箇所はこの時に新補されている。



①長押 釘隠金具（外部）



②飛檐垂木 木口金具



③隅木下端 吊金具



④軒先 幕吊金具

写真 6. 2. 10 釘隠・木口・吊金具

## 6.3 付属物の検証

### 6.3.1 扁額の変遷

得仁堂の創建時には泰伯・伯夷・叔斎像が安置されていたが、その後、「孔子堂」・「釈迦堂」と名称を変え、享保3年(1718)以後は「八幡堂」となり、その後、文政3年(1820)に伯夷・叔斎の二像のみ祀られて再び「得仁堂」として名称が変更された。この時に、紀州9代藩主徳川治貞<sup>はろさだ</sup>が、紀州の細工人である小笠原一斎に命じて伯夷・叔斎の二像を造らせ、水戸藩6代藩主治保<sup>はろもり</sup>に贈ったことなどは第3章で明らかにした。

一方、現在の得仁堂の南正面に掛かる扁額(写真6.3.1左)は、像の由縁と同じ紀州藩の10代藩主徳川治宝<sup>はるとみ</sup>が文政3年に揮毫し、文政年間中に内田幸吉が彫ったものである<sup>注1)</sup>。

それ以前の扁額に関する記述は鶴飼信興の「後楽紀事」に詳しい。これによると、泰伯・伯夷・叔斎像が安置されてからしばらくは武田常斎の額が掛けられ、その後、釈迦堂と名前が変化する元禄年間には今井元昌の額になり、享保年中には八幡堂となって別の像が安置されると額は外されたという<sup>注2)</sup>。つまり扁額は、①武田常斎→②今井元昌→③徳川治宝と付け替えられてきたことがわかる。

今回の工事で扁額を取り外したところ、虹梁と茨垂木に現在は使われていない額受金具と額吊金具が確認された。この金具は現在の扁額の金物より古いものと見られ、現況の額受金具が、虹梁の材成のほぼ中央付近で、間隔は548mmあるのに対して、旧金具は虹梁の上角に打たれ、間隔は521mmと現況より若干狭く、金具自体も小さいものであった。額吊金具も現況は化粧棟木下に1箇所のみであるが、旧金具は両側の茨垂木に打たれており、二箇所で吊っていたと見られる。つまり現況の扁額を納めるには旧金具では困難であったことが推定され、これらは初代または2代目の扁額を止めていたものと考えられる(写真6.3.1右、◎現況金具・○旧金具)。

扁額の変更は、建物の名称や像の変遷と軌を一にしていたと考えられる。建造物の調査によって、現況前に別の扁額があった痕跡を発見できたことで、史料上の記述の一端を裏付けることができた。

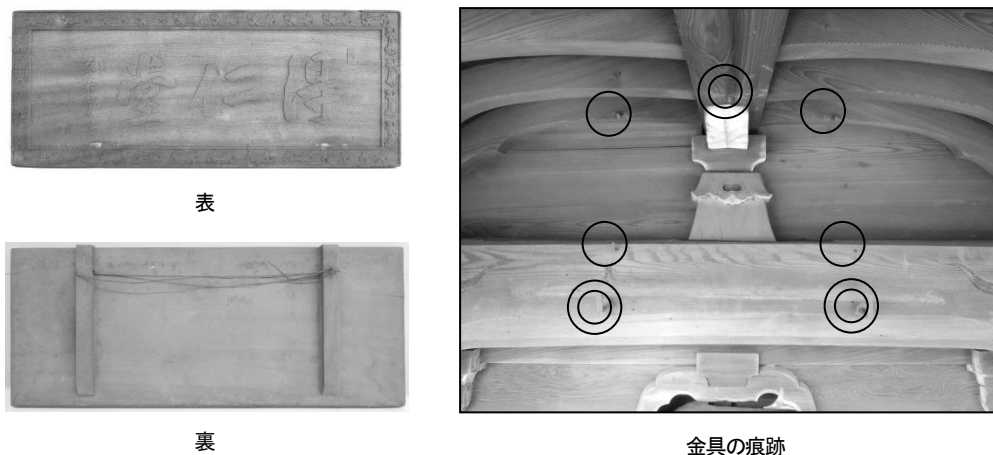


写真6.3.1 扁額

### 6.3.2 伯夷・叔斎像

これまで、創建時の得仁堂には伯夷と叔斉の二体が納められていたと考えられることが多かった。しかし、ここまでの考察で、泰伯・伯夷・叔斉像の三体が安置されていたことが判明した。

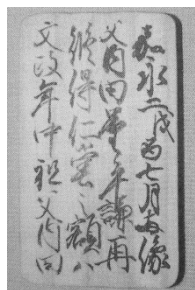
三体の安置を示す資料は、これまでも各論文や文献で述べられている（第2章2.6）。今回の史料調査の検討で、これらの指摘は信憑性が高いことを確認し、さらに三体の木像安置が確実にあることを示す資料が発見された（第3章3.4）。また、第4章のトコ廻りの調査によって、その史料が実際の建物の痕跡とも一致することから、創建当初の得仁堂のトコは、三像を安置することを計画して作られたことは確かであると考えられる。そして、得仁堂がこれらを祀る廟堂ではなくなってから、当初の木像は別の保管先で焼失してしまったので、安永8年(1779)に伯夷・叔斉像の二体だけが紀州の細工師小笠原一斎の手で作り直されて、得仁堂復旧の際に納められたことは、既に述べたところである。

当初の伯夷・叔斉像の作者は水戸藩抱えの細工師、前田助十郎と伝えられる。また、現在光圀の木製の面三つが水戸の久昌寺に残されていて、一つは前田の作、残り二つは同じ細工師の太田九蔵の作であることが知られている。前田は寛文9年(1669)水戸藩の分限帳である「寛文規式帳」に「御細工人」として記されていて、光圀が元禄3年(1690)の隠居から元禄13年に死去するまで、太田とともに隠居所に詰めていた<sup>注3)</sup>。

なぜ木像の作り直しを紀州の細工人に依頼したのかは不明だが、適当な細工人が居なかったことと、木像の焼失が藩内で極秘にされていたことが理由として考えられる。また、第4章2節2項で検証したように、作り直された木像は当初に近い大きさで、ほぼ同形であった可能性がある。再度の安置にあたって、八幡堂のトコの虹梁を上げる改造が行われたが、幅はそのままであったため、非常に窮屈な配置となっているが、創建当初のトコ復原し、その左半分に二体の像を置いてみると、適度な空間で違和感なく納まることから推測できる（図4.2.3）。そのことから、製作依頼にあたっては、元の木像の寸法・形態が伝えられたと推察できる。

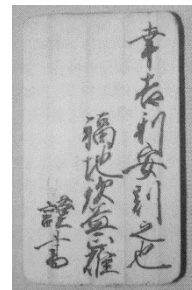
現存する伯夷像の本体は高さ649mmの坐像、叔斉像の本体は高さ1,191mmの立像で、ともにサクラ材の寄木造りである。叔斉像から発見された銘札により、福地次益の父内田量平が嘉永2年(1849)に像二体を修理したことが判明している<sup>注4)</sup>。

嘉永二戊酉七月両像  
父内田量平謹再  
修得仁堂之額ハ  
文政年中祖父内田



表

幸吉利安刻之也  
福地次益正雄  
謹書



裏

写真 6.3.2 叔斎像体内銘札

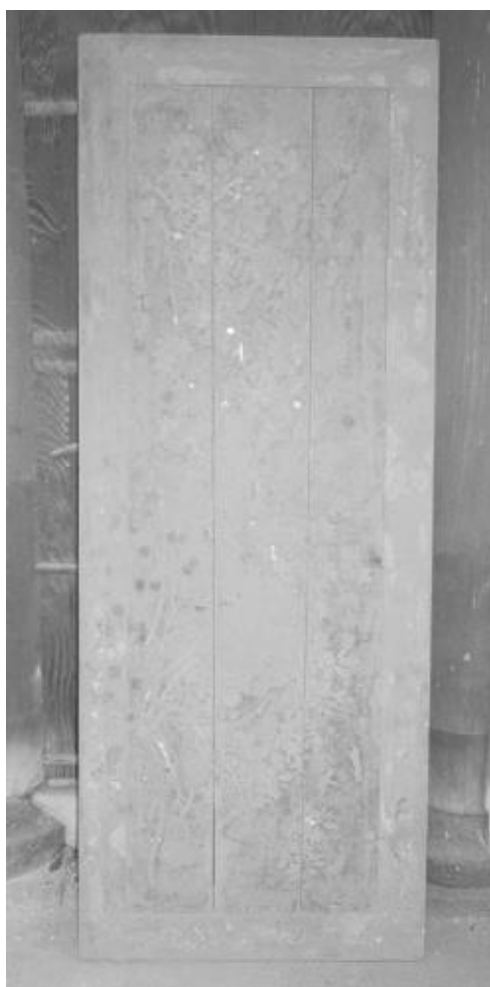
縦4.9cm×横2.7cm、檜

水野敬三郎・瀬山里志「小石川後楽園伯夷叔斎像等調査報告」(『平成十一年度文京区の文化財』所収)より転載

### 6.3.3 螺鈿の机

得仁堂の室内には漆塗螺鈿造りの机が遺存している。部材は天板(1 枚)、側板(長辺:2 枚中 2 枚遺存、短辺:2 枚中 1 枚遺存)、足(4 本中 3 本遺存内 1 本全長、他に破損部材 6 本)、足固め(4 本中 3 本遺存)が残っている。部材の損傷は著しいものの、漆は布ふせ・砥粉下地に黒または赤漆がなされている。螺鈿は各部材に施され、天板は植物模様に縁を幾何学模様、側板・足・足固めも植物の螺鈿細工がある。

文政 9 年(1826)、坂昌成は、「前に螺鈿の机に香燭を備へてあり<sup>注5)</sup>」と記し、昭和 13 年(1938)には、藤島亥治郎が、「室内祀壇前に横長の甲板と細い四脚とを具へ、特徴ある刳形に細かく唐草文を螺鈿した机があり、様式技法上明清の製作であろう。品雅に富んだ優作である。上には香蠟を備えたことが舊記にある。<sup>注6)</sup>」と記述している。彼らが述べている机は現存している螺鈿細工の机を指していると考えられる。制作された時期は、文献から幕末には存在していることが確認できるが、創建時まで遡る可能性がある。創建時のトコ廻りは詳らかになっていないが、この机の存在は、その当時のトコ空間構成や機能的側面を知る手掛かりになると思われる<sup>注7)</sup>。

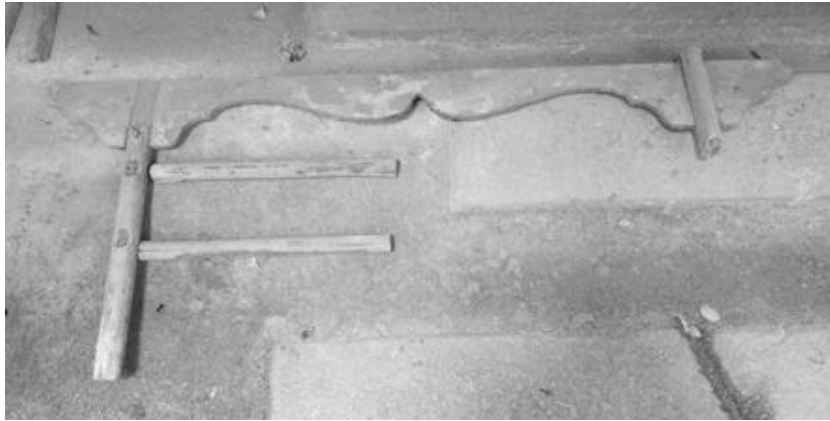


①天板(表)



②天板(裏)ほか各部材

写真 6.3.3 遺存していた螺鈿の机



①側板（長辺）・脚・足固め

側板表面は漆塗、裏側は弁柄漆と見られる塗装痕がある。また、脚は足固めが2本入り漆塗痕が見られる。



②天板の螺鈿細工



③天板縁部分の螺鈿細工



④側板（短辺）の螺鈿細工

写真 6.3.4 螺鈿の机詳細

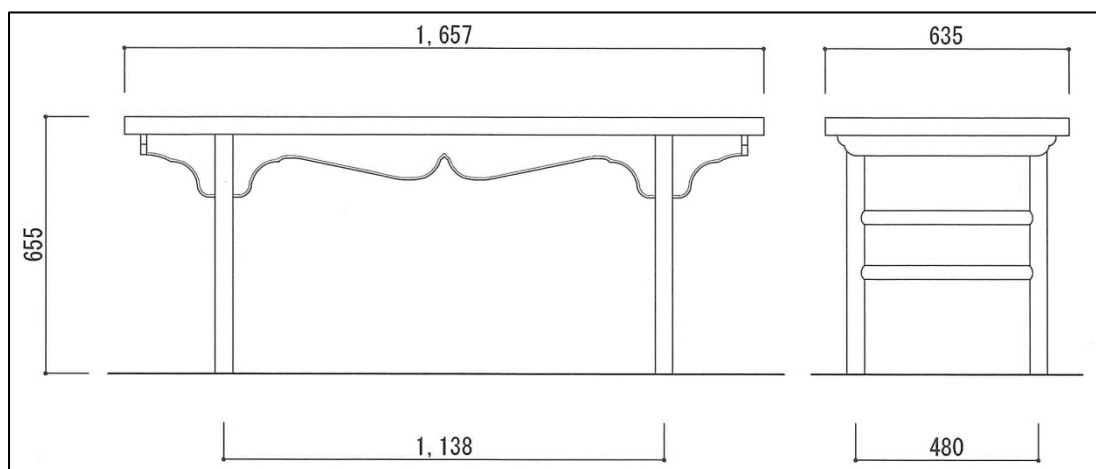


図 6.3.1 螺鈿の机復原図

#### 6.3.4 史料との検証

この章では、得仁堂の造作類と室内外に遺存している扁額などの付属物について論じた。ここでは、これまで扱ってきた絵図や文献・史料などを参考にして、建物の調査結果と比較しながら造作類などの考察を行う。なお、近代以降では、建物の規模や意匠が大きく変更している部分が屋根以外に行われていないことから、主として江戸時代を中心とする。

得仁堂を意匠的な観点から具体的に記述した史料は少ない。ただ、第3章6節で紹介した史料にはいくつかの指摘がなされているので、再度ここで取り上げてみよう。

まず、文政3年(1820)3月6日の志賀理斎の記述である（【史料11】）。

「此道すからに、得仁堂とて、伯夷叔斉の像を安置させ給ふ有、内は讃岐瓦を以て甃とす、像は前田助十郎といえるか、造りしとかや、此堂のことハ、もとより義公の御本意を示されたる者なるへしといえり、」

次に、文政9年(1826)10月29日の坂昌成の記述である（【史料10】）。

「やゝ木深き処にいらか<sup>(藁)</sup>ふけるハ得仁堂なり、三方唐戸にして色々の花鳥を彫付らる、さぬき瓦を甃にしかれて伯夷叔斎の木像を安置せらる、伯ハ坐像叔ハ立像、前田助十郎作也といへり 前に螺鈿の机に香燭を備へあり、額は紀伊の殿大納言治宝卿の御筆なり」

得仁堂は文政3年(1820)2月9日に復旧されているので、これらの記述は、その後まもなくして記されたということになる。

これらの内容を整理すると以下のようなになる。

- A. 屋根に「いらか（藁）」が葺かれている。
- B. 三方が唐戸で花鳥をモチーフとした彫刻がある。
- C. 伯夷・叔斎像が安置されている。制作者は前田助十郎である。
- D. 内部はさぬき（讃岐）瓦の<sup>しきがわら</sup>甃（敷瓦）が敷かれている。
- E. 螺鈿の机に香燭が供えてある。
- F. 額は紀州の徳川治宝の筆によるものである。

Aは、屋根に関する記述で、既に第3章で考察を行っているので、ここでは割愛する。

Bに関しては、文字通りに解釈すると、「三方」すなわち建物の三つの面に唐戸があり、花鳥の彫刻が設えているとのことである。

得仁堂は正面三間、両側面二間である。正面は中央間が棧唐戸で両脇間は板壁、側面は南寄り一間が吊戸で北寄りが板壁である。このうち正面両脇間の板壁の下地材は、他の柱間が筋違であったのとは異なり、厚30mm程度の檜材を板溝に入れ、上下の板傍は突付かつ合釘止としていた。部材は見え隠れであるが台匏で仕上げられ、両側柱には和・洋の釘を併用して止めていた。このことから他の面と同様に明治前半期の施工と見られる。部材表面には外部の板壁を止めた釘跡以外に目立った痕跡はない。今回、この下地材は健全であったので解体を行わなかった。可能な範囲で調査したが、柱両側面などに建具が納まっていたような痕跡は見られなかった。

一方、建物の両側面の二間は、南寄りは当初材と見られる中敷居と鴨居および吊戸で、北寄り

の壁板両側の柱側面には部分的な埋木が見られるが、建具が納まる痕跡はなかった。したがって、上記の「三方唐戸」のうち、正面中央以外はどの柱間を指しているのか痕跡上は明らかにすることが出来ない。



写真 6.3.5 南面両脇間の下地板



写真 6.3.6 現在の南正面



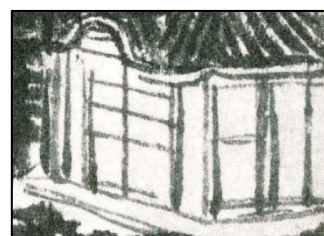
①「後樂園絵図」(明大本)

寛文5年(1665)～寛文8年(1668)



②「水戸様御屋敷御庭之図」

元禄16年(1703)以前



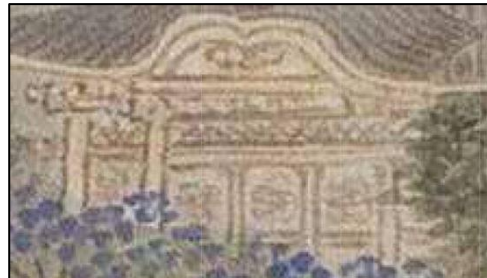
③「後樂園図」

寛政9年(1797)



④「小石川後樂園図」

天保2年(1831)以降



⑤「後樂園之図」

安政2年(1855)～慶応4年(1868)

図 6.3.2 得仁堂を描いた絵図(部分拡大)



そこで、絵図上では南面がどのような表現がされているか、再度検証してみよう。図 6.3.2 は得仁堂の姿を部分的に拡大したものである。①は前述の通り、創建後まもない絵図である。これを見ると中央間に開口がある。側面二間分も開口のように描いているが、南寄りは一しっかりと開口として描いている。正面は明らかに出入口と見られ、側面南寄りも開口であるなら現況と同様である。建物は全体に白色で塗られているが、今回の調査で白色顔料は木鼻や墓股以外は発見されなかった。この絵図全体を見ると、建物部分は、ほとんどが白か赤で塗られているので、おそらく絵画表現として背景と区別するために彩色を施したと考えられる。

次に②は元禄 16 年以前のもので、建立から 30 年程度経過していると見られる。絵図はかなり簡略化されているが、正面に建具のようなものが二箇所描かれている。よく見ると四角形の上に縦線が見られる。これはおそらく建具を軒から吊られていることを表現し、側面の建具を正面に描いていると考えたと納得できる。正面に開口部はないが側面の建具形式は現況と一致する。

③は寛政 9 年(1799)の制作で、「八幡堂」の時代である。建物は絵図の端で全体が描かれていないが、正面三間、側面二間であると考えられる。正面は中央間と両脇間に分かれ、中央間は横線が引かれ建具を表現していると思われる。両脇間は無地で壁を表していると思われる。一方、建物側面は二間と見られ、南寄りには中敷居のような二本線が描かれており、上部が開口であることを窺わせる。北寄り一間の中央にある縦線一本は、壁板の継目であろう。したがって、この絵図で表現されている柱間装置は現況とほぼ一致する。

④は得仁堂に復旧後に描かれたものある。正面三間と側面二間である。正面中央間は内開きの開き戸が描かれているが、現況は外開き開き戸である。建具自体の上半分は何も描かれていないが、下半分は内側にさらに四角い枠を描いて縁部分を白く塗っている。中央間の上部には扁額が描かれ、白く塗って区別している。これは時期から考えて、現在の扁額と同じものと考えられる。正面両脇間は、上半分に縦線を三本描き、連子または欄間のようなものを表しているとも見られるが、壁板の継ぎ目を表現している可能性もある。下半分は中央間の建具と同様に内側に四角い枠を描き、四隅は留め状に斜めに線が引かれて周囲を白色で塗っている。

また、建物側面は西面のみ描かれている。二間のうち北寄りは上半分が吊戸で、下半分は縦線が三本描かれており壁板を表していると思われる。吊戸は軒裏から線が斜めに引かれ、吊られている様子が見受けられる。また、南寄りは何も描かれていないので壁板であろう。この絵図は、概ね現況の柱間の機能と同じだが、正面両脇間が単なる板壁ではない点が注目される。

最後の⑤は、前述の通り、幕末に安政 2 年の地震以前の小石川後樂園を復原的に描いたものである。得仁堂はほぼ正面のみである。よく見ると長押上付近に建物右外まで伸びる彫刻のようなものが描かれ、柱との前後関係が曖昧な表現となっている。右端は樹木に隠れているが、柱間は現況とは異なり五間あるように見える。各柱間には装飾が施されている。中央間上部には板を斜めに傾かせた描写があり扁額と思われる。この絵図は復原的に描かれている点からも細部表現の信憑性は低いと見られる。

以上のように絵図の細部を検討してみると、表現の仕方や正確さは個々に異なるが、正面中央間と側面北寄り一間を開口として表現している点は、どの絵図も概ね一致していると考えられる。特に側面南寄りは当初から中敷居のある吊戸形式であったとする調査結果を補強してくれる。



しかし、④や⑤の絵図にあるように正面両脇間が、単なる板壁ではない点は、現状と大きく異なっている。上記史料【10】の「三方唐戸にして色々の花鳥を彫付らる」という記述にもそれを窺わせるので、建物の調査結果との総合的な解釈が必要になってくる。なお、⑤に関しては絵図の信憑性が低いので、参考程度とする。

まず、建物の調査では、現在の棧唐戸は明らかに近年のものではなく、安政6年(1859)の修理内容を記した田村剛の著作に「扉組子なおほし(中略)扉録物等新規取替」とあることから、現況の建具は既に安政6年以前には取付けられていた可能性が高いことを示した。また、両脇間は建具の取り付けの痕跡がなく、現在の下地材は明治前半期に施工されたことも明らかにした。一方、上記史料【10】が記述された文政9年から、建具の修理が行われた安政6年まではわずか30年程度である。また、天保2年(1831)以降に描かれた絵図はさらに地震後の修理時まで期間が短い。このことから、現在の棧唐戸は、史料にある「唐戸」や、絵図で表現された建具と同じものである可能性が高くなっていく。また、両脇間は現況の下地板が近代のものであることから、それ以前は現在の板の代わりに彫刻が施された羽目板が納まっていたとも考えられる。記述にある「三方」とは「三間」を指し、両脇間の彫刻が中央と同じように建具に見えたために、同じく「唐戸」と表現したとも考えられる。

すなわち、「三方唐戸にして色々の花鳥を彫付らる」の記述は、「南面三間の内、中央間を唐戸とし、両脇間を花鳥の彫り物で飾っている」と解釈することが可能である。なお、両脇間の彫刻は、寛政9年(1797)の③以前の絵図にはなく史料にも記述がない。単に描いていないとも考えられるので、創建時から設えられていたか不明であるが、少なくとも再び得仁堂となる文政3年(1820)以降には存在し、この時の復旧に伴う修理の際に入れられた可能性もある。その後、明治前半期の修理の際に、この彫刻は取り外され現在の檜板に替えられたと考えても矛盾しない。

また、絵図や建物の調査から両脇間の吊戸形式は創建時から変化していないと見られるが、吊戸の戸締り金具が簡易なものであることから、園内は限られた人々によって観賞され、厳重な戸締りをする必要がなかったとも考えられる。

次に、史料の記述の考察に戻る。Cは伯夷・叔斎像の記述であるが、制作者が前田助十郎とある。ただ、今回の調査で現在の二像は、紀州の小笠原一斎によるものと判明したので、おそらくこの記述は言い伝えられていることを記述していると考えられる。ただ、第2章で述べたように、焼失して新たに造り直したことは公には伏せられていた可能性もある。

Dは、内部の敷瓦に関する記述である。ここには「さぬき(讃岐)瓦」との表現がなされている。讃岐瓦は、現在では釉薬のない「いぶし瓦」を指す場合が多く、釉薬のある現況の敷瓦ではないと見られる。享保3年に高松藩出身で四代藩主となった宗堯が、讃岐の石清尾八幡を勧請して得仁堂を「八幡堂」に変えた際、トコ廻りの改造と同時に同じ讃岐の敷瓦に改め、文政9年まで残っていたと考えられる。したがって、今回、発見されたが緑色の釉薬を創建時と考えると、敷瓦は現在に至るまで少なくとも二回、敷き直されていると考えられる。

また、Eの螺鈿の机は、前述の如く現在でも遺存しているものである。ここで言う「香燭」は、おそらく香と蠟燭と考えられ、当時の礼拝形式の一部を垣間見ることができる。

Fの額は、現況の扁額を指し、絵図④に描かれている。

## 6.4 第6章のまとめ

本章では、得仁堂の造作類と建物に由来する付属物の考察を行った。ここで明らかとなった点は、以下の通りである。

- ①建物周囲の壁板は、明治前半期に施工された。
- ②中敷居と鴨居は当初材、付鴨居は当初・江戸後期以降・明治前半期・昭和 57 年の四世代の部材が遺存し、転用材も使用されている。
- ③地覆は明治前半期、長押は当初材（北面は当初材を改造）、格天井は明治前半期またはそれ以降の施工と見られる。
- ④現在の敷瓦は明治前半期に施工されたものである。創建時は緑色釉薬瓦、享保 3 年以降にいぶし瓦、そして現況の敷瓦となったと見られる。
- ⑤臺股彫刻には当初の塗装が遺存し、狩野派の技法に由来する鍬泥下地が施されている。
- ⑥現在の棧唐戸は、安政 6 年(1859)以前には取付けられていた。また、両側面の突上戸は、創建時からその形式は変化していないと見られる。
- ⑦得仁堂に使用されている金具は、古いもので安政 6 年(1859)まで遡る可能性がある。
- ⑧現在の扁額は三世代目で、紀州藩第十代徳川治宝が文政 3 年(1820)に揮毫し、内田幸吉が彫ったものである。
- ⑨現在の伯夷・叔斉像は、安永 8 年(1779)に紀州の細工師によって作り直されたもので、その後、嘉永 2 年(1849)に修理された。
- ⑩堂内に遺存している螺鈿の机は、創建時まで遡る可能性がある。
- ⑪正面両脇間は、建物の痕跡や史料から文政 3 年(1820)から明治前半期まで花鳥の彫刻がある羽目板であったと考えても矛盾しない。

## 第7章 結論



## 7.1 得仁堂の変遷と社会的要因

これまでの考察で、得仁堂は創建から現在に至るまで像や名称が変化し、それに伴って建物の改造が行われてきたことが明らかとなった。こうした建築現象に見られる変遷の根本的な原因は、社会的要因が大きかったと思われる。

光圀は生前、神仏習合のため「八幡改め」と呼ばれる八幡社の整理・処分を行った。光圀の死後、得仁堂は瓦葺の「八幡堂」と名前を変えるが、そこには光圀の政策の揺り返しと、水戸藩が高松出身の藩主となり、讃岐から八幡神を勧請したことが重なっていた。その際、一度に「八幡堂」とせず「孔子堂」・「釈迦堂」としたのは、目立たないように徐々に変更したと推察できる。

また、水戸徳川家の六代藩主となった徳川治保は、光圀に倣って学問奨励に尽力し、停滞していた「大日本史」の編纂を再び軌道に乗せることになるが、その潮流は「後期水戸学」と呼ばれるようになる。この編纂事業に関わった者たちは、光圀を讃えとともに、儒教を基盤とする思想を体系化し、その理論が後の明治維新の礎となっていく。治保の時代には、すでに伯夷・叔斎・泰伯の三像は他の場所に移されて焼失してしまっていたが、彼の治世中に伯夷・叔斎の二像を新造するなど、得仁堂を復興する機運が高まってくる。

その後、建物の修理が行われ、再び名称が「得仁堂」となったのは、光圀の志を受け継いだ人々の意志に起因していると考えられる。そこには社会情勢の変化が人々の思想形成の変化を生み出し、建築現象に影響を与えていたという社会と建築の因果関係を見出すことができる。このように、得仁堂の復興には、光圀を源流とする水戸学の興隆と、彼に対する評価の高まりといった当時の社会的な理由が横たわっていると考えられる。

近代に入ると小石川後樂園は軍部の所管となり、その後、文部省に移管され、関東大震災や東京大空襲を経て現在に至る。その間、庭園は明治天皇の行幸地として利用されたり、文化財の指定を受けることになる。その中で得仁堂は、各時代の要求によって修理が行われ、屋根材などの仕様が変化した。建造物の変遷はこうした社会状況と無関係ではなかったと思われる。

特に、近代以降の我が国は、諸外国の勢力を脅威と感じており、いち早く英国や米国などの先進諸国に追いつくべく、積極的に工作機械や材料を輸入して国内産業を育成する必要があった。この先進国の技術を導入した具体的な時期は、各分野・各地域によって多少の差があったと思われる。例えば、洋釘の使用は明治10年前後から文化財建造物でしばしば見受けられるが、その使用された時期や地域の正確な動向は掴めていない。得仁堂での洋釘や帯鋸の使用時期は、全国的な建築の動向よりも時代的にやや早いとも考えられたが、その当時、国力を集中して修理を行える環境にあったことは想像に難くない。こうした社会的観点も含み合わせると、建物に残されている痕跡や修理の過程も理解しやすいと思われる。

本研究では、得仁堂に関して史料と建物の調査の両面から、創建から現在に至るまでの変遷を明らかにしたが、この成果によって、得仁堂の儒教建築としての位置づけや庭園史、さらには政治・経済・宗教などの各分野にも供することができるとと思われる。現代の我々は歴史的建造物を通じて、各時代の社会を垣間見ることができ、そこから逆に建物の評価を改めて問い直すことも可能だと思われる。そうした視点からみると、建築というハードで具体的な現象の中には、社会史全般におけるソフトな現象の解明に提供できる要素が内包されていると考えられる。

得仁堂における建造物の変遷と、その要因となった社会的変化との関連をまとめると以下のようになる。

表 7.1.1 社会の変化と建造物の変遷

時代	社会の変化	建造物の変遷
近世	江戸幕府の政策 儒教の興隆 施主（光圀）の生い立ち	<b>得仁堂の建立</b> 伯夷・叔斎・泰伯像の安置
	元禄大地震 光圀の死去 八幡改めの揺り戻し	<b>孔子堂・釈迦堂となる</b> 瓦葺
	高松藩出身の藩主 讃岐から八幡神を勧請	<b>八幡堂となる</b> トコの改造、八幡神の安置
	水戸学の興隆 光圀の再評価	<b>得仁堂として復旧</b> 伯夷・叔斎像の再造立
近代以降	軍部の所管 天皇の行幸	<b>こけら葺となる</b> 大規模修理
	関東大震災 文部省の所管 史跡及び名勝に指定	<b>銅板葺となる</b>
	東京大空襲	<b>鉄板葺となる</b> 宝珠焼失
	特別史跡及び特別名勝に指定	<b>銅板葺となる</b> 宝珠の復原

## 7.2 まとめ

本稿では、得仁堂に関する史料および建造物調査による検証を行い、以下のような結論を得た。

① 小石川後樂園は、日本趣味と中国趣味とが共存した江戸時代を代表する大名庭園で、園内の建物は、回遊式庭園の中の「景」と「用」としての機能を有し、得仁堂はその両方の性質を併せ持つ建物として建立された。得仁堂は、禅宗様を基調とした「廟」の建築として分類される宝珠を頂く宝形造の建物で、トコの構成などは全国でも稀なものであった。一方、江戸時代に入ると、幕府や各藩はその支配を確立するべく儒教思想の普及を推し進め、その受け皿として各地に教育施設を建設した。敷地内には独立した「廟」も併設され、その構造や意匠は、同じく儒教建築に関連する得仁堂と同様に、主として自国で培われてきた形式で建設された。（第2章）

② 得仁堂はこれまで、光圀が尊敬する古代中国の賢人、伯夷と叔斉のみを祀った堂とされてきたが、「夷斉堂」に祀られていた伯夷・叔斉の二像と「至徳堂」に安置されていた泰伯像を合祀するために新たに建設されたものであった。その建立時期は、小石川後樂園が描かれた絵図の検討から、寛文5年(1665)7月～寛文8年(1668)1月と特定された。光圀没後、得仁堂は「孔子堂」、「釈迦堂」と名称を変え、享保3年(1718)以降、「八幡堂」になり、次いで文政3年(1820)には伯夷・叔斉の像が祀られて、再び「得仁堂」として復旧した。この時、それまで別の場所に保管されていた泰伯像を含む三体の像が焼失していたので、伯夷・叔斉の二体の木像だけが新造され安置された。（第3章）

③ 創建時の得仁堂のトコは、間口二間幅の規模で、中央東寄りに丸柱一本を建て、西側は広く東側には棚を備えたものであった。「八幡堂」となった江戸時代中期、丸柱を撤去し、新たに丸柱二本を建て、規模を間口一間幅とする改造が行われた。次いで、「得仁堂」に復旧した江戸時代後期には、虹梁を上部に上げ、袖壁板を撤去した。これらのトコの改造の過程は、史料による像の変遷と矛盾しない。（第4章）

④ 屋根は、創建時は植物系葺材と推定されるが、江戸時代中期から末期までは瓦葺の時代であった。近代以降、こけら葺となり、現在まで鉄板葺、銅板葺などに葺き替えられた。その変遷には、各時代の社会的要求があった。（第5章）

⑤ 造作類は、修理が繰り返されているものの、創建時の技法や部材も残されていた。正面両脇間は、文政3年(1820)から明治前半期まで花鳥の彫刻がある羽目板であったと見られる。また、紀州第十代藩主の徳川治宝が文政3年(1820)に揮毫した扁額、安永8年(1779)製作の伯夷叔斉像、創建時に製作された可能性のある螺鈿の机なども遺存している。（第6章）

⑥ 得仁堂は現在に至るまで改造が繰り返されたが、こうした建築現象に見られる変化は社会的要因が内在していた。（第7章）

表 7.2.1 年表

水戸徳川家・小石川後樂園 関連事項		得仁堂関連事項	
		名称	主な出来事
寛永6年(1929) 頼房、徳川将軍家より小石川の地、7万6,700坪を下賜。 作庭開始。	頼房 (1609-1661)		
明暦3年(1657) 光圀、「大日本史」編纂開始。			
寛文元年(1661) 光圀、庭園の整備を開始。	光圀 (1661-1690) 生没年 (1628-1701)	得仁堂	寛文5年～寛文8年(1665～1668) 得仁堂建立 「夷斎堂」と「至徳堂」を合祀。屋根は植物系葺材か。室内は敷瓦。 トコに前田助十郎作の泰伯・伯夷・叔斎の3像を安置。 トコ東側内部に欄。額字は武田常斎が揮毫。螺鈿の机製作か。
寛文5年(1665) 光圀、明の朱舜水を招聘。			
元禄13年(1700) 將軍綱吉から添地1万1,094坪を加増。	綱條 (1690-1718)	孔子堂 釈迦堂	元禄13年～元禄15年(1701～1703) 「孔子堂」、次いで「釈迦堂」となる。 瓦葺。額字は今井元昌が書き改める。 元禄16年の大地震により修理か。
元禄15年(1702) 桂昌院光子の来訪により庭園の改造。			
元禄16年(1703) 大地震により大被害。	宗堯 (1718-1730)		享保3年(1718)以降 八幡神を勧請して「八幡堂」となる。 泰伯・伯夷・叔斎像を移動。その後、焼失。 この頃、軒廻り・鴨居・敷瓦等補修、トコの規模縮小。額を撤去。
享保3年(1718)～享保15年(1730)頃 宗堯による大改修。			
明和3年(1766)～文化2年(1805)頃 治保による再整備。	宗翰 (1730-1766)	八幡堂	安永8年(1779) 伯夷・叔斎像を再造立。
	治保 (1766-1805)		
	治紀 (1805-1816)		
	齊脩 (1816-1829)		
天保12年(1841)～天保13年(1842) 齊昭、水戸に偕楽園を作庭。	齊昭 (1829-1844)		文政元年(1818) 八幡神の遷座。  文政3年(1820) 再び「得仁堂」となる。 新造の伯夷・叔斎の2像を安置。「得仁堂」を揮毫。額字彫刻は内田幸吉。 トコ間口拡張、壁板補修、棧唐戸新設、垂木木口・釘隠金具取付。
	慶篤 (1844-1868)		
	昭武 (1668-1869)		
安政2年(1855) 大地震および、翌年の暴風雨により大被害。			嘉永2年(1849) 内田量平(内田幸吉の子)が伯夷・叔斎像を修理。 安政2年(1855) 地震により柱が礎石から脱落。 安政6年(1859) 木鼻胡粉塗り、扉組子修理、鉄製金具取付、壁板新補、長押金具 銷落し、扉金具等新規取替、化粧網縁付直し。
明治2年(1869) 兵部省の所有となる。		得仁堂	明治前半期 こけら葺に葺替、軸部・軒廻り補修、小屋組改造、格天井新設、敷瓦取替、 壁板補修、突上戸新設。(明治6年直前か)  明治後半期 鉄板葺に葺替。(明治38年以降か)  大正期 露盤取替など修理。(大正10年か)  昭和前期 銅板葺に葺替、露盤取替、トコ廻り・壁板補修。(昭和2年か)  昭和25年(1945) 宝珠焼失  昭和中期 鉄板葺に葺替、唐破風棟・鬼板取替。(昭和27年前後か)  昭和57年 銅板葺に葺替、基礎据え直し、野地板取替、露盤・唐破風箱棟補修、 軒・トコ廻り補修、木部・建具補修、金具取替。  平成21年 暴風雨剥落。  平成24年～26年 銅板屋根葺替、部分修理、宝珠復原。
明治5年(1872) 陸軍省の所有となる。			
明治6年(1873) 明治天皇の行幸。 この頃より皇族や海外来賓が多数来園。			
明治8年(1875) 砲兵第一方面内砲兵本廠の所有となる。			
明治12年(1879) 東京砲兵工廠と改称。			
大正12年(1923) 「史蹟名勝天然記念物保存法」により「史蹟及び名勝」に指定(3月7日)。 同年9月1日、関東大震災により大被害。			
昭和2年(1927) 「後楽園内工作物補修計画」により、修復工事を実施。			
昭和11年(1936) 文部省に移管される(管理は東京市)。			
昭和25年(1945) 東京大空襲により被害。			
昭和27年(1947) 「文化財保護法」により「特別史跡及び特別名勝」に指定(5月15日)。			



## 第8章 展望



## 8.1 今後の研究課題

本稿では、小石川後樂園内に建つ得仁堂に関して、主として史料と建造物調査の両面から考察を行った。今回の検証で新たな事実が明らかとなったが、建設年代などについては従来の説を示す必要から、諸先学の研究成果に負うところも大きかった。

史料の調査に関しては、近代以降は、もう一歩踏み込んだ調査がなされていない。特に軍の所管になっていた時期は、現在の防衛省に史料が所蔵されていると推測されるが、史料調査は困難を極め、新たな発見には至らなかった。また、東京大空襲時の小石川後樂園の詳細な被災状況に関する史料も見つけることができず、都市レベルにおける被災範囲と得仁堂の災害との関連も考察されていない。これらの検証は今後の研究課題としたい。

建造物調査において、今回行われた平成24年12月から平成26年3月の修理工事は、小屋組の解体まで行わなかったため、屋根廻りの詳細な調査や考察も課題として残されている。

今後、得仁堂を通して、庭園、政治、思想などの文化現象と、その社会基盤となる経済的变化との関連がさらに明確になることによって、新たな視点や、考え方を総合的に評価することができると期待したい。

しかしながら、今回の史料と建築の両面の調査によって、建物の変遷過程や、その要因となる社会史との関連が明らかとなった部分があったことも事実である。こうした史実の検証には、具体的な物証が残っていたことで裏付けが可能となった。

文化財建造物の保存・修理の分野では、単に痕跡や古写真を根拠としてその修理方針を決定する近視眼的な判断だけではなく、当時の社会史も深く鑑みて、その意味や価値、さらには将来の展望などを検証することが大切になると思われる。そうした建築における社会性にこそ、今後の建築のあり方が横たわっていると考えられる。今回の研究を通して、歴史的建造物の保存・修復の意義を改めて実感した次第である。



## 脚注

## 参考文献

- 1) 森蘊：庭園とその建物，日本の美術，第34号，至文堂，1969
- 2) 白幡洋三郎：江戸の大名庭園/饗宴のための装置，INAX 出版，1994
- 3) 稲次敏郎：日本庭園入門/建屋と庭園のかかわり，INAX 出版，1996
- 4) 白幡洋三郎：大名庭園，講談社，1997
- 5) 宮元健次：「図説」日本庭園のみかた，学芸出版社，1998
- 6) 日向進：茶室に学ぶ 日本建築の粋，淡交社，2002
- 7) 小野健吉：岩波日本庭園辞典，岩波新書，2004
- 8) 田中昭三：「日本庭園」の見方，小学館，第4刷2006
- 9) 進士五十八：日本庭園，中公新書，2006
- 10) 水野克比古：京都禅の庭，光村推古院，7刷，2007
- 11) 小野健吉：日本庭園—空間の美の歴史，岩波新書，2009
- 12) 飛田範夫：江戸の庭園—将軍から庶民まで，京都大学出版会，2009
- 13) 湯原公浩編：大名庭園 武家の美意識ここにあり，別冊太陽 日本のこころ204，平凡社，2013
- 14) 小野健吉：日本庭園の歴史と文化，吉川弘文館，2015
- 15) 水野克比古：京都名庭園，光村推古院，11刷，2016
- 16) 宇田川辰彦監修：庭師が教える 図解日本庭園の見方・楽しみ方，家の光協会，第2版，2017
- 17) 鶴飼信興：後樂園紀事，国立公文書館内閣文庫所蔵，元文元年(1736)（宮崎成身：視聽草 所収）
- 18) 重森三鈴，重森完途：日本庭園史大系 18巻 江戸初期の庭(五)，社会思想社，1974
- 19) 大木秀人：後樂園略記，出版社不明，大正年間か
- 20) 吉永義信：名勝調査報告 第三輯，小石川後樂園・醍醐寺三宝院庭園，文部省，1937
- 21) 林羅山：小廬山記，国立公文書館内閣文庫所蔵，寛永17年(1640)（羅山先生元集 自寛永十五年至同十七年所収）
- 22) 吉河功：小廬山景中の渡月橋と西湖堤の変遷，日本庭園学会誌4，日本庭園研究会，1996.3
- 23) 榎本其角：後樂園拝見之記，元禄15年(1702)11月27日（東京市史稿，遊園篇1，東京市役所，1929 所収）
- 24) 名越克敏：後樂園志，国立国会図書館蔵，安永4年(1775)頃
- 25) 吉川需，高橋康夫：小石川後樂園，東京都公園協会，1981
- 26) 吉永義信：日本庭園史 — 昭和初期頃の回想 —，小学館，1989
- 27) 朱舜水：遊後樂園賦并序，寛文9年(1669)（徳川光圀輯・徳川綱條校：舜水先生文集，正徳5年(1715)，早稲田大学所蔵，安積澹泊旧蔵本 所収）
- 28) 安藤定為：常陸帯，元禄10年(1697)（ひたち帯—元禄常陸紀行—，筑波書林，1994 所収）
- 29) 田村剛：後樂園史，刀江書院，1929
- 30) 林鶯峰：国史館日録，寛文2年(1665)～寛文10年(1672)，国立国会図書館蔵
- 31) 坂昌成：御園の記，文政9年(1826)10月29日，早稲田大学図書館蔵
- 32) 藤島玄治郎：後樂園の建築，造園研究，第25号 後樂園特輯，1938.7

- 3 3) 玉井哲雄：図説 日本建築の歴史 寺院・神社と住宅，河出書房新社，2008
- 3 4) 文化庁監修：国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻），毎日新聞社，1998
- 3 5) 太田博太郎：日本建築史序説，彰国社，増補第2版，第7刷，1995
- 3 6) 新建築学大系編集委員会編：新建築学大系 2，日本建築史，彰国社，1999
- 3 7) 文化庁監修：文化財講座 日本の建築 4 近世Ⅰ，第一法規，1976
- 3 8) 後藤治：日本建築史，建築学の基礎⑥，共立出版株式会社，第5刷，2007
- 3 9) 太田博太郎監修：日本建築様式史，共同印刷株式会社，第3刷，2001
- 4 0) 村上訊一：霊廟建築，日本の美術 第295号，至文堂，1990
- 4 1) 鈴木充：江戸建築，日本の美術 第201号，至文堂，1989
- 4 2) 飯田須賀斯：江戸時代の孔子廟建築（福島甲子三編：近世日本の儒学，岩波書店，第3刷，1984 所収）
- 4 3) 城戸久，高橋宏之：藩校遺構，相模書房，1975
- 4 4) 鈴木三八男：日本の孔子廟と孔子像，斯文会，第2刷，2012
- 4 5) 野方辰美編：日本・中国・朝鮮の孔子廟，孔子の里，1993
- 4 6) 西山松之助監修，内山知也，本田哲夫編：湯島聖堂と江戸時代，斯文会，第3刷，2001
- 4 7) 筑波大学，斯文会制作・著作：孔子祭復活百周年記念事業 草創期の湯島聖堂 よみがえる江戸の『学習』空間，清流出版社，2007
- 4 8) 文化庁監修：国宝・重要文化財大全 12 建造物（下巻），毎日新聞社，2000
- 4 9) 株式会社集英社，株式会社日本アート・センター編：週刊絵で知る日本史 27 豊国祭礼図屏風，集英社，2011
- 5 0) 重要文化財喜多院修理委員会編：重要文化財喜多院客殿外 5 棟修理工事報告書，喜多院，1976
- 5 1) 奈良県文化財保存事務所編：重要文化財長岳寺旧地藏院・楼門修理工事報告書，奈良県教育委員会，1969
- 5 2) 歴史の謎を探る会編：常識として知っておきたい 日本の三大宗教，河出書房新社，2005
- 5 3) 小島毅：宗教の世界史 5 儒教の歴史，山川出版社，2017
- 5 4) 井沢元彦：逆説の日本史 16 江戸名君編 水戸黄門と朱子学の謎，小学館，2009
- 5 5) 吉田俊純：水戸光圀の時代 一水戸学の源流，校倉書房，2000
- 5 6) 瀬谷義彦：新装水戸の光圀，茨城新聞社，2000
- 5 7) 宮田正彦：水戸光圀の「梅里先生碑」，水戸史学会，2004
- 5 8) 名越時正：新版 水戸光圀，水戸史学会，1986
- 5 9) 長山靖夫：天下の副将軍 水戸藩から見た江戸三百年，新潮社，2008
- 6 0) 稲葉君山編：朱舜水全集，文会堂書店，1912
- 6 1) 石原道博：朱舜水，吉川弘文館，1989
- 6 2) 文部省[総務局編]：日本教育史資料集 附録〔1〕，富山房，1904
- 6 3) 財団法人文化財建造物保存技術協会編：史跡旧萩藩校明倫館（南門）修理工事報告書，萩市，2006
- 6 4) 水戸市史編さん委員会編：水戸市史 中巻 第1，水戸市役所，1968
- 6 5) 早稲田大学校地埋蔵文化財調査室編：下戸塚遺跡の調査 第4部 中近世編 - 近世 -，早稲田大学，1997.3
- 6 6) 文京区遺跡調査会編：文京区埋蔵文化財調査報告第20集 春日町遺跡Ⅲ・Ⅳ地点，文京区遺跡調査会，2000.3
- 6 7) 鈴木暎一：徳川光圀，吉川弘文館，2006

- 68) 平井聖：中井家文書の研究 1 卷—第 4 卷，中央公論美術出版，1976-79
- 69) 瀬川淑子：皇女品宮の日常生活—「无上法院殿御日記」を読む—，岩波書店，2001
- 70) 安見隆雄：水戸光圀と京都，水戸史学会，2000
- 71) 熊倉功夫：後水尾天皇，中央公論社，2010（初版は「後水尾院」，朝日新聞社，1982）
- 72) 計見東山：後樂園，育英舎，1907
- 73) 武部敏夫，中村一紀編：明治の日本 宮内庁書陵部所蔵写真，吉川弘文館，2000
- 74) 「小石川後樂園得仁堂補修工事」（56 北公庶 第 1212 号），東京都東部公園緑地事務所蔵
- 75) 財団法人高野山文化財保存会編：重要文化財金剛峰寺徳川家霊台家康霊屋秀忠霊屋修理工事報告書，真陽社，1962
- 76) 宮野明彦，永谷洋司，日本屋根経済新聞社：新版 屋根の知識，日本屋根経済新聞社，2003
- 77) INAX 日本のタイル工業史編集委員会編：日本のタイル工業史，INAX，1991
- 78) 瀬戸史編纂委員会編：瀬戸市史 陶磁史 篇五，1993
- 79) 阿木香，日野永一，新見隆，山本正之：日本タイル博物誌，INAX，1991
- 80) 市川守静編：丹青指南，大正 15 年（青木茂編：明治日本画史料，中央公論美術出版，1991 所収）
- 81) 文化財建造物保存技術協会編：重要文化財妙義神社本殿・幣殿・拝殿、附神饌所、附透塀、唐門、総門修理報告書（本文編），便利堂，1989
- 82) 茨城県立歴史館編：頼重と光圀—高松と水戸を結ぶ兄弟の絆—，平成 23 年度特別展，2011
- 83) 鈴木一：社会的建築論—近代建築の開花，東京出版，1991

## 注

### 第2章

#### 2. 2

- 注 1) 広辞苑 第四版，岩波書店，1991，p. 1745
- 注 2) 参考文献 7)，p. 211
- 注 3) 建築大辞典，第二版，第三刷，彰国社，1997，p. 1112
- 注 4) 参考文献 11)，p. 2
- 注 5) 参考文献 1)～16)などを参照。
- 注 6) 参考文献 11)，pp. 2～22 飛鳥時代以前の遺構として例えば、縄文時代：大湯環状列石(秋田県鹿角市)、弥生時代：田和山遺跡(島根県松江市)、古墳時代：行燈山古墳(奈良県天理市)・南郷大東遺跡(奈良県御所市)・城之越遺跡(三重県伊賀市)などが挙げられる。
- 注 7) 参考文献 11)，p. 82
- 注 8) 参考文献 7)，p. 54
- 注 9) 前掲書：建築大辞典，p. 245
- 注 10) 参考文献 4)，p. 34
- 注 11) 参考文献 17)
- 注 12) 参考文献 18)，p. 18, 21, 22
- 注 13) 参考文献 4)，p. 28, 46

注14) 同上, p. 27, 28, 32, 33

注15) 前掲書：建築大辞典, p. 29

注16) 参考文献7), p. 211

注17) 参考文献9), pp. 102~104

注18) 参考文献4), pp. 193-4

注19) 表2.2.2の略年表や図2.2.2の配置図は、主として鶴飼信興「後樂園紀事」や、吉永義信「名勝調査報告」、吉川需・高橋康夫「小石川後樂園」、明治大学博物館所蔵の「水戸様小石川御屋敷御庭之図」などの史料を再考して作成した。また、掲載した写真の内、現在では失われている清水観音堂・八卦堂は、大正8年以前の姿で大木秀人『後樂園略記』から転載、西行堂・唐門は、公益財団法人東京都公園協会の所蔵で東京大空襲(1945)以前のもの、その他の現存する施設は著者が撮影したものである。

注20) 小石川後樂園における各施設の日本と中国趣味に関する分類は、唐綺君、波多野純が著した「江戸の大名庭園における中国作庭の影響 — 小石川後樂園を中心に —」(2005年度日本建築学会関東支部研究報告集, Vol. 76, 2006. 2)においてもなされており、本稿ではこれを参考に再構成した。この論文では、建物や橋などの施設の以外にも、築山や川なども含めて中国に由来する作庭の影響を検証している。

注21) 参考文献21)

注22) 参考文献22)

注23) 五島聖子、藤井英二郎、白井彦衛の「小石川後樂園の水景の変遷に関する史的考察」(ランドスケープ研究, vol. 62 no. 3, 1999)によれば、文献上、通天橋の名称は文政3年(1830)に記された志賀理斎の「御園の記」が初出であり、大堰川の滝が枯渇した後、現在の位置に渡月橋を架け直し、橋が空中に浮かぶようになったので、これを「通天橋」と呼び、その後、「渡月橋」の名称は大堰川下流の別の橋を指すようになった可能性を指摘している。渡月橋が現在の橋の位置と異なっていたとするこの指摘は、参考文献22を著した庭園研究者の吉河氏の見解と一致している。

注24) 今回の検証でこの絵図の制作年代が 寛文5年7月中旬~寛文8年1月中旬と推定された。

注25) 参考文献23)

注26) 「後樂園地図」, 明治39年測量(重森三玲：日本庭園史図鑑, 第24巻 江戸時代初期, 1936所収)

注27) 東京市役所編：後樂園, 1938 所収

注28) 参考文献24)

注29) 参考文献26) 所収

注30) 鶴間和幸ほか「朱舜水遺蹟の学術調査」, 科学研究費助成事業, 研究課題番号62041152, 1987年度

注31) 参考文献27)

注32) 参考文献28)

注33) 参考文献20) 所収

注34) 参考文献29), pp. 41, 42

注35) 参考文献20), p. 49

注36) 参考文献17)

注37) 参考文献30), 寛文5年6月17日の記述に「其余境到暫置言、遠望絶景不可優計」(其の余の境到は暫く置きて言わず、遠望絶景優げて計ふべからず)とある。林鷲峰は光圀の命により国史編纂の事業に携わ



り、史館の園遊の記録や文人たちの交流、政治、学問などの日記に書き続けた。なお、初期の小石川後楽園の眺望に関する論考は、李偉の「初期小石川後楽園における眺望行為に関する研究」(ランドスケープ研究, vol. 68, No. 5, 2005. 5)がある。

注 3 8) 参考文献 27)

注 3 9) 参考文献 25), p. 111

注 4 0) 参考文献 32), p. 28

注 4 1) 参考文献 31) ここに、「前に螺鈿の机に香燭を備へあり」とある。なお、後楽園訪問は前日の 28 日。

## 2. 3

注 1) 創建時における得仁堂背面の突出部分の呼称は明らかとなっていない。建物の形式上、「須弥壇」等と呼んでも差し支えないと思われるが、今回の修理工事で、江戸時代後期の部材と見られる壁板の裏面に「床外口は」、「床ノ間西ノはめ」等の墨書が発見された。得仁堂は中国の賢人を祀る儒教としての建物として建てられたものであり、他に適切な言葉が見つからないので、本稿では、過去に呼ばれていた名称を用い、床(ゆか)と区別するため「トコ」とカタカナ表記とした。

注 2) トコ廻りは今回の調査により、後世に改造が繰り返されていることが判明した。トコ間口両柱や背面の両角柱は後補の部材である。今回の調査で、創建当初のトコ間口は北面二間分で中央に柱が建っていたと見られるが、その奥行きは不明である。また、建物本体の柱は根継部分を除きすべて径 8 寸の檜材の円柱の当初材である。本文中にもあるように、北西隅柱のみ根継がなく柱全長が残る。柱の足元は礎石から造りだした礎盤の上に建ち、柱下部に粽を施すが上部にはない。

注 3) 斗・肘木は檜材ですべて当初材と見られる。蓑束は、正・背側面の計 7 箇所内、北面東側以外は当初材と見られる。北面東側の蓑束は側面が曲面ではなく直線となっており、風蝕の状況からも明らかに部材が新しいことから、おそらく昭和 57 年の修理時に取り替えられたものと推定される。蓑股は当初のものと推定され、頂部の斗寸法は他の組物の巻斗・方斗と同寸である。

注 4) 垂木は未解体のため、変遷や各部材の時代判別など詳細を確認することはできなかったが、使用されている釘や材料の質などから、少なくとも江戸時代中のものと見られる。丸桁は柱真から一手先の実肘木上端に載せ、その上に小天井板を設けて、隅部を隅肘木上端に鬼斗、桁行・梁間二方向の実肘木を受ける。正面中央間の実肘木上端に虹梁と菖蒲桁を載せ、虹梁の上端に蓑束を建てて唐破風の棟木を受ける。壁際の枅肘木には板溝を彫り琵琶板を嵌める。

注 5) 前掲書：建築大辞典, p. 1694

注 6) 同上, p. 1692

注 7) 参考文献 33), p. 30 ここに「様式という言葉は、ヨーロッパから導入された美術史で用いられた言葉で、スタイルの訳語である。ギリシャ、ローマ、ビザンチン、ゴシック、ルネサンス、バロックなどヨーロッパ各地域の歴史と深く結びついて使われている言葉で、すべての造形芸術、絵画、彫刻、それらを統合する建築で用いられる概念である。なお、この様式概念は造形芸術にとどまらずあらゆる芸術分野で用いられるし、時代や地域を超えても用いられる。」との解説がある。

注 8) 「禅宗様」は、かつて「唐様」とも呼ばれていた。本稿では、建築史家の太田博太郎によって提唱され、現在、建築史で一般的に使われている「禅宗様」という名称を用いた。

注 9) 前掲書：建築大辞典，p. 1523

注 1 0) 参考文献 34)

注 1 1) 参考文献 35)

注 1 2) 参考文献 34)～39)は、近年出版されたものも含めて主として日本建築史を概説する書として知られている。この中で、参考文献 38 (p. 172) は「儒教の建築」として解説を行っている。しかし、儒学の影響として建てられた湯島聖堂や藩校、彫刻細部の紹介のみで「儒教建築」を建築史上の系譜として詳細に述べてはいない。

注 1 3) 参考文献 42)～47)

注 1 4) 例えば、参考文献 35 の太田博太郎著『日本建築史序説』では、閑谷学校を「市民社会の建築」として、「学校建築」に区分し、後述の日本建築史の文献を紹介する部分では、「神社建築」「寺院建築」と並行して「学校・劇場その他」と分類している。また、参考文献 48 の『国宝・重要文化財大全 12 建造物(下巻)』では、「藩校」として閑谷学校や弘道館の建物を分類している。

注 1 5) 参考文献 34)～39)など

注 1 6) 前掲書：広辞苑，p. 2718

注 1 7) 同上，p. 2188

注 1 8) 前掲書：建築大辞典，p. 1694

注 1 9) 参考文献 40)，p. 17 ここに「“霊廟” という名称は徳川将軍の廟に限って用いられたと考えられ、『徳川実記』では将軍の廟を霊廟とするのに対し、将軍室の廟は権現造の形式をもっている」とあり、これを区別して「霊牌所と呼ばれている」とある。

注 2 0) 参考文献 43)，p. 21

注 2 1) 参考文献 34) ここで紹介している類例は一部ではあるが、これ以外にも同書には「隅柱間突出型」および「両脇間突出型」の平面形式の建物が多く紹介されている。

## 2. 4

注 1) 参考文献 52)，53)

注 2) 参考文献 53)，pp. 228～229

注 3) 参考文献 54)，p. 25 「大日本史」編纂の費用は莫大なもので、水戸の領民に「八公二民」の重税を課したと言われるほどの一大事業であったとも言われている。なお、光圀は寛文 12 年(1672)に駒込の別邸内にあった「大日本史」の編纂支局を小石川邸内に移し「彰考館」とした。

注 4) 参考文献 55)，p. 30

注 5) 同上，p. 30 ここに「今日、光圀十八歳の立志は、修史の志であったとは認めない見解のほうが有力である。」とある。また、木村哲人の『水戸黄門は悪人だった』(第三書館，2002)には、「現代の研究者は十八のころ史記を読むのでは遅すぎると指摘する。光圀自身が十四歳で読書の習慣がありしばしば徹夜して朝を迎えたことを語っている。当然論語や史記であろうから伯夷伝は最初に読んでいるはずだ。」(p. 35)とある。

注 6) 参考文献 56)，p. 283

注 7) 参考文献 57)，p. 25

注 8) 参考文献 58), p. 47 なお、「梅里先生墓」には碑文が記されているが、これは中国の詩人陶淵明<sup>とうえんめい</sup> (365～427)の自伝的な詩「五柳先生伝」に倣ったものだと言われている。陶淵明は、中国の魏晉南北朝時代の文学者で、彼の詩文は江戸時代の文学作品にも影響を与え、光圀も清貧を重んじる陶淵明の生き方を称賛したと伝えられている。また、瀬谷はこの点に注目して『新装水戸の光圀』の中で「光圀は藩主となって間もないころ、水戸郊外の緑岡(水戸市見川一丁目)の丸山に淵明堂を建立して、陶淵明の像を祀った。それは江戸後楽園の伯夷叔斎を祀る得仁堂と好一對をなすものであった。(中略) 伯夷と陶淵明、それにもう一人の中国人、呉の泰伯(太伯)の映像は、一生光圀の脳裏を離れなかった。」(参考文献 56, p. 285) と、伯夷・叔斎、泰伯そして陶淵明が光圀にとって尊敬すべき人物であったことを述べている。

注 9) 参考文献 56), p. 283

注 10) 江戸幕府は修史事業として、林羅山・林 鶯峰の父子に「本朝通鑑」を編纂させるが、この中で天皇は呉の泰伯の末裔であるという説を唱えていた。これを見た光圀は中国に傾倒しながらも天皇が中国人を祖としているという考えに憤慨して、「大日本史」の修史事業を開始したと言われている。

注 11) 参考文献 56), p. 151 朱舜水(1600～82)は、江戸初期に明から渡来した儒学者。名は之瑜<sup>しゆ</sup>、字は魯瑱<sup>あざな</sup>、号の舜水は郷里の川の名からとったという。中国浙江省餘姚<sup>よよう</sup>の士大夫(科挙官僚・地主・文人の三者を兼ね備えた者)の家に生まれ、明国に仕え、祖国滅亡の危機を救おうと、海外に渡って援兵を求めて奔走したが叶わず、万治2年(1659)に長崎に流寓して帰化した。翌1660年には柳川藩の儒者安東省庵<sup>あんどうせいあん</sup>と会い知遇を受ける。数年後、徳川光圀が臣下の小宅生順<sup>おやけせいじゆん</sup> (1638～74)を長崎に遣わして彼を招こうとしたが、初め応じなかった。しかし、省庵の勧めもあり、寛文5年(1665)7月、66歳の時に水戸藩の江戸藩邸に招聘された。住居は江戸駒込の水戸藩中屋敷(現：東京大学農学部敷地)を与えられ、水戸にも二度訪れる機会があったという。天和2年(1682)4月17日に83歳で没するまで光圀に厚遇された。墓は光圀の命によって水戸家の瑞竜山墓地<sup>ずいりゅうざん</sup>(現：常陸太田市)に建てられた。朱舜水は儒教思想を中心として水戸藩で形成された「水戸学」に大きな影響を与えたことで知られる。

注 12) 上記の注 11)で記したように、この当時、中国では漢民族の明王朝が滅亡し、満州民族の清朝が成立する。朱舜水は明朝再興のために日本に援軍を求めて数度に渡って長崎に渡来、光圀の招きに従って死去するまで日本に留まることになる。参考文献 54)は、この当時の状況を以下のように考察している。「『中国』つまり明という王朝が『野蛮人』の清によって滅ぼされた(中略)。この衝撃は大変なものであった。(中略) 日本との関係で特筆すべきは、豊臣秀吉の本当の相手は明であったのだ。(中略) 戦国時代の精鋭をもってしても、明は倒せなかった。そして、文化的にも世界最高水準の国家だ。まさに日本人にとって、彼らが自負するようにそれは『中国(=世界一の国)』であったのだ。(中略) 朱舜水は初め、日本の援軍を得て明を回復しようという志を持っていた。しかし、清は強大であり、一方日本は『唐入り』失敗後、大陸に進出しようという気力を失っていた。そこで舜水は明国回復をあきらめ、日本という外国に『中華の伝統』を残そうと決意した。光圀の招請に応じたのもそのためだ。」(p. 40～43)。ここには当時の日本人の中国に対する眼差しと、朱舜水が日本に渡来した意図が述べられている。

注 13) 参考文献 56), p. 283～284

注 14) 参考文献 43), p. 3

注 15) 同上, p. 6

注 16) 同上, p. 11, 12

注 1 7) 同上, p. 22, 23, 27

注 1 8) 参考文献 61), p. 155

注 1 9) 参考文献 42), p. 957~958 また、この書の中では、聖堂建立に際して参考にしたと考えられるのは、「宋以後出版された書籍の感化最も大で又明末の帰化人を通じて明清時代の支那建築の影響も一部大いに現れた。」(p. 947~948) と述べられている。

注 2 0) 参考文献 43), p. 27~28 こうした意匠・様式的要素は各時代・建物によって差があった。江戸時代初期の尾張藩名古屋城内の聖堂や上野忍岡聖堂は、学校施設との関連を主旨として建設されたというよりも、むしろ孔子を安置することが主な目的であり、建物の要素に中国風の要素が多く組み入れられたという。その後、得仁堂が建設された頃の寛文年間以降になると、学校施設が各地で建設され、建物の主力は教育空間としての講堂や他の学舎に向けられ、聖堂は旧閑谷学校大成殿のように規模も小さく日本の伝統的な様式として建設される傾向となる。元禄期には、五代将軍綱吉が忍岡聖堂を改めて「大聖殿」と称して孔子を安置する建物が建設され、再び中国風の要素が強調される。多久聖廟もこの時期に建設されたものである。その後、徐々に国学が勃興してくると聖堂建設の意義が薄らいでいくが、寛政 11 年(1799)の湯島聖堂の再興の際には、聖堂は朱舜水の模型に基づいた中国風が再び色濃く反映される。しかし、幕末頃になると、全国的に各藩の財政的が困窮していたこともあって、儒教の儀式やその意義が形骸化し、聖堂が建てられる機会はほぼ失われることになる。

注 2 1) 同上, p. 82

## 2. 5

注 1) ①水戸市史編さん委員会編：水戸市史 中巻 第 1, 水戸市役所, 1968, 第 1 章 第 2 節

②加藤貴：下戸塚村の水戸藩付家老中山家屋敷について（早稲田大学校地埋蔵文化財調査室編：下戸塚遺跡の調査 第 4 部 中近世編 - 近世 -, 早稲田大学, 1997. 3 所収）

③岩淵令治：発掘地点の変遷と拝領者－水戸藩の拝領屋敷の変遷・小石川邸の変遷(文京区埋蔵文化財調査報告第 20 集 春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点, 文京区遺跡調査会, 2000. 3 所収)

注 2) 波多野純, 小澤弘, 加藤貴, 丸山伸彦：一連の江戸図屏風を素材とした江戸の住まいと都市空間の復元的研究(1)－歴史資料としての都市図屏風－(住宅総合研究財団：住宅総合研究財団研究年報 No. 22, 1995 所収)

注 3) 前記の如く、朱舜水は光圀と共に儒教の学校を設立するため、建物の模型を制作したと言われている。彼の生存中に建設されることはなかったが、寛政 11 年(1799)、幕府直轄の学問所が湯島に開設された際、この大成殿は、この時の模型を参考にしたと言われており、没後もその影響は大きかったことが伺える。同じ儒教の建物として、得仁堂の建設にも朱舜水の影響もあったと推測されるが、どのように関わっていたか具体的に明らかとされていない。

注 4) 参考文献 30) 例えば、林鷺峰による「国史館日録」の寛文 8 年(1668)4 月 8 日条には、「後樂園」という名は見られず、「参議遊園中」など単に「園」と記述されている。

注 5) 参考文献 17)

注 6) 同上

注 7) 参考文献 20) 園の名称が古くから「後樂園」であったにもかかわらず、指定名称は「小石川後樂園」と

された。これは、先に岡山の「後樂園」が後樂園として指定されていたためであった。なお、指定前年の11月には当時、所管していた陸軍砲兵工廠の許可を得て指定のための実測図が作成されている。

注 8) 小石川後樂園が昭和27年に文化財として指定された。その概要は以下の通り。

名称 小石川後樂園

種別1 特別史跡

種別2 特別名勝

指定年月日 1923.03.07(大正12.03.07)

特別指定年月日 1952.03.29(昭和27.3.29)

追加年月日 1937.05.15(昭和12.05.15)

所在地 文京区後楽一丁目

詳細解説 寛永二年水戸藩祖徳川頼房ノ築造スル所ニシテ其ノ嗣徳川光圀之ヲ修治シ朱之瑜ニ選名セシメテ後樂園ト稱セリ江戸庭或ハ大名庭ノ稱アル型體ノ古園ニシテ築山泉水庭ニ屬シ徳川時代初期ヨリ中葉ニ於ケル庭園作物トシテ典型ト見ルヘキモノトスヘシ明治二年諸藩封土ヲ奉還スルニ方リ藩主徳川武時其ノ邸ト共ニ之ヲ上地シ今ハ東京砲兵工廠敷地ノ一部トシテ陸軍省ノ所管ニ屬ス築造以來年ヲ閱スルコト約三百年前ニハ安政二年ノ大震ニ遭ヒ後ニハ明治十三年涵徳亭ノ焼失セル等幾多ノ變革ヲ受ケ工作物中唯其ノ跡ヲ印スルニ過キササルモノアリ境域並周邊ニ縮少ト變易トヲ來セルアリ又煙害ノ爲メ巨樹老木ハ既ニ枯死シ或ハ枯死ニ瀕スルモノアリ池泉流水ハ往年ノ清澄ヲ有セサルモ林泉ハ尚其ノ美ヲ失ハス大要舊態ヲ存シ依然名園ノ表象ヲ認ムルニ足レリ 本園ハ明治七年以來行幸並ニ數次ノ行啓ヲ受ケ又外國貴賓ノ觀覽スル者多數ニシテ園名今ヤ海外ニ著聞スルニ至レリ

寛永三年水戸藩主徳川頼房の築造にかかり、同光圀これを修治し且つ朱之瑜をして後樂園の園名を選ばしめた。江戸時代大名庭の初期のものとして典型的のものである。

文化庁国指定文化財等データベースより

## 2. 6

注 1) 参考文献として一部掲載しているものもあるが、本文中で分類した①～④までの研究成果を整理する。

### ①小石川後樂園に関する通史

1. 計見東山：後樂園，育英舎，1907
2. 田村剛：後樂園史，刀江書院，1929
3. 重森三玲：日本庭園史図鑑，第24巻 江戸時代初期，有光社，1936  
(改訂版 重森三玲，重森完途：日本庭園史大系，18巻 江戸初期の庭(五)，社会思想社，1974)
4. 吉永義信：名勝調査報告，第三輯小石川後樂園・醍醐寺三寶院庭園，文部省，1937  
(改訂版 吉永義信：日本庭園史—昭和初期頃の回想—，小学館，1985)
5. 吉川需，高橋康夫：小石川後樂園，東京都公園協会，1981

### ②庭園を中心とした論文

1. 服部勉：『水戸様小石川御屋敷御庭之図』の考察を中心とした小石川後樂園の庭園構成について，東京農業大学農学集報，第44巻，第1号，1999.5
2. 五島聖子，藤井英二郎，白井彦衛：小石川後樂園の水景の変遷に関する史的考察，ランドスケープ

研究, vol. 62, No. 3, 1999. 1

3. 唐綺君, 波多野純: 江戸の大名庭園における中国作庭の影響 ―小石川後樂園を中心に―, 2005 年度日本建築学会関東支部研究報告集, 2006. 2
4. 李偉: 初期小石川後樂園における眺望行為に関する研究, ランドスケープ研究, vol. 68, No. 5, 2005. 5

### ③得仁堂に関する考察

1. 藤島亥治郎: 後樂園の建築, 造園研究, 第 25 号 後樂園特輯, 1938. 7
2. 白井裕泰: 小石川後樂園得仁堂について, 史標, 第 22 号, 1995. 12

### ④伯夷・叔斎像に関する論述

1. 水野敬三郎, 瀬山里志: 小石川後樂園伯夷叔斎像等調査報告, 平成十一年度文京区の文化財, 2000. 3
- なお、得仁堂の建設年代等について従来の説を示す必要から、本稿はそれぞれの著作のごく一部を取り上げて示したものに過ぎない。本稿は、これらすぐれた研究成果に負うところが大きいことを、改めてここに明記する。

注 2) 例えば、現在、小石川後樂園に関する最も一般的な書である吉川需、高橋康夫の『小石川後樂園』の中に、寛文 9 年に書かれた朱舜水「遊後樂園賦并序」を巻末に全文掲載している。翻刻の出典は「朱舜水全集による。」とし、得仁堂に関連する部分は「吾聞山中。旧祠泰伯夷齊。龍門以冠世家列伝。」と掲載している。この部分は本文中で、「山中の旧祠には泰伯・夷齊を祀る。」と解釈している。しかし翻刻の「山中。」は正確には「山中旧祠。」が正しい (①「朱舜水先生文集」正徳 5 年版、②朱謙之: 朱舜水集, 中華書局, 1981、③稲葉君山編: 朱舜水全集, 文会堂書, 1912 など)。したがって、上記の解釈は成立しない。また、後に続く「召伯之堂」の部分は「泰伯を招いて合祀した堂」と解釈できるが、解説がないので得仁堂建設の過程や同定もなされていない。

注 3) 前掲書: 初期小石川後樂園における眺望行為に関する研究 (脚注 2.6 注 1) ②-4, p. 374

注 4) 前掲書: 小石川後樂園得仁堂について (脚注 2.6 注 1) ③-2, p. 11

注 5) 同上

注 6) 前掲書: 小石川後樂園伯夷叔斎像等調査報告 (脚注 2.6 注 1) ④, p. 7

注 7) 同上 pp. 8~9

## 第 3 章

### 3. 1

注 1) 『国書総目録』『古典籍総合目録』によれば、現存する史料は全て写本で、鶴飼の自筆本は残されていない。

#### A 「大伯伯夷叔斎の像」としたもの

(『日本庭園史図鑑』と『日本庭園史大系』のみ「太伯」と表記。他は「大伯」と表記)

[古典籍]

#### 1. 内閣文庫所蔵本 (甲)

宮崎成身 (江戸末の旗本) 編「視聴草」(草稿本) 第 142 冊内所収。文政 13 年 (1830) 頃から 30 年以上にわたって編纂。

#### 2. 東大史料編纂所所蔵本

野口勝一所蔵本(会津人斎藤伝五郎所蔵本の写本)の謄写本「後楽園図誌 全」所収。

[刊本での翻刻] (2点とも翻刻の典拠記載なし)

3. 東京市役所編：東京市史稿 遊園篇 1, 1929 (上記 1. の内閣文庫所蔵本<甲>が典拠か)

4. 重森三玲：日本庭園史図鑑, 第 24 巻 江戸時代初期, 有光社, 1936 / 重森三玲, 重森完途：  
日本庭園史大系 18 巻 江戸初期の庭(五), 社会思想社, 1974)

B 「伯夷叔斉の像」としたもの

[古典籍]

1. 内閣文庫所蔵本(乙)(錦洞館旭岱子編「墨海山筆」 巻 52 内所収)

2. 国立国会図書館所蔵本

3. 慶應義塾図書館所蔵本(末尾に「井伊家より借用」とあり)

### 3. 2

注 1) 第 1 章 2.6 でも指摘した通り、この記録に注目したのは、李偉：初期小石川後楽園における眺望行為に関する研究, ランドスケープ研究, vol. 68, No. 5, 2005.5 で、「夷斉堂と至徳堂は後世の得仁堂と考えてよい。」との指摘がある。唐代の中国では、伯夷・叔斉を祀る「夷斉廟」が首陽山に設けられていたことが、李頎(690～没年不明)の漢詩「登首陽山謁夷斉廟」(首陽山に登り夷斉の廟に謁す)によって知られる(吉川幸次郎, 小川環樹編：唐詩選, 筑摩叢書 203, 筑摩書房, 1973)。

注 2) 参考文献 22)

注 3) 明大本の中に書き込まれた文字「米璃瑠御茶屋」は正しくは「米(べい)瑠璃(るり)御茶屋」で「璃」の文字も違うことから、写本あるいは控の可能性もある。

注 4) 前掲書：『水戸様小石川御屋敷御庭之図』の考察を中心とした小石川後楽園の庭園構成について(脚注 2.6 注 1) ②-1)

注 5) 日暮義晃：水戸小石川藩邸への将軍御成(「元禄御成記」「綱吉公御成記」による)(文京区遺跡調査会編：文京区埋蔵文化財調査報告第 20 集 春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点, 第Ⅳ章 第 2 節, 2000 所収)

注 6) 朱舜水による石橋(円月橋)の設計・指導については、「舜水先生文集」付録「行実」, 内閣文庫所蔵の寛文 10 年部分に、次のように記されている。

「及<sup>テ</sup>上<sup>ニ</sup>公作<sup>ル</sup>石<sup>ニ</sup>橋<sup>ヲ</sup>于<sup>ニ</sup>後<sup>ニ</sup>楽<sup>ニ</sup>園<sup>ニ</sup>。先<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>亦<sup>ニ</sup>授<sup>ル</sup>梓<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>以<sup>ス</sup>制<sup>ニ</sup>度<sup>ヲ</sup>。梓<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>愧<sup>ニ</sup>其<sup>ニ</sup>能<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>不<sup>ル</sup>及<sup>ニ</sup>也。」(「梓人」は「大工の親方」。「制度」は「基本的な規則」)

この部分は、光圀が舜水に命じた「学宮図説」(中国の学校建築図)の作成に関する記事と古代祭器製作についての記事の間に挟まれている。明大本に描かれた「唐石橋」が現在の円月橋にあたるとするならば、上記の記事は、舜水が設計の技術に優れていたことを述べるついでに、以前に行われた円月橋造営のことを記したものと考えられる。絵図の「唐石橋」は現在の円月橋よりずっと簡素な橋として描かれていることもあり、今後の検討を要する。

注 7) 筑波書林刊「ひたち帯」には、国立国会図書館所蔵の「鶯宿雑記 巻 89」(「千年山集抄記」所収)の「常陸帯」の影印と猿渡玉枝による訳文が掲載されている。

注 8) たとえば、松前から取り寄せた丹頂鶴のつがいをお飼っており(参考文献 67)、亀は菟亀・亀甲亀が放されていた(安積寛ほか：桃源遺事, 茨城県国民精神文化講習所, 1935)。

### 3. 3

- 注 1) 後に中院通茂は、武家伝奏(武家の奏請を天皇・上皇に取次ぐ公家の役職)になって光圀と親交を結んだ。
- 注 2) ①国学者伝記集成 第1巻, 国本出版社, 1934、②日本人名大辞典 第1巻, 平凡社, 1937、③国史大事典, 吉川弘文館, ④国学関連人物データベース, 国学院大学など。
- 注 3) 作者は不明だが、狩野派絵師の可能性が高い。元禄5年(1692)、河原書院の内部は狩野探幽(1602～1674)の絵画で飾られていた(辻言之:東都紀行, 1692)。光圀死去の翌年に描かれた肖像画(公益財団法人徳川ミュージアム所蔵)は狩野常信(1636～1713)筆であり、紀伊徳川家御用絵師狩野興以の次男興也(?～1673)も光圀に仕えていたとされる(茨城県立歴史館編:平成23年度特別展 頼重と光圀—高松と水戸を結ぶ兄弟の絆, 茨城県立歴史館, 2011)。いずれにせよ有力な絵師の手になるものであろう。なお、得仁堂の墓股にある龍の彫刻には、当初の塗装が残されており、その下地は狩野派独特の<sup>ちゅうでい</sup>鎗泥技法によるものであった。
- 注 4) 参考文献25), p.9
- 注 5) 元和6年(1620)入内して、寛永元年(1624)中宮となる。これにより將軍家は天皇の外戚となった。しかし寛永4年、それまで後水尾天皇が法令を無視し、幕府の許可無しに高僧へ与えていた<sup>しえ</sup>紫衣が剥奪される「紫衣事件」が生じる。これをきっかけとして、同6年に後水尾天皇は讓位し、上皇となった。それに伴い、中宮和子には院号が与えられて東福門院となり、翌年、東福門院の娘が明正天皇として即位した。
- 注 6) 参考文献68), 第2巻所収「内裏仙洞御所造営関係年表」なお、寛文2年5月1日に大地震があり、同年中は余震が続いた(西山昭仁:寛文2年(1662)近江・若狭地震における京都での被害と震災対応(京都歴史災害研究 第5号, 京都歴史災害研究会, 2006.3所収)。そのため火災からの復旧は遅れたと考えられる。
- 注 7) 斎藤英俊編:日本美術全集19 近世宮廷の美術, 学習研究社, 1979に小堀遠州設計の庭園について詳しい解説がなされている。
- 注 8) 同上
- 注 9) ①「水戸紀年」寛永18年の項(茨城県史編さん近世史第1部会編:茨城県史料 近世政治編I, 茨城県, 1970所収)、②内藤耻叟 校訂標記:徳川実紀, 徳川実紀出版事務所, 1899、③大野敏編集:神奈川県指定重要文化財 英勝寺山門復原保存修理工事報告書, 宗教法人英勝寺, 2011)。
- 注10) 光圀の侍医、井上玄桐筆の「玄桐筆記」(千葉新治編:義公叢書, 早川活版所, 1909所収)に、光圀の指示にしたがって遠くの在郷から大きな鯉鮒を生きたまま西山荘に運んだ際の方法が記されている。後水尾院に贈られた鯉も、「後樂園絵図」(明大本)に描かれた鯉も、水戸から同様な方法で届けられた鯉であろう。
- ここで、修学院を解説する際によく取り上げられる、中の茶屋客殿の杉戸絵に描かれた鯉の絵に言及しておきたい。下記の写真1の杉戸は、もとは延宝2年(1674)に完成した東福門院御所の奥対面所(10月移徙)にあったが、翌年6月東福門院逝去の後の天和2年(1682)に、建物とともに修学院へ移されたものであった(参考文献68) 第4巻)。杉戸は中の御茶屋客殿一の間<sup>おさむ</sup>の南側、縁座敷の東端にあり、森蘊氏(奈良国立文化財研究所文部技官のち同研究所建造物研究室長)の表現を借りると、「両面共に金色の網を通して見た鯉が描かれている。西面(一の間南)は母子連れ、東面は親鯉唯一匹である」(森蘊:修学院離宮, 創元社, 1955)。この絵には、鯉が夜な夜な杉戸をぬけ出て、御庭の瀧に遊泳し、女官がそれを見て恐怖するので、網を画かせたという伝説があり、鯉の絵が住吉具慶の筆で、網が円山応挙という言い伝えもあったが、同一人の筆であることは間違いないとされる(高桑義生:修学院離宮, 芸艸堂出版部, 1948)。



改めてこの絵を見ると、東面西面とも手前が網であるので、両面を合わせてひとつの絵とし、間の板を水とすれば、親鯉二匹と子鯉一匹がひとつの網の中に入れられた状態である。東面の親鯉が正面を向いて凝視している所から、網の所々のほつれた穴は、親鯉が破って外に出ようとした跡であろう。

あくまでも私見に過ぎないが、一匹の親鯉は後水尾上皇、親子の二匹は東福門院とその娘(女一宮、後の明正天皇か)をあらわし、網は幕府によって掛けられ続けて来た「公家法度」や「勅許紫衣法度」を始めとする多くの規制を暗示し、ほつれた穴は後水尾院による抵抗の跡であろう。また、網の金色は幕府によることと、中の鯉が高貴な存在であることを暗示している。この絵は後水尾院の考えによるもので、水戸の鯉から発想されたものと思われる。

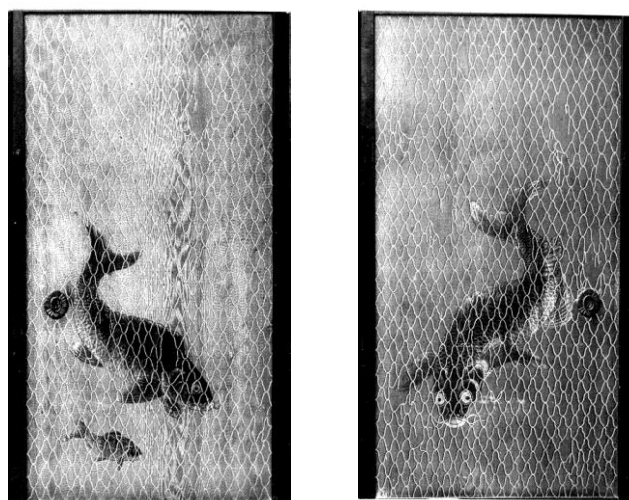


写真1 修学院離宮の中の御茶屋客殿杉戸絵

有職文化協会編『修学院離宮』(豊書房)より転載、撮影：大原久雄

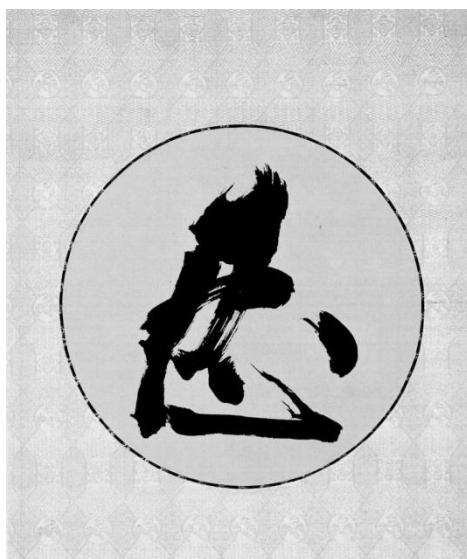


写真2 後水尾院宸筆による「忍」の字

霞会館資料展示委員会編『特別展 寛永の華 後水尾帝と東福門院和子』(霞会館)より転載、聖護院所蔵

上記写真 2 の後水尾院の書は、京都の聖護院門跡と金沢の成巽閣に伝えられる「忍」の一字が、院の心情や世界観を象徴的に映していると言われるが（霞会館資料展示委員会編：特別展 寛永の華 後水尾帝と東福門院和子，霞会館資料第 20 輯，霞会館，1996、奈良本辰也：桂と修学院，駸々堂出版，1976）、鯉の杉戸絵はそれを絵画によって表わしたものといえるのではないか。そして、この絵に関する伝説は、幕府による疑いの目を逃れるために創られたものかも知れない。

なお、描いた絵師について森氏は、宮内庁書陵部所蔵史料（おそらく、延宝 5 年東福門御所奥対面所図面。参考文献 68）第 4 巻，掲載の図 375-2）に、「一ノ間御絵之間外記式ま御絵杉戸二口共一式 狩野外記」と付箋があることから、狩野外記（秀信）の筆であるとしている（森蘊：奈良国立文化財研究所学報 第 2 冊 修学院離宮の復元的研究，奈良国立文化財研究所，1954）。「秀信」は二名いるので、厳密には狩野外記敦信（秀信）とされている（ティモシー・クラーク、川本桂子訳「狩野外記（敦信）筆 祇園祭礼山鉾巡行図杉戸」（国華，第 1317 号 2005 所収）。

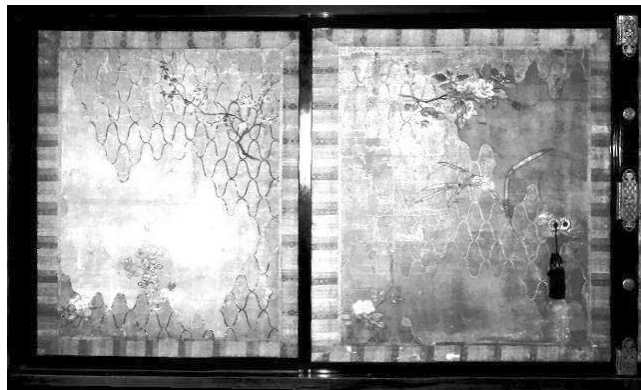


写真 3 青蓮院門跡の宸殿東の間襖絵(左半)



写真 4 毘沙門堂衝立仕様杉戸絵

毘沙門堂提供

また、森蘊の「修学院離宮の復元的研究」には、注記として「同所(青蓮院門跡)には鯉ではないが、同じ網目を描いた板戸があり、鯉を描いた板戸は山科の毘沙門堂にある。」とされている。現在、青蓮院門跡には網を描いた板戸は見当たらないが、網と植物が描かれた襖絵(上記写真3)が四枚残されている。網は大きく破れており、所々の網の目か花や枝が顔をのぞかせる。網の目には金箔が貼られ、網自体の線は緑青をもって引かれていて、使われなくなって苔が付いているように見える。

一方、上記写真4の京都山科にある毘沙門堂には、修学院の杉戸絵の鯉と全く同じ構図の杉戸絵が衝立として残され、円山応挙(1733-1795年)の筆になると伝えられている。描き方は全く異なり、ヒレの位置や形には少し異なる部分がある。構図の大きな違いは、網がなく代わりに水紋が描かれていることであり、鯉はのびのびと泳いでいるように見える。青蓮院門跡へは、修学院中の御茶屋客殿と同じ天和2年に東福門院御所の建物が移されており(参考文献68 第4巻, p.42)、毘沙門堂でも時期は不明だが御所から建物を移築したとの言い伝えがある。

一方、修学院の鯉の板絵については、さきの伝説に加え、「金色の網を描かせてかぶせたが、その網をも破って出た」という後日譚も伝えられている(石川忠: 京都の離宮, 大原出版企画, 1973)。青蓮院門跡、毘沙門院両所の絵は、由来や相互の関係が不明であるが、この後日譚を表したものであろう。網から解放された鯉の幸せな結末である。

注1 1) 近衛家屋敷は万治の火災をまぬがれ、後西天皇の仮内裏とされた。内裏は寛文2年11月5日に上棟したが、翌3年1月21日に新造内裏へ移徙したのは東宮で、その5日後に後西天皇は譲位した。後西院御所の建設は同年12月21日新初、翌4年8月8日上棟、8月21日移徙である(以上、参考文献68 第2巻)。

史料6に記されている近衛屋敷の修理は、後西院の移徙に伴うものであろうか。基熙が妻品<sup>しなのみや</sup>宮と暮らすための新宅は寛文6年12月12日に完成したという。なお基熙は、光圀の夫人であった尋子(泰姫)の甥にあたる。また後年光圀は、養子で第三代藩主となる綱條の嫁として基熙長女の熙子を求めたが、基熙は公家と武家の通婚には反対であるとして、この申し出を断った。しかし、その後も親密な贈り物の取り交わしは続けられたという(以上、参考文献69)。

注1 2) 国史大辞典編集委員会編: 国史大辞典 第5巻, 吉川弘文館, 1985

注1 3) 参考文献70) 同書によれば、さらに光圀は後水尾院が没する延宝8年(1680)8月直前の4月に、平安から江戸初期までの詩文を集めた「扶桑拾葉集」を完成させて後西上皇に献上し、天和元年(1681)には、中院通茂を通じた上皇からの勅に応じて、詩50首と和歌30首を作り進呈した。

注1 4) 参考文献71)

注1 5) 絵図に描かれた得仁堂は、外部が白く塗られているが、今回の修理工事の痕跡調査では、塗料片が全く見つからなかった。本稿では建立直後の姿を描いたとしたが、今後のさらなる調査・検証に期待したい。

### 3. 4

注 1) 東京市役所編: 東京市史稿 遊園篇2, 1929

注 2) 武田常斎はもと平十郎泰重と名乗り、甲斐の武田氏に連なる家系。父親は寛文2年(1662)江戸に来て光圀に拝謁し彰考館前身の史局に勤務。子の泰重も光圀に仕えて右筆となる。寛文12年4月、罪に問われて出奔し館常斎と姓名を改めたが、延宝7年(1679)6月に許され帰参し再び右筆となり、元禄元年(1688)1月に41才で死去した。(「水府系纂 55巻 上」茨城県立歴史館所蔵)

注 3) 今井元昌は、貞享3年(1686)長崎から江戸に來た医師で、元禄2年(1689)から光圀に側医として仕え、同4年には法橋の位を授けられたのち、正徳5年(1715)には幕府の医師となった。(「水府系纂 48 卷」茨城県立歴史館所蔵、および『新訂寛政重修諸家譜』)

注 4) なお、下記史料のように前年の寛文8年(1668)4月8日の記録では、小廬山の頂上に堂があり山下には閣があったとされる。

「頂有堂、号少廬山、是応故黄門之求而先考記、今猶存、山下有閣、其間有巉巖、其路細而斜長、(中略)既而入閣、其前有山躑躅、紅白相交、新緑重陰、」

林鷺峰：史料纂集 116 国史館日録 第3，続群書類従完成会，1998

「閣」は前に躑躅山があるとされているので、「後樂園絵図」(明大本)中の「米瑠璃御茶屋」と考えられる。「堂」は時期から見て、おそらく清水観音堂であろう。

注 5) 前掲書：茨城県史料 近世政治編 I

注 6) 改造ではなく新築されたとの判断は、痕跡調査の結果、建設当初から三体分の空間がトコに用意されていたと考えられたことによる。

### 3. 5

注 1) 参考文献 64)

注 2) 「孔子堂」と称された理由は不明である。ただ、「むなしく行過ぬ」(傍点筆者)と記しているのも、この時、既に3体の像は外に移され、堂が閉鎖されていたことも考えられる。

注 3)



表：「観音堂」



裏：「元禄壬午除月之吉

東洲今井順齋書」

(「除月」は陰暦の12月)

写真1 清水観音堂の扁額

東京都東部公園緑地事務所保管

注 4) 前掲書：小石川後樂園伯夷叔齊像等調査報告(脚注 2.6 注1) ④), p. 8

注 5) 一説には享保15年春。これは、野口勝一：後樂園図誌，東京大学史料編纂所所蔵，1892 所収の「後樂園之記」に書き込まれた註記による。

### 3. 6

注 1) 参考文献 20)，29)

- 注 2) 小宮山楓軒(1764-1840)は、江戸時代後期の水戸藩士。祖父・父と同じく彰考館に勤務して「大日本史」編纂にあずかった。(国史大辞典編集委員会編：国史大辞典，第6巻，吉川弘文館，1985)
- 注 3) 「水戸藩邸上屋敷之図」(年未詳 昭和45年写 慶応大学図書館所蔵)には「台御殿跡畠なり」と記され、「上水絵図」(年未詳「神田玉川上水留」国立国会図書館所蔵)には「台庭」と書き込まれている。(共和開発株式会社編：東京都文京区春日町(小石川後樂園)遺跡 第10地点 一後楽1-3地点における開発に伴う発掘調査報告書一，株式会社東京ドーム，2007)
- 注 4) 史料冒頭の年月日には干支が3つ含まれている。最初の「庚辰」は文政3年の干支、次の「丁亥」は同年2月1(朔)日の干支。3つ目の「乙未」は2月9日の干支である。(内田正男編：日本暦日原典，雄山閣出版，1992 参照)
- 注 5) 元来「伯」は長男、「叔」は末弟のことを指し、「伯叔」は「夷齊」の異称でもある(貝塚茂樹ほか編：角川漢和中辞典，角川書店，1974 参照)。この祭文では光圀について「我先祖義公、伯病、仲夭、叔継国政」「伯」長兄頼重が病となって、「仲」二男亀丸(1625-28)は夭折し、「叔」3男の光圀が国政を継いだ」と書いていることに合わせた記載であろうか。しかし、伯夷・叔齊の徳を「求仁得仁之誉」としながら堂の名前も示していないのは、得仁堂が八幡堂に変えられて、長年復旧出来なかったことに対する深謝の気持が表れたものかと思われる。
- 注 6) 著者の志賀理斎(1762-1841)は、もと幕府の役人で、文政2年12月に藩主<sup>みねひめ</sup>齊脩の正室峰姫(第十一代将軍家斉の八女)の添番格となり、文政3年の1月1日から、峰姫の御守殿で見習を勤めた(「志賀理斎年譜」東京大学史料編纂所所蔵および、『日本人名大辞典(新撰大人名辞典) 第3巻』平凡社，1990)。この「御園の記」は峰姫の後樂園入園の下調べを目的としたものであったという(参考文献25)。この文には鶉飼「後樂園紀事」からの引用が多く見られるにもかかわらず、太伯(泰伯)像には触れられていない。
- 注 7) 参考文献64)，67)
- 注 8) 前掲書：小石川後樂園伯夷叔齊像等調査報告(脚注2.6 注1) ④)，p.8-9
- 注 9) 堀内信編：南紀徳川史 第7巻，名著出版，1971。『南紀徳川史』は、第14代紀州藩主茂承の命で明治21-34年に編集された紀州藩の史料集成。「装剣奇賞」(1781)の部分は「十寸穂の<sup>ます 穂</sup>薄<sup>すすき</sup>」からの孫引きであるが、その「十寸穂の薄」(「紀伊国地誌」内閣文庫所蔵，文化12年成立か)では小笠原一斎が「<sup>いっさいぼり</sup>老斎雕」として項目がたてられている。また『日本人名大辞典(新撰大人名辞典) 第1巻』平凡社，1990(1937 初版)にも『和歌山県誌』(1914)を出典とする小笠原一斎の項がある(ただし、出典ともに元号の誤植あり)。
- 注10) 紀州藩第九代藩主徳川治貞(在位：1775-1798)は、藩政改革を行った名君とされ、「麒麟」(最も傑出した人物の例え)にちなんで「紀麟公」と呼ばれたという
- 注11) 後の得仁堂復旧にあたっては、同じ紀州藩の第十代藩主治宝の揮毫になる扁額が制作された。この扁額は現在懸けられているものである。
- 注12) 蘆沢元斎(一閑)は、水戸藩の家老を務めた蘆沢伊賀信重(1577-1647)を初代とする九代目で、名前は総兵衛元昇。初名は亀次郎で、また総六ともいった。藩士としては、享和2年(1802)の御前小姓から始まり、文化2年(1805)の六代藩主<sup>はるもり</sup>治保逝去に際しては、瑞龍山の墓所まで柩に随行。同10年には通事となって藩主<sup>はるとし</sup>治紀の世継<sup>なりのぶ</sup>齊脩付きとなり、文政5年(1822)藩主齊脩から150石を賜り、同9年「東藩文献志」の編集係を命ぜられた。下って天保10年(1839)には職を辞して一閑斎と号し、安政6年(1859)76才で歿した(「水府系纂 5巻」茨城県立歴史館所蔵)。

注1 3) 享保年間改変以後と推定された根拠は示されていないが、そのひとつは、大池の右下に描かれた「四国橋」によると思われる。この橋の四隅には「讃岐石」「阿波石」「土佐石」「伊予石」が配されている。

なお、今回の調査で、この絵図の元図が、小沢文庫(小沢圭次郎収集史料, 国立国会図書館所蔵)にあることが判明した。下記図1にある「水戸侯後樂園略図」と題されたこの絵図の下方右左にある書込(左方は小沢による明治26年3月の識)によると、伝来の経緯は、水戸藩の儒者で彰考館総裁を務めた立原翠軒の長子、画家の立原杏<sup>きょうしよ</sup>所(1785~1840)が所蔵する絵図を、国学者で幕府右筆を務めた屋代弘賢<sup>ひろかた</sup>(輪池)(1758~1841)が借りて写し、後に屋代の旧蔵図を豊田敦幹(経歴未詳)が模写して小沢圭次郎に贈ったのが、この絵図であった。小沢による書込には、「図中に描かれた四国橋は他の後樂園記録には見られないものであり、今後調べ考えて明らかにすべきである」との内容が記されている。

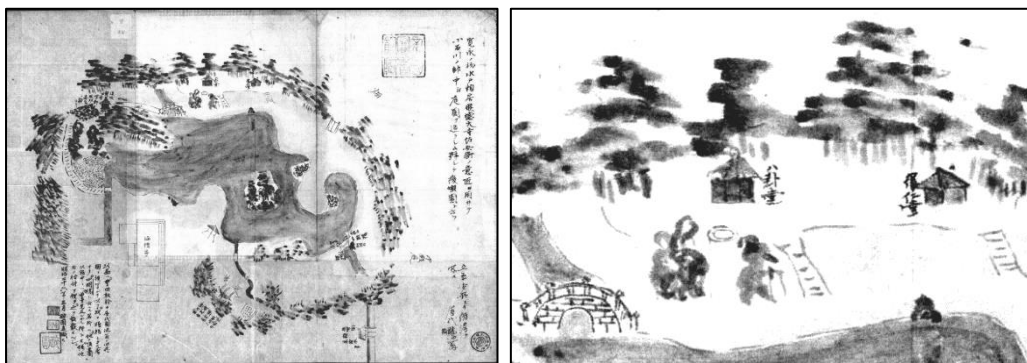


図1 「水戸侯後樂園略図」(右は部分拡大)

国立国会図書館デジタルコレクション 亥一164より

注1 4) 元図を同じくすると思われる2種の図が、公益財団法人 東京都公園協会に所蔵されている。

注1 5) 水戸学は、光圀が始めた「大日本史」の編纂事業を遂行する過程で水戸藩に開展した学問。17世紀の後半から18世紀の30年代にかけての前期と、18世紀末期から幕末期にかけての後期からなる。前期は「大日本史」の編纂に取り組み、歴史の学問的研究を主眼としていたのに対し、後期は歴史事業の継続のみならず現実社会の課題解決をも目指し、内憂外患のもとで国家的危機を克服するための思想が形成された。(国史大辞典 第13巻, 1992, 鈴木暎一「水戸学」の項)

注1 6) 小山田与清:後樂園拝見記, 天保9年(1838)5月, 早稲田大学図書館所蔵

### 3. 7

注 1) 参考文献29), p.17, p.27

注 2) 同上, p.18 詳しくは第5章で述べるが、今回の工事に伴う調査では、明治前半期に、①小屋組を改造して屋根をこけら葺とした、②壁内に筋違・胴縁を入れて壁板を修理した、③柱の補強を行った、④床に敷瓦を敷いた、などの大規模な修理が行われたことが判明した。また、明治6年に行われた小石川造兵司への天皇行幸に先だって、園の堂宇が修繕されたと云われる(参考文献25))。行幸は翌7年と19年にも行われた(明治天皇聖蹟保存会編:明治天皇行幸年表, 1993)。得仁堂の修理はこの間になされたと見られる。

注 3) 参考文献73)所収

注 4) 参考文献 72) 所収

注 5) 参考文献 20), p. 43

注 6) 同上, p. 49

注 7) 参考文献 29), p. 27

注 8) 参考文献 19) 所収

注 9) 参考文献 26) 所収

注 10) 参考文献 32), p. 26-8

注 11) 参考文献 25), p. 112

注 12) 「小石川後楽園得仁堂補修工事」(56 北公庶 第 1212 号), 東京都東部公園緑地事務所蔵

## 第4章

### 4. 2

注 1) 第 5 章でも述べているが、得仁堂の小屋組の架構は四段で構成されている。一段目の部材は、手先部分を組物の肘木としている繋肘木を含め、改造された痕跡は見られなかった。特に背面側の繋肘木は建物の南北中心軸から東に 151 mm 寄った位置に当取付いており、位置を移動した痕跡は確認できなかった。一方、二段目から上部の小屋組材は貫穴がある転用材なども使用されており、ほとんどが後補材であった。柱・頭貫・組物の各部材は檜材で外部側の風喰差もほとんどなかったが、北西隅柱の北面の頭貫木鼻は頭貫と別木で柱に蟻掛・和釘打ちされており、形状・絵様も他と異なっていたので、この部分に関しては、後世、取替えられたと見られる。

なお、第 2 章で考察した通り、頭貫木鼻や組物の拳鼻・実肘木の渦の巻き込みや若葉との関係は古風を残し、17 世紀中頃までの意匠と見ても差し支えないと思われる。これらのことより柱・頭貫・組物の各部材は、一部の頭貫木鼻を除いて、当初の部材と判断した。

注 2) 北面両隅柱側面の上方には小壁や落掛けが取付いていた痕跡は発見されなかった。北面両隅柱の鴨居が取付く内側部分には和釘痕が残っていることから、創建時のトコ間口上方は両脇二間分とも長押下端に無目の鴨居があり、他の柱間の鴨居と同じように柱に仕口を彫らずに、鴨居両端を柱に釘打ちしていたと考えられる。また、同隅柱両側面の下方にはトコ框の仕口痕は見られなかったので、当初のトコ正面は、他の面と同様に、地覆が礎石側面に取付いていたと見られる。

注 3) 現在、建物の足元は葛石が廻り、北東隅のみ斜めになっている。葛石自体は建物の基礎石等と比較して部材が新しく当初材とは言い難いが、今回の調査で北東隅の葛石が何らかの理由で後世に切断されて斜めに配置したかを検証したが、石口部分の痕跡などからは明らかにできなかった。

注 4) 虹梁両端の上端にも、柱上部にある板溝幅 (23 mm) と同じ幅の嵌板溝の痕跡がある。(下記写真 1) なお、頭貫下端は、北西隅柱から東側トコ柱まで研られており、板溝の痕跡は確認できなかった。

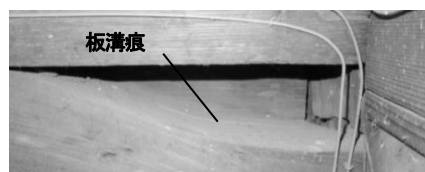


写真 1 トコ虹梁上端 (西側)

注 5) トコ廻りの他の部材は、調査によって以下のことが判明した。

#### <隅柱>

現在のトコは、中央間の丸柱二本に対面して奥に隅柱を2本建て、下部に土台、上部に桁を廻して軸部を構成している。柱間には横胴縁を四本配り、壁板を内と外から太鼓張とする。隅柱下部の礎石には太柄穴があったが、後世の修理で土台を入れた際に隅柱の石口を切断した可能性もあったため、柱脚部分に礎石建ちの痕跡は確認できなかった。

各隅柱の側面には、建物側と内側に板溝が二本彫られていた。それぞれ北面外側の板溝のみ幅165mmで、他は幅9mmである。前者の板溝は溝内に鋸目があり後世、幅を広げたと見られる。また、隅柱には現状と異なる位置に横胴縁の仕口痕があった。丸柱側には横胴縁の仕口穴はなく、横胴縁を受ける縦胴縁を丸柱に和釘止していた。この縦胴縁の両脇には幅9mm程の板溝二本が両丸柱とも彫られている。板溝は平滑な仕上げで、かつ縦胴縁を解体しても打ち替えた痕跡がなかったので、これらは丸柱と同時期の施工と見られる。横胴縁は東面のみ新しく、他の面は和釘痕があったので、少なくとも江戸期の材と見られる。ただ、隅柱は現況の横胴縁と仕口痕が合わないことから、隅柱は横胴縁よりもさらに時代が遡ると考えられる。したがって、隅柱は丸柱と同時期の江戸時代中期まで遡る可能性が高い。

#### <桁>

トコ上部の桁は角柱上端でコの字型に廻して軸部を固めている。北面の桁は、角柱の柄を下端から受け、東・西面の桁柄を側面から受ける。東・西面の桁と建物側との取り合いは、両桁柄ともに頭貫の仕口穴と合わず、上端から鋸で止められていた。また、各桁上端は、板決りを設けて天井板を受ける。桁の材種は3本ともに桧材で木目の詰まった良質なものである。西面以外の桁上端は、傾斜があり口脇状となっていたが、垂木などを打ち付けた痕跡は見られなかった。

北面の桁は、両端の木口下端に蟻仕口痕が見られたが、その理由は判明できなかった。また、桁下端には内側9mm、外側30mmの板溝が彫られているが、現況の壁板厚は内側9mm、外側15mmなので外側の溝幅は明かに大きい。板溝を後世に彫り広げた痕跡も見られなかった。この北面の桁は転用材か、前身の桁を再用したとも考えられる。

東面の桁は、下端が2本溝で内側9mm、外側は幅29mmで、やはり外側は現況の壁板厚より幅広であった。前記のように建物側との取り合い部分は、先端を柄のような形状に加工しているものの、頭貫の仕口穴とは合わない。頭貫の柄穴は東西で形状が異なり仕上げは荒い。

西面の桁は、北・東面と異なり上端に傾斜がない。また、下端の板溝は内外側ともに幅11mmで現況の壁板厚と合致している。建物側との取り合い部分は、東面と同様で頭貫の仕口穴と合っていない。

このように、桁の部材自体は少なくとも江戸時代のものであると考えられるが、正確な時期を特定することができなかった。ただ、取付けられた時期は、頭貫の仕口穴と合わないことから、以前に別材が納まっていた可能性がある。江戸時代後期以降の可能性が高い。また、東西の桁の内側上部には、竿縁の欠き込み穴の痕跡が見られたので、過去に竿縁天井であった可能性がある。

#### <トコ框・トコ板>

トコの壇を形成するトコ框の両端は、丸柱と仕口が合わず、虹梁や丸柱にある板溝痕に対応する溝が上端に彫られていないため、江戸時代後期以降、取替えられた部材と見られる。トコ框背面にはトコ板を載せる板決りと、根太彫が3箇所施されている。現況のトコ板は杉材で、厚21mmの板三枚を、根太を兼ねた



吸付棧で一体化させている。トコ框の根太彫とトコ板の根太は間隔・寸法が整合し、かつ根太の側面にはトコ框と板掛に止める和釘がそれぞれ遺存していたので、トコ板とトコ框は同時代に施工されたと見られる。ただ、背面の板掛は部材が新しく洋釘一回打ちであることから、現況のトコ板は少なくとも一度解体されたと見られる。

#### <壁板>

トコ外部には化粧の腰胴縁が北・東・西面の3方に廻り、各面の壁板はその上下に配置される。壁板はすべて杉材であった。

上部の壁板は、前記の通り、柱間に横胴縁を配り、内・外部から太鼓張りにする。その内、外部の壁板の北面と東面は、板傍を合釘にて接合していた。裏面は鉾や手鋸で加工され、「床外口は」「床ノ間西ノはめ」等の墨書もあることなどから、江戸時代後期までは遡ると見られる。また、北面のみ目板張りとしているが、化粧胴縁を止めた和釘痕がトコと接続する建物本体と同高の位置にあり、東面の壁板にも同じ高さに5段分の化粧胴縁の和釘痕が見られたので、外部に化粧胴縁が廻っていた時期があったと見られる。なお、西面の壁板は、①節が多く材質が他ほど良質ではない、②板傍が合釘で接合されていない、③裏面に墨書がない、④化粧胴縁の痕跡はあるが北面や東面と高さや配列が異なる、等のことから、転用材の可能性も考えられた。ただ、具体的に時代を特定することは出来なかった。なお、西面の壁板は、傷みが甚だしかったため、資料的価値も考慮して小屋裏に保管することとした。

また、腰胴縁下部は一枚張としている。東面南端の板のみ裏面が風蝕していたので転用材と見られる。他は裏面の仕上げが手鋸のものが江戸時代後期、帯鋸は明治前半期の部材と推定した。

内部の壁板は、杉材で西面のみ和釘止で打ち替えもなく、裏面が手鋸で仕上げられていることなどから、江戸後期まで遡ると見られる。北面と東面の部材の裏面は帯鋸で仕上げられ、部材も新しいことから明治前半期の部材と考えられる。

#### <天井>

天井は、板三枚の上端を吸付棧によって一体化させたものを、トコの桁の板決りと頭貫に打付けた板掛に載せ、四周を和釘で止めていた。板は厚24mmの杉材である。また、頭貫の板掛は幅27mm、成30mmで和釘止されていた。現況の天井板はすべて和釘止されていることから、少なくとも江戸後期には取付いていたと見られる。

なお、洋釘や帯鋸の使用年代については、建物本体部分の痕跡や古写真などを比較・検証した。詳しくは、第6章でも論じているが、その概要は以下の通りである。

建物本体の側廻りの壁板は内・外部両面から太鼓張りとなっていた。その下地材は、東西面北側と背面両脇間は柱際に縦胴縁を打って筋違を配し、正面両脇間は横板張とし柱際を釘打していた。これらの部材は後補材と考えられ、洋釘と和釘の両方を用いて固定していた。釘は打ち直された痕跡がなく、和・洋の釘は同時期に施工されたと考えられ、柱際の縦胴縁などは洋釘、和釘は筋違の交差部分を中心に使用されていた。下地材に打ち付ける壁板の内、最も時代が遡ると見られる壁板の裏面は帯鋸で仕上げられ、筋違と接触する部分は厚さ調整のために鉾で研られていた。また、各柱の足元は壁内の見え隠れ部分に鉄製のアングルを用いて地覆と固定していた。これは江戸時代の施工とは考え難く、筋違を入れる前に施工しなければならぬので、施工順序としては足元のアングルの設置→下地材→壁板で、いずれも同時期の施工と見られる。

一方、トコ廻りの壁板は、建物本体の最古の壁板よりもさらに風喰が進んでいる壁板の裏面は、手鋸または鉋で加工され、取付け部位を示す墨書も書かれていた。建物本体部分の加工痕と比較すると、この部材は少なくともトコが現在の規模に改造された江戸後期まで遡ると判断した。

水戸藩邸は、近代に入ると水戸家の手を離れて兵部省の所管となり、その後、明治12年には東京砲兵工廠として陸軍の所管になるが、庭園部分は明治天皇の工廠行幸の休息地、更には公的な迎賓施設として整備し利用される。

明治期に入って撮影された得仁堂の写真（参考文献73）所収）があるが、これを見ると柱の足元は既に根継が施され、正面両脇間の西側の壁板は、現在のものと木目が同じで同一部材であることがわかる。この壁板裏面の加工痕は帯鋸であった。この書籍の解説には、掲載されている写真のほとんどが、明治初期から中期にかけて明治天皇の行幸時に撮影されたものとある。

明治期の小石川後楽園の行幸は、明治6年5月、明治7年5月、明治19年11月の3回あったので（明治天皇聖蹟保存会編：明治天皇行幸年表，大行堂，1993）、この写真は明治19年以前に撮影されたものと考えられる。小石川後楽園の3回の行幸の内、明治6年時は「行厨」と呼ばれた弁当による昼食で、明治19年の行幸では後楽園内の亭で昼食をとったとされる（宮内庁編：明治天皇紀，吉川弘文館，1971）。また、参考文献25）には、「工廠はその所管地の一部としての園の整備にも意を用い、堂宇の修復、樹木の手入れ等を行って、明治六年、天皇の工廠行幸の折ここに休息たまわり（後略）」（p.62）と述べられている。ここには小石川後楽園内のどの建物を修理したのか詳らかとなっていないが、軍の管理下で製材機械や釘などの輸入品を用いて早急に建物の修理を行ったということは十分に考えられる。特に幕末期の小石川後楽園はかなり荒廃していたと言われており、得仁堂も屋根・小屋組・造作類を含めた大規模な改修が行われた可能性が高い。

したがって、洋釘や帯鋸の使用時期の上限は、早くても明治6年の行幸直前まで遡る可能性があるが、明治期の行幸の最終年を根拠として、ここでは年代設定を「明治前半期」（明治19年頃）とした。

注 6）現在、伯夷・叔斎像の2体は東京都建設局東部公園緑地事務所にて保管されており、堂内のトコには何も安置されていない。

注 7）前掲書：小石川後楽園伯夷叔斎像等調査報告（脚注2.6注1）④）

## 第5章

### 5. 2

注 1）今回の調査では、小屋組は内部の格天井から小屋裏に入って調査を行った。また、各部材の保存を考慮して、軒周りでは、垂木や茅葺（唐破風部分を含む）、裏甲（二重裏甲の下部）の解体は行わずに、屋根は修理前と同様の銅板葺に葺き替え、昭和10年の古写真を参考に宝珠を復原した。

注 2）鶴飼信興の「後楽紀事」（元文元年<1736>、参考文献17）の中で、得仁堂の屋根に関して「茅葺也」と、元文元年（1736）の時点で茅葺であったことを窺わせる記述が見られる。しかし、後述の注5で示すように、今回の調査では茅葺の痕跡を発見することは出来なかった。

注 3）東京芸術大学所蔵（大東急記念文庫善本叢刊，美術書集1第14巻「畫学齋過眼図藁」下，大東急記念文庫，1978所収）この図に「ハマン」という文字が記され、得仁堂が「ハマン＝八幡（堂）」と呼ばれていたことが示唆されている。

注 4) 参考文献 31)

注 5) 今回の調査では、可能な限り創建時または江戸期の小屋組の骨格を留めている部材がないか丹念に調査を行ったが、檜皮葺や茅葺、瓦葺を示す十分な根拠を発見できなかった。創建時が茅葺であれば化粧隅木上端に叉首尻受の痕跡等が想定されるが、こうした仕口も見られなかった。

注 6) 参考文献 25), p. 62 なお、脚注の第 4 章 4.2 注 5) でも示しているように、明治天皇の行幸の最終年を根拠として、ここでは修理の年代設定を「明治前半期」(明治 19 年頃)とした。

注 7) 参考文献 20), p. 43

注 8) 同上, p. 36

注 9) 参考文献 29), p. 27

注 10) 参考文献 32), p. 28

注 11) 参考文献 20), p. 43 ここに「大正十二年の震災災によって荒廃せる後樂園は昭和二年二月に陸軍省によって復旧に着手された。」とある。得仁堂に関する記載はないが、園内建物の復興政策の一環として得仁堂も修理がなされたことは十分に考えられる。

注 12) 今回の調査では、こけら葺表面に鉄製と銅製の二種類の吊子が発見された。宝珠はこの時期に銅製に変更された可能性もあるが詳細は不明である。

注 13) 参考文献 74) この時の設計図書に「既存鉄板を撤去」とある。

注 14) 遺存していたこけら葺は厚 3 mm 内外、葺足 30mm 程度、勾配は約 7/10 勾配であった。昭和 57 年修理時には銅板葺の勾配を引通し 6.5/10 程度とし、こけら葺表面にコールタールを塗布していた。当時の工事記録を見ると、こけら葺を「トントン」と表現していることから、屋根材の下地としての認識が強かったようである。なお、この時の工事概要は以下の通りである。(表記はできるだけ当時の設計図書のものを変えずに示す。)

#### 1. 解体工事

屋根解体、犬走コンクリート(雨落石含む)解体、地覆土台解体

#### 2. 基礎工事

礎石据直し、地覆石据直し、雨葛石据直し、犬走タタキ

#### 3. 建物補正工事

揚上レベル補正、緊結傾斜補正

#### 4. 木工事

野物材(杉 1 等)、化粧材(桧無節、ケヤキ上小)、樹脂加工、露盤・鬼彫刻

#### 5. 屋根工事

平葺(銅板厚 0.3 mm、六ツ切)、軒付三段(銅板厚 0.3 mm)、唐破風及箱棟(銅板厚 0.3 mm)、鬼(銅板厚 0.5 mm)、露盤(銅板厚 0.5 mm)

#### 6. 建具工事

栈唐戸補修、蓐戸補修、吊込

#### 7. 金具工事

栈唐戸辻金物、落し猿止め金具、蓐戸吊金具、幕吊金物、蓐戸蝶番(小)、蓐戸蝶番(大)、軸摺金物(座金共上下 1 組)、飾鉾(長短共)、飾鉾用菊座、戸閉り掛金、化粧垂木金具(銅製)、菱形釘隠し(銅製)

## 8. 雑工事

### クレオソート塗(1回)

注 1 5) 露盤内部には「昭和五十七年 三月吉日 吉越四郎 Y.S.」の墨書が発見された

注 1 6) 今回の修理工事で、真東頂部を継木し、昭和 10 年の古写真を参考にして銅製の宝珠を復した。

## 5. 3

注 1) 当初材は、幅 212 mm、厚 45 mm 程度の杉材で、隅部分の上端は鋸彫のうえ鋸止としていた。また、東面南側隅の部材上端には間隔 30 mm 程度で和釘が遺存しており、折曲げ長さから厚 24 mm 程度の部材が打付けられていたと見られる。これは二重裏甲が取付く以前の瓦葺に關係する軒付板や瓦座を止めた釘とも考えられたが、詳細を明らかにできなかった。また、現況の唐破風の裏甲は拝み部分から東西に部材を接合して曲面を形成しているが、これらは後世の修理によるもので、当初は拝みから東西端まで一材で曲面を造り出していたと見られる。現況部材の内、東西端部は、赤色(朱か)に塗装されている幅 130 mm の部材があった。この塗装は本文でも述べているように二重裏甲にも見られ、いずれも洋釘打で、他の同じ建物からの転用材と考えられる。さらに唐破風西側には、比較的風喰が進行した部材が洋釘止されていた。部材そのものは木目が荒いが、他の部位で使用されていたと見られ、後世に部材を切断して西側に取付けたと見られる。これらの唐破風部分の一段目の裏甲は、いずれも明治前半期以後に修理が行われたと見られる。

注 2) 参考文献 76), p. 69 銅瓦屋根の使用の早い例は、慶長 15 年(1610)完成の駿府城天守、慶長 17 年完成の名古屋城天守などがだと言われ、現存する建物は寛永 17 年(1640 年)に檜皮葺から葺き替えられた久能山東照宮(静岡県)と考えられている。また、当時、銅瓦葺は非常に高価であった。「この銅瓦葺は金属屋根施工で、本葺と言われます。(中略)銅は槌で叩いて伸ばして銅板に仕上げられたのでしょう。江戸時代の大工の棟梁の家に残された古文書(1620 年)は現場で銅を炭で焼いて延ばしていたことを伝え、長さ 1 尺 2 寸 1 分、幅 1 尺 6 分半の平瓦 1 枚作るために手間として米 6 升、炭 6 貫目を必要としていたと言いますから、非常にぜいたくな屋根だったわけです。」

注 3) 同上, p. 71

## 第 6 章

### 6. 2

注 1) 使用されていた壁板の下地材は、南面のみ檜で他は松であった。加工痕は東西面腰壁下の胴縁のみ帯鋸で、他は台鉋(一部鉋)を使用していた。また、第 8 章でも述べているが、洋釘は明治 10 年代頃の文化財建造物でしばしば見られるので、この頃から普及し始めたと考えられている。ただ、すでに明治 5 年頃よりフランスから大量に輸入されていたといわれている。帯鋸に関しては、1808 年に英国にて発明されたと言われている。日本では、例えば、村松貞次郎の『大工道具の歴史』(岩波書店, 1973)などには既に横須賀に慶応元年(1865)に帯鋸が輸入されていたとの記述も見られる。陸軍省の管理下にあった小石川後樂園で、帯鋸が明治前半期に園内の建物の修理に使用されていたことは十分に考えられる。

注 2) 参考文献 73) 所収

注 3) 参考文献 29), p. 17 その他、この時の修理内容として、同書に「安政二年十月二日の大地震で得仁堂は

大破損したので、六年四月修復に着手し、一時中止となり、十月二十一日再度取掛って、二十五日に落成した。修復の箇所は貫鼻胡粉付、扉組子なほし、角鐵者取付、建羽目板新足、御長押銅物糊さび落し、扉録物等新規取替、紐縁喰付直し、と見えてゐる。」(P. 27)とある。

注 4) 外部の壁板は、風雨に晒されており当初材と思われる部材は発見されなかった。壁板は釘を何度も打替えており、風喰も甚だしく和・洋釘の判別も困難であった。ただ、裏面の加工は2種類に分けられ、①帯鋸で筋違との接触部を鉋で削り、板傍を樋部倉矧としているもの、②帯鋸と台鉋を併用して、板傍を削継としているものに大別できる。①は明治前半期とみられ、北面両脇間以外の全ての壁板である。②は北面両脇の壁板が該当し、部材の風喰も前者ほど進行しておらず、洋釘止の打替えがなかった。本文中でも記しているように、これは大正～昭和中期頃までに施工された部材と見られる。一方、内部の壁板は、概ね江戸期と明治前半期のものが遺存していた。江戸期のものは南面両脇間に配置され、風喰の進行などから明治前半期の部材よりも古いことは確認できたが、当初まで遡るとは考え難かった。この材は今回の修理では解体していないため、裏面の加工痕を確認できなかったが、表面は台鉋で仕上げ、板傍を樋部倉矧としていることは確認できた。その他の板は、表面は木目を強調した浮造り仕上げとし、裏面加工は、外部と同様に帯鋸で板傍を樋部倉矧としている明治前半期と見られる材と、表面に風喰のある外部板の転用材が一部で見られた。

注 5) 現在、施釉された陶磁器製の建材は一般に「タイル」と呼ばれることが多い。しかし、第一回内国勸業博覧会(明治10年)では「敷瓦」として紹介され、大正中期頃まで「敷瓦」という呼び方が一般的であった。「タイル」という呼称は、大正11年の平和記念東京博覧会にて用いたことが始まりとされる。また、瀬戸では江戸時代後期頃から、従来の陶器を「本業」、九州から伝わった磁器を「新製」と呼んで区別した。

注 6) 敷瓦の調査では、愛知県瀬戸市「瀬戸蔵ミュージアム」と常滑市「INAXライブミュージアム」にご協力頂いた。得仁堂の敷瓦について、瀬戸蔵ミュージアムから、「江戸時代末頃に当該資料のような敷瓦がつくられているが、もう少し厚みがある。明治12年頃に「新山」と呼ばれる陶胎に白化粧土を塗った染付製品が登場すると、以降の本業敷瓦は染付や銅板絵付の製品になり、当該資料のような敷瓦は生産されなくなるので、明治初期に制作されたものだと思う。」との回答を得た。なお、得仁堂の敷瓦の大きさは、240mm×240mm(化粧面)、厚18mm程度で、側面はテーパーが付けられ底面を小さくしている。一般に、敷瓦は江戸初期まで側面は垂直で厚みは30mm程度と厚く、江戸時代中期から明治初期には側面にテーパーを付け、厚みも18mm程度となり、明治中期に至ると外形はより小さく、厚さも薄くなり側面は垂直になる傾向にある。

注 7) 参考文献77), P. 47～50

注 8) 敷瓦の文様の内、床面中央付近に1枚だけ文様の異なる敷瓦と建物南西隅に無地の敷瓦2枚があったが、いずれも現況の敷瓦を施工した後に施工されたものと見られる。文様が異なる敷瓦は、愛知県の瀬戸蔵ミュージアムにも同じ文様の敷瓦が保管されている。ただ、この敷瓦は文様部分に青色の呉須(ごす)(酸化コバルトを主成分とした染付に用いる鉱物質の顔料)が施されている。瀬戸蔵ミュージアムによると、この文様の形は他の得仁堂の敷瓦よりも時代が新しい可能性が高いという。また、無地の敷瓦は欠失部分を補うために後補したものと考えられ、この2種類は明治前半期以降に取替えられたと見られる。

注 9) 参考文献78) この書の「第3章 本業焼の技術 第1編 近世窯業」に、近世釉薬の分析表(勇右衛門窯)があり、緑釉の項目のみ引用して表にした。

注1 0) 参考文献 17) ここに「堂のうち敷瓦なり」と、元文元年(1736)時点で敷瓦が敷かれていた記録がある。

注1 1) 墓股の龍の彫刻部分は平成 21 年 11 月に落下(原因不明)して、今回の工事着手前に別途保管されていた。なお、この墓股は杵・彫刻部分が檜材で、小屋裏から裏板を和釘で固定していた。杵の形状などが東京都に所在する社寺の類例調査から 17 世紀頃の特徴を有していることから、創建時の墓股と判断した。

注1 2) 参考文献 26) 所収

注1 3) 測定は無機化合物の結合形態を把握するための「X線回折」(PANalytical 製 X 線回折装置 X`Pert PRO)による分析と、元素情報を得るための「蛍光X線分析」(フィリップス社製全自動蛍光X線分析装置 MagixPRO)の2種類を行った。分析は専門機関である株式会社アグネ技術センターが行った。また、今回分析した箇所は、墓股以外では、組物などの木口、蓑束繰形下端、内部化粧胴縁なども合わせて行った。これらの箇所は、昭和 57 年の修理の際に塗装が施されており、今回の顔料分析では Zn (亜鉛)が多く検出されていることから、この時の修理ではおそらく鉛白が使用されたと見られる。しかし、南面虹梁上の蓑束は唐破風下の額裏部分であり、直接風雨に晒されることがないため、繰形下端の白色塗料は目視では後世に塗装された痕跡はなく、当初の塗料がそのまま遺存していると考えられ、分析結果は胡粉の主成分である Ca (カルシウム)が多く検出され、亜鉛の成分が検出された他の白色塗料とは異なる結果であった。したがって、当初の木口等の白色塗装は胡粉塗であった可能性が高いと考えられた。今回の修理ではこの正面の蓑束繰形下部の塗装は当初の仕様である可能性があるのもそのまま残し、他の蓑束繰形下端や木口部分などは胡粉塗を施すこととした。内部の化粧胴縁部分は、おそらく明治期に施工されたと見られる部材は艶のある赤味がかった漆のような塗料が目視で確認できた。表面は塗膜が形成され、薄く剥がれ落ちている部分も見られた。今回はX線回折と蛍光X線の分析に加えて赤外分光計 (FT-IR) にて、赤外線吸収スペクトルから対象物の特性を分析した。その結果、漆に類似しているスペクトルが検出され、さらに蛍光X線分析では Si (ケイ素)、Al (アルミニウム) など、砥粉の成分と思われる元素も検出されていることから、漆が使用されていた可能性が高い。また、目視で確認できる赤味の成分は顔料などの元素は検出されていないので、植物染料である柿渋を使用したと見られる。したがって、木部の目止めとして砥粉を施した後、柿渋にて着色してから漆で仕上げたものと判断した。

注1 4) 分析を担当した株式会社アグネ技術センターの指摘では、これらの試料において「X線回折では銅の腐食生成物 Br (ブロカンタイト)が検出され、これらは銅と亜鉛の共存を示唆している。」との回答を得た。

注1 5) 墓股の龍の胴部分全体の当初の上塗に関しては、分析結果から判断することは困難であった。分析では Cu (銅)が検出されており、主として鎗泥下地の成分が検出されたものと判断したが、採取した試料の中に上塗の成分も含まれていても矛盾しないので、緑青塗であったと考えられる。

注1 6) 参考文献 80), P. 425~426 近年、この技法書をさらに現代語訳として解説した書籍『日本画 画材と技法の秘伝集』(小川幸治編、日貿出版社、2008 年)が出版された。この中で大正・昭和初期に活動した日本画家松岡映丘『日本画を描く人の為の秘伝集』の「杉戸絵の描き方」を紹介している。「こころなく描くと、胡粉が杉脂のために黒くなって仕舞ふ。脂止めをする絵具下地に白緑もいいし、銅粉を膠で溶いて塗るもいい。これを「鎗泥法」という。白緑と鎗泥を混ぜてもいい。胡粉の下地として、その彩色の場所だけに金箔を置くこともある。」と、鎗泥下地が木部の脂止めとしても有効であることが述べられている。

注1 7) 参考文献 81), P. 146~150 同書に『丹青指南』や他の文献史料を紹介して、「鎗泥下地」が狩野家独特の下地技法である旨が述べられている。

注1 8) 参考文献 82), P. 26 なお、今回の工事では墓股彫刻の翼など木部の欠損した箇所は、古写真や破損されている部分などを参考にしながら形状を検討し、白描画を作成、顔料分析結果を基に彩色下図を作成して最終的な配色を決定した。ただ、墓股彫刻部分に残る彩色の仕様を後世に残すため、当初の彫刻は現状のまま別途保存し、欠損した彫刻部分を新規に作製し墓股枠に取り付け、そこに彩色を施した。

注1 9) 参考文献 29), P. 17

注2 0) 同上

## 6. 3

注 1) 扁額は幅 919 mm×成 373 mm×厚 24 mmの樺材で、周囲の縁には龍の紋様が彫刻され、背面には蟻棧が2本付けられている。表面は風喰が甚だしいため彩色痕を確認することはできなかった。扁額は「得仁堂」の文字と徳川治宝の印が彫られているが、今回の調査で揮毫の原本が公益財団法人徳川ミュージアムに所蔵されていることが判明した。脚注 3. 6 の注 11) で示した通り、発見されたのは、下記写真1の徳川治宝作の絹本墨書二枚と詩文一点、およびその箱書で、墨書二枚の内、一枚は現在の扁額と同寸・同形であった。

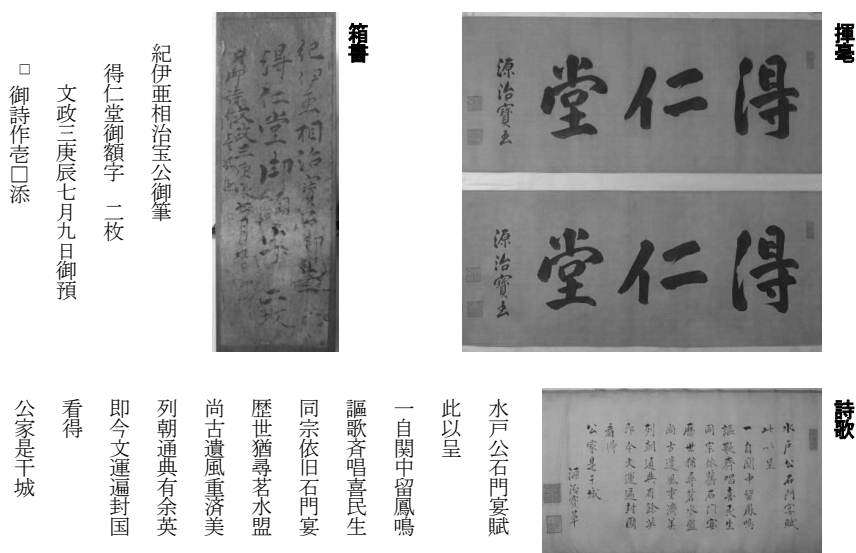


写真1 徳川治宝作の揮毫と詩歌、およびその箱書

なお、扁額の由縁に関しては、文政9年著作の坂昌成の「御園の記」にも「額は紀伊の垂相殿治寶卿御筆なり」とある。また、平成7年に伯夷・叔斎像に関する調査が行われたが(前掲書：小石川後樂園伯夷叔斎像等調査報告)、その際、叔斎像の頭頂円孔内に納入された銘札が発見された(本論中の写真6.3.2)。これによると福地次益の祖父、内田幸吉が文政年間(1818～1830)に得仁堂の額を彫り、嘉永2年(1849)に内田幸吉の子、内田量平によって伯夷・叔斎像二体を修理したことが明らかとなった。つまり、現在の扁額は文政3年に徳川治宝が揮毫し、文政年間中に内田幸吉が彫ったと考えられる。

注 2) 参考文献 17) なお、脚注 3. 5 注 3) で示した通り、今井元昌は同園内の清水観音堂の扁額も揮毫し、これは現存している(元禄15年制作)。

注 3) 前記したように、現在の伯夷・叔斎像に関する調査は、水野敬三郎らによって行われている(前掲書：小

石川後楽園伯夷叔斎像等調査報告)。この中で、前田助十郎の経歴の根拠として「寛文規式帳」と「桃源遺事」を取り上げている。今回、この二史料を追調査したので、その記述内容を以下に紹介する。

①「寛文規式帳」(茨城県史編さん近世史第1部会編：茨城県史料 近世政治編Ⅰ，茨城県，1970所収)

「御細工人(中略)同断(「禄付なし」) 前田介十郎」

②「西山にて召仕れ候者之覚」元禄14年(1701)12月(安積覚ほか：桃源遺事，茨城県国民精神文化講習所，1935所収)

「太田九蔵御歩行並、御細工御用に付、御逝去迄西山に相詰、白寺谷イ沢に住す、前田助十郎 九蔵同断、」

注 4) 前掲書：小石川後楽園伯夷叔斎像等調査報告(脚注 2.6 注1)④)

注 5) 参考文献 31)

注 6) 参考文献 32)，P. 28

注 7) 今回の工事で、小石川後楽園内の建物や調度品は、得仁堂を除き、震災や戦災ですべて失っていることから、螺鈿の机は文化遺産として大変貴重なものと判断され、東京文化財研究所にて調査・修復されることになった。



## 発表論文

得仁堂に関する著作一覧

### <学術論文>

2016 年

- ① 小川保, 奥村俊道, 富沢晃 : 歴史の中の建築 小石川後樂園得仁堂 一修理に伴う史料を中心とした考察一, 文化財建造物研究会 一保存と修理一, Vol. 1, pp. 20~44, 2016. 3

2017 年

- ②奥村俊道, 勝又英明 : トコ廻りを中心とした建造物の変遷 小石川後樂園得仁堂に関する考察 その1, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 82, No. 737, pp. 1783~1792, 2017. 7

2018 年

- ③奥村俊道, 勝又英明 : 屋根および造作を中心とした建造物の変遷 小石川後樂園得仁堂に関する考察その2, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 83, No. 745, pp. 525~534, 2018. 3

### <研究発表>

2013 年

- ① 奥村俊道 : 現場レポート 東京都 特別史跡・特別名勝小石川後樂園得仁堂 : 得仁堂の敷瓦, 文建協通信/文化財建造物保存技術協会編, pp. 70~73, 2013. 7

2017 年

- ② 奥村俊道, 勝又英明 : 小石川後樂園得仁堂に関する考察, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (中国) , pp. 89~90, 2017. 7



## 謝 辞

本研究を遂行するにあたって、論文指導をしていただきました勝又英明東京都市大学教授に深く感謝申し上げます。勝又先生にはお忙しい中、私が社会人という時間的制約がある中でお時間を設けて下さり、丁寧なご指導を頂きました。

元武蔵工業大学（現東京都市大学）教授の鈴木一先生には、私が 20 代の頃、論文の書き方や構成など細やかに指導をして頂きました。先生の熱心なご指導にも関わらず、およそ 25 年間、私の論文は全く認められませんでした。そのような不肖な弟子を叱咤、激励し続けて下さり、今回、ようやく一つの区切りをつけることが出来ました。本当にありがとうございました。

論文審査では貴重なご助言を賜りました、大橋好光東京都市大学教授、天野克也東京都市大学教授、小見康夫東京都市大学教授、さらに学外の審査員である東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復（建造物）の長尾充教授に厚く御礼申し上げます。特に長尾充先生にはご多忙の中、丁寧な論文指導および審査をして頂きまして、誠にありがとうございました。

第 3 章の史料調査による検証は、小川保、奥村俊道、富沢晃共著「歴史の中の建築 小石川後樂園得仁堂 一修理に伴う史料を中心とした考察一」（文化財建造物研究 一保存と修理一、2016.3）を再構成したものです。史料の調査では、所属する公益財団法人文化財建造物保存技術協会の小川保氏に負うところが大きく、私の収集した史料をさらに補うべく各地に赴いて丹念に史料を調査し、貴重なお時間を割いて古文書の解釈に取り組んで頂きました。小川氏の御尽力がなければ今回の成果はなかったと思います。

本稿執筆にあたり、事業主である東京都建設局東部公園緑地事務所をはじめ、東京都教育庁ほか、関係諸機関の方々に多大なるご協力とご理解を頂きました。

所属する公益財団法人文化財建造物保存技術協会においては、論文作成に理解を示して頂きました高塩至理事長や、直属の上司である事業部設計課小林裕幸課長、また、得仁堂の修理工事の基本設計を行い、粘り強く本稿の指南と適切な助言をしてくれた西澤正浩氏、現在の職場に導いてくれた加治屋嘉文氏には感謝の言葉もございません。

また、英訳の手伝いをして頂いた許斐紀子女史におかれましては、実際に得仁堂に足を運ばれる程の熱心さで、私の稚拙な文章の英訳に取り組んでもらいました。本当に頭の下がる思いです。

今回の研究は、皆様方の大きなお力添えがあればこそ成し遂げることが出来たと思っております。今後、微力ではありますが、文化財建造物を含む文化全般に関する理解をより一層深め、社会に貢献して参りたいと思っております。

最後に、論文が長く認められずに心配をかけた父・母、学部生時代に英訳の手伝いをしてくれた弟や妹、そして陰で支えてくれた妻真奈美と、愛する息子たちに感謝の意を表します。